
移住世界のエンプレス

露野鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

移住世界のエンプレス

【Nコード】

N5324S

【作者名】

露野鶴

【あらすじ】

安定した将来を掴む手前、高校3年生の冬に私、宮井榎乃は交通事故にて人生に幕を下ろしました。

と思いきや、死後によくあるまさかの異世界トリップ。さらにそこは実在する『ヴァーチャルシミュレーションゲーム』の中の世界。目が覚めた途端、ある土地の領主にさせられて

国を発展させたり、遠征したり、同盟組んだり、敵に攻め込まれたりする国盗りシミュレーションゲームの世界で、榎乃の新しい人生が始まる。

*主人公にチート機能はついていません。ご了承ください

*色々考えた末に残酷描写ありに設定しました。苦手な方はお気を付けてください。

登場人物紹介（ネタバレあり）（前書き）

ネタバレを含む人物紹介ですので、未読の方はお気を付け下さい。
本編に合わせて、たまに更新していきます。
現在は、3章20話までの情報です。

登場人物紹介（ネタバレあり）

> 主人公 <

・宮井榎乃

みやいかの

18歳。女。

黒目黒髪ボブカット。ユキヒョウ（白っぽい豹）の獣人。

スポーツ少女だったが、交通事故で死に、獣人の『魔法使い』という使いづらいキャラで領主になった。素直だが、負けず嫌い。

好きな物：カボチャ、外出、雪。

苦手な物：デスクワーク、絶叫系の乗りもの、熊。

> ミヤイ領の人々 <

・レーレル

26歳。女。

栗色の目と髪。狐の獣人。

領主のお世話係。おっとりしているが、仕事はできる。

好きな物：領主さま、家事全般、くるみ。

苦手な物：辛い物、お酒。

・イリエ

18歳。女。

碧目、白金髪ロングヘア。黒猫の獣人。

レベルが高く、防御に強い『戦士』。真面目で真つすぐ、義理堅い。その美貌や仕草から、カノにこっそり騎士と呼ばれている。

好きな物：剣の稽古。

苦手な物：人間。

・サーナ

16歳。女。

赤毛。兔の獣人。

実はお針子。人懐っこいため、イリエやユリアの良き友人。

好きな物：噂話、編み物。

苦手な物：料理、釣り。

・ユリア

16歳。女。

深緑の髪。羊の獣人。

食堂の料理人。煮込み料理が上手。引っ込み思案だけれど、マニアからの人気がある……らしい。

好きな物：甘い物、雨の日。

苦手な物：おしゃべり、男性、人間。

・バルバラ

46歳。女。

こげ茶の目と髪。狸の獣人。

『僧侶』であり、新設された孤児院の院長。面倒見が良く、母性的。快活なおばちゃん。

好きな物：元気な子供、女神さま。

苦手な物：腰痛、敬語。

・フェレ

22歳。男。

砂色の髪。狼の獣人。

両手斧の『戦士』。気さくで明るいため、後輩の『戦士』達から慕われている。

好きな物：狩猟、肉。

苦手な物：冬、読書。

・ゼオン

24歳。男。

琥珀色の目、紺色髪。人間。

強い『魔法使い』であり、魔法店の店主。魔法改良が得意。ずばらでだらしがないが、面倒見は意外に良い兄貴肌。

好きな物：酒、研究。

苦手な物：女神、姉貴。

・デイサ

36歳。女。

茶色の髪。熊の獣人。

畑を作っている。ラウラの母親であり、気配り上手な女性。人の相談をよく聞く。旧アズサ領の出身。

好きな物：野菜、園芸。

苦手な物：人間、戦。

・ラウラ

9歳。女。

茶色の髪。熊の獣人。

デイサの一人娘。元気よく、畑で遊ぶので叱られがち。人見知りをしない。

好きな物：お母さん、花。

苦手な物：虫。

・クルト

12歳。男。

緑目、濃い金髪。ライオンの獣人。

旧アズサ領の孤児。意地っ張りで、生意気だけれど、弟妹には優しく

い。
好きな物：アズサ様、弟妹。
苦手な物：お説教、人間。

> 他領地の人々<

・安田隆人
やすだりゆうと

18歳。男。

黒目黒髪。人間。

カノの元同級生にして初恋の人。聖セルヴィリア国の国王であり、レベルマックスの『僧侶』。真面目で実直だが、いろんな意味で不器用。不戦同盟サブリーダー。

好きな物：シームルグ（ペットの巨大鳥）、ゲーム、学校。

苦手な物：スポーツ、健康診断、健康茶。

・新葉悠
しんはるか

年齢不詳。生物学的には男。

黒目亜麻色髪。エルフィン族。

シン八領領主であり不戦同盟のリーダー。フランス人形と見紛うほどの美女に見えるが、実際は男。女性に特に優しい。職業は『狩人』。

好きな物：綺麗な物、女装、女の子。

苦手な物：虫。

・鬼頭雄吾
きとうゆうご

56歳。男。

黒目白髪。人間。

キトー領領主であり、不戦同盟のサブリーダー。貫禄のあるナイスミドル。元の世界では大物だったらしく、その経験を領地経営に活

かしている。職業は『狩人』。
好きな物：緑茶、経済学。
苦手な物：女装している人。

・栗栖沙耶くりすず

15歳。女。

黒目黒髪。人間。

クリス領領主であり、不戦同盟のサブリーダー。黒髪和風美少女。口数は少なく表情にも乏しいが、よく気配りできるフォロー上手。職業は『盗賊』。

好きな物：美味しいもの。

苦手な物：幽霊、珍味。

・遠野芯とのおのしん

37歳。男。

黒目茶髪。虎の獣人。

トーノ領領主であり、不戦同盟のサブリーダー。歴戦の戦士であり強面長身の見た目に反して、気さくでよくしゃべる。しかしマイペース。職業は『戦士』。

好きな物：強い魔物、大自然、昼寝。

苦手な物：勉強、パズル。

・江田奨えいだしょう

32歳。男。

黒目黒髪。人間。

5年前にこの世界に来た元IT企業のエリート。ヴァルデー王国に仕える領主で、王の補佐として活躍中。夢は世界征服？

好きな物：家族、パソコン。

苦手な物：アウトドア、ラテン語。

ゲームシステム&用語解説（ネタバレあり）（前書き）

『マイグレーションオンライン』のゲームシステムの解説をまとめ
てあります。

本編では順番に説明しているので、最初に読むとネタバレになる可
能性もあります。ご注意ください。

現在は3章20話までの解説になります。以後のシステムの解説は
本編の進行に合わせて更新していきます。

本編では説明していない細かな裏設定も載せています。

混乱した時、久々に読んでシステムを忘れてしまった時にご利用
ください。

ゲームシステム&用語解説（ネタバレあり）

<システム&用語解説>

プレイヤー
領主

『マイグレーションオンライン』の世界に死後トリップしてしまった日本人。

一つの領地の領主となることが義務付けられる。

種族、職業を選択できるが、ランダムでも選択できる。

ランダム設定

種族、職業を選択する際に迷った場合、ランダムで選んでくれるというシステム。

ただし、使いにくい組み合わせになる可能性が高く、非常に不評。被害者は多数。

領地

領主に与えられ、運営し発展させていく土地のこと。青い境界線で囲まれており、その内側には魔物が侵入できない。

初めは領主と同じ種族の領民50名と正六角形に区切られた土地一つで始まる。

建築物を建てる、遠征する、などの領地発展が領主のレベルに影響する。

領地の拡大

領地を最初に与えられた正六角形1マスから拡大することができる。自領地に隣接する空き地ならば制約なく拡大できる。

他領地ならば、傘下に入るか傘下にさせることができる。他領地を排して、手に入れることもできる。

離れた他領地を手に入れた場合、自領地までの空き地がすべて自領地に変化する。

『マイグレーションオンライン』世界の三大陸全ての土地を自領地にした場合、それ以上の拡大はできない。

建築物

領地に建てられる建物。領主のレベルが上がるたびに、建てられる建築物が増えていく。それぞれランクがあり、建築物のランクが上がるほど、豪華になったり大きくなったりする。

一つ一つの建築物には、領主のステータスが影響しており、決まったステータスの増加に伴って、高いランクの同じ建築物を建てることができる。

例：畑

領主Lv1で畑ランク1が建築可能（全職業共通）。

領主ステータスSTRが一定値で、畑ランク2も建築可能。

畑ランク1よりも畑ランク2の方が、面積が大きく、土の状態も良い。ランク1のものをランク2にするには、改築が必要であり、それに伴い材料や資金も必要である。

また領主の職業により、それぞれの建築物の建築可能時期が変わる（ただし、畑などのように生活に必須のものは、建築可能時期が全職業共通である）。

職業

仕事の名称ではなく、領主や兵士・冒険者など戦闘を行う人物には、戦闘手段の種類という意味で用いられる。

職業により装備・使用可能な武器や防具、習得可能なスキルが決まっている。

防具で装備不可のものは装備すると一歩も動けなくなる。

武器で使用不可のものは使用してもダメージが出せない（本編で気づいていない人もいたが）。

（ 防具とは戦闘用の衣裳を指し、普段着などに職業制限はない。もしあると、『戦士』は普段着や寝巻も鎧になってしまう。

武器とは戦闘用の武器を指し、日用品のペーパーナイフなどに使用制限はない。あると紙が切れない）

『マイグレーションオンライン』では5つの職業を自分で選ぶことができる。後の変更はできない。

また、領主の職業は、領地発展にも影響する。領主の職業に合う建築物からレベルの低いうちに建築できるようになる。

・『戦士』

盾と金属鎧という防御力の高い防具を装備可能。皮鎧も装備可能。剣・斧・槍・槌が片手用両手用ともそれぞれ使用可能。

それぞれの武器スキルを習得できるが、基本的に魔法は使えない。

領地発展面では、軍事系建築物の建築可能時期が早い。

・『狩人』

防御力は普通だが、動きの速くなる革鎧を装備可能。

使用可能武器は弓かナイフ。

基本的に魔法は使えないが、全職業の中で唯一、弓による遠距離攻撃ができる。弓とナイフの武器スキルを習得可能。

また狩人固有スキルとして『捕獲』を身につけることができ、魔物をペットにできる。

領地発展面では、商工業系、運輸系建築物の建築可能時期が早い。

・『盗賊』

防御力の低い布服のみ装備可能。

剣・斧・槍・槌・聖典・ナイフの全ての片手用武器を使用可能。

基本的に魔法は使えないが特徴的な戦闘方法と固有スキルがあるらしい。

領地発展面では、農業系、娯楽系建築物の建築可能時期が早い。

・『魔法使い』

防御力の低い布服のみ装備可能。

使用武器は両手杖。

多種多様な攻撃魔法を習得できる。

領地発展面では、魔法系建築物の建築可能時期が早い。

・『僧侶』

防御力の低い布服のみ装備可能。ただし、盾を装備可能。

使用武器は聖典（片手武器）。

味方強化の補助魔法、治癒魔法を習得できる。

領地発展面では、信仰・医療系建築物の建築可能時期が早い。

ステータスとレベル

ステータスは『マイグレーションオンライン』の全ての人が持つ、自分の戦闘能力値。HP、MPと7つの項目に分けて数値で示される。

レベルは『マイグレーションオンライン』の全ての人が持つ、自分の戦闘力。

レベルが1つ上昇することに、ステータスが自動的に増加する。

領主ならば加えて『成長ポイント』が10与えられる。

『成長ポイント』を使って、伸ばしたいステータスに振り分け、上昇させることもできる。

(戦闘をしない一般人はステータスがもちろん低く、レベルもほぼLv1である)

領主のレベルとステータスのみ、領地の発展に影響を与えている(詳しくは上記参照)。

ステータスの項目

ステータスにはHP、MPと7つの項目がある。7つの項目それぞれが戦闘と建築物のランクに影響する。

HP:

体力(生命力とも呼ばれる)を表し、この数値が0になると、死亡を意味する。

MP:

魔力を表し、この数値を消費して魔法やスキルを使用する。

STR（攻撃）：

武器で攻撃した場合の攻撃力を表す。ゲームによっては攻撃ではなく筋力とも表される。

農業系建築物のランクに影響する。

DEF（防御）：

武器で攻撃された場合の防御力を表す。

軍事系建築物のランクに影響する。

DEX（器用）：

攻撃の命中力を表す。

商工業系建築物のランクに影響する。

AGI（速度）：

攻撃速度、攻撃回避確率を表す。

運輸・移動系建築物のランクに影響する。

INT（知力）：

魔法攻撃力を表す。INTとMNDの数値で魔法防御力が決まる。

魔法系建築物のランクに影響する。

MND（精神）：

魔法治癒力を表す。INTとMNDの数値で魔法防御力が決まる。

信仰系、医療系建築物のランクに影響する。

LUC（運）：

攻撃の会心率を表す。会心の攻撃が出た場合は、ダメージが1.5倍になる。

娯楽系建築物のランクに影響する。

HP、MPと7つの項目の成長度（伸びやすさ、伸びにくさ）は、種族に影響される（詳しくは下記参照）。

種族

『マイグレーションオンライン』では、人間、エルフィン族、獣人の3種族が住んでいる。

領主は種族を自分で選ぶことができ、エルフィンや獣人の場合は姿が多少変化する。

種族によって、領主のステータスの値の成長度（伸びやすさ、伸びにくさ）が決まる。

（具体的には、自動でステータスが変動する分に差があり、また『成長ポイント』を割り振る際に、必要なポイント数が変化する）
職業と組み合わせることで、様々な領地の発展を行うことができる。種族の違いにより寿命に差がある。本来のヴァーチャルゲームではそれが領地の発展速度に影響するはずだったが、この世界の中では領主の寿命や老化速度（歳をとる速さ）が元の世界から本当に変化している。

・人間

平均寿命は80年。

外見や老化速度の変化は無く、元の世界の人間と同義。そのためか、人口が一番多い。

ステータス面では、DEXとLUCが伸びやすい。

・獣人

平均寿命は40年。

獣耳と尻尾のある姿になる。

一年に2つ歳をとり、人間の二倍、エルフィン族の四倍の速さで老化する。領主人口が一番少ない。

ステータス面では、DEF、次にSTRが伸びやすい。レベルアップによるHPの増加が大きい。

・エルフィン族

平均寿命は160年。

尖った長い耳のある姿になる。多少美形になる。

二年で1つ歳をとり、人間の二倍、獣人の四倍の遅さで老化する。

ステータス面では、INTとMNDが伸びやすい。レベルアップによるMPの増加が大きい。

AGIのみどの種族でも同じ伸びやすさである。

平均寿命の『年』は、実際に生きる年数で表している。年齢の『歳』というのは、見た目・体の老化に合わせて数値で表している。

例：生まれて5年目の獣人ならば10歳と表し、生まれて5年目のエルフィン族ならば、2歳から2歳半と表す。

同盟

他領地のものになるのではなく、他領地と目的や目標のため協力して領地経営をするための組織形態。

(よくある別のゲームのギルドや徒党と同じ意味合い)

同盟設立にはリーダーとなる領主が必要であり、リーダーは莫大な設立費用を負担する。

リーダーは同盟旗のデザインを決定、変更でき、サブリーダーを任命できる。

加盟には、リーダーと、いるならばサブリーダーの承認が必要。

加盟者は年間20万ゴールドという資金を払う必要がある。

加盟者とリーダー・サブリーダーの領地の間には、『路』と呼ばれる街道が自動的に開かれる。

『路』には、領地と同じく魔物が侵入できないようになっていたため、比較的安全に行き来することができるようになる。

プロローグ（前書き）

拙い文章で細々書いていきます。

秀囲気を楽しみながら、温かく見守って下さるとうれしいです。
楽しんでいただけたなら、とてもうれしいです。

プロローグ

あーあ、センター試験の日、雪かもしれないって。

まじ？ 運悪いなあ……。ほんと、憂鬱。やっぱ、推薦にしろけば良かった。受験終わってる組の人たちは気楽そうだねー。

そういえば聞いた？ 宮井さんのこと。あのT大学にスポーツで入ったよ。

すごっ、やっぱ違うんだねーうちらとは。そのうちテレビとか出るんじゃない？ 目指すはオリンピックとか？

それもさ、大学の方から、「来てください」って電話があったとかで。

羨ましすぎ！ ああいうのが勝ち組って感じなのかね。

高校生の噂話というものは、お弁当タイムや部活動中、下校時などなど色々なところで発生する。

けれど、トイレの手洗い場というのは良くない。非常に良くない。だって今のように、個室に噂の本人がいたって、気が付きようがないのだから。

雑談を繰り広げる集団が去る足音を聞いてから、私はそっと個室から出た。体はすつきりだけど、気持ちはすつきりと程遠くなくなってしまった。

悪口でないだけマシかもしれないが、私にとってはあまり喜べる話ではなかった。

スポーツで有名な大学へのスポーツ推薦が決まり、私の将来は勝ち組と呼ばれる。入学してもいいのに。

まだセンター試験も終わらず、将来が見えてこない受験生よりも大分安定していることは確かだ。けれど私は……。

「……やめよ」

暗くなりそうな思考はそこでストップして、蛇口を勢いよく捻り、手を洗ってトイレを出た。

下校時刻を過ぎていたので、受験勉強のために残っている生徒や、私のようにのんびんだらりとしていた生徒以外は残っていない。

静かな校舎を出て、慣れた通学路を進む。

少し憂鬱な、高校三年生の1月、雪の降りそうなほど寒く、どんよりした曇りの日。

俯きながら歩いていた私は、そこで交通事故に会い、勝ち組と呼ばれるはずだった人生を閉じた。

どこからか歌声が聞える。数人の子供が一緒に歌っているような可愛い歌声につられて、私は閉じていた目を開けた。

明るい声とは裏腹に、真っ黒な場所だった。部屋の中にいるような閉塞感もない。けれど、夜空のような点々とした星もない。

とりあえず体を起こそうとして、違和感に気付いた。体が、動かない。いや、どこに体があるか分らない。体の感覚がない。

「はあ……?」

自分でも説明できない事態に、思わず間抜けな声を上げてしまった。声は出たけれど、どこから出たのかやっぱりよく掴めなかった。目を凝らしても、暗闇以外何も見えない。目を開いている感覚はあるのに……。

そこまでして、ようやく気付いた。私は、さっき車に轢かれていなかったか?いつもの通学路で、右折してくる車に気付かなくて前からあの交差点は細かい事故が頻発していて、危ないと聞いていた。私も何度かひやっとする体験はあった。そして、さっき……。

目の奥に突き刺さるような車の白いライトと、衝撃を確かに覚えている。痛みは思い出せないけれど、ブラックアウトする視界の中でひどいクラクションの音を聞いたのが最後だったと思う。

「あー、私死んだか……?」

なんだか落ち着かず、声に出して独り言なんて言ってしまふ。声はどこにも響かなくて、そのまま暗闇に消えた。先程から流れてくる歌声だけは、なぜかエコーが掛ったように、綺麗に響いているのに。

やっぱり、死んでいるのか自分。

哀しいとか辛いとかそういった形ある感情は浮かばず、ぽっかりと胸に穴が開いたようで、私はもう一度目を閉じた。なにも考えちゃいけない気がした。

瞼をぎゅっと閉じて、奥歯を噛みしめようとしたけれど、やっぱり感覚が掴めなくて、力を入れられなかった。

そうしているうちに、いつの間にか歌声がフェードアウトしていくのに気付いた。少しずつ遠ざかり、ついに歌の途中で無音になる。

「死んだ後って……ずっとこのままなのかな。ていうか死んだ人みんなこのままじゃあ、暇すぎだよ。ここはほら、神様とか女神様とか天使とか悪魔とか、幽霊の先輩とか、三途の川とか……」

目を閉じたまま、誰にもなく捲し立てる。声を出していないと、不安がこみ上げてきて、叫びそうになってしまう。

「御花畑とか！ 賽ノ河原とか！ あと最近読んだ漫画なら異世界トリップとか！ なんかあるでしょー！」

「……ま……か」

実際に、いつの間にか叫んでいた。だから、

「きゃんえにーわんひあみー！？ このネタ懐かしいなって、ほんと誰かいないの！ この放置ひどいよ、こっちは死ぬの初めてなのにっ」

「……すか」

「初心者はいっだって不安なんだからっ、優しく分りやすく簡潔に導いてくれないとさあー！」

「……聞え……すか」

暗闇にいつの間にか現れた声に、私はしばらく気付かなかった。

「聞えますか」

「はい、今聞えました。ごめんなさい」

「貴方を異世界へ移動します」

「おお〜〜ようやく来た。じゃなくて、待て待て待て！ 私、死ん

だの？ それで異世界トリップなの？ てか、ここどこ？ 貴方、誰っ」

ばちつと目を開けて凝らす、暗闇に人影はない。というより、何も見えないままだ。先程の歌声と同じく、女のような細かい相手の声だけは、エコーが掛っている。

「まずは、名前を教えてください」

「は？」

「ハ、でよろしいですか」

「よろしくないよろしくない！」

こちらの声は届いているのに、質問にも聞き返す声にも反応せず、勝手に話を進められそうになった。首を真横にぶんぶん振りたい。無理だけど。

「名前を教えてください」

「ああーもう、榎乃。宮井榎乃です。これでいい？」

「カノ。登録しました。次に、職業を選んでください」

「あの！ いやだから、まず説明をね。」

もし目の前に相手がいって、身体が動くのだったら、肩を掴んで揺さぶりたい。人の話を聞きましよう、と。

もどかしさに感覚はないものの、頭の痛い思いがしてくるが、相手は平然と話を続けた。

「職業は5つの中から選んでください」

「ちよつと待ってつてばあ！ ぐすつ……もー……ぐずつ、ヘルプ

ミー」

涙の感覚もないけれど、思わず涙声になりながら愚痴ると、ようやく相手は、こちらにまともに反応した。

「ヘルプが必要ですか？」

「必要すぎです！」

「では、職業について説明します。職業は、『戦士』『魔法使い』『狩人』『僧侶』『盗賊』から選ぶことができます。『戦士』になれば、防御力が高く、安定しやすくなります。『魔法使い』では、攻撃力と

」

「そんなのどうでもいいから！ この状況をヘルプ。この世界をヘルプッ」

なんだかファンタジーな職業だが、今は無視する。ひしひしとしてくる嫌な予感も無視する。『戦士』とか『魔法使い』とか攻撃力とかそういうとあるジャンルで聞いたことのあるような単語も、今は無視で。

「職業ランダム選択、了解しました。この世界について説明します。『マイグレーションオンライン』は、プロジェクトアンドリユーが開発し、運営するバーチャルシミュレーションゲームです。『マイグレーション』の世界で、貴方は小さな地域の領主となって、地域を発展させたり、領土を拡大したり、遠征行って土地を奪い合ったり、様々な育成ができ

」

次第に説明する女性の声が、遠くなっていくのを感じた。女性の声小さくなったのではない。

『死後、ゲームの世界に異世界トリップ』という状況に、私の気が、そして意識が遠のいていったのだった。

プロローグ（後書き）

お付き合いくださってありがとうございました！
パニックになると、独り言をつぶやき続けるスポーツ少女を応援し
てくださると嬉しいです。

1話（前書き）

4月20日、少し改稿して、主人公の外見の描写を加えました。

1話

「ん……」

窓から零れる光が眩しくて、目を閉じたまま寝返りを打った。ずれた布団を無意識に引っぱりあげる。もそもそと動いて、落ち着いたところで再び安らかな眠りの中へ突入をしかける。

「んっー……」

しかし、なんだかちよつと落ち着かない。眉間に皺を寄せながら再び寝返りを打ち、寝やすいポイントを探る。

なんだか布団がふわふわしすぎて落ち着かないのだ。沈みこみすぎて辛い。もうちよつと固めの方が好みで、ちゃんと自宅のベッドは調節してあるはずだけど……。

そこで私はがばりと身を起こした。忘れていたことを急に思い出した、あの焦りの感覚が込み上げてくる。

そうだ、私、多分死んだんだ。そして確か、ゲームの世界へようこそ的な展開になって、それで？

どうしたんだったか。女の声の説明を聞いていたはずだが、途中までしか覚えていない。夢オチ、と思いたいところだが……。

私は、ベッドの上に座りぐるりと周囲を見渡した。

自宅のベッドよりふわふわでいくつも重ねられた布団（これが寝にくさの原因らしい）。さらにベッドは、南国リゾートっぽい天蓋つきベッドだ。薄いが、よく見れば細かい刺繍の入ったレースのカーテンが、垂れ下がっている。

部屋は、自分の体から比較すると12畳ほどだろうか。ベッドが

中央の置かれ、部屋の広さを無駄遣いしているように感じた。さらにこのベッドがどう考えても大人3人が余裕で寝れそうなサイズ。ベッドの脇、出窓の手間には、ちょこんとサイドテーブルが置かれている。だがそれも良く見れば、猫足という高級感溢れるサイドテーブルだった。

他に家具は見当たらず、人もいない。一見、ホテルの高級な部屋かなにかに見える。まあ、実際に泊まったことなどないが。

さて、どうしたものか。

とりあえず、無駄に広いベッドのカーテンを引きサイドテーブルに近寄ると、小さなハンドベルが置かれているのに気付いた。これは……もしかあれですか、偉そうにこう摘まんで、チリーンなんてやると……、

「ご領主様、お起きになられましたか」

ノックと共に、長い簡素なワンピースを着た女性が衣類を手にして入ってきた。25、6歳ほどで、薄い布でできたバンダナのような帽子を被っている栗色の髪の大人数美人だ。

「あの……お早うございます」

「お早うございます。お身体はいかがでございますか？」

よく分らない質問に首を傾げると、女性は安心させるようにふんわりと笑いかけてくれた。

「覚えておいでですか？ この土地の新しいご領主様になられると
いうことで、神殿から昨夜遅くにこの屋敷にご到着なされたのです
が、お疲れだったのか馬車の中で気を失われていらっしやいました」
「そう……なんですか……。あの、何がなんだか実は全然良く分っ

てないんですけど……」

「はい、色々なことは後で説明いたします。まずは、お召し替えとご朝食を。」

わたくしは、レーレルと申します。ご領主様の身の回りのお世話を致しますので、宜しくお願いいたします」

「あ、いえ、そんなご丁寧にも」

「ふふ、そんな緊張なさらなくてください。わたくしには敬語も必要ありません」

「あ、はあ……」

持っていた衣類を手渡され、丁寧に挨拶される。こんな上品な会話を聞いたことがなかったので、なんと返していいのやら、しどろもどろになりながらこちらも頭をぺこりと下げた。

とりあえず、優しそうな人がいて良かった。

退出しようとして踵を返したレーレルの後ろ姿を、ほっとしながら見送っていると、私は一つ、ありえないことに気がついた。

「ちょっと待って！」

「はい？なんでございますか」

驚きで敬語が飛んでいった。

「後で説明されるかもしれないんだけど待ちきれないから聞いてい
いかな……。その、それ……。揺れてるそれ」

「わたくしの尻尾が何か？」

不思議そうな顔でレーレルは自分の尻尾をこちらに見せた。

いえ、あの、尻尾が何かではなく、尻尾の存在そのものに疑問を
持ったんだけど。

レーレルのスカートの後ろから、もっさりした狐色の尻尾が揺れている。というか狐の尻尾だ。

「……あああれですね、ほらあのファッションね。いやー私の故郷でもあったよ、歌手がやったのに似せて、尻尾をぶら下げる流行が」

無理矢理一人で納得して呟くと、レーレルは益々きよとんとした顔になった。その後、そつと帽子をとった。栗色の髪がぱさりと揺れて、

「獣耳……」

可愛らしい三角の狐耳がぴょんと飛び出した。

「ええと、わたくしは獣人ですから……。この土地のほとんどは獣人ですし」

「へー。へー……獣人……いるんだ。ほんとにファンタジーっていうかゲーム要素テコ盛りだね」

「珍しいでしょうか？ 地域によっては見かけないかもしれませんが」

耳を見せ終わったレーレルは、帽子を再び被って、耳をきゅつと帽子の中にしまい込んだ。入れるんだ……。

「うん、日本 私の出身地はいなかったというか、伝説の生き物だったよ」

「まあ……、そんな離れたところから御出でになられたのですね」

興味深いです、とレーレルは笑いながら尻尾を揺らした。

「でもご領主様も、獣人でいらっしやいますのに、伝説だなんて」
「は、い？」

私は人間ですが？

そう思いながら、当たり前のように言ったレーレルの言葉に恐怖を感じた。いやいやいや、ファンタジーだからといってそれは無いだろうと言い聞かせながら、手をそつと自分の頭上に伸ばしてみた。こんなに手が震えたのは初めてかもしれない。

結果から言うと、もふもふだったよ。私の獣耳。

「うつうつ……なんで、こんな……。確かに前より音は良く聞えるけど！ けどこんな新境地開拓したくなかった……。なんでーどうして獣人なおお。普通の人間族もいるらしいのに……。」

柔らかい布団に突っ伏して、呻き続ける。呻いてもどうにもならないことは、枕に当たる耳の感触と、ぶらりと揺れる尻尾の感覚でわかる。

先程、自分の獣耳に気付いて悲鳴を上げ、鏡を持ってきてもらい、

改めて雪豹の獣耳と尻尾が付いていることを確認した。

これと違って特徴のない、以前と変わらない、少し幼い見た目の自分の顔。ボブカットの黒髪が顎あたりでふわふわ揺れて、大きいけどキツイと称される目が、鏡に写った頭の上の獣耳を睨みつけていた。

間違いなく、頭上にくつついていた、獣耳……。

ちなみに、本来耳があるべき場所には何もなく、顔の輪郭だけになっていた。前髪が真ん中分けて、顎まで伸び、輪郭が隠れていたのは幸運だった。耳のない顔を見るのは、さらにシヨックというか……わたしにとっては、ホラーの領域だ。

鏡を放りだし、そしてそのまま朝食も採らず、天蓋のカーテンを全て閉め、布団に籠っているというわけだ。

でも勘弁して下さい。ほんとこのシヨックからしばらく立ち直れそうにない。

カーテンの向こうで、レーレルがオロオロしている様子が見えていないわけではないが、今はそつとしておいて欲しい。

通学路でいきなりはねられて死んで、さらによくわからないままゲーム世界にトリップさせられて、おまけに獣人になっている。もう、泣いていいよね？

思った途端静かに溢れてきた涙を布団に押し付けて擦る。

獣耳と尻尾が付いてしまった以外は、身体に変化はなかった。けれど今の体は、いままで18年生きてきた体ではないのだろう。死んで、新しい体になってしまったのだ。

獣人が嫌だとか、そんな問題ではなく、もう戻れない取り返しのつかない事態に陥っていること再確認させられたのが辛かった。

私の嗚咽を聞いて、レーレルがそつと部屋から立ち去る音がした。

30分くらいだろうか。わんわん泣いて、泣き疲れて、しばらくぼんやりしていた。

目が腫れぼつたいけれど、眠気は無く、むしろ泣き疲れてお腹が減った。泣くって意外にエネルギーを使う。

すっかり泣いたので、気分も頭も多少はすっきりしてきた。

一つ頭を振って気分を切り替え、先程渡された着替えを手にとった。

飾り気の少ない上品なワンピースに、ボレロのような上着を羽織る。

日本では1月に入ったばかりだったが、ここは春のような穏やかで暖かい天気だ。薄着くらいで丁度良かった。

ベッドの脇に置かれていた膝までのブーツを履いて（何故かサイズがぴったり）、初めて部屋の外へ出た。

それなりに大きいお屋敷らしい。部屋の前には、回廊が広がっており、そこから小さな中庭に出れる。広々としているが、華美なイメージはなく、古いお寺などに来た時のような安心感を覚える。

どこへ行けばいいかわからないので、ウロウロしていると、中庭の反対側からなにやら騒ぐ声が聞えてきた。

「ですから！ ご領主様はまだお休みになってらっしゃいますので、また後日」

「悪いが、そういう訳にもいかない。来たばかりで混乱しているはずだ。早めに会っておいた方が」
「お待ちください！」

その中の一人はレーレルの声だ。バタバタという数人の足音と共に

に、声がこちらへ近づいてきた。

「ご領主様って、私だよな。さつきそう呼ばれていたし。隠れた方がいいのか、出て行った方がいいのか考えたが、このままウロウロしていても仕方なしと判断して、こちらから声の方へ向かった。」

角を一つ右に曲がると、騒がしい集団はすぐに見つかった。

レーレルと、レーレルと同じ服を着た若い女性、年老いたお爺さんが、道を塞ぐように立っている。塞がれて困っているのは、それは

私は、ぱかんと開いてしまった口を手で覆った。

いるはずがない。この世界に私の知り合いなんて。

他人の空似だと言い聞かせながら、それでも気付くと彼の名前を口にしていた。

「……………安田くん？」

中学時代の思い出の人。

1話（後書き）

獣耳と尻尾はロマンです。

雪豹なのは完全に趣味です。狐も趣味です。

獣耳としっぽっていったら、絶対狐か猫か狼は欲しくなるじゃないですか！

あと、うさぎ？

その辺出てくるかはお楽しみです。

2話

嬉しそうに、少しだけ寂しそうにはしゃぐ声が、まだまだ冷たい風に乗って校庭へ流れていく。校庭には、200人ほどの黒い集団ができていた。セーラー服で抱き合う彼らの手には、黒い筒が握られている。今日貰ったばかりの卒業証書だ。

集団を掻き分けながら、人を探している私も、もちろん同じ筒を握っていた。

中学の卒業式が終わってから、すでに30分が経つ。多くの卒業生たちは名残を惜しんで解散する気配を見せないが、ぱらぱらと帰っていく人も出始めた。

けれど、私はまだ帰るわけにはいかなかった。今日が、最後のチャンスだから。

「あ、いたいた。榎乃、こっち！一緒に写真撮ろう」

枝の先の蕾が開きかかった桜の木の下で騒いでいた3人の女の子たちが、嬉しそうに手を振ってきた。

いつもお昼休みにお弁当を食べていた中学時代一番の友人たちだ。卒業してから遊ぶ約束をしているけれど、こうして学校で過ごすことも無くなると思うと、感慨深い。

私はすぐに駆け寄ったが、友人たちに向かって、ぱんと手を合わせた。

「ごめんっ、今から例のミッションやってくるから後で！」

「ミッションって、告白のこと！？わあっ、さっすが、榎乃だ。結果楽しみにしてるぜ」

「安田くんなら、体育館の方で見たな。戦友よ！骨は拾ってやる

から」

「あはは、ありがと。行ってきますす！」

ばしばし肩を叩いて励ましてくれる友人たちにお礼を言って、体育館へと向かった。

まだ帰っていないと知り、ほっとしたものの、何故だか歩いている気分ではなくて、小走りになってしまう。

安田隆人。3年間同じクラスだった。私の片思いの相手。そして、これから告白する相手、だ。

知らない内に握っていた拳をいっばいに振って走り、卒業生用の花道を通って、体育館の扉を引いた。

これが、私の、初めての告白。

玉砕だったわけだが。

私は、目の前に座る相手を見ながら、遙か昔の甘酸っぱい記憶を掘り起こしていた。

クセのないすっきりとした顔立ちに、記憶より少し伸びたごく普

通の黒髪。目立つほど整った顔ではないが、よく見ると綺麗な顔と
いうのが正直なところだ。

中学では細いという印象が強かったが、今では少し背も横幅も大
きく逞しくなったようだ。

少し悔しいのは、隆人の耳がまともだったことだ。

回廊で、突然の再開に混乱しかけた私を助けたのは、自分のお腹
の音だった。

その場に居合わせた人々は一瞬沈黙し、私は赤く縮こまり、隆人
が食事をしながら色々説明すると言いだした。

そして今現在。食堂のような場所へ案内され、食事が出来るのを
待っている。

聞きたいことは色々あるのだが、なにせ告白以来初めて会うのだ。
どう接していけばいいのか、いまいち決められないが、沈黙が降
りてしまうと余計やりづらいので、元同級生として極力普通に接す
ることにした。

実際告白なんて3年も前のことだし。気にしない、気にしない。

「久しぶりって言えばいいのかな……。ちょっと雰囲気変わったね」
「宮井もな。その、まさか獣人になってるとは……。なんで獣人を
選んだんだ？」

隆人は、じろじろ見るのを我慢するかのように、敢えて耳から目
を逸らしているようだ。

「え、選ぶって？ 私、起きたらこうなって」

「それは多分……。いや、先に状況を整理しよう。宮井、どんな風
にここまで来たのか、話してくれないか」

なんだろう。喋り方が前より固くなった気がする。けれど、嫌だとか他人行儀だとかいう印象はなくて、頼れそうな大人びた口調だった。

こんな馬鹿げた状況の中でも、ちゃんと話を聞いてくれそうな安心感が、胸に湧いた。

ついでに言うところ3年前の話を持ち出されることが、一番ほっとしたのだが。

「どうやら、私……」

死んじゃったみたい。

そう言おうとしたが、口は開いたものの、なかなか声に出せなかった。

2、3回ぱくぱくと口を動かしてから、言いかえることにした。

「私、交通事故にあつて。気付いたら、変な暗い空間にいてさ。そこで、異世界に行きみたいなこと言われて。」

まさかの異世界トリップかと思つて聞いてたら、なんかゲームの世界だつていう説明を受けたんだ。

あははっ、説明されてる最中に、情けない話、気絶しちゃったんだけどね」

「そうか。俺も似たようなもんだ。」

高校1年のころ病気で死んで、気付いたらゲームの世界に來させられた。実際にやったことあるゲームだったから、そこまで混乱せずに済んだが。それから2年間この世界で暮らしている」

「病気……。喘息、とか？」

確かに、中学の頃は病弱なイメージはあつた。欠席も多めだったし、体育も見学だけだという話は聞いたことがある。ただ、見学理

由は喘息と聞いていた。

けれど、まさか2年も前に初恋の相手が亡くなっているなんて…。

話し方や雰囲気が変わったのも、2年間この世界で生きてきたためだろうか。

「いや。喘息も持っていたが、元々他の病気があったな。中学のころから長くないと言われていた。こっちはすっかり健康体になって、そこだけは嬉しかったな。」

で、宮井はこのゲームのことはどれくらい知っている？」

「名前も全然。ヴァーチャルゲームっていうのがあるのは知ってたけど、持ってなかったし。部活と受験ばっかだったから」

「そうか。ヴァーチャルゲームっていうのは、5感すべてがゲームに入るんだ。ゲームの中で自由に動き回れるし、物も食べれて、嗅覚も触覚もある。」

全身がゲームの世界に入るイメージだな」

「じゃあここって、やっぱりゲーム？」

「いや、ゲームはさすがに、ここまで細かい作りじゃないし、プレイヤー以外のキャラクターは同じことしか話さないぞ。」

世界設定や魔法なんかそのまま利用した、完全な異世界と考えた方がいい」

「お待たせいたしました」

ちょうど、レーレルがトレイに乗せて、食事を運んでくれた。隆人の分もあるようだ。

ナン（本場風のカレー屋さんで見たことがある）らしきものが2

枚と、湯気の立っているスープが一つ。それと、サラダがついている。

フォークを渡されたけれど、これはサラダ用だろう。

隆人は、慣れた手つきでナンを小さくちぎってスープにつけて食べているので、私も真似させてもらった。

「わ、おいしい！」

少し辛めのスープと、柔らかいナンがよく合っていて食べやすい。思わず顔がにやけてしまう。食べ物って偉大だなあ。

幸せに浸りながら思う。確かにこれはヴァーチャルではないだろう。この空腹感も、それが満たされる幸福も、味も、到底作り物とは思えなかった。

「うん、ゲームじゃないっていうの今納得したよ！」

思ったまま素直に言うと、

「ははっ、確かに美味しいよな」

初めて隆人は、表情を崩した。笑うと、先程までと打って変わって、少し子供っぽくなった。

食後に、隆人がレーレルに何か話しかけ、レーレルは一つ頷いて、一冊の本を持ってきてくれた。

片づけられたテーブルの上に、置かれたそれは、

「う………太いなあ」

受験勉強で使っていた辞書並の分厚さだ。重くて途中から電子辞書にしたため、最近ではあまり使っていなかったが。

本を読むなんて習慣が身についていないので、見るだけで少し腰が引けたが、隆人はそれを分っているようで、大丈夫だと説明してくれた。

「開いてみる。日本語じゃないが、何故か読めるだろう」

「うわ、アルファベットでもないんだ。なんか暗号みたいだ。けど読める。不思議だー」

「その文字は大きいし、挿絵が多いから、読みにく本でも難しい本でもない。」

「どうも、ゲームスタート時の攻略本らしい。ちょっと貸してここだ」

2、3ページ進んだところで、読むように促された。

「『ゲームを始めるには。」

1、お持ちのヴァーチャル機の動作環境をご確認ください」
「そこはいい。こっち」

「『2、キャラクターを作成しよう。」

ここで決めるのは、性別、外見、名前、職業、種族です。職業は5種類から選び、それぞれ有利、不利な特徴があります。」

また、種族は『獣人』『人間』『エルフィン』の3種類から選べます。職業と組み合わせると、様々なボーナス効果が付きます」

なお、迷った場合は、ランダムボタンで、ランダムに作成をすることが出来ます」

……まさか、私が獣人なのって、ランダム!？」

「途中で意識を失ったのなら、そうだろうな」

ランダム。せめて、エルフィン（挿絵を見ると、耳の長い美形種族のようだ。いわゆるエルフ？）が良かった。

リアルで獣耳とか尻尾とか付けられても困る。

途中で意識を失うなんて、意気地なし！ 私の精神の根性なしめ！

「ゲームでは外見も決められたんだが、さすがに異世界トリップでそれはないようだ。

獣人の特徴は　おい、大丈夫か……？」

「へーきー。いーから続けて……」

「あ、ああ……。で、この種族っていうのは、自分のことだけじゃなくてな。俺達に与えられる領土に住む種族の話なんだ」

「領主とかなんとかいうやつ？」

「そうだ。元々のゲーム『マイグレーションオンライン』は、シュミレーションゲームだ。

プレイヤーは自分の領地を持って、そこを發展させていく。ある程度まで發展したら、他の土地を開拓して領地を広げたり、他プレイヤーと領地をくっつけて国を作ったりもする。その辺は自由だが。

領地の種族によって、多少發展の仕方が変わる」

「それで、レーレルも獣人なんだね」

「そうだ。獣人の場合の特徴は、ここだ。

『身体能力が『人間』や『エルフィン』に比べると優れているため、遠征や農業、狩猟が得意である。』

戦う場合は生命力と防御力が突出して高い』

ちなみに俺と俺の領地は『人間』だ。特徴としては、商業が發展しやすいのと、器用だから工業が發展しやすいこと。

戦う場合は命中率と会心率が高いな。

「……ついてきているか？」

「な、なんとなくは」

「だが、領地の方針はそれだけでは決められない。領主の職業が関わってくるからだ」

「なるほど。っていうか私の職業ってなんだっけ……？」

たぶんこれもランダムだろう。

服装や装備でわかるわけでもないし、そもそもこの服はレーレルから渡されたものだ。

「そこもランダムか……。ゲーム内ならステータス画面を見ればいいんだが」

「へ？」

「いや、なんでもない。聞けばいいさ」

「そっか。レーレルさん」

食器の片づけに、厨房の奥へ引っ込んでしまったレーレルを呼ぶ。頼んでばかりで申し訳ないけれど、今のところ知り合いはレーレルしかない。

「はい？」

「あのさ、どうも私来る途中で多少手順をすっ飛ばしちゃって、混乱してるんだ。」

だからつかぬことをお伺いするけど、えーと、私って、職業何？」

この質問もどうなんだ。レーレルも、また不思議そうな顔をした。いっそ記憶喪失とか言えばわかりやすいかもしれないが、そういうわけでもないし、お世話になってるのに嘘をつきたくない。

「『魔法使い』でいらつしやると聞いておりますが」

「うわ、そうなんだ。なんかちょっと合わない感じがするんだけど
安田くん？」

見ると、思いっきり溜息をついて、なにやら近くの紙にメモを取り出した。羽ペンなのが、気になる。

「待て。肉弾派の『獣人』で、『魔法使い』だと……？ 生命力は伸びるが、防御力は『魔法使い』の特徴で伸びにくいから……。

攻撃も魔法主体だと攻撃は関係ないから、魔法攻撃力の低い『獣人』だと、威力が……」

「……安田くん？」

なにやら、防御力、攻撃力などと書いて、その横に数式を書いていく。

書き足す度に、隆人の顔がみるみる険しくなった。

「さらに発展方向が、魔法関係になるはずだが、基礎魔力が低いから……」

「おーい？」

「いや、遠征ではいいか？ しかし農耕関係の施設の発展が遅れるな 宮井」

突然手を止め、真剣な顔で私を見つめてきた。

そんな顔で見られると、在りし日の想いが懐かしくって、ちょっと動揺するのでやめてください。

まあ、今更ときめいたりしないけれど、こっ、落ち着かないのだよ。

隆人は深いため息とともに、口を開いた。

「これは……ネタキャラだ」

2話（後書き）

初恋の人と再会ってしたくないですね。

私もしたことがあります……。泡で固めたくなくなりました。

隆人はもつと少年らしくしようと思ったのに、なぜかストイックな青年に。

>ステータス<

領地Lv1 カノミヤイ、獣人

HP280/MP10

STR（攻撃）：2

DEF（防御）：2

DEX（器用）：2

AGI（速度）：2

INT（知力）：1

MND（精神）：1

LUC（運）：1

3話

「……安田くんってちょいちょい分らない用語使うよね」

中学時代は気が付かなかったけれど、なかなかのゲーマーっぽい。隆人は、そ…そうか？ と動揺しながら説明を続けてくれた。

「ネタキャラは、ネタにしかならないキャラということだ。要するに、見た目や名称などは良く見えても……」

「実際には使えない子？」

「う…まあ、そうだな。だが、これは宮井が一人で戦闘をした場合の話だ。」

いいか、このゲームでの…いや、この世界での宮井や俺の役割は、与えられた領地を発展させ、運営していくことだ。

遠征や盗賊討伐、他の領主からの侵略などに対しては、戦いが必要になる可能性もある。

だがその場合は、自警団や軍などを領地内で作れば、なにも宮井一人で戦うことはない。

宮井が一人で戦う必要があるのは、領地外で魔物に襲われたり、盗賊に襲われたりする時だ」

「魔物？ そんなのもいるんだ……」

「だからこそ、だれも所有できていない未開の地が多いんだ。」

ともかく、宮井が個人で戦うのは、職業と種族の組み合わせで言うところ、少し難しい。

だが、早めに治安を強化してしまえば、たいして困ることではない」

せつかく異世界に来たけれど、どうやら特別強くなれるなんてサ
ービスはないようだ。

強くなったところで、することなんてないので構わない。けれど、
最初っから駄目な子扱いされると意外にショックかも。

「って、ちよつと待って。他の領主とか、誰かが所有とか言ってる
けど、私達以外にも、同じ状況の人いるの!？」

「ああ。一人一人に状況を聞いたわけではないが、皆日本人で同じ
世界出身だ。

同じ状況の、今領主をやってる人が、確か1000人はいるはず
だ」

「いつ……。それって大事件じゃない……?」

「一斉に1000人がこの世界に来たわけではない。俺や宮井のよ
うに、来る時期はばらばらだ。

もしかしたら、まだ来るかもしれないが」

多いのか少ないのかはなんとも言えない。数だけ聞くと多そうだ
が、1年間で亡くなる人数は100万以上だと聞いたことがあるか
ら、死後の世界というわけではなく、やっぱり偶然異世界トリップ
したということだろう。

「話を戻すぞ。

職業が『魔法使い』なら、領地は魔法系の技術や学問が発達しや
すいが、獣人は魔法に向いていないから、時間がかかるだろう。発
達しないわけではない。

だが、建国を目指したり、何か目的がある場合でないなら、そこ
まで発展を急ぐ必要は無い。

領民と領主が安定して生きていければまずは、それでいいだろう
?」

「え、う、うん。実はまだ戦闘とか建国とか言われても全く分んな

いんだけど、みんなが暮らせれば、まずはいいよね？

私も慣れるまで時間がかつちゃうと思うし……」

「ああ。ゆっくりやればいいさ。」

だから、まあ落ち込むな」

いや、ネタキャラって言い出したのは貴方です。

胸中でツッコミを入れながらも、安心させるように笑いかけてくれるので、口には出さないでいた。

それとも、異世界に来てしまったことに対する『落ち込むな』なのだろうか。

獣耳と尻尾にはかなりショックを受けたけれど、私は生きている。異世界に迷いこまなければ、私という人生は、どの世界からも消えて、つまりは死んでいたのだろう。

生き延びてラッキー！　なんて軽くは言えないけれど、衣食住も保障されて、最初から仕事もある。さらには、知り合いもいる。

前の世界に残してきたものも、未練もたくさんあるけれど、これ以上を言うのは贅沢だと分っている。

だから、大丈夫。

隆人は一通り説明が終わったようで、静かに立ち上がると、食堂に取りつけられた大きな窓へと近づいていった。ちよいちよいと手招きされたので、私もついていく。

食堂は2階にあるため、窓の外には小さなベランダ（かつこよくバルコニーというべきか？）があり、2人で並んで外へ出た。

ひゅおつと暖かな風が吹いて、心地良さに思わず尻尾を揺らしてしまった。な、慣れたら嫌だな……。

屋敷の外は、ただの広い土地しかなく、建物や住居は一切見当たらない。

ところどころ雑草が生えている、どちらかというところ、学校のグラウンドのような場所が広がっていた。

遙か遠くの方には、山や都市のような影がうつすらと見えなくもないが。

「青い光るラインが見えないか？ その範囲が、宮井の領地だ」

言われて目を凝らすと、数キロほど先に（対象が無いので、距離感がつかめない）、スポーツのコートのような青い直線が光っている。しかしラインは地面に引かれているわけではなく、浮いていた。

「あそこまで……って、何も無いけど」

「初めは領主の屋敷以外何も無い。領民も最初は50人いるが、領主の屋敷と一緒に住んでいる」

人っ子一人見当たらず、ぽっかりと寂しい空間になってしまっている。

「いつか、人や物が増えたら、賑やかになるのかな」

「ああ。あつという間だ」

俺のところも最初はこうだった、と感慨深そうな顔で隆人が言う。隆人も領地を持ち、もう2年も領主として働いているのだ。

「安田くんの領地ってどんなところ？」

「俺が『僧侶』だからな。女神信仰の巡礼地や聖地として発展しているぞ」

「安田くんが僧……！」

思わず隆人の頭に目が行ってしまふのは、日本人のイメージだ。視線に気づくと、隆人は少し居心地悪そうにした。将来の髪に、不安でもあるのだろうか。

「う……。『僧侶』は回復魔法が使えて、医療が発達する。人間ならば商業も盛んになるから、医薬品などを開発して売り出している」
少しぶっきら棒に説明してくれた。

中学のころから長くないと言われていた

隆人の話を思い出して、すぐに返事ができなかった。きっと色々思うところがあつて選んだのだろう。

私が告白（そして玉砕）したころには、既にそんな風に言われていたのだ。

「見にいつてみたいね」

「落ち着いたらな。観光も盛んだ」

「遠いの？」

「かなり離れているな。東京から京都、といったところか。俺は魔法で移動できるから問題ないが、宮井にはまだ無理だろう」

それほど遠いと、自力で行くのは難しい。

隆人は、ぼんと私の頭に手を置いて、

「まあ、いつか来てくれ」

と笑った。

大きな手が獣耳に当たってくすぐったいので、ひよいと避けると、
隆人がなんだか残念そうな顔をした。

分るけどさ。触りたくなるけどさ！ もふもふだしね！ でもし
ばらくは、この獣耳はそっとしておいてもらいたい。

3話（後書き）

ちよつと短めになってしまいました。

ほんとはもうちよつと足す気だったんですが……力尽きました……。

動きのほとんどない回で、説明ばかりでした。

そろそろ榎乃ちゃんに動いてもらいます。

4話

説明が終わると、隆人はすぐに帰ってしまった。

なにやら呪文を唱えると、隆人の足元に青白く光る模様が現れ、光ごと消えていった。瞬間移動って便利。

私としてはもう少し色々教えて欲しかったが、他の領主が色々口を出しすぎてもいけないと言われてしまった。

代わりにということ、隆人は黒い石で出来たような薄い皿をくれた。

よく見ると、底には複雑な丸い模様が刻まれている。これが、いわゆる魔法陣というやつらしい。

なぞってみてもただのデザインにしか見えないが、この皿に水を張って相手を呼ぶと、テレビ電話のように使えると教わった。

一度部屋に戻って、皿（水鏡というらしい）を置き、部屋を出ると、中庭に人影が見えた。

数人が日向ぼっこをしながら、休憩をとっているようだ。

皆女性で、レーレルと同じワンピースを着て、帽子をかぶっている。これは仕事着なのかもしれない。

かざりと足元の草を踏んで近寄ると、彼女らは顔を上げて、はつと居住まいを正した。

「ご領主様つ、気が付かずに申し訳ございません」

一番手前に座っていた女性が素早く頭を下げた。

残りの2人も慌てて一緒に頭を下げる。

「え、いや、そんな畏まらないで！ 休憩中にごめんね、私まだレールさん以外のこっちの人と話したことなくて。

ちよっとお喋りしてみたいって思っただけなの。だめかなっ？」

これ以上畏まれる前に、強引に話を持ち出した。

3人は一瞬きよんとして顔を見合わせてから、

「はい！」

「ぜひっ」

花のように顔を綻ばせた。

よく見ると、3人ともまだ若く、同じ年か、2、3下くらいに見える。

そんなうら若き乙女たちに、満面の笑みを見せられちゃうと、意味もなくどきどきしてしまうから不思議だ。

3人の傍に腰を下ろす。

一番最初に口を開いたのは、赤毛の少女だ。丸っこい顔に、ぱっちり二重の大きな瞳が印象に残る。そして兎尻尾。

「良かったーっ！ あたし、今回も『気安く声をかけるな！』ってタイプのご領主様なのかと思っちゃいました。

あ、あたしはサーナって言います。こっちのメガネっ娘がユリアで、金髪美人がイリエです」

「サーナっ、いくらなんでもその話し方では失礼です」

ぺらぺらと喋り出したサーナを遮ったのは、金髪美人と称されたイリエだ。

完全な金というより、白金のロングヘアを持つイリエは、仕事着

のようなワンピースが恐ろしく似合っていない。

切れ長の瞳に、大人びた表情と仕草で、ドレスやモデルさんのような格好をさせたくなるほどの美人だ。そして黒猫尻尾。

「いいって。むしろそれくらいで丁度話しやすいよ。ご領主様、なんて呼び方もしないでいいし。」

私は、榎乃。名前で呼んで」

「はい、カノ様！ ほらイリエ、気さくでお優しい方じゃない！
ユリアもそんな怯えないですよ」

「……え、いえ、怯えてなんて……」

話しを振られて縮こまってしまったのは、メガネを掛けているユリアだ。

べたすぎるけれど、深緑の髪をゆるく三つ編みしている。

これまたべただけけれど、ちょっと内気そうだ。

そして なにやら真っ白いもこもこの尻尾がついている。尻尾だけでは分らないけれど、帽子からは飛び出ているくるくるした角が飛び出ている。

羊って尻尾あったんだ……。

ユリアはもじもじと黙りこんでしまった。手をしきりにいじいじさせている。

サーナはなんとかユリアに話させようとしたけれど、諦め、一つ溜息をついた。

「ごめんなさい、カノ様。」

あたしたち、元は別の領地にいたんだけど、そこが耐えられなくなっ

逃げ出して、他の人達と協力して、別の土地に新しいご領主様をお願いしたんです。

前の領主は厳しかったから、またそんなのかと思つて、ちょっと怖がつてるんです」

「そんな領主もいるんだ……。領主つて、お願いすると派遣されるの？」

「はい。人を50人集めて、皆で女神様にお祈りするんです。

そうすると、その土地に新しい領主の屋敷が出来て、そこには数日分の備えがされていて、しばらくするとご領主様が神殿からいらつしゃるんです」

それで最初の領民は50人、住居はないのに屋敷はあるわけか。女神が勝手に送ってくる領主。しかも、いい人とは限らないのだ。それに仕えなきゃいけないなんて、ちよつと理不尽じゃないか。領主くらい自分たちで選びたいだろう。

「領主を勝手に決められるの、嫌じゃない？」

悶々とするのは苦手なので、素直に聞いてみた。

ストレートすぎるかなとも思う。私自身が領主であるし、私の前じゃ素直に答えてくれないかもしれない。

けど、心のため込むのも嫌なんだ。

強く首を振つたのはイリエだった。

「いいえ。誤解なさらないください。私たちは、自分から女

神に祈つたんです。領主を下さいと。

流れ者になるよりも、領主に仕えることを選んだんです」

「そつか。ありがと。

期待されたなら、答えないとね。

あのさ、今50人いるんだよね？
みんなと一度に話せる機会ってないかな」

3人に頼んで、夕方、50人を領民用の食堂に集めてもらった。
50人まるっと入れるのがそこだけらしいし、さらに夕食後なら
ちょうどいい。

満腹になっているときは、人は機嫌よく話が進められるものだ。
ぎしぎし軋む扉を開けると、50人の目が一齐に私に向いた。
石造りの壁で囲まれ、古びたテーブルと椅子がいくつも並んでい
る。満席だ。

食堂の一番内側、厨房から料理を受け取るカウンターの前に立っ
て、ぺこりと頭を下げた。
日本人が作ったゲームの世界だからか、礼がお辞儀でいいので、
やりやすい。

「はじめまして。領主になった榎乃って言います。
えっと……実は私、なにがなんだか分からないうちに領主になっ
てしまったんです。
不可抗力、みたいな感じで。」

でも、皆が領主を必要としてお祈りしてくれたって聞きました。
だから、その期待の分しっかり働いて、一緒に笑って暮らしたい
です。

協力して、くれますか？」

しんと静まりかえった室内に、自分の声だけが響いた。
まずは、自分がなにをしたいのか相手に伝えること。自分を見てもらうこと。

そして、皆を見ること。
それがしたいと思った。

50人をじつと見つめる。

後ろの方には先程の3人娘がいて、右端にはレーレルがいる。
それ以外は初めて見る人ばかりだけれど、子供から老人まで、今日から一緒に生きていく。

誰かが、思い出したようにばらばらと手を叩いた。
釣られるように、他の手の音が重なり、たちまち拍手の波が広がった。

じんわりと、嬉しさが滲みてきた。

受け入れてもらえたよ。だから、お別れだね……お母さん。

一瞬だけ目を閉じて別れを告げ、頭を切り替える。

「ありがとう！」
まず、聞きたいことがあるんです。さっき領地を見たけど、まだ何もなかった。

最初は食料や、材料の備蓄があるって聞いたんだけど、どのくらい持ちそうですか？」

きつと、無くなったら飢えてしまうだろう。

まだこの土地には市場もないから、物の売買もできないし、そもそもお金もない。

全体的に物資不足なはずだ。

訊ねると、一瞬ざわついた後、後方から細い手が伸びた。

「あっ、あの……。私、料理作ってるから……。食料の残り、わかります……」

「ありがとうございます。ユリアさん。お願いします」

「はいっ……。ええと、テクがあと1ヶ月分くらいはあります。

あつ……。あと、ラスト豆も同じくらいです。果物、野菜類は1週間分ほどで……。長持ち、しないと思います」

「えっと、ごめん。こっちの風習まだよく分ってないんです。

テクって何ですか？」

「テクは……。えっと主食の穀物で……。今日の、ご飯に出た……。白いえっと、ふつくらした……」

「ああ、ナンもどき！ 分りました」

テクというものが、米や麦の代わりなのか。あれを料理するとナンもどきになるのだろう。

とすると、主食はあっても、その外の材料はすぐ無くなってしまふ。

はい！ と続けて元気よく手を上げたのは、右前に座る同じ歳くらいの青年だ。くせのある茶髪。そして、犬耳（柴犬？）。

「とりあえず畑を作って、収穫できるまでは、近くの山や森で果物とか肉とか狩ればいいんじゃないか」

「森なら、西に行ったソ口湖の近くにあるわ！ 魚も釣れるんじゃないかしらね」

「畑っても種はあるのかよ？」

「テクとラスタ豆、あとトマトとキュウリもあつたぞ。ジャガイモは備蓄の一部を種にしちまえ」

犬青年が発言すると、皆慣れてきたようで、ぼんぼん意見が飛び交った。

ところで、トマトとキュウリとジャガイモはそのままかい。まあ食べ物の設定まで全部異世界チックにするのは難しかったのだろう。わかりやすく、たいへんよろしい。

「よし！ じゃあ皆の意見をまとめます。

まず、明日。畑を作って、季節の種を植えていきましょう。何人くらい必要かな？」

「20人もいれば、結構大きなのが作れるんじゃないか」

「待て、そういえば男は全部で何人いるんだ？」

そこ重要。働けそうな男手の数を把握しておかなければ、作業しにくいだろう。

ざわつきだした室内に、私は声を張り上げた。

「はい、13歳から45歳までの男性起立！ えーと、ひい、ふう、みい……」

年齢は大体だが、力仕事というところくらいだろう。

椅子をがたがたさせながら、26人の人が立ち上がった。

「結構いますね。

畑って耕すのが力作業なんですよ？ 種蒔きは女性や子供でもできそうですか？」

ジャガイモやキュウリなら、小学校で育てた記憶があるし、大丈夫なはずだ。

「ええ、水やりもわたくし達でできますわ」

「僕やれる！ やったことあるっ」

「はい、決定。じゃあ、午前中に耕すのを20人で。疲れと思うので、交代しながら進めましょう。」

午後からは手の空いてる女性や子供の方で、種蒔きです。

狩猟のほうは、急ぐ必要はないので、数日後くらいにして、その間にほかのことを進めましょう」

まとめながら、黒板かホワイトボードがほしいと思った。

部活やクラスで、作戦会議や行事の相談をし合った時のことを思い出してしまう。

「ほかに、早めに作りたいものなどはありますか？」

少しだけ寂しい気持ちで、さらに議題を広げていった。

会議終了後の夜、布団を整えに来たレーレルに、例の水鏡を見せると、仰天された。

「そんなものくださるなんて……」

「なに？ やっぱり高い物なの？」

「はい、とつても。わたくし、実際に見たのは初めてです」

「なんだか悪かったかなあ……」

レーレルは興味深そうに尻尾をぱたぱたさせているけれど、高級品をほいほい貰う訳にもいかないし。

ただの元同級生ってだけで いや、私にとっては初恋だったけど、この場合そこはあまり関係ない。

「あの御方ならこれくらいはなんでもないと思います。

なにせ、聖セルヴィリア王国の王様でいらっしゃるじゃいますし。

貰えるものは貰っておいた方が」

驚きで、私の尻尾がピンと反応した。

さり気なくがめついレーレルの発言はいいとして、その前のセリフ何て？

「なにがなにで、誰がどこの何だって？」

「あら？ ご存じなかったんですか？」

リユート「ヤスタ様といえば、有名な聖セルヴィリア国の王様です。」

「よ
誰もがセルヴィリア国の薬に助けてもらった覚えがあるはずですよ」

「異世界で最強補正がついたのは、アンタだったんかい。」

「御帰りなさいませ、陛下」

「ああ。それと陛下はやめてくれと言っているだろう」

「はい、リユート様。こちらが今日の報告書です。それで、あちらはいかがでしたか？」

「……良くないな」

側近から書類を手に取り、机に向かいながら溜息をついた。
予想以上に、条件が悪すぎる。

「やはり、南のヴァルルーデ王国が気になりますか」

「場所が近いからな。レベルが低いうちは襲われないようにはなっているが……。宮井が獣人族になってしまったのも運が悪い。

ヴァルルーデの連中は獣人を毛嫌いするから、目を付けられやすい」

「ミヤイ様とは……？」

「その新しい領主の名前だ。カノ＝ミヤイで登録されているな」

机の上にあつた1通の書簡を開く。

新しい領主が誕生　もとい、誰かが異世界トリップしてくると、女神の住む神殿から全領主に書簡が届けられる。

内容は、新領主が誕生したという報せと、領主の名前、場所だけだ。

自分の領地の近くでない限り、それほど重要な情報ではないが、今回だけは特別役に立った。

「まあ、水鏡を渡しておいたから、なにかあればすぐに連絡があるだろう」

水差しを持ってきてもらい、卓上にある黒い光沢を放つ皿に、水を注ぐ。

水面はまるで鏡のようにすぐに静まった。一点の曇りもなく、覗きこんだ隆人の顔を映し出している。

これを静かに叩いて、名前を呼べば、相手の水鏡に繋がる。相手が水鏡の前にいなければ気付かれないが。その辺りはやはり、電話と似ている。

「ついで居らっしやらなくて良いので？」

遠慮がちに訊ねられたので、水鏡から顔をあげた。

心配そうにでも見えただろうか。

「ああ。外的な不安要素はあるが 領主としての宮井なら大丈夫だ。

あいつは人をまとめるのが上手いから。

俺はずっとそれを見ていた」

4話（後書き）

ガイド隆人退場です。

女の子がたくさん出せてとても楽しいです！

羊にしようと思って、あれ？尻尾あつたっけ？と思い、ぐぐったら出てきました。

あるんですね、尻尾。

そろそろ獣耳尻尾の種類が尽きてきました。

豹、猫、兎、羊、犬……。アイデアあつたらいただけると嬉しいです！

5話

翌日のよく晴れた昼過ぎ、予想以上に早く畑が完成した時に、それは起きた。

《テーン！ テツ、テツ、テツ、テエーン！！！》

どこからともなくファンファーレが鳴り響いた。

私は手にじょうろを持ったまま、働いていた人々は鍬やら種やらを手にしたまま、ぽかんと立ち尽くした。

朝から肥料を運んだり、石や雑草をどかしたりしてせつせと作った畑は、種蒔も水やりも終わっている。

そのテニスコート2、3面ほどの大きな畑が静まりかえり、ファンファーレの音が《テエーン……ン》とエコーしながら消えていった。

何今の。誰がどこから鳴らしたんだ？ 完成のお祝いだろうか。

誰かに問おうと周囲に目を走らせると、領民たちが私を凝視していることに気付いた。正確には、私の足元。

視線につられて、自分の足元を見降ろすと、

「え、何これ！」

私の立っている地面に、青く発光する円が浮き出していた。両手を広げたほどの直径があり、円の中では、細かい模様が絡み合ってい

る。

隆人が瞬間移動の魔法を使ったときと似ている、魔法陣だ。驚きながら、魔法陣から出ようと、一歩進む。すると、魔法陣も一歩分動いた。どうやら、私についてくるというか、私がこれを出しているらしい。

「どうしよう、これ。なんか変な魔法とか出たりしないよね……？
化け物とか炎とか鳩とか　　ってそれは手品じゃん！」

思わずノリツツコミをしながらしゃがみ込んで、恐る恐る陣に指先を伸ばした。

そっと触れると、青い光が一瞬強まり、目の前に文字が浮かんできた。

『レベルアップ！』

一瞬だけ表示され、空気に溶ける様に文字は消えた。恐らく、畑を作ったことでレベルアップできたのだろう。領民たちは顔を見合せながら、おおっと歓声を上げた。

「やったあっ！」

「おめでとつございますー！」

「これでよろやく……」

「驚いたねー」

などと、皆それぞれ喜んでいますが、私の困惑はまだ続いていた。文字は消えたけれど、足元の魔法陣は消えていないのだ。

尻尾をぶんぶん振って喜び合う人々を残し、私は慌てて自分の部屋へ戻った。

井戸が屋敷内にしか無いため、畑は屋敷のすぐ真横に作った。そのため自室との行き気は楽だ。

ベッドに腰掛け、貰った攻略本を開いた。

レベルアップという単語を索引で引き、書かれているページに辿り着く。

「えーと、これが。」

『レベルアップ。建物や施設を作ったり、何度も狩猟へ行ったり、人口が増えたりすると、領主のレベルが上がります。』

レベルが上がると、建てられる物の種類が増えてできることも多くなります。領主にはレベルアップ時に『成長ポイント』が与えられます。ポイントを使ってステータスに自由に割り振ることができます。』

青い魔法陣が出てレベルアップの文字が浮かび上がる瞬間の絵が付いているが、この魔法陣がどうやって消えるのかまでは書かれていない。

魔法陣は今も消えずに、部屋の床に浮かびあがっている。

踏んでも擦っても砂をかけても、消えなかった。

やはり本だけでは分りにくい。私は、サイドテーブルの水鏡を叩いた。

「安田くん、ヘルプッ！ カモン王様！」

教えられた手順で呼ぶと、一瞬ゆらりと水面が蠢き、私の顔が映

っていた場所に、隆人の顔が現れた。

覗きこんでいるためか、少し長めの前髪が、水面に垂れて邪魔そうだった。

髪を払いながら、水面の隆人は少し顔をしかめる。

「いつばれたんだ、それ……」

私は、すぐに隆人が出てくれたことにほっとした。

「黙ってるなんて水臭いよ！ あと、水鏡くれてありがとう！ っ
てそれどころじゃない。あのね、レベルアップしたの！」

「どういたしまして。そしておめでとう」

「ありがとう。で、なんか足元に光る模様が出て！ なにこれ、ど
ししたらいいの！」

「領地にステ振りしなければ消えない。ステ振りは やってみれ
ばわかる、指輪を使ってみる」

「……はい？」

「ああ、そうか。宮井は確か指輪が無かったんだな……」

隆人は溜息をつきながら、右手を芸能人結婚式の記者会見たく
掲げた。

中指には、細い銀の指輪があり、中央に青い宝石が埋まっている。
隆人が左手で、指輪を撫でると、宝石の周りに小さな魔法陣が浮
かび上がる。そのまま、

「ステータス」

呟くと、指輪の魔法陣が消え、代わりにパソコンのような四角い
ウィンドウが開かれた。

これは魔法陣のようなくちゃぐちゃした模様とは違い、きちんと

文字が読み取れる。

真ん中に大きく『ステータス』とあり、その下に様々な数値が書かれていた。

「うわあ、すごい何それ。魔法と言うよりSFっぽい表示！」

「どちらもファンタジーだろう。ともかく、これがステータス画面だ。本来ならゲームスタート時から、指に指輪が嵌っていて、レベルアップすれば自動的にこの画面が開くんだが」

「……ない、よ？」

両手を掲げてぴらぴらと振ってみる。まめだらけの手には、指輪なんてオシャレなアイテムはついていなかった。

「それがおかしいんだが……理由は分らん。」

ともかく、ステ振りすれば魔法陣は消える。俺のを代わりに使え。別に外せない指輪ということもないからな」

「え、安田くんはいらないの？」

「ステータスは覚えているし、レベルも完ストしている。スキルも取り終えているから、特に不便なことはない」

隆人は、さらりとすごいことを言っ指輪を外すと、水の中に落とされた。落とした。

落とされたそれは、不思議なことに、私の水鏡の底に沈んでいる。

「水鏡はこうして、物を渡すこともできる。まあ、液体系は溶けてしまうから無理だが。それに濡れてしまうから紙類も送れない」

取り出すと、確かに濡れている。手頃な布がなかったので、とりあえず服の袖口で軽く擦って、左手の薬指にはめた。

指のサイズが違うはずだが、着けるといつの間にか少し小さくな

って薬指にぴったりになった。

おおーと感動して見ていると、水鏡から叫び声が響いた。

「待て待て待て！」

「へ？　なんかあった？」

「どうして、そのっ……左手の薬指なんだ！　意味を知らないのか！？」

いつになく隆人が焦っている。それとも怒っているのだろうか。

「前、友達に言われたよ。『榎乃はぼーっとしてるから危ないの！指輪持ってたら、左手の薬指に着けときな』って。

おまじないって言われたんだけど違うの？」

「違わなくは……だがしかし」

「駄目かな？」

普段からぼーっとしているつもりはないのだが。

結局、その時は指輪なんて持っていなかったから着けなかった。

高校時代の友人に言われた言葉だ。あれこれと世話を焼いて小言を言いながら、それでもいつも一緒に笑ってくれた。

今は、どうしているのだろう。悲しませているかもしれない。

思い出して鼻がつんとし、急に涙が出そうになったけど、なんとか踏ん張った。

そんな私を見ながら、隆人は口をぱくぱくさせている。

いつも冷静だから見慣れないけど、慌てるところなるのか。

普段の涼しげなさっぱりした顔に皺を寄せて、顔を真っ赤にしている。

「だっ……駄目では、というかそついう問題ではない！ もついい……とりあえず、画面を開くんだ」

「ステータス」

指輪を撫でて同じように言うと、画面が広がった。

《ステータス：領地Lv2 領主カノミヤイ、獣人

HP300/MP15

STR (攻撃)	: 4
DEF (防御)	: 5
DEX (器用)	: 3
AGI (速度)	: 3
INT (知力)	: 1
MND (精神)	: 1
LUC (運)	: 2

成長ポイント：残り10》

すたあ、でふ、でつくす……？

広がったはいいが、私にはこの数値が良いのか悪いのかも分らない。

左手を掲げたまま、右手で攻略本のページをめくり、ステータスについて書かれた場所を開いた。

「『ステータスの意味は二つあります。まず、自分が個人で魔物や外敵と戦うときの能力値としての意味。もう一つは、領地が発展としての能力値です』」

なんか、前に安田くんに言われたことと似てるね？」

「ああ、戦力としての見方は、RPGなどと同じようなものだ。宮井のこの数値だと、攻撃力、防御力が高くて、魔法攻撃力と回復魔法力が低い。HPが高くて、MPが低い。

これは獣人になっているからだ。おかげで、『魔法使い』として見ると、このステータスは残念すぎるものだ。

そこは、戦わないようにするか、戦いたいならば、《成長ポイント》をINTに全部振ってしまえばいい」

画面をよく見てみると、ステータスの数値の横に上矢印がついている。

どうやら、これを触ればポイントを振れるらしいが、INTの矢印の横には、2という数字が着いている。

INTを1上げるには、『成長ポイント』を2つ消費するようだ。

「ステータスよっての領地の発展はどうなるの？」

「そこだ。発展、つまりはその領地の特色が何になるかが、このステータスで決まる。

まず、指輪に『建築物』を表示させてくれ」

さきほどと同じように指輪を撫でる。

「建築物」

すると、ステータス画面の横に、新しいウィンドウが開いた。

《『魔法使い』 建築可能なアイテム

LV1：畑1、民家1、道1

LV2：市場1、鍛冶屋1、魔法店1

畑は知らないうちに作ってしまった。民家や道まで作れたのか。

気になるのは、1v2の鍛冶屋と魔法店だ。鍛冶屋はまだしも、魔法店とは一体何を売っているのだろう。

「1v2で魔法店が作れるのは、『魔法使い』だけだ。俺が1v2のときは、『僧侶』だったから、代わりに教会が建てられた。

『魔法店』を建てられるようになったのは、1v6まで行ってからだ」

「つまり、職業に合った建物から早く作れる？」

「正解だ。

ステータスは、その後の建物の成長に関わってくる。今、どの建物にも数字が1と付いている。このランクは、関連するステータスが成長するほど、大きくなる。

ランクが大きくなると、まあ立派になったり豪華になったりする「うーん、じゃあアイエヌ……知力に全部振ったら、魔法店がそのうちゴージャスになると」

「だが、DEXが低いと市場のランクが上がらない。俺は、作った医薬品を売れたかったから、器用も多めに上げて、早く市場を発展させたな。テンプレートはあるものの、ある程度組み合わせ次第で色々できる、ということだ」

「なるほど。ありがとう！ 説明お疲れ様です」

お礼に拍手をぱちぱちしてあげる。

何も見ずに、そこまでスラスラ説明できるなんて、どれだけゲーマーなんだろう。きっと日本では攻略サイトとか人だったに違いない。この前も、ステータスの計算式とか作ってたし……。

考えながら、画面に触れる。

とりあえず、鍛冶屋に關係するSTRの数值は高いほうだ。DE
Xも特別低いというわけではないだろう。

『魔法使い』としては、低すぎるINTに全部振ることに決めた。
カチカチと画面の矢印を押していく。タッチパネルなんて、やっ
ぱり魔法というより、ハイテクと言いたくなる。

「なあ」

「ん？」

ステータスを調節していると、隆人がどこか遠慮がちな声で話し
かけた。

「俺が王様だと知ってどう思った？」

「んー？ 驚いた。ちよつとびびった」

「そつか……」

INTが6になり、調節完了。成長ポイントが0になると、足元
の魔法陣は音もなく消えた。

隆人がやっていたように指輪を2回撫でると、画面も消えた。

「でも、安田くんは私に普通に接して欲しいんだよね？ 言いだせ
なかったっていうのは、そういうことでしょ？」

消えた画面から目を話し、隆人の顔をまっすぐ見つめると、隆人
はちよつと笑った。

「ああ。頼む」

「じゃあ、敬語も使わないけど、許してね！ さて、放ってきちゃ
ったから畑に戻らないと。本当にありがとう」

「構わない。初心者育成も古参プレイヤーとしては大事な仕事だ」
「あはは、また分りそうで分りづらいゲーム用語使ってる」

お互い笑いながら、またねと手を振って、水鏡から顔を上げた。
水鏡から離れると、隆人の顔が水面から消えていった。
私は本当に運がいいと、改めて思った。

教えてくれた分、恩はちゃんと返す。まずは、立派に領主の仕事
を頑張るしかない。

畑に戻ると、人々の達成感に溢れた笑顔と歓声に包まれた。

5話（後書き）

動くか！と思いきや、またもや説明回。ほんとすみません。でもチュートリアルはこれで終了。説明もこんな長々したのは、もう……出ないと思いたいです。

読む方も書く方も疲れますよね！

1章お付き合い下さり、ありがとうございました。

2章『出会いだらけのビギナー』も楽しんで頂けると幸いです。

>ステータス<

領地Lv2 カノミヤイ、獣人

HP300/MP15

STR（攻撃）：4

DEF（防御）：5

DEX（器用）：3

AGI（速度）：3

INT（知力）：6

MND（精神）：1

LUC（運）：2

>領地設置建築物<

・ランク1

領主の屋敷、畑

6話（前書き）

迷った末に残酷描写ありになりました。小説情報にも追加しておきました。

苦手な方は気を付けてください。

6話

「はっ！」

気合を入れながら、イリエが剣で、兎型の魔物の右目を切りつけた。魔物がキャンと悲鳴を上げ飛び退ったところで、私が横から蹴り飛ばし、駆け寄ったイリエが、剣を突き立てた。

ちらりと、指輪の上に浮かび上がる戦闘ウィンドウを見て、兎のHPバーが0になったのを確認する。

大きくびくと跳ねてから、魔物は絶命し、木でできた宝箱へと姿を変えた。

戦う前まで、毛皮を剥ぐとか捌くとかいうグロイ作業があったらどうしようとハラハラしたのだが、そこはゲームに似た異世界のおかげで、グロイ作業無くアイテムゲットできるようだ。

本日10箱目となる宝箱を開けると、中身は予想通り毛皮と兎肉だった。

だが、肉は嬉しい。なにせ今日私が、森に来たのは、主に食料確保が目的だから。

応援と　それより遙かに多い心配をされながら、領地の西、三日月型のソコ湖の奥にある森へとやってきた。

畑作成から4日後の今日、初めて領地の外へ出たのだ。

1v2になつてから、噂を聞いたのか人口が20人も増えた。嬉しいことではあるが、食料の先行きが本当に怪しくなってきた。し、レベルアップをすればまた人口も増えるだろう。

畑から採れるものができるまで、あと何日もかかってしまうので、

狩猟と釣りに行く人たちを決め、それぞれ食料調達することになったのだ。

私はせっかく『魔法使い』という戦闘職なので、狩猟に参加した。狩猟する森は、動物以外に魔物も出るので、戦闘が出来る人でなければならぬ。私を含め、4人が狩猟メンバーである。

領主が来たばかりの土地は、女神の加護で一時的に強い魔物が出なくなるらしい。人数的には問題ないと、手練れ『戦士』であるイリエに言われた。イリエは、この森に何度か来たことがあるのだ。

イリエは、顔にかかった髪を払うと、流れるような仕草で、剣を治めた。

金髪美人でモデルのようなイリエが、まさか肉弾戦闘派だったとは。

戦士らしく、重い銀の鎧に身を包み、細身の剣と盾を装備している。

ゴツイながらも装飾が派手な金属鎧は、美人なイリエにとても良く似合っていた。御伽噺というか、これこそゲームの騎士といった感じだ。

ちなみに私の装備は、普段通りのワンピースだ。『魔法使い』は、鎧を着ることができないらしい。チャレンジ精神で無理矢理着ようとしたが、着るとなぜか一步も動けなくなるのだ。

これもゲーム設定のままの異世界であるせいだ。

武器には、安っぽい木の杖。市場がないので装備を買うこともできず、倉庫にあったものを譲ってもらった。主に魔法を放つためではなく、歩くのと、殴る方向で役立っている。

私はスカートの汚れを払いながら、少しだけ浮かんだ汗を拭くと、4人全員が無事かを確認した。

「みんな、無事みたいだね」

「特に問題ないです。カノ様、MPは？」

「もう、すっからかん。そもそも15しかないのに、火の球一個投げるだけで10とか、コストかかりすぎだよ……」

「ここぞという時のために、温存しましょう。そもそもカノ様は、杖で殴られてもダメージ出せています」

「だね。格闘技はやったことないけど、喧嘩とかならやっ　あ、いやなんでもない！」

忘れたい黒歴史を一瞬思い出してしまいそうになった。

最初の一戦は、森に入っすぐだった。鼠というある意味王道的なモブ魔物が飛び出して来たので、応戦したのだが、その時にMPを使い切ってしまったのだ。

我ながら後先考えなさすぎる。

しばらくすれば回復するのだが、さっきの戦いでも3体に囲まれたために、魔法を使ってしまった。

魔法の使い方は、攻略本を読んで頭に入っている。ステータスや魔法スキルなども、多少は詳しくなっただはずだ。

魔法無しでも勝てなくは無。ただ魔法を使わないと、倒すのに少し時間がかかる。

イリエが木々の間から太陽の位置を確認し、昼を過ぎたことを教えてくれた。

「少し、休憩して昼食にしましょう。見通しのいい場所ですし、カノ様のMPも回復できます」

「わざわざごめん……」

これはかなり情けない。レベル差もあるが、確実に足を引っ張っている。

隆人が戦闘に難色を示していた理由が分ったような気がする。

「まあ、気にするようじゃないさ！ ほら、火を起こさんとね。

カノちゃん水汲んできてくれるかい。近くに川があつたはずだから」

「はい、ありがとうございます」

励ますように会話を打ち切り、指示を出してくれたのは、バルバラだ。40歳ほどの外見に、こげ茶で結いあげた髪、皺のなかでも、くりくりと動く目がとても優しそうに見える。そして狸耳と尻尾。

一見、学食のおばちゃんのような太つちよで母性的、お玉やフライパンが似合いそうな人だ。もちろんここに来ているからには、実際は戦闘職。こう見えて、バルバラおばちゃんは『僧侶』だそうだ。武器として、聖典である太い本を抱えていて、傷を治す魔法をかけてくれたりする。

陽気な人で、私が名前で呼んでほしいと言うと、嬉しそうに『カノちゃん』と呼んでくれた。

皆歓迎はしてくれるけれど、親しげに話しかけてくれる領民は少ないので、とても嬉しかった。

言われた通り水筒に水を汲んで戻ると、バルバラが持ってきていたナンもどき もとい、テクを手渡してくれた。

隣に座って、これまた持ってきていた豆を挟んで食べる。豆とテ

クだけで、結構な栄養が取れるらしい。

「やっぱり動いた後の食事は一番だねえ。あたしゃそんなに働いちやいないんだけどさ。みんなまあ、強いこと。怪我をしてくれないから出番がないわ」

「バルバラ！　それがいいことじゃないか」

木にもたれる様にして座るイリエがすぐに抗議した。

キラキラする外見に反し、イリエはちょっと真面目すぎるような人だ。

バルバラさんもそれを分っているようで、笑って答える。

「もちろん、褒めてるんだよ。これなら安心して何回でも来れる。食料不足なんて、すぐになんとかなるさ」

「おう、肉が食えるのは楽しみだよな！」

バルバラさんに賛成するように、砂色の髪の方　フェレが手を叩いた。20代前半くらいで、肌は皆より幾分褐色がかっている。屈託なく笑う印象の良い人だ。そして狼耳と尻尾。

職業は、イリエと同じ『戦士』だが、得物は斧だった。振り回すと威力が大きいが命中しにくく、兎や鼠のような小さい相手では苦戦していた。攻撃力重視なのか、動きやすくするため、金属鎧ではなく皮鎧を纏っている。

「3人は仲良しに見えるけど、前から知り合いだったの？」

最後の一片を口に放りこみながら、せっかくなので聞いてみる。口を開いたのは、一番お喋りなバルバラだった。

「あはは、まあ知り合いというかね……。出身はみんなバラバラな

んだけど。この地で女神に祈りを捧げるときにさ、魔物が襲ってくることもあるんだよ。

領地の青い境界線が無いと、魔物は人里にも近寄るからね」

「えっ……、じゃあ領地以外では暮らせないんですか？」

「ホントは領地外で暮らしてる人の方が多いっすよ？ けどまあ、皆行くところが無くて仕方なくってところ。誰もが領地で暮らしたいと思ってるはずっす」

じつと火を見つめながら、フェレが呟いた。

バルバラも、テクを食べ終わり、パンパンと手を叩いて、粉を払う。

「青い境界線は、領主がもたらす女神の奇跡の一種って言われてんだ。あの線の内側に、魔物はいれない。」

あたしらは、50人で祈っている時に、邪魔が入らないよう、魔物を狩っていたのさ。祈りながらね。それだから、まあ、仲良いとどうか息はピッタリだろう？」

「……はい」

そんな風に苦勞してまで、領主を呼ぶ。

私は、応えられるのだろうか。その期待に。

お前なんか、いらなかったわ！

せめて、あの馬鹿と一緒に死んでいれば良かったのに。どうして来たのよッ

ふつと頭の中に、鮮明に声が蘇った。昔、言われた言葉だ。私は結局、あの人の期待には応えられないままだったな……。

私が黙って考え事の世界に入ってしまったいそうになると、イリエが立ちあがった。

「皆食べ終わったな。行こう。」

カノ様、ここから少し上流の、良い薬草と木の実がある場所まで行きます。あと1時間くらいで着くので、そこで折り返して帰りましょう。」

「あ、うん。頑張ろう。」

気を取り直して、再び森を進む。

どこの領地にもなっていないが、完全なる未開の地というわけではないので、それなりに切り開かれた道があって歩きやすい。

イリエを先頭にして、私、バルバラ、フェレの順番で進んでいく。無言で歩くというわけではなく、たいていバルバラが話を弾ませてくれた。

魔物さえ出なければ、ピクニックといえるほど長閑だ。

「ああ、あの木。カノちゃん知ってるかい？ あれは、冬に花が咲くんだよ。珍しいだろ？」

「へええー……どんな色の花なんですか？」

「それが、青い色なんすよ。一面の雪景色に、一本だけ咲く青い花の木。」

「素敵ですねえ！」

「だろっ！ 青い色は女神の力の象徴だから、皆から愛される木なんだよ。」

日本人でいう桜みたいなものだろうか。
バルバラは『僧侶』だからか、話しにちよくちよく女神という単語が出てくる。

「この地方は冬ってやっぱり雪降るんですか？」
「それなりに積もるね。膝くらいまでだ」

それは、日本基準で行くと、結構北国だ。綺麗であっても、さぞ寒かろう。

雪雲なき太平洋側に住んでいた人間としては、ちよつと不安である。

「でも見てみたいなあ。冬になったら見に来ようかな」

「ははは、元気だねカノちゃんは！」

「雪は慣れてないんですけど……寒さには結構鍛えられてるんです。寒中水泳とかやったことあるので」

「すごい元気っすねカノ様……」

友達には無駄なところでチャレンジャーと言われたことがある。

雑談を弾ませていると、イリエがぴたりと立ち止り、右手を上げた。

「魔物が近い時の合図だ。」

雑談はここまでにして、各々さつと武器を構える。

杖を構えた途端、自動的に指輪が反応し、戦闘ウィンドウが展開される。書かれているのは、敵のHPバーと名称、それと自分のHP/MPPバーだけだ。

だが、この指輪が反応するということが、近くにいるのは動物ではなく魔物である証拠になる。名前はバッシュベア、HPは兎の2倍近くで、260ある。

どこかに、熊が隠れている。

音を立てず、神経に集中する。

後ろから、がさがさつと草をかき分ける音がした途端に、草むらから隠れていた熊が飛び出してきた。2メートルはある大物。

「おお、いい獲物！」

最後尾のフェレは余裕の表情で、熊の初撃を斧で受け止め、弾きかえす。

熊はびくともせずに、再びフェレを狙って右前足を振り下ろしてくる。

フェレは今度は、斧を横に振り切って、攻撃を流すと、反動を使って今度は逆から連続で攻撃を繰り返した。

その間に、私は熊の後ろへ、イリエは側面へ回り込む。防御の低いバルバラは、フェレの後ろで守ってもらい怪我の準備に備えて、魔法陣を展開しておく。あとは呪文を言えば即発動できるはずだ。

フェレの攻撃が熊の肩にヒットし、熊が2、3歩後ろへよろける。HPが大きく減り、スタンしたことを表す星マークがHPバーの横に現れる。

私は、チャンスとばかりに、杖を振りかぶった。

右足を引きながら、熊の怪我をしている右肩を強打し、その勢いを殺さずに自分の体を回転させつつ、回し蹴りを放つ。蹴りのスキ

ルなんて持ってないので、実力そして力任せだ。

頑丈なブーツを履いているのが幸いして、熊はイリエの方へ傾いた。

イリエもタイミングを間違えず、素早く踏み込み、体重を乗せながら剣で衝いて、ダメージを与える。

「ぐおおおおーッ」

悲痛な鳴き声を上げて、巨大はどさりと地面に倒れた。HPバーは完全に赤い色が消えた。

熊の血が地面に吸われる前に、すうっと宝箱へと変化する。

「よっしゃ！ 熊肉に熊の毛皮、それと牙だな。いいもんだ」

宝箱を開けたファイルが満足そうに笑って、持ってきた布袋に突っ込む。

熊の肉は結構大きく重そうだが、ファイルは軽々と肩に担ぎあげた。

「皆ご苦労さん。こりゃあ、豊作だ。怪我人は、いないね？」

3人ともが頷くと、バルバラは聖典をパタンと閉じて、魔法陣を消した。

兎などと違って、一撃に力を入れたため、皆多少は呼吸が荒くなっているが、問題なさそうだ。

イリエは何やら考え込んで、熊……と呟いた。

私はむしろ、初めて見た熊の肉に驚いている。

「熊肉って初めてみました」

「おや、そうかい？ まあ一般的な食べ物とは言わないがね」

「どうやって食べるんですか？」

「色々あるんだろうけど、あたしが食べたのは」

バルバラが言いかけた瞬間、バルバラの背後でゆらりと、影が蠢いた。

はっとして、目を凝らした瞬間、影が勢いよく何かを振り下ろした。

「バルバラさんッ」

ごめん、と思いながら杖でバルバラを横へ突き飛ばす。

次の瞬間、バルバラのいた所に回転する手斧が飛んできて、避ける間もなく、私の目の前にくる。

「っっ」

咄嗟に杖を構えて、受け止めるが、勢いを殺しきれず、吹き飛ばされる。

手斧が当たった杖は、当然ながら真っ二つに折れた。

「カノ様ッ！ バルバラ、回復を。フェレ、守りつつ撤退だ！ コイツは熊連中のボスだ。一匹なら平気だが、戦っていると他の熊が来るぞ！」

地面に伏しながら、イリエの鋭い声が聞える。

右腕で何とか体を起こす。杖で直撃の軌道を逸らすことはできたが、左腕に結構な深手を負った。肩口から肘あたりまで、ざっくり切れている。

神経まで傷をおったのか、じんじんする。が、痛みはなんとか堪えられる程度だ。

顔を上げると、先程の熊の倍　3メートル以上はある巨大な…
…ここまですると化け物にしか見えない熊が、イリエを狙っていた。
イリエは挑発するように、わざと大声を上げ、剣で軽く攻撃する。
巨大熊　戦闘ウィンドウによるとキングベア（ベタな名前だ）
は、前足で交互に重い一撃を繰り出してくる。敵HPバーは226
0と表示されている。
イリエは、受け止めるより避けることに専念しながら、私たちの
方へ攻撃が向かないようにしていた。

私のHPバーは、168になっており、半分ほどの短さになって
いる。

大丈夫だ、ゲームなんて3割切らなきゃ平気だ。昔やった2Dの
ゲームではそんな風だったはず。
痛みを堪えて、立ち上がろうと力を込めた時、

「『ヒーリング』」

バルバラの静かで優しい声が響いた。

すっと溶ける様に傷と痛みが消え去った。見ると、服は切れたま
まだが、腕には傷跡もない。

「ありがとう！」

すぐに立ち上がり、杖の欠片を勢いよく地面に突き立てる。杖な
んて補助道具でしかないと攻略本に書いてあった。効果が低くなる
だけで、無しても魔法は発動できる。

そこから、足元に魔法陣が広がる。青いいくつものラインが、円
を作り中の模様を編んでいく。

陣が完成したところで、私は杖の欠片を抜いて振りかぶった。

「『フレイア』」

名前の通り、炎が弾丸のようにそのまま飛んでいく。

見事、熊の頭部に命中したが、HPへのダメージは100しか出ない。さらにHPバーの横に火傷と表示され、数秒ごとにHPが減るが、それも20ずつくらいしか減らなかった。

熊が怯んだ隙に、イリエが敵の前足を狙って剣を振るった。巨体すぎて顔なんて届かないため、まず手近な弱い部分を狙っているのだろう。

しかし、HPは60しか減らなかった。どうやら、物理攻撃への防御力が高いらしい。

「カノ様！ 撤退します。振り向かずに走ってください！」

でも、と言いかけた言葉を呑みこむ。まず私が逃げなければ、この人たちは逃げられないだろう。ぐだぐだやってる暇はない。

「くっ……そおおお！ 了解！」

魔物の狙いが悲鳴を上げている間に、踵を返して走り出そうとするが、

「げっ」

ぴたりと足を止め、むしろずりずりと後退した。

木々の間から、さらに無数の近づいてくる影が見えたから。

6話（後書き）

いきなりバトルバトルです。狩らねば食料は手に入りませんから。とはいえ、完全に違うゲームになってますね。

あくまで領主ゲームですから！

ただ戦いは必要になるので、やっぱり外せないんですが。

敵の様子を考えるために熊の画像を見たんですが、熊って、熊って可愛い！

敵に回すのが惜しいくらいです。

そういえば去年、大学の駐車場に熊出たなあ……。

7話（前書き）

再び残酷描写があります。
苦手な方は注意して下さい。

7話

どうやら逃げることは難しいようだ。緊張で尻尾の毛が逆立った気がする。

近づいてくる影から一旦距離をとって、皆の様子を確認する。

イリエはキンググベアの注意を引くのに手いっぱいだ。敵の攻撃をまともに食らったら、どうなるのかちょっと予想が出来ない。

先程手斧を投げつけてきたときは、1v2の防御力でもなんとか耐えられたけれど、直撃ではそうはいかないだろう。

バルバラは、イリエから少し離れたところで、いくつもの補助魔法を放っていた。

「『ラピッド』」

「『ディフェンシブ』」

呪文というより英語から想像すると、スピードアップと、防御力アップというところだろう。

フェレは、新たな敵の増援に気付いて、駆け寄ってきた。

「カノ様、俺の後ろに！」

敵と私達を隔てていた最後の木を越えて、普通サイズの熊型魔物さつき倒したバッシュグベアが、6体現れた。

私が後ろに下がると、フェレはちらりとこちらを見て、何かを投げた。

慌ててキャッチすると、試験管のような小瓶に、コルクの蓋が付いている。中には、ソーダのように泡立つ青い液体が入っていた。

「MP回復つす。一つしかないんで、とっついて正解でした」

物資不足は辛いつすねと言いながら、フェレはすぐに集中しなおし、バツシユベアに先手を放つ。

一步踏み込み、手前にいた3体を横薙ぎに吹き飛ばす。そのまま休まず追撃し、倒れたうちの1体に、頭上から斧を振り下ろした。

「ぎゅおおおー……」

何度聞いても嫌な鳴き声を残して、アイテムボックスに変化した。

私は受け取った小瓶を開け、飲もうと口を開くが、

「飲みもんじやないよ！ 体にぶっかけなあ！」

慌てたバルバラの声に止められた。ポーションって水薬じゃないのか。でも、そういえば誰にもポーションだとは言われていない。

「それっ、『グロリア』！ 長くは持たないよっ」

バルバラは、すぐに魔法を展開して私に掛けた。見ると、私の最大MPが15から20に増えていた。

考える暇もツツコミを入れる暇もないので、言われたとおり頭から液体をかぶる。

濡れた感覚は特になく、布が水分を吸収するときのように、すつと消えた。

指輪で確認すると、MPは20。これなら、『フレイア』が2発撃てる。

フェレがもう1体仕留めるのを見ながら、魔法を放つチャンスを待つ。

2発分しかないので、無駄打ちは絶対にさけない。だからといって、待ちすぎるとバルバラの補助魔法の効果が消えてしまうのだが。

フェレとイリエの様子を交互に見ていると、先に態勢を崩したのはイリエだった。

かわし切れなかった右前足の一撃を盾で弾いたものの、すでに敵の左前足が振り上げられている。

これは、直撃コースだ。

「しまっ……」

「『フレイア』」

用意していた魔法陣を発動させ、キングベアの左前足にヒットさせる。

炎魔法の衝撃で軌道を逸らされた左前足は、それでもイリエの体を周囲の木々と共に弾き飛ばした。

イリエの体が宙に舞う中で、

「『ヒーリング』」

これまた用意していたバルバラが、タイミングよくイリエを癒しの魔法で包む。

イリエは、即座に手について、なんとか転倒を防ぎ受け身をとった。

キングベアのHPは、じりじりと減っていて、1796になっている。しかし、まだ半分にも届いていない。

イリエは剣と盾を構え直したが、キングベアは構わず、いきなり

バルバラの方へ突進した。

バルバラは、構えを解いて即座に駆け出す。

「逃げるッ！」

「フレ」

唱えかけた時に、分った。確実に間に合わないし、距離が空きすぎて助けにも入れない。

イリエが剣を投げつけるけれど、キングベアはバルバラから狙いを変えなかった。

「うあああつ！！」

「バルバラッ」

右前足に薙ぎ払われ、バルバラの体が横転し、木にぶつかって動かなくなる。

だが、まだ息はあるようで、さらにキングベアが追撃しようとしたところを、追いついたイリエが受け止めた。

手の空いている私が、バルバラに駆け寄り、引きずるようにしてキングベアから離す。

木々の間、十分離れたところで指輪をバルバラに向けると、敵の表示が消えて、バルバラのHPとMPバーが現れた。

最大HP835が、29まで削れている。

熊の爪に引っかかったのか、アイボリーだった『僧侶』のロープが真っ赤に染まっている。

出血によって、まだダメージが継続していた。5、10とHPが削れていく。3秒後には、どうなる？

「カノ様！」

頭が真っ白になりかけた時、先程と同じくフェレが小瓶を投げた。またもや試験管に、コルクの栓。迷わずコルクを抜き、液体をぶっつけた。

HP14だった数値が、一気に64まで回復する。同時に、出血ダメージも止まった。表面上の傷は塞がったということだろう。ほっとしつつ、震える手で、意識を失ったままのバルバラの体をそっと横たえた。

これでもう回復手段はない。一撃でも受ければ、全滅するだろう。フェレの持っている薬も、物資不足と言っていたから、あっても1本か2本のはず。

ぶるりと身震いする。

怖い。本当に、怖い。先程肩をえぐった一撃が、忘れられなかった。

「やだ……やだあっ」

泣きたいけれど、涙は出ず、呻き声しかでない。

私は、一度死んでいる。けれど、きつと偶然や軌跡は2度もない。

諦めたくない。まだ、終わりたくない。だって私は、まだ全然生きていない！

ずっと思っていたじゃないか。もし、あそこで生まれなかったら、もっとマシに暮せたかもしれないって。今度こそ、上手くやってみるって。

ようやく叶ったのに、終わるなんて絶対できない。

でも、勝てるの？

応える様に、背後でがさりと草を踏む音がした。

はっとして、バルバラを庇いながら、振りかえる。

もう見たくもない、ふさふさの黒い毛に、つぶらな瞳、鋭い爪をもつ、やはり熊がそこにいる。

キングベアではなく、弱い方のバツシュベア。それでも、私は一人では勝てない。でも、諦めることもできない。

立ちあがって、魔法陣を展開する。

「『フレイア』」

「ぎゅおおー！」

どんつと近距離で炎が炸裂し、熊が狂ったように鳴いて、突進してきた。

頭突きのようで、頭からぶつかってくる。

避ければバルバラにあたる。一撃くらいなら、きつと受けられる。

そう判断して身構えた時、

「ちよつと失礼」

「!?!」

声と共に、後ろからぐつと襟を掴まれ、私の足が浮いた。

浮

いた？

そのまま持ち上げられて、肩と膝の裏を支えられる。誰かの大きな手だ。

自分の体が宙ぶらりんになっているのが分かる。

きよとんとして、目の前の熊を見つめると、

「『タイトルルネード』」

突然起こった小さな竜巻が、熊の体を吹き飛ばし、さらに木や草と一緒に切り刻み。これ以上は言葉にしたくない。

ともかく、一撃で吹き飛ばし、さらに木が無くなり視界が開けたところを、まだ竜巻が襲っていく。

つまりは、フェレが相手をして残りの3体（いつの間にか1体倒していたのだろう）を巻き込んでいった。

「……………うわ……………」

コメントすることもできず、そっと見上げると、すぐ近くに人の顔があった。

木漏れ日を遮る紺の髪が、私の頬をくすぐった。逆光のなかで、堀の深い、整った輪郭が捉えられる。

その中央で、琥珀色の双眸が輝いた。

「ワリイ、生きてつか？ ちょっとこのまま走るぜ」

「え？ ちよっ」

先程抱えられた姿勢のまま お姫様抱っこをされたまま、走り出される。

助っ人の誰かは、揺れないよう、しっかり手に力を込めてくれた。
くれたけど、これ怖い！

「わああ、止めて止めてこの浮遊感だめええ！ ジェットコースターとかホント駄目だからあああ」

お姫様抱っこなんて、全然ロマンチックじゃない！

おんぶのような安定感は無で、文字通り地に足がつかない感覚に、恐怖を煽られる。

ふわつとした浮遊感が収まらなくて、まるで絶叫マシン。すでに絶叫しているし。

状況も忘れて目を閉じ、とにかく相手の服にしがみつく。

揺れながら　きつと走りながら、助っ人は低すぎない柔らかい声で、呪文を唱えた。

「『サンダーレイン』」

目を閉じていても分るほどの閃光が走る。

何かの断末魔が周囲に響いて、どおおおんと重量のあるものが、倒れる音がした。

7話（後書き）

またもや戦闘フェイズでした。

もっと早くピンチにする予定が、みなさん意外に頑張ってくれました。

そのせいで長くなってしまったんですけども……。

颯爽登場！ 新しいキャラの順番です。

8話

イリエやフェレがどうなったのか心配で、お姫様抱っこにまだ怯えながらも、そつと目を開いた。

緑豊かな森の中だったはずなのに、木が何本もなぎ倒され、地面は少し焼け焦げ、散々な有様だった。

そして中央には、1メートルはありそうな巨大な宝箱。キングベアのなれの果てだろう。

疲れ切った表情のフェレが宝箱に寄りかかり、その横では傷だらけのイリエが、剣を支えにしながらしゃがみ込んでいた。

2人とも、こちらを 正確には、突然強力な魔法で敵を薙ぎ払った助っ人を、茫然を眺めている。

「駆け寄りたかったが、私はいまだに人の腕の中だ。」

「皆！ ちょっと、いい加減下ろしてくださいっ」

「お、忘れてた。ワリイな急いでたもんで」

助っ人は、私の膝の裏に当てていた腕をゆっくり下ろして、そつと立たせてくれた。

浮遊感からの解放に、涙が出そうになりながら、改めて相手を見つめた。

立って見ると、まず身長差に驚いた。190?くらいはある。異国風なびらびらした薄布を何枚も重ね着して、さらにじゃらじゃらとネックレスやブレスレットを付けている。紺の長髪は、肩あたりでゆるく一つに纏められ、腰に届くほど長く、整った顔立ちと相まって、女かと思間違えてしまうほどだ。

見蕩れてしまいそうになるが、そんなことをしている場合ではない。

イリエは、ふらつきながら私に近付こうとする。慌てて駆け寄って、身体を支えた。

「カノ様、ご無事ですか」

「私は怪我ないから。イリエこそっ、いいよ立たなくて！」

「私もフェレも少し疲れただけで、かすり傷ばかりです」

「バルバラは、どうなったんすか……？」

フェレが、おそろおそろ訊ねてきた。

「向こうで休んでる。傷はひどいけど、大丈夫だよ」

無事とは言い難いけれど。フェレとイリエは、ほっとしたよう同時に溜息をついた。

「すみません。私が注意を引き損ねて……」

「イリエのせいじゃない。運が悪かったんだよ」

「けれど、この森に油断したのも私です。強い魔物がいる場所を通らないようにしたのですが……」

悔しそうに唇を噛んで言葉を切る。そんなイリエを見て、遠慮がちに口を開いたのは例の派手な助っ人だった。

「それについてなんだけど、ホント、ワリイ。普段いない場所にあるんな強い熊連中が出たの、俺のせいだわ」

ずっと、イリエの目が鋭くなる。ついでに、金髪によく映える黒猫耳が、ぴくりと動いた。

「貴方は　人間、ですね。出身は？　どうしてこんな森に？　—

人で？」

言われてみると、もはやあるのが当たり前になっていた獣耳と尻尾がない。髪で見づらいが、耳も普通の場所に、普通の耳がついている。

私の領地に住む人は、獣人だけだから、隆人以外で人間を見るのは久々だなあ。

「睨むなって。出身は言えねえけど、怪しいもんじゃねえよ。……

あー、分ったよ。少なくとも南じゃねえから、睨むな」

「それで、なぜ森に？」

イリエが尋問口調になっている。

「はあ……聞いてねえな。まあいいや。……森の奥でちょっと、魔法の実験してんだよ」

「実験？」

「まー改良つつうか開発みてえなもんだな。

魔物相手に色々試してたんだが、どうも驚かせちゃまって、強い魔物がこつちに逃げたんだ。

急いで追いかけたんだが、迷惑かけたな」

出ないと言われていたのに強い魔物が出たのは、違う場所から逃げてきたためだったのか。

納得しながら、少しほっとした。これから何回か食料調達に来る度にこんなに危険ではたまらないが、今回運が悪かっただけなのだ。

けれど、イリエはまだ相手を睨んでいる。

先程からこの険悪な雰囲気はなんだろう。

「い、イリエ……」

向こうのミスとはいえ、助けくれた人にその態度はちょっと悪い気がする。おろおろと助けを求めてフェレを見ると、驚いたことにフェレまで表情が硬かった。

「それを信じると？」

「信じるも信じねえも……、俺が熊なんかけしかける理由ねえだろ」
「お前がヴァルルーデの人間なら十分あるはずだ」

みんなの会話がよく分らない。

「だから、ヴァルルーデじゃねえつつの。いくら獣人だからって、人間見ただけで全部ヴァルルーデって決めつけんな。俺は差別する気もねえし、悪かったっていつてるだろ」

「どうだか。この辺りに人間なんて、ヴァルルーデ以外滅多にいない」
言い合いはどんどん加熱していくが、内容はどんどん分らなくなっていく。

「ちょっと待って」

堪らず口を挟むが、

「だあかあ、最近この辺にいただけで、別にここ出身じゃねえんだって！」

「お前を捕えて吐かせればすぐばれるぞ」

「なんで捕まんなきやいけねんだよ！ 熊の事故のせいならわかっけど、今のそっぴい意味じゃねえよな、故意って言いてえんだよな？」

完全に私の存在を無視されている。人って、分らないことを耳元でがangan叫ばれると、ちょっと、腹立つよね？

私は、大きく息を吐いて、その反動でたくさん吸った。森の空気がお腹いっぱいに入ると気持ちいい。

その息に乗せて、叫ぶ。

「うるさああああい！ ちょっとストップ！

なんでいきなり喧嘩になるの！ 事故は迷惑だけど、助けてくれ
たじゃん！」

「ですが……」

「喧嘩してる暇あったら、バルバラさんを領地に運んで手当てしたいんだよ！ 聞きたいことあるならその後にしてっ。

「それで、その助っ人さん！」

「う、あ、おう」

びしりと指をさすと、助っ人は何故か背筋を伸ばした。

「貴方、助けてくれてありがとう！ でも迷惑かけたって思うなら、領地までバルバラさんを運ぶの手伝って！ まだ魔物出るかもしれないし！」

「わ、わかった」

今襲われてはひとたまりもないので、助っ人さんに送ってもらおう計画だ。

「それともう一つ！」

「な、なんだ？」

「貴方、名前は？」

帰り道は、ゼオンと名乗った助っ人のおかげで、特に問題もなく帰って来られた。魔物が現れると、容赦なく雷魔法で焼いてくれたのだ。

領地に辿り着くと、待ち構えていた人々が悲鳴を上げた。豊作だったけれど、全員ボロボロで、さらに一人は意識不明なのだから、当たり前だ。

バルバラの手当てを頼むと、念のために私達全員も手当てをされることになった。かすり傷は結構あるのだ。

手当てのために、バルバラを除く私達4人が屋敷に入ると、そこで突然あのレベルアップのファンファーレが鳴り響いた。

「ここでレベルアップかあ……」

強い敵を倒してもレベルアップしないのに、狩猟から帰還するとレベルアップする。やはり、あくまでシュミレーションゲームが元だからだろうか。『敵』ではなく、『狩猟』という単位で経験値があるらしい。

あれだけ苦労したので、なんとなく釈然としないが、仕方ない。ステータス画面を開き、ちゃちゃっと全部知力に振っていると、ゼオンがなるほど、と呟いた。

「なあに？」

「納得してんだ。新米領主なんだな」

「うん。それがどうかした？」

「どうかってゆーか。まあ、お前らが人間にピリピリしてたのも分るなって」

いまいち、話が見えてこない。私が新米領主であることと、さっきのイリ工達の態度に関係があったのだろうか。

首を傾げていると、

「そのお話は後です」

前を歩いていたイリ工が食堂に辿りつき、扉を開いた。

領民たちが集まる食堂は、すでに食堂の役割を越えて、会議場になったり団欒場所になったり医務室になったりしている。

中では、レーレルが救急箱のようなものをテーブルに並べていた。

「御帰りなさいませ、カノ様、皆さん。医者は、バルバラの治療をしておりますので、わたくしが手当てをいたします」

促されて椅子に座り、かすり傷を見せると、ガーゼのようなものに、消毒液をつけて、当ててくれる。しみるけれど、我慢我慢。バルバラ以外に『僧侶』はいないので、治療は魔法ではできない。

「カノ様のお怪我はこれだけですな。あら？ その腕は……」

「ああ、これは怪我したけど、バルバラさんが直してくれたから平気」

服までは直らないので、縫わないといけない。後で、裁縫道具でも借りよう……あればだけど。

私の手当ては終わったので、今度はイリ工を治療してもらおう。

席を譲りながら、先程の意味をゼオンに聞く。

「ね、新米領主だと、人間にピリピリしないといけないの？」

「あん？ 何も知らねえのか？」

「う、うん……」

食料不足解決とシステム関連を覚えることに必死で、種族や世間の状況は全く知らない。

正直に答えると、ゼオンは呆れたように溜息をついた。

「おいおい大丈夫か、この領地」

「う、ごめん……」

思わず小さくなると、イリエが消毒液に顔を顰めながら、再びゼオンを睨んだ。

「カノ様はご領主になられてまだ日が浅いんだ。余所者が口を出さないでくれるか。お前の疑いも晴れていない」

「またそれが。ピリピリすんのもわかるつつたけどな。」

お前らが心配してんのは、俺がヴァルデーのスパイとか手下とかで、この何も知らねえご領主さんを潰すなり脅すなりして、領地がヴァルデーに下ることだろ」

「……」

「俺は、ヴァルデーじゃねえ。はあ……言うしかねえか。故郷はリーシャ帝国だ。もう出て、今はふらふら流れ者だけだな。リーシャ帝国に問い合わせればわかる」

「問い合わせだど？ リーシャ帝国がどれほど遠いと思っている」

「じゃあねえだろ。本当なんだから」

また『ヴァルデー』。さっきからこの単語を繰り返している。

イリエは、ひとまず納得したのか、それ以上口を開かなかった。聞かれたくない雰囲気のようにだけど、聞かずにいるのはもやもやした。

「ごめん、空気無視して聞いていい？ ヴァルデーって何？」

イリエは一つ溜息をついて、治療の終わった腕を引っ込めると、こちらを向いた。

「……この領地にいる人の多くは、南の王国から逃げてきています。その国がヴァルデー王国。人間が国王で、獣人は嫌われます」

「嫌う……」

「サーナもユリアも私も、ヴァルデーから逃げて来ました」

説明するイリエと席を交代し、治療を受けながらフェレが頷いた。

「俺は、ヴァルデーではないっすけど、近かったんで。色々あって逃げて来ましたね」

「差別ってこと？」

聞くと、イリエとフェレは目を逸らした。2人とも尻尾が力なく垂れている。

答えたのは、ゼオンだった。

「ま、奴隷だな」

8話(後書き)

薄暗い話になってきました。会話が堂々巡りするのは、書いてて辛いです。先に進めたい！

>ステータス<

領地LV3 カノミヤイ、獣人

HP340/MP22

STR(攻撃) : 6

DEF(防御) : 8

DEX(器用) : 5

AGI(速度) : 5

INT(知力) : 1

MND(精神) : 2

LUC(運) : 3

9話

小中高と運動部で、ひたすら部活に打ち込んできた。疎かにするつもりはなかったけれど、学業のほうの成績は学年が上がることに急降下した。時間の限界と、私の元々のおつむの限界だろう。

ともかく、外で走り回ることの方が多くて、机に長時間座って集中するなんてしたことがない。授業中は、部活で疲れた体力を回復つまり寝ていた。

受験だつてどれもスポーツ推薦で、『スポーツを続けますか？』という面接の問に、イエスと言えば合格通知が届いた。

よって受験勉強の苦労も知らない。

初めて、デスクワークを本格的にして、その苦労とストレスを実感した。皆、よく頑張っていたんだなあ。

スポーツだつて辛いこともあるけれど、苦労のタイプが違つと思ふ。

自室の椅子で伸びをしながら、溜息をついた。

サイドテーブルを少し大きい物に変えて、仕事ができるようにしてあった。

そこに広がった書類は、いつこつに減らない。

「よし、息抜きにしよう！」

朝からずつとやっている。さすがに休憩するべきだ。

もうすぐお昼だから、それまで散歩でもしよう。

屋敷を歩いて、すれ違う領民たちと挨拶しながら、外へ出る。最初からいる人々は、もう慣れたようで、大げさな敬語も怖れるようなよそよそしい態度もなくなってきた。それが嬉しい。

今日も春のよく晴れた天気。今のところ、1度しか雨が降っていないけれど、冬の雪解けの水があるから水不足の心配はないらしい。屋敷の横の畑も作物がそろそろ目を出し始め、茶色だった寂しい畑に小さく緑の模様が生まれている。

畑を眺めていると、駆け寄ってきたのは、小さな女の子だ。熊耳に軽くトラウマを感じるけれど、9歳ほどの少女は2つに結った髪を揺らして嬉しそうに笑うので、その気持ちはすぐ消えた。

「ラウラちゃん。こんにちは」

「カノちゃん！ あのねー、きょう、葉っぱがでたのー。みてみてー」

「わあ、ホントだ。これは何の葉っぱかな」

「んつとねー……おかあさーん」

畑の奥で作業していたラウラのお母さんが、呼ばれてにこにこ笑いながら、近付いてきた。お揃いの熊耳で、笑顔がいいところも親子お揃いだ。

「カノ様。どうもこんにちは」

「御苦労さまです」

「おかあさん、これなんだっけー」

「こらっ、ラウラ！ そんな風に葉っぱ引っ張っちゃだめよ。植物が痛がるでしょう？ これは、カボチャ」

カボチャもそのままなのか、この異世界。

けれど、今はそのアバウトさに感謝する。

「カボチャ大好きです！」

あの砂糖とは違う甘さ！ お菓子にもなる可愛らしさ！ ちょっともっさりした食感！

ラウラのお母さんは、私の過剰反応に驚きながらも、嬉しそうだ。

「まあ、そうなんですか。じゃあ、頑張って作りますね。夏から…
…秋くらいには、収穫できますから」

「楽しみにしてます」

ラウラに手を振って、畑を去る。秋が楽しみだなあ。

屋敷の正面から、まっすぐ南へ道を進む。今のところこの道だけが石畳で作られたメインストリート。ゲーム風に言うなら『道1』
というところだ。

道の両脇には、様々なお店が並び、人が行きかっている。

どれも、石造りの小さな店舗だが、その奥にはたくさん木造の民家があるため、領地の中では立派に見える。

メインストリートは、活気に満ち溢れていた。今日は週に3日の市場が開かれる日だから。

すでに私はLv8。建物が一気に増え、市場や鍛冶屋、魔法店に革屋、雑貨屋から服屋まである。

建物ランクはすべて1のままだから、たいして豪華なわけでもないし、商品の種類は多くない。

資材が有限であるため、ランクアップよりも先に、必要な施設を建てることに集中しているのだ。

それでも、狩猟に行つてから数日（この世界に来て2週間）経つて、ようやくここまで来れた。

熊と、釣りに行つた人々のおかげで、当面の食料問題が解決したので、建築に力を注いだ。

市場を作つて、狩猟で得た他のアイテムを売り、お金を得て、資材を調達する。

その資材で、様々な店を作つて、元々職人や商人をやつてきた人々に仕事を割り振つた。

こうしてようやく、みんなで一斉に共同仕事をするのではなく、それぞれの仕事を持つことができた。

鍛冶屋や服屋などは、建築は領地でやったけれど、その後の経営は個人任せだ。経験者に任せているので、それなりに安心。

手に職の無い人たちは、屋敷や食堂、釣りや畑を手伝う仕事を与えている。

いわゆる公共事業みたいなもので、私（というか、領地の資金）からお給料を払っている。

また、レベルアップに伴う人口増加のため、建築が得意な数人を大工として仕事を与え、領民は個人で大工に頼んでそれぞれ家を持つことができるようになった。

まだお金や材料（物々交換も多いのだ）に余裕のない人々は、多くが屋敷に住んでいるけれど、家族で暮らす人などは家を持って嬉しそうだ。

これも言つなれば、屋敷は公営住宅といったところだろうか。

何も無い屋敷だけだった土地が、町とは言えずとも、村くらいに

はなってきた。

そのために、私の仕事は力作業から、デスクワークへシフトしてしまったのだが。人が増えれば、決めることも考えることも多くなる。

例えば、人口。

衣食住＋仕事の問題は落ち着いたけれど、人数もきちんと数えなければならぬ。顔と名前と備考を覚えていられる50人程度のときは終わったのだ。

名簿を作って、名前と出身地、今の住所と仕事、家族構成なんかを書いてもらう。

さらにそれを配る人を手配する。

出身地を聞くのはいいけれど、まだ周辺の地理は勉強中だ。その勉強も進めなければならぬ。

そして、紙もペンも高い。その資金は領地から出さなければならぬので、領地自体に収入がなければならぬ。そもそも、公共事業の人に給料が必要だ。

とすれば、税金だ。

日本にいたころは、消費税しか関わりが無かった高校生だったのに、まさか税金を取るほうに回るとは思わなかった。

(ちなみに貨幣は、ゴールド。これはゲーム内マネーなので、たいへん有り難い。

なにが有り難いって、金貨でもない透明な青い石の金なのに単位は全てゴールド。そして貨幣価値が変動しない。だってこの世界に他の通貨も単位もない)

税金を取るにしても、取るなら取るで、個人の収入を考えないと、圧迫してしまう。個人の収入も調べていかなければならない。

いや、収入も名簿に載せて

「おい」

こうして、私のやるべきことは際限なく増えていく。
今のところは税金をとらず、狩猟に行ったり釣りに行ったりして、
物々交換で代金を支払っているけれど、そのうち決めないと。

「おい！」

考えを廻らせながら歩いていると、急に後ろから肩を掴まれた。

「わっ、何」

慌てて振りかえると、不機嫌そうに顔を歪めたゼオンが立っている。
る。

紺色の髪は少しボサボサで、だらしない。

せつかくの美人が台無し、と言いたいところだが、これはこれで
妙に色気があるのが、何故か悔しい。

「お前な、何回も呼んでんのに、ふらふらしてんじゃねえよ」

「あ、ごめん、考えてたもんだから」

「あん？ 何を」

「住民名簿と税金」

即答すると、ゼオンは釣りあげていた眉を、可哀そうにと言いな
がら、ハの字にした。

大事なことを考えていたのに、憐れまれるのはなぜだろう。

「ふらふら歩いてたっつーことは、お決まりの休憩の散歩だろ？」

そんなこと考えてるんじゃないや休憩になつてねえだろうが……」

「ああ、確かに……。でも、歩いているときに考えると、結構頭回るもん」

「歩いているときに考えると転ぶだろうが。危ねえな」

小さい子じゃないんだからそれはない。

否定しようと思ったが、ゼオンはその暇を与えず、私の手を引いた。

「じゃあねえな。ちつと店寄れよ。茶くらい出してやる」

メインストリートの端っこ、服屋の向かいが、魔法店だ。言いかえると、ゼオンの店。

石造りの小さな家の壁に、申し訳程度の看板が出ている。接客にやる気が感じられない。建物ランクは1でも、他の店ならば自分達で飾ったりなどして、頑張っている様子があるのだが。

新築なのに軋む扉を開けると、狭い店内の壁にはずらりと商品が並び、カウンターにも積み上げられている。

魔法店といつても、魔法自体は売り物ではない。杖や『魔法使い』の歴史書、魔法の補助道具なんかを売っている。

私も初めて見るが、それにしても種類は少ないのに品数が多い。

「……売れてないのね」

「失礼だな、おい。売れてるよ、市場でな」

つまり、店に買いに来る客はいないということだ。

ゼオンはカウンターの奥の扉を開け、手招きする。

そちらが、住居スペースだ。建築に立ち会ったから少し覚えてい

る。

しかし直後に、記憶は塗り替えられた。

「うわあ……。」「ごちゃごちゃ。よくこれでお茶を出す気になるね」

簡素なテーブルと椅子。そしてソファ。家具はそれだけでベッド
すらない。どうやらソファで寝ているようだ。

それだけなら散らかしようなのに、部屋は本や紙、杖などが
散乱し、足の踏み場がないほどだ。

「うるせえ、調べ物してたんだよ。客なんて来ねえからな」

「やっぱり、来ないか……」

「おうよ、一人もな。つーわけで、初のお客様イラッシャイマセ」

ゼオンは椅子を引いて、木製のカップを差し出しながら、薄い笑
みを浮かべた。

125

熊のおかげで大乱闘だった狩猟の後、ゼオンはこの領地に暮し
たと言い出した。

理由は、故郷のリーシャ帝国にイリエが身元を問い合わせると言
ったからだ。

問い合わせて、故郷に自分が流れ者をやっているのがばれると、
連れ戻されるから領民にしてくれ、と。

違う種族でも領民にはなれる。ただ、最初の50人は同じ種族で
ないといけないらしく、そのせいか後々も同じ種族が集まってきて
しまうらしい。

もちろん周囲はゼオンに大反対だった。みんな、人間が嫌いだ、
と。

それでも許可できたのは、イリエが疑いが晴れるまで外に解放してやることはできないと言ったことが大きい。

逃がすわけにはいかないし、一応助けてくれた恩人なので閉じ込めるのも気が引ける。

魔法店を建てるために、ちょうど優秀な『魔法使い』が必要だったのもあり、領地外へ外出禁止という条件付きで領民になった。

1週間ほど前に、イリエが疑いが晴れたと報告したけれど、彼はいまだにここにいる。

それに、やはり領民がお客として来ることはないらしい。

lv8になった今でも、領民の中で人間はゼオン一人だ。

両手でカップを持ちながら、俯く。中のお茶は、ハーブティのよくなすつきりする味だった。

「暮らしにくくない？」

「別に」

ゼオンは言いきった後、短すぎたと思ったのか、ぼつぼつ説明を加えた。

「あれだ、別になんかされてるわけじゃねえし。避けられてはいるけど、食べ物売ってくれねえわけじゃねえ。人間に酷い扱いされてきたにしちゃ、優しい対応だと思うぜ」

ま、奴隷だな

数日前に言われた言葉を思い出す。馴染みのない言葉。

具体的に何をされたかなんて聞いていない。というか、聞けるわ

けがなかった。思い出したくないって、皆の顔に書いてある。

辛いことを思い出したくないから、皆普段からよく笑う。笑って吹き飛ばそうと無理矢理誤魔化している。でも、いつも皆の顔には、影があった。

目の前に、人間がいなければ、皆笑ったまま獣人同士で暮らしただろう。現れてしまうと、皆、怯えてしまう。

でも、このまま、獣人同士だけで暮らすなんてことはない。領地の中がそうであっても、世間から孤立しては暮らせない。

「お前は、怖かねえの？」

いつの間にか降りていた沈黙に耐えきれなくなったように、ゼオンが呟いた。

いつも通りの、気軽な口調。だけど、ちょっとだけ固かった気がする。

「私は、領主になる前は人間　じゃなくて、人間のえーっと知り合いとか友達いたから。

きつと人間も獣人も変わらないってこと知ってるから。怖いとかは、ない」

「ふうん。領主になる前、ね……」

そもそもこの種族設定はゲームのものだ。ステータスなどに違いはあっても、言葉や宗教、生活様式に違いは無い。

根本的なものも、きつと変わらないはず。

自分の尻尾をちよつと手でつまんでみる。

ユキヒヨウ。白っぽい豹柄の尻尾。

今はあるのが自然で、意識しなくても気分に合わせてぶらぶら揺れる。

耳もあるけど、違いなんてこのくらいで、人間だからどうとか、
獣人だからどうなんてないはずだ。

実際、隆人だって人間だったけど、何も違わなかった。

貰った指輪ごと、左手を右手で握り締める。

「私さ、馬鹿なんだよね。頭昔っから悪いから、難しいこと考えれ
ないし考えたくない。

みんな、仲良くしよう！ って、それでいいじゃん」

そう思う、と言うと、ゼオンは薄い笑顔のまま、立ち上がった。

「単純だな」

「駄目かな？」

「さあ。俺からは分らねえよ。 お代わりは？」

「ありがとう」

カップを差し出して、新しく注いでもらう。

この話題は終了ということだろう。

お茶を待ちながら、テーブルの上に乗っていた紙を手にとる。

「ごちゃごちゃと字が書き殴られ、その中央に魔法陣が書いてある。

「そっいえば、何の研究してるの？」

「魔法つつつたる」

「いや、魔法だけどさ」

魔法は、『僧侶』の持つ治癒魔法。『魔法使い』の使う攻撃魔法。
そして、女神が持つという力。例えば、領地のあの青いラインと
か だけだ。

最後のは関係ないとして、他の魔法は職業とレベルアップで元々

決められたものを覚えていく。

あくまでゲームのシステム設定の一部。
それなのに研究や実験って……。

こちらの考えを見透かしたように、ゼオンは口を開いた。

「魔法は女神の与えた力ってな。やってるうちに次第に新しいもん覚えてそれで終了。」

俺は、それ気に食わねえんだよ」

琥珀色の瞳が、揺れた。

「なんでも女神女神。領主が勝手に決められんのも、領地の外では安全に暮せねえのも、女神が決めたことだろ。」

しかも、お前みてえに休憩時間まで悩み続ける領主もいりゃ、差別作る領主もいる。領主が何もせずに消えちまう領地なんざザラにある」

「そう……だね」

いつか私がした問い。

女神の 正確にはゲームの設定だけど、この世界の住民たちになにか恩恵があるんだろうか？

ただ窮屈なだけではないのだろうか。

ゼオンの気持ちの方が、わかりやすい。

「魔法だって、こんな便利な力なら、もっと色々使えるはずだぜ。だから、改良してやる。俺の理論ならもっと良いやつができる」

珍しく真面目な口調で熱く語ったゼオンは、私に再びカップを差

し出した。

受け取るうと手を伸ばすと、笑いながらすつと届かないように力
ツプを引っ込められる。

「何するのよ」

「なあ、お前。俺の研究に協力しねえか？」

9話（後書き）

色々がんばる主人公。

本人が言うほど、頭悪くないんだよなあきつと。

しかしやることたくさんありすぎるのを見ると、書きながら領主って絶対なりたくないなと思ってしまいました。

>ステータス<

領地Lv8 カノミヤイ、獣人

HP799/MP68

STR（攻撃）：16

DEF（防御）：23

DEX（器用）：18

AGI（速度）：18

INT（知力）：19

MND（精神）：9

LUC（運）：8

>領地設置建築物<

・ランク1

領主の屋敷、畑、道、民家、市場、鍛冶屋、魔法店、革屋、雑貨屋、
服屋、厩舎

「普通のより、もっとMP消費の少なえ魔法とか、生活を便利にする系の魔法をちょこちょこ完成させてんだ。
領民どもにも役に立つはずだぜ」

散らかって埃臭い部屋の中、いたずらの反応を待つようなゼオンの顔を見ながら、私は彼の誘いに即答した。

「だが断る」

「早ッ！ おい、話しくらい聞いとこうぜ、そこは」

ツツコミながらゼオンは、カップをテーブルに戻した。

いや、研究とか難しそうだし。これ以上デスクワークが増えると机蹴りたくなるし。

他にもネガティブな要因はいろいろあるけれど、

「領主業だけで精一杯だもん。落ち着くまでは、そんな余裕ないよ」
「ま、予想はしてたけどな」

ばっさり断られるのも想定内なのか、ゼオンはちよつと残念そうに肩をすくめるだけだった。

私はゼオンの気持ちには共感できる。けれど、魔法の研究なんていかにも難しそうなことは他の人をお願いしたい。

「ごめんね。でも、私じゃなくても協力者」
「いねえ」

溜息と共に、遮られた。少しだけ乱暴な声に、はつとゼオンの状況を思い出した。

人間というだけで疎まれていのに、いきなり訳もわからない研究に協力する人はいないだろう。

うつかり滑った口を、べしつと自分の手で叩いておく。反省。

「ごめん」

「いや……。まあ、そういう意味だけじゃなくてだな。魔法使えんのは『魔法使い』と『僧侶』だろうが。んでもって俺のは攻撃魔法からの研究や開発だから、『僧侶』は使えねえ」

「あー……」

二杯目のお茶を味わいながら、固まってしまった。

人口が増え、領民に戦闘職のものも増えたが、その中に『魔法使い』はいなかった。どれだけ敬遠されるんだ獣人『魔法使い』。

領民と領主の戦闘職の違いは、ステータスに『成長ポイント』が無いことらしい。つまり、自分で好きにステータスを割り振れず、決まった分だけが伸びる。獣人のMPとINT　いわゆる魔法攻撃力がほとんど自動で伸びないのは、私も経験済みだ。

ならば多く打てず威力の低い魔法を放つより、最初から伸びやすいSTR頼りで殴る近接攻撃のほうが便利。

治癒魔法は代わりが効かないため『僧侶』の人数は少しいるものの、『魔法使い』は私だけだった。

「つまり私しかいなくて、誘ったのかあ」

見るからに頭脳派でない私が誘われたのはそれでか。とても納得。

「今すぐじゃなくてもいいからよ。また気が向いたり、暇が出来たら考えてみてくれ」

「一応ね。でも、本当にみんなのためになる魔法なの？」

「あん？」

「私は研究参加できないけど、役立つものなら、人手対策考えてみるよ？」

「……見せてやるよ。よっと」

ゼオンはテーブルの上にある本の束から、一冊抜き、さらに中に挟んであった紙をぴらりとめくった。

覗き込むと、紙にはお馴染みの魔法陣が描かれている。

二重になった円があり、円と円の間には、読めない文字がびっしり書き込まれている。私はこの世界の文字を読めるはずだけれど、これは読めない。

さらに内側の円の中心には、六芒星。

いかにもファンタジーで使われそうな形だ。

ゼオンは、魔法陣をぴらぴら振って、テーブルから少し距離を取る。

「これが俺様の開発した魔法陣。 あ、ワリィ。そのカップ貸せ」

既に半分ほど飲みほしたカップを、中身を溢さないようにして渡した。

ゼオンは、足元にカップを置き、すっと目を閉じ、

「見てろ」

言つと同時に、ゼオンの足元に淡く発光する魔法陣が展開された。いつ見ても幻想的だなあと思いながら、ぼかんと眺めていると、

見本の魔法陣の紙を目の前に突き付けられた。

「良く見ろって。細かいとこまで一緒だろ？」

「あーうん。文字読めないけど、形は一緒だと思う」

「それは古代文字だ。円の外側にあるこの古代文字の羅列が、何の魔法をどう使うか、どんな現象を起こすか指定する起動式だ。法則に則って、正しく書かないと、発動しない。」

他の星やら円やらの模様は、どんな魔法を使う時でも同じでいい。要するに、俺が研究してんのは、この起動式つつうことになる」

「へえー」

「今みてえに、魔法陣は細部まで暗記して思い浮かべれば、勝手に足元に浮かぶ。」

レベルアップで覚える魔法なんかは、最初から頭ん中に魔法陣が記憶されてんだが、開発した奴は自分で暗記しなきゃなんねえ。

あとは呪文だ。発動者の声だけが大事だから、別に意味ある単語じゃなくてもいいんだが、これ決めんの苦手なんだよな……。

とりあえず『凍れ』」

呪文と同時に陣が消え、べきん！ と氷を割るような音が響いた。ゼオンは少しかがんで、ひょいとカップを手にとり、逆さに振る。

「こぼれない。凍ってるだろ」

「おおおー」

駆け寄って、手に取る。お茶の色は、そのままにしっかり凍っている。ちろつと舐めてみると、冷たくて、ちゃんとお茶の味がした。

「こいつは、夏に冷てえ茶が飲みたくて開発した。氷攻撃魔法の応用だ」

「すごいのに、開発理由ひどいね……」

「欲しいもんから作らねえとな。攻撃とか治癒だけじゃなくてよ、こんな風に生活で使える魔法があつていいと思わねえ？ 逆に、水を一瞬で沸騰させる魔法も開発済みだぜ。炎魔法の応用でな」
「主婦に優しいなあ」

この領地では、人手が足りないから専業主婦なんてまだいないけれど。食堂の人たちは喜びそうだ。

ゼオンは再びカップを地面に置いて、目を閉じ、魔法陣を展開した。良く見ると、古代文字が先程と微妙に違うのが分る。ちよつと長いような気がする。

「じゃあ、戻すぜ　あー。まあ適当に言つか。『沸け』」

じゅつと焼けるような音がして、カップの中身が揺れた。液体に戻った上に、湯気が出ている。

思わず、ぱちぱちと称賛の拍手を送った。手品みたい。

「おー。沸いたねえ」

「な？　これなんかは、初期に開発した簡単なやつだが、便利だろ？　もつとすげーのもあるぜ」

ゼオンの派手な外見に反して、魔法は地味だけれど、埋もれておくにはもつたない研究だと思う。

役立つなら領地から公共事業として取り上げてもいいが、『魔法使い』不足が問題だ。

なんとかかしてやりたい。

戻ってきたお茶を一気に飲み干して、ぷはあと言いながら袖で唇をぬぐった。

「よし、なんとかしてみる。今日はこれで失礼するね。お茶美味しかった」

「んじゃ、領主様の案に期待しとくとするか。歩きながら、考えるなよ。危ねえから。またのご来店を」

「あははっ、大丈夫だって。またね」

軽く手を振り、薄暗い店からメインストリートへ戻る。

薄暗かった室内から、昼前の日差しの下に出ると、映画館から出た時の、あの夢から覚めたような感覚を覚えた。

入口で見送ってくれているゼオンを一度だけ振り返ると、ゼオンは紺の髪をかき上げ、眩しそうに目を細めながら、手を振り返してくれた。

先程より考えることが多いものの、手品のような魔法を見せてもらったせい、少し気分が良くなった。

メインストリートは昼近くなったせい、先程より道行く人の数が増えていた。

人々はすれ違いながら、私に気付くと、驚いたり慌てたり笑ったりし、軽く会釈してくれる。ここ最近、休憩のたびに散歩しているので顔見知りも随分できた。

足取り軽く、石畳を屋敷に向かって進む。今から帰れば、お昼御飯にちょうどいい頃だろう。

鼻歌でも歌いながら帰ろうかと思った時、

《テテーン！ テッ、テッ、テッ、テエエーン！！！！》

道じゅうに例のレベルアップファンファーレが鳴り響いた。

ああ、こんな道のご真ん中で……。

私がいなくなる間もなく、道行く人や働いている人や遊んでいる子供たちまで、ぽかんとした後、一斉にぐるりと私の方を見つめてきた。

このファンファーレはどうやら領地全体に鳴り響く仕組みらしい。その度に領民皆の注目を集めてしまうので、8回目のレベルアップになった今でも慣れない。できれば、レベルアップの時は誰にも見つめられずにすむ自室にいたかった。

駆け寄ってきてお祝いを言ってくれたり、話しかけようとしてくれるのは嬉しいけれど、いきなり取り囲まれるとちょっと怖い。

集まってくる人々に、にこにこ笑い返ししながら、そそくさとメインストリートを外れて、人がいない方へ逃げた。

メインストリートから少し外れて、屋敷からは南西の方向に駆け足で向かう。

この辺りは、新しい民家が増えているけれど、仕事や買い物に行っている人が多く、日中は人通りが少なかった。

木造の小さな家と家の間、舗装されていない隙間（道とも呼べないほど狭い）を、通り抜けながら、薬指の指輪を軽く撫でて、画面を起動した。

現在のステータスをざっと眺めて、極端に低いところや、高いところがないよう調節していく。

目的があれば一点特化で上げるのもいいけれど、今のところ特に領地の方向性は決まっていない。戦闘も前回の懲りたため、必要がなければするつもりはない。

発展を考えて、今は均等に上げていくのが無難だろう。

今回は、低かったLUC（運）を上げて、

《ステータス：領地Lv9 領主カノミヤイ、獣人

HP845 / MP78

STR (攻撃)	: 18
DEF (防御)	: 26
DEX (器用)	: 20
AGI (速度)	: 20
INT (知力)	: 20
MND (精神)	: 10
LUC (運)	: 19

成長ポイント：残り0 《

少しMND（精神）が低いけれど、それは次のレベルアップで調節しよう。

DEF（防御）が高いのは、レベルアップの時自動で上がってしまふ分があるからだが、実際の戦闘では鎧を装備できないため、全体の防御力は大したことが無い。

つくづく使えないキャラだなあとステータスを見る度に溜息がでる。

そもそも、元ゲームなら、ネタキャラができるような仕様は駄目じゃないのか。売っていたのかな、このゲーム……。

密かに疑念を抱きつつ、

「建築物」

Lv9で建築可能な一覧を表示した。

《『魔法使い』 建築可能なアイテム

1v8：厩舎1、酒場1

1v9：練兵所1、宿屋1》

厩舎は、一昨日完成したばかりだ。その名の通り、馬を飼う場所
で、お金を払えば遠出するとき馬を貸してくれる。また、個人の
馬を預かっておいてくれたりする。

私は馬に乗れないけれど、外へ釣りや食料調達に出かける人や、
市場に来る行商人達は大喜びしていた。これで流通がまた良くなる
と。

酒場の方は、建築を検討中だ。お酒の楽しみを知らない私にとっ
ては、資材の在庫を考えると後回しでいい物件だけれど、できるの
を楽しみに待っている領民達もいる。

何かお祝い事がある時などのために、一応作っておくべきかもし
れない。

問題の1v9の建物。宿屋はいいとして、問題は練兵所だ。

「なんだか、物騒になってきたなあ」

呟きながら、指輪を撫でて、画面を消した。

人口200名近くに膨れ上がったこの街に、今現在戦闘職は36
名。

そのうち『僧侶』の6名は、医者としての役割が大きく、戦力外。
残りの30名を戦闘員として、自警団のように警備や治安維持を任
せている。

残りは『戦士』が18名。そして、本物の賊ではなく、隠密的な
働きをする『盗賊』が5名。魔物に対して強い『狩人』が7名。

練兵所を作れば、『戦士』達を鍛えることができ、統率も取れる。
便利なことこの上ないので、すぐにでも建てるだろう。

ただ少し、聞きなれない物騒な単語が気になってしまう。せめて

訓練所とか、オブライトに包んで欲しかった。

これからの建築予定を考えながら、すすいと路地裏を進む。家々ができていく様子を見てきたので、地図は頭の中に叩き込まれているが、初めての人は迷いやすい場所だ。

だから、人通りの少ない場所で、きよろきよろしながら立ち止まっている少年を発見して、私はすぐに迷子認定した。

「おい、そこの君。迷子？」

声をかけると、少年はびっくりと大げさに肩を震わせた。ついでに頭上の小さな獣耳がふるふるしている。背後で揺れる尻尾を見て、ようやくライオンだと分った。髪もたてがみのようにもさもさした金色だ。

10歳くらいの痩せた少年は、抱えていたテクや果物を固く握りしめ、私が近付いた分だけ後ずさりした。

震えているのに、緑の目だけはきつく睨みを効かせてくる。

「どしたの？ 何に怯えてるの？ 何もしないよー」

「……うるさいっ。あ、あっちへ行けっ」

「って言われてもなあ。迷子じゃないの？ どこ行くの？」

明らかに挙動不審。このくらいの歳では、迷子になったと恥ずかしくて言えないのかもしれない。男の子ってそーゆーものだと聞いたことがある。

深く突っ込まず、メインストリートまで送ればいいだろうか。それともこの辺りの家の子なのだろうか。

「うーん。この辺りの子？ どこまで行けば道分るかなあ」

「ち……ちがうつていつてるだろっ。家は あ……えっと、大丈夫だ！ 道はわかってるから、そ、それじゃあな！」
「ちよつと！」

こちらの制止を待たずに、少年は身を翻して、路地裏の奥へと駆け去っていく。大丈夫とか言われても、その方向に民家はもうほとんどない。

悩んだ拳句、追いかけてようとしたところで、少年が走り去った方向から喧騒が響いた。

「おい！いたぞ、てめえ、うちの商品を返しやがれ！」
「逃げ切れると思ってんのかいっ！ あんた、そっちへ回ってくれ」
「おう、観念しろ！」

複数の人間が走り回る音がしたと思うと、左手の家の角から、少年が再び飛び出してきた。

少年はぎよつとしたように立ち止り、引き返そうとするが、既に数人の大人が行く手を阻んでいた。

「追いついたぞ！ そのアンタ、協力してくれ。そのガキは盗人だ！」
「くそっ、どけよ！」

迷った拳句、私の横をすり抜けようと突進してくる。

「なんだか、物騒になってきたなあ」

本日二度目の眩きをしながら、私は少年の足を華麗に引っかけた。

10話（後書き）

遅くなりました！ ようやく更新です。

前回の最後あれだけ引つ張っておいて、即座に断る主人公。

ステータスを均等にしようとする苦心する主人公。

成長ポイントは貯めておけるので、方向性が決まらないうちは無理して振らなくていいんだよと言ってあげたい。

>ステータス<

領地Lv9 カノミヤイ、獣人

HP845 / MP78

STR（攻撃） : 18

DEF（防御） : 26

DEX（器用） : 20

AGI（速度） : 20

INT（知力） : 20

MND（精神） : 10

LUC（運） : 19

>領地設置建築物<

・ランク1

領主の屋敷、畑、道、民家、市場、鍛冶屋、魔法店、革屋、雑貨屋、
服屋、厩舎、教会

11話

少年とはいえ、盗人は盗人。ましてや、この領地で起こった初めての犯罪である。

足を取られて見事に転び、御用となった少年は、すぐに商品を返してくれたが、それでうやむやにするわけにはいかない。

自警団もどきの団長を任せているイリエを呼んで、逃げようともかく少年を縄でぐるぐる巻きにし、一緒に屋敷まで連れ帰った。

「盗んだものは、豆一袋と、リンゴ3つ、テク3枚。これだけだな」
腕を組んでイリエが普段より数段厳しい声音で少年に確認をとった。

屋敷の地下、倉庫の隣の小部屋で、古い机一つにイリエと少年が向かいあって座っている。私はイリエの斜め後ろ、出入り口の扉の前に立ったまま、話を聞いていた。

なんだか、火曜日あたりに見ていたサスペンスドラマを思い出す。じつと見つめられて、少年は居心地悪そうにうつむいた。さすがに部屋の中では、縄はほどいてある。

「そうだ」

「なぜ盗んだんだ？ お腹がすいていたのか」

「そうだ」

「この屋敷の食堂では、無料でご飯が提供されている。それを食べればよかったらどう？」

イリエは当然の疑問を口にした。

まだ個人で稼ぎ、生活することが難しいため、基本食料は炊き出しのように一斉に配り、皆で一緒に食べている。

個人の収入が増えていけば、そのうちなくなるかもしれないが、まだまだ先の話だ。

そのため、食事に関して困ることはないはず。

「どうなんだ？」

「……」

少年は、答える気がないというように、目を閉じてしまった。詰問口調におびえているというわけでもないようだ。

「なら、質問をかえよう。さっきは答えてくれなかったから、もう一度。君の名前は？」

「……」

反応せずに、黙っている少年を見て、イリエは一つ溜息をつくと、席を立った。

「休憩にしよう。飲み物を持ってくる。大人しく待っていてくれ」

少年にその声をかけ、出口ですれ違いざま、わたしにそっと耳打ちした。

「すみません。私ではどうも頑なになってしまつようなので、少し彼と話てくださいますか」

「うん。ありがとねイリエ」

お礼を言つと、少しだ表情をやわらげて、イリエは部屋を出て行った。

私が空いた席にそっと座つても、少年は顔を上げようもしない。

気にせず、イリエとはわざと反対の気軽な口調で、

「ね、君。実は、領民じゃないでしょ？ だから、食堂にも来れなかったんじゃない？」

内緒話でもするかのように、声をひそめて笑いかけた。すると、少年のライオン耳が、ピクリとわずかに動いた。

「実はね、私も領民じゃないんだ。さっきのお姉さんには内緒だよ？」

カミングアウトしてみせると、初めて少年が顔を上げ、まじまじと私を見る。

領民じゃない人間もこの地にはいる。旅の行商人たちなどは、普段はこの土地で暮らしていないので、領民ではない。

この土地に住みたければ、私に会いに来てもらい、少し挨拶して職業や出身を聞いてから、領民にするのだ。

領民になる条件があるわけではないけれど、念のため。だが私は、この少年に会った覚えがなかった。やはり、領民ではなかったのか。

「驚いた？ 仲間だね。君はホントはどこに住んでるの？」

「……アズサ領。アンタは……？」

「もっと遠くかな」

ようやく話ができたことに、内心ほっとしながら、話を合わせる。

「私は、カノ」

「……おれは、クルト」

「いい名前だね。何歳？」

「12」

歳の割りに、少し小柄だ。もう少し下かと思っていた。

「そつか。じゃあ私は6つお姉さんだ。ね、お家に帰りたい？」

「当たり前だろ」

「私も。きつとクルトのお母さんも心配してるよね」

「親なんていない……」

少しだけ緑の瞳を揺らしながら、クルトは目をそらした。

私は、わざとらしく驚いた表情を貼り付ける。

「そうなんだ！ ご、ごめんね？」

「平気、だし……」

「じゃあ今、一人で暮らしてるの？ 寂しくない？」

「別に……弟と妹、いるから……おれがしっかりしないと……」

「もしかして、リングとテク、3つずつだったのは、弟さんたちのため？ アズサ領にいるの？」

「うん……お腹、すかしてるはずだから……。なあ、逃がしてくれよ！ あいつら、待ってるんだ！」

イリエが戻ってこないことを確認するように、扉の方を見てから、クルトは私に懇願した。

「ごめん……無理だよ。すぐにあのお姉さんが戻ってきちゃうから

……」

私は、不本意そうに、残念そうに呟いて、そこで会話を打ち切った。

黙ってしまった少年を見ながら、情報を頭のなかで整理する。

この領民ではなく、アズサという人が治める領地から来たらしい。この近くに他の人の領地があると聞いたことはないのだが。

それに、両親はおらず、孤児であり、弟妹の面倒を一人で見ている、と。

たぶん、日々の暮らしに困って、ここまで盗みを働きに来たのだろうが、アズサ領とはそんなに貧しいところなんだろうか。

イリエが戻ってくるにはまだ少し時間があるだろう。

「私、アズサ領には行ったことないなあ。噂には聞いてたけど、どんなところなの？　どんな領主様？」

本当は名前すら知らないのだけれど。改めてクルトに向き直り、世間話として話を振った。

ぱたぱたとクルトの尻尾が揺れる音がして、

「小さい村で、森の奥に隠れてるんだ。アズサ様は、すごく、優しい」

故郷が大好きなのだろうか。思い出すようにクルトは初めて笑顔になった。

言わされているというわけでもないらしい。てっきりどこか人間の領地で酷い扱いでも受けているのかと思っただけれど、違うようだ。

「いいね。行ってみたいな」

「……」

ようやく見れた笑顔が、何故か一瞬で萎んでしまった。耳も尻尾も力なく垂れてしまう。

さらに事情を聴きだそうと口を開いたところで、ドアが軽くノック

クされた。

お盆を持ったイリエが現れ、机の上に、飲み物と少しの食べ物を置いていく。

「昼だから、一応飯だ。ご飯のあとにまた事情を話してもらってから。鍵は掛っているから、部屋から逃げようと思うなよ」

硬い口調でそう告げると、イリエは私に目配せしながら、部屋の外へ出ていった。

私も立ち上がり、クルトにまた後だと笑いかけながら、イリエの後を追った。

地下への階段の踊り場で、イリエと私は向かい合った。この辺りは、使わないものが多く保管されている倉庫なので、滅多に人は来ないし、今なら皆は昼食のため食堂にいるはずだ。

「何か、お分かりに？」

「うん。名前は、クルト。12歳で、うちの領民じゃないみたい。孤児で、弟妹のために食料を盗んで、本当はアズサ領ってところに住んでる。」

領主は悪い人じゃないみたいだけど、生活苦しいのかな……。

イリエは、アズサ領って聞いたことある？」

「いえ、知りませんね……。誰かその出身のものがいないか、探してみます。」

カノ様に手伝っていたいで、すみません」

「ううん！ こういうのも大事なことだし。今後もあるかもしれないから、よろしくね」

「はい」

例のクマ事件以来、イリエとは割と打ち解けて話すようになった。生真面目なタイプなので、仕事も頑張ってくれるし、相談すると一緒に考えてくれる。

『戦士』としてはLv40で、この領地の『戦士』の中では一番レベルが高く、他の『戦士』からも、頼りにされているようだ。リーダーシップもあり、街の警備なども自分たちで予定を組んで手際良く動いてくれるから、イリエは前にもこういう仕事をしていたのかもしれない。

「ふふ、怖いイリエもカッコいいね」

「茶化さないでください。結構疲れるんですよ、厳しい態度をとるのって」

「あはは、本当にご苦労さま」

綺麗な顔にイリエは思いつきり皺を寄せる。

「それで、あの子をどうなさるおつもりですか」

「そうだなあ。とりあえず、犯罪は犯罪だし。予定通りの償いをしてもらおっかな」

今までこの領地で犯罪が起きていないのは、まだ人口が少ないことと、皆顔見知りであること、また、これから領民としてやっていく上で、最初から立場を悪くするような者がいなかったことが大きい。

これからは、そうはいかないため、一応盗みなどに対してのペナルティは考えてあるし、伝えてある。

盗みならば、無給金労働1ヶ月。その間は、自分の家や部屋に変えることは許されず、地下の部屋で生活してもらう。肉体労働もあれば、内職のような地味な作業まである。

彼はまだ子供だから、内職を1ヶ月、延々とやらされるだろう。もちろん、食事や休憩はあるけれど、なかなか精神的に辛い作業だ。

「わかりました。食堂に犯罪があったことと、その罰の内容を掲示しておきます」

「うん。それからのことは、アズサ領のことが分かったら、また決めよう。もしかすると、バルバラさんに手伝ってもらうかも。呼んできてくれる？」

「はい。今なら昼食でも取っているでしょう。すぐ言ってきます」

イリエは頷いて、素早く踵を返し、きびきびと食堂へ向かっていった。

私はイリエを見送ると、階段を降り、再び小部屋のドアを開いた。ぱつと顔を上げたクルトの机の上の皿は、すでに空になっている。相当お腹が空いていたのかもしれない。

急いで食べたのか、口の周りに食べかすをたくさんつけていた。

「美味しかった？ 口にいっぱいいついてるよ」

指摘すると、クルトは慌ててごしごしと服の袖で、口を拭いた。

幼いその動作に思わず頬が緩むが、私はあえて、表情を引き締めた。

「じゃあ、お腹がいっぱいになったところで、クルトのこれからについて話そうか」

「……」

薄暗く、静かな室内に、クルトがごくりと唾を飲む音が響いた。

「この領地では、盗みの罰は、1ヶ月の労働。もちろん給料はでないよ？ さすがに肉体労働はさせないし、子供にでもできる仕事に

する。

衣食住も保障は 保障ってわかるかな。えーっとご飯も住むところもちゃんとある。とりあえず、明日から働いてもらう」

口を開く隙を与えず、そこまですらすらと告げると、クルトは突然立ち上がった。

「待てよ！ 1ヶ月なんて無理だっ」

「どうして？」

「そんなことしてたら、ソソとミラが死んじゃう！」

「さっき言ってた弟と妹？」

「そうだよ！ 食べるものなんてないんだっ、おれが持って帰らないと！ あいつら、まだ6歳と4歳なんだっ。あいつらを殺す気かよ！」

机を蹴飛ばして、私に詰め寄り、お腹辺りの服を引っ張られる。

本当は胸倉を掴みたいのだろうが、身長が全く足りていない。

つま先立ちになりながら、必死に訴えてくる様子に嘘はなかったけれど。

「だから、何？」

「！？」

思った以上に冷たい自分の声が響き、クルトの動きを止めた。

「面倒を見なくちゃいけない弟と妹がいれば、誰でも盗みをしていい？」

「……………だっ……」

「貴方が盗んだ商品だっ、商人の家族の命を背負ってるんだよ。まだ皆苦しくて、商品一つ売れるか売れないかで、何日かご飯が食

べれるか食べれないかが、決まるんだ。

まあ、一応今は屋敷にこればご飯は食べられるようになってるけどわ。

クルトの盗みで一家が飢えたら？」

「知るかよ！ そんなのっ、考えてられねえよ！ そんなの自分がご飯食べてからじゃなきゃ、考えない！」

「そう。なら私たちだって、クルトの事情なんか知らない」

見上げてくる緑の目を、上から静かに見下ろす。

唇を噛みしめ、私の服を握る手に力がこもる。クルトの手は、力を入れすぎて、真っ白になっていた。

この辺りでいいだろうか。

私は、ふっと溜息をついて、床に膝を立て、クルトと視線を合わせた。

「盗まなきゃ、生きていけない状況なの？」

「そうだよ！」

「アズサ領は皆、そんな風なの？ 領主様は優しかったんじゃないの？」

「そんなのっ……」

そこで初めて、強がりの少年の目に、涙が滲んだ。

「そんなの、もうない！ アズサ様は死んじゃったんだ！ おれ達以外、もう誰も住んでないっ」

つとと涙が頬を流れて、一度流れると次から次へと大粒の涙が浮かんでは零れ落ちた。

服を握る手が離れ、止まらない涙をぎゅぎゅと抑える動作に、流石に胸が痛む。

そつと手を伸ばして、ライオンのたてがみのようなクルトの髪を撫でた。

昔、小さい頃、他愛もないことで泣きじゃくる度、誰かにこうしてもらった。何故か落ち着いたことを思い出す。

「誰もいないの？ 一人も？」

「……うん」

「そこに住み続けてるの？」

「……だって、母さんが、迎えに来てくれるって。いつか来るって言っただんだ！ だから待つんだ。じゃないと、母さんが迷うから！」

「そっか。それなら待ちたいね。」

「じゃあ、明日から、労働1ヶ月ね」

頭を撫でながら、先程と全く同じことを告げると、クルトは涙を溜めた目を開いて、ぱちくりさせた。

「は……？」

「うん。事情は分ったけど、それとこれは別だから。」

ついでに、盗みの罰が終わったら、クルトはこの領地の孤児院に入るうね。

実は、ついさっき孤児院完成したばかりなんだ。タイミング良かったね」

実際には、孤児院という建築物はなかったのだが。

lv6で建築可能になった教会を立てて、その横にさらに民家を増設したものだ。どちらもランク1であるため、粗末で小さいが、領民の中の孤児3人を預かることになっていた。

先程レベルアップしたのは、この建物が完成したからである。それまでは、屋敷で一緒に預かっていたが、今後の人口増加につれて流れてくる孤児も増えるかもしれず、きちんと面倒をみる施設を作

ったのだ。

「そういうわけで、今日からクルトはこの領民ね。他の領民じゃないなら、別に何も問題ないし。孤児院の院長も優しい人だから安心して」

そう言つと、ようやくクルトは金縛りから解けたように、叫び出した。

「な、なに勝手に決めてんだよ！ おれは、アズサ様のところで暮らすんだ！ それに、おまえだつて領民じゃないって言つてたくせにっ」

「うん。領民じゃないよ。私、ここの領主だから」

「なっ……ふざけんな！ 返せよ、おれを家へ返せっ。おれはっ、母さんを待つんだっ、アズサ様のところで！」

腕をめちやくちやに振り回して、クルトが暴れ出す。

ほかほかと殴られると地味に痛いので、私は立ちあがって、クルトから距離を取った。今は何を言つても落ち着かないだろう。

そのまま黙つて部屋を出て、外から鍵を閉めた。

「あー……しんど……」

扉にもたれるようにして、その場にずるずると座り込む。

兄弟なんていなかったの、子どもは嫌いではないけれど、上手く接する自信はない。

いつも以上に気を使つたり、あえて厳しくしたりするのは、非常に疲れた。

「だから、この後はプロに任せるね、バルバラさん」

座ったまま、階段から降りてきた女性を見上げる。

血色の良い、元気溢れる笑顔で、バルバラは力強く頷いた。

「あいよ。新しい子だね。任せときな、うちの躰は厳しいよ」

「それと、まだ後2人増える予定だから、よろしくね」

「何人でもおいで。賑やかなのは大歓迎さ。それで、その子達はいつ来るんだい」

バルバラ院長の逞しい笑顔に元気をもらって、私もよいしょと立ちあがった。

「いまから、迎えにいくよ」

11話(後書き)

たいへん遅くなりました。すみません！
某おばさんがさりげなく復活します。

12話

「カノ様。アズサ領出身の親子がいました」

屋敷の食堂へ行くと、仕事の早いイリエが駆け寄り、さっそく食事中のその親子のところへ連れて行ってくれた。

「って、ラウラちゃん。それと、そのお母さん！」

ぼろぼろと零しながらスープを飲んでいるラウラちゃんと、それを注意しながら暖かく見守るお母さんが、こちらを見て微笑んだ。イリエと二人、並んで親子のテーブルの向かい側に腰掛ける。

「ああ、カノ様。またお会いしましたね」

「二人が、アズサってところの出身だったと聞いて……」

アズサという言葉に反応したのは、ラウラちゃんの方が早かった。

「アズサばっちゃん！ おぼえてるよっ」

「ばっちゃん……？」

「うん！」

嬉しそうに笑いながら、ばっちゃん好き！と叫ぶラウラちゃん。笑い返しながら、目配せでラウラのお母さんに説明を求めると、彼女は少しだけ寂しそうに口を開いた。

「アズサ様は、ご高齢の方でしたから……。でも気さくなお方で、よくラウラや近所の子を孫に似てるって可愛がってくださいだったので
す」

「孫……」

「なんでも、領主になられた時に、生き別れてしまったと仰ってました」

それは元の世界で亡くなった時に死に別れたんじゃないだろうか。密かに思いながら、さらに質問を重ねていく。

「えっと、もうアズサ領はないって聞いたんですけど……」

「……ええ。3年前に、アズサ様が老衰でお亡くなりになったので……。」

アズサ領は6年前にできて、3年しか続かなかったんです」

老衰。お婆さんになってから異世界トリップするのは、どんな気持ちだったろう。

行き成りわけのわからない世界で、もう歳なのに、領主になれと言われる気持ち。

ラウラのお母さんは、汚れたラウラの口をそっと近くの手で拭いた。

ラウラは若干うっとうしそうにしながらも、黙って口を拭いてもらっている。

「けれど、アズサ様は領主になられた時から、『自分は長くないから』と仰って、領民が違う土地で暮らせるように、信頼できるように色々手配しておいてくださったんです」

「用意の良い方だったんだね」

「はい。その頃は、ちょうどヴァルデーが他の土地を侵略し出していたので、人口を増やさず建物も必要最低限で、レベルアップしないように気をつけてくださいました。」

アズサ様は『一時的な隠れ里』だって」

レベルが一定を超えると、他の領地から侵略が可能になってしま
う。そのため、あえてレベルを抑えた。

自分のことと、領民のこれからをよく考えてくれたのだ。

そして『一時的な隠れ里』という方針を崩さず、アズサ領は滅び、
住む人も散っていった。

うらやましい、と素直に思う。素早く方針を決めて、人を纏めて
いける、そのアズサという人の才能を。

私は、まだどう発展させていくかを考える余裕もなく、出てくる
問題をこなすことで精いっぱいだ。

「私達は、アズサ様のお陰で違う獣人の領地にすぐ移住することが
できました。流れ者に戻らなくて済んだんです。

……まあ、その後、引越した先が戦で占領されてしまったので、
また逃げ出してここまで来たんですけど」

「それは……たいへん、でしたね」

母親とはいえ、30歳ほどの若い女性だけれど、簡単に説明して
くれる何倍以上もの苦労をしているのかもしれない。

たいてい苦労もせず日本で生きてきた自分では、上手く掛ける言
葉が見つからない。

「そうですね。でも3年間だけでしたけど、幸せに暮らせたのは、
アズサ様のおかげなんです。そこで夫に出会って、子供を生んで…
…。幸せでした」

ラウラの父親は、領民にはいない。寂しそうに微笑むのを見る限
り、何かあったのだろう。

ラウラを女手一つで9つまで育てるのも、きつととても苦労を
。

そこまで考えて、はたと気付いた。

「え？ おかしくないですか？」

「え？」

頭の中で、ぐるぐると数字を数える。

えっと、アズサというお婆さんが領主になったのが6年前。そこで結婚して、ラウラを生んでと言っていたけれど、ラウラは今9歳。領民になるときに、確かに年齢を聞いた覚えがある。

「だって、今ラウラちゃんは9歳なんですよ？ で、6年前にアズサ領でって……あ、もしかしてラウラちゃんに兄弟、とか？」

「え？ あの、ごめんなさい、質問がよく分らないんですけど……」

ラウラのお母さんは、急に戸惑った表情になり、首を傾げた。

助けを求めるようにイリエを見るけれど、同じように不思議そうな顔をしている。

金髪をさらりと揺らしながら首を傾げて、イリエが口を開いた。

「カノ様、何も変じゃありませんよ？ ラウラが今、9歳。1年に2つ歳を取って、つまりラウラが生まれたのは4年と少し前ってことじゃないですか」

なんか、今、おかしい単語を聞いた気がする。

初めて自分に獣耳と尻尾があることに気付いた時のような、あの感覚。

「…………ご、ごめん。もう一回今の、言っつて？」

「ですから、1年に2つ歳を取るから、つまりラウラが生まれたの

は4年と少し前にな

説明するイリエを手で制して、そのまま私はテーブルに突っ伏した。勢いの良さに、ごんと額をぶつけるが、気にしない。

突然の行動に、イリエとラウラのお母さんが疑問符を浮かべているけれど、ちよつと落ち着いて考えたい。

「1年に2つ歳を取るって何!？」

旧アズサ領は、領地の西、この前狩猟に行った三日月型のソロ湖の森から、さらに川を一つ渡って続く森の中だと聞いた。

最初はソロ湖の近くだった領地を人口が増えないように、気付かれにくい森の奥に移動したらしい。

ラウラのお母さんから得た情報を元に、日が高いうちにイリエとゼオンを連れて、旧アズサ領を目指すことになった。

この前あんなことがあったばかりなので、若干トラウマ気味であり森には近づきたくないのだけれど、仕方ない。幼い子供が、森の奥で飢えているなんて見過ごせないからだ。

それでも流石にバルバラを連れてくる気にはなれず、イリエと安全性を考慮してゼオンを引張ってきた。

イリエは、ゼオンを連れていくことに露骨に嫌そうな顔をし、ラウラのお母さんも近寄りづらそうにしていたけれど、ゼオンの戦闘能力の高さはピカイチだ。レベルは聞いても教えてくれなかったけ

れど。

「おいおい、なんでまた落ち込んでんだよ」

領地の青い境界線のすぐ内側、建てたばかりの厩舎の前で、借りる馬を選びながら、ゼオンが呆れた顔で、私の顔を覗きこんだ。

今回は馬があるので、森に行くのもそれほど時間はかからない。もちろん私は乗馬スキルなんてないので、誰かの後ろに乗るしかないのだけれど。

イリエは、後ろに案内役のラウラのお母さんに乗せるので、必然的に私がゼオンの後ろだ。

ちなみにラウラはバルバラさんに預けてきてあり、こっそりラウラにお母さんの名前も聞いておいた。熊耳とラウラのセットでしか覚えてなかったのだけど、本名はデイサというらしい。

デイサは、私が項垂れている理由が自分のせいだと思い、イリエと馬を選びながら少し気まずそうにしていた。

私は空気を読まないゼオンを軽く睨み上げながら、溜息をついた。

「別に、落ち込んでない」

「じゃあなんで尻尾垂れてんだよ。仕事に戻ったのかと思ったら、急に外出するから、来いなんて呼びつけてくれやがって。文句言いてえのに、そんなに元気ねえと、文句言いにくいだろーが」

心配してくれるわけではなく、あくまでゼオンの都合らしい。

「だから、落ち込んでるんじゃないって。何て言うんだろ……えーとカルチャーショック？」

「なんじゃそりゃ。ほれ、こいつに乗るぞ。俺が先に乗るから、ここに足引っかけて、後ろにまたがれ」

じゃらじゃらと馬具を調節し終わると、ゼオンは慣れた動作で馬に跨った。

軽く言うけれど、馬なんて生で見るとも数えるほどしかない。いきなり乗れと言われても……。

困って、じつと馬を見つめると、馬もつぶらな瞳で見返してくれた。真黒の大きな瞳が輝いている。

「くっ……可愛いな、馬！ 癒されそう……」

「ほら、早く乗れって。うだうだやってつと、前に乗せるぞ」

「げ、それは勘弁！」

そんな乙女チックな乗り方をしたら、鳥肌が立ってしまった。口からきつと砂も吐ける気がする。

慌てて、差し出されたゼオンの手を掴み、言われたとおりに馬の後ろ側に乗る。

「うわ、高いっ」

月並みだが、予想以上の高さにくらりと目眩がした。思わず、ゼオンにしがみつく、そのままゼオンは馬をゆっくり進め始めた。

私が怖がっていてもお構いなしだ。

いつもと違う目線の高さで、領地をおそろおそろ眺める。

正面には、まっすぐ広がるメインストリート。昼過ぎの穏やかな時間を人々がそれぞれ生活している。

すべてランク1の建物であるため、こじんまりした景色だけれど、中世風の小さな家々がいくつも並んでいるのを見ると、心が温かくなる気がした。

メインストリートの奥には、唯一立派な建物である屋敷。

屋敷だけ立派で、まだまだ街が追い付いていない景色だ。

「こちらも用意できました。行きましよう、カノ様」

ぼんやり眺めていると、デイサを乗せたイリエが、声を上げた。

「うん！ 暗くなる前に行って、子どもたちを保護しよう！」

気分と頭を切り替えて、旧アズサ領に向おう。

今は、怖がっている時でも、落ち込んでいる時でもない。

獣人の寿命は平均40年。1年で2つ、人間の2倍、まだ見ぬエルフィン族の4倍の速さで歳を取る。

人間の寿命は平均80年。1年で1つ歳を取り、獣人とエルフィン族の中間の歳の取り方。

エルフィンの寿命は平均160年。2年で1つ歳を取り、人間の2倍、獣人の4倍の遅さで歳を取る。

そんな先程イリエに聞いたばかりの、新しい事実について、悩んでいる時じゃないんだ。

言い聞かせながら、風切って、領地の外へ出た。

12話（後書き）

ちやっかり新事実とゼオン再登場。

ラウラちゃん親子も、きつと相当苦労してきたのでしよう。

それを前に出さず、穏やかに暮らそうとするお母さん、カッコいいです。

種族についてもちらつと新情報。領地の方針を決めるにしても、この差を考えるのは重要かもしれません。

そして、違う領主のやり方を見て、そろそろ主人公も色々悩むのでしょうか？

13話

はじめはゆっくり、私が馬に慣れてくると、次第に駆け足になって、森へのなだらかな道を進んだ。

領地の外は基本的には自然以外ほとんど人工物がない。置いても魔物や獣に壊されてしまいうらしい。家などは一軒も見当たらず、見通しの良い原っぱが湖まで続いている。

前回は歩いたその景色が、馬上で流れていくのを静かに見送った。

ソコ湖は、大きい。湖面の大きさを詳しく例えるのは難しいが、対岸が霞む程度には大きい。といっても三日月形をしているので、端行くほど対岸は近くなるそうだ。

青く弧を描く湖の周囲に森があり、森に隠れているが奥にはソコ湖の水源となる川が流れている。

森といっても、食糧確保のため頻繁に人が訪れるので、道は整っている。数日前には魔物におびえながら少しずつ進んだ道を、馬で一気に駆け抜けた。

ネズミなどの小さな魔物は、馬の速さに追いつけないためか、レベルの高い人間がいるためか、襲っては来なかった。

密かに心配していた熊だが、騒がせなければ本来森の隠れた洞窟に住んでいるそうなので、道には現れない。

川を渡り奥へ行くほど、木々が生い茂って薄暗くなり、頭上からわずかに木漏れ日が届くだけになった。

そこでようやく、前方を駆けるイリエとデイサの馬が止まる。

イリエは軽やかに馬を降り、デイサに手を貸し、降ろしてやる。つくづくイリエは騎士っぽい動作が似合う。

見惚れていると、ゼオンも馬を止めて降り立ち、私に手を貸して

くれた。危なっかしい動きで馬からなんとか降りる。

デイサが全員を振り返りながら、道を指さした。

「まだ道は続いてますけど、これはカモフラージュです。アズサ領へは、このヴアルの木が目印で、この木が並ぶのに添って進みます。道が整っていないので、馬はヴアルの木につないで置きましょう。そう遠くありませんから」

デイサが触れる道端の木には見覚えがあつた。ハート型の葉を持つこの木は、前にバルバラさんが教えてくれた。

「これって、青い花が咲く？」

「そう、冬には女神様の花が咲きます。だから冬はとても目立ってしまふんですけど、雪が深くてここまで来る人もいないので」

話しているうちに、イリエとゼオンが馬を繋ぎ終えた。魔物が襲うのは、基本的には人間や人工物だけなので、馬を残すのは大丈夫だそうだ。

イリエとデイサが先頭になって下草を払いながら進む。二人とも森に慣れているのか、手際が良い。

ゼオンと私は、周囲の魔物に警戒しながら、後を追う。

「ゼオンは、知ってたんだよね。私たちが、早く成長するのって」

「あん？ ああ、獣人な。老けやすいんだろ」

「……」

女の子に対してのデリカシーが足りない。時の流れる速さが違うとか、その綺麗な顔に見合ったカッコいいセリフを言えないのだからか。

「で、それがどうしたって？」

「どうっていうか……。私、それ、さっき初めて知ったから……」

「ほー。何？俺と一緒に歳とれないのが寂しいって？」

俯いた私を、なぜかゼオンが嬉しそうにからかってくる。曲解もい
いところだ。誰がそんなことを言った。

「茶化さないでよ。ゼオンは、うちの領地で暮らすとき、みんなと
歳がずれていくんだよ。気にならない？」

言ってから、ちょっと失敗したかなと思った。これではまるで遠
まわしに出ていけと言っているようだ。

慌てて言い直そうとしたが、先に口を開いたのはゼオンだった。

「まあなー。でもよ、俺の故郷はリーシャ帝国だったからな。

お前、リーシャ帝国って知ってたか？人口のほとんどが、エル
フィンだ」

エルフィン族。名前しかまだ聞いたことがない第三の種族であり、
ファンタジーでよくあるエルフのような種族だと聞いた。

「えーと、確か、魔法が向いてて、獣人の4倍の遅さで成長する？」

「おう。人間より2倍遅せえな。

俺は、母親が人間で父親がエルフィンだったらしい。んで、姉貴
がエルフィンで生まれて俺は人間で生まれた。家族内でもそんな
だからな。

今更気にするだけでもねえっつーか。まあ、今まで俺は老けるの
が早いと思ってたから、ここへ来て逆で戸惑っちゃまうけど」

私の踏んだ小枝がベキッと大きな音を立てる。

「え？ は？ 何、両親が、エルフィンと人間？」

「おう。親なんて覚えてねえけど」

「……ごめん。それで、お姉さんがエルフィンなの？ 両親種族違うと、どちらかが出るの？」

「おう。それで、俺が今24歳だろ？ で、姉貴とは生まれたのが12年違うんだが、姉貴は今18歳ってわけだ」

「え、24+12で、さらにえーと2で割る……ややこしっ」

「今じゃ妹みてえなもんだ。エルフィンでは他種族婚も別に珍しいつてもんじゃねえし」

「そうなの……？」

色々問題が起こりそうだ。夫婦間の歳の開きとか、子供が親より年上とか。

「じゃねえと、エルフィンほとんど子供ができねえからな。ま、獣人とはあんまりくっつかねえが。さすがに4倍はなあ……」

「子供が、できない？」

説明を聞けば聞くほど疑問が生じていく。この無限ループはいつになったら終わるのだろう。しかも、男性相手にこういう話題はあまりしたくないのだが、聞かないのも落ち着かない。

質問することにも、説明を聞くことにも少しげんなりしながら、ゼオンの言葉を待った。

「それも知らねえか。エルフィン子供が生まれにくいことで有名だぜ？ 子供のいねえ夫婦が多いし、できにくい。18で結婚して、30年後にようやく妊娠したなんつー話はざらにある」

「うわー……。じゃあエルフィン以外は？」

「あんまり俺も詳しくねえけどな。人間なら1、2人くらいは生む

「んだろ？」

「そこは普通なんだ……」

「んで、獣人が平均8人くれえだろ？」

「は、8……平均8人!？」

多い。すごく多い。平均ということは、もっと多い人もたくさんいるはずだ。

驚きのままに叫ぶと、先行する二人が振りかえった。すぐにイリエが憤怒の形相で駆け寄ってくる。

「ゼオン、貴様、カノ様に何をしている！」

「うげ、誤解だつーの！ 何もしてねえ！ おい、そっだよなつて、なんで頭抱えてんだよ！」

「平均8人つて人口の増え方どーなるの！ 少子高齢化皆無なのか！ 速く老けるのにどうやってそんなに生むんだ!……つてあああ、自分で老けるつて言っちゃったあああ」

ゼオンに掴みかかるイリエと、イリエになぜか怯えるゼオン（第一印象がお互い悪すぎたんじゃないだろうか）、情報量が溢れて混乱のまま叫ぶ私。

「だから誤解だつつてんだろ！ 俺は子作りの説明をしてただけで」

「きつ……貴様！ カノ様に対してッ」

「うわ、今のナシだ、おい！ 言い間違えたんだって！ 子供にっいてだな」

收拾のつかない事態に、ディサが慌てて前方を指さした。

「あの！ もう、着きますから、ほら、あの大木の向こうですから、

みなさん落ち着いてください！」

その言葉に混乱中の3人が顔を上げたが、前方を見て、即座に顔が凍りついた。

びたりと動きを止めた3人に不思議そうな顔をしながら、デイサも自分が指さした方を振り返る。

「！」

目に飛び込んできたのは、赤く燃え盛る炎と煙だった。

魔法の炎が普通の炎と違う点は、燃えるとき匂いがしないことだと走りながらゼオンが言った。実際焦げくさい匂いは全くしない。

しかし、音は変わらない。廃墟を燃やす醜悪な炎の音が、旧アズサ領に飛び込んだ私達の耳を打った。

滅んだ領地でも、建物はそのまま残る。森の奥、少し開けた場所にある古い家や建物は、すべてランク1の木造のようで、勢いよく燃え上っていた。

燃え上る建物が数軒円のように並び、中央にある唯一立派な屋敷もまた、火の海に吞まれていた。もう使われていない領主の屋敷だ。

「何これ、なんで燃えてるの……」

私が目の前の光景に茫然としてみると、隣でデイサが地面に膝をついた。

「そんな、どうして……何があつたの!? ああ、アズサ様の領地がっ……いやあ!」

デイサは、故郷のようなものだと言っていた。滅んでいるのは分つていても、燃え盛るのを見るのは耐えられないはずだ。

何と声を掛けようか迷っていると、イリエが素早くデイサの肩を支えた。

「デイサは、ここにいて動くな。ゼオン、水系の魔法で炎をなんとかしろ! カノ様、子供を手分けして探しましょう!」

「なんとかつて……やってみるが、この炎は魔法だぜ? 消えにくいし、時間かかるぞ!」

「それでも、やるしかないだろう! 早くしないと、森に延焼する!」

「くそっ、了解! だが、その前に」

ゼオンが足元に素早く魔法陣を展開した。

「『アクアコート』! お前もっ、『アクアコート』!……これで、5分は炎魔法のダメージが減る。切れる前には一度戻ってこい!」

私とイリエの体を水のベールが足元から覆った。水系の防御魔法だろう。これで火に包まれた建物に入ることができる。

「ありがとう!」

お礼を残して私が領主の屋敷に向かうと、イリエは周囲の建物に

駈け出した。

後ろで、ゼオンが水系魔法の呪文を叫び出すのが聞える。

「『クラウドバースト』！ 『クラウドバースト』 『クラウドバースト』 『クラウドバースト』 ツ！」

魔法陣が出るのとはほぼ同時に、発動し、発動した瞬間に次の魔法陣を発動している。本来、上級魔法ほど一つ発動する度に、次に魔法が使えるようになるまで待機時間が長くなる。そうならない辺り、ゼオンが魔法を改良しているのかもしれない。

領主の屋敷に飛び込む寸前、燃え盛る領地の上空をいくつも雨雲が埋め尽くしていくのが見えた。

「屋敷の中は薄く煙が漂っていたが、視界を奪われるほどではなかった。」

昔、火事では煙で前が見えないと防災訓練で習った。しかし、今回は魔法の炎。

ゼオンの教えてくれたことによると、煙も濃くはなく、焦げるような匂いもない。普通の煙とは違い、煙で意識を失う心配はしなくて良いそうだ。

気をつけるのは炎と、落ちてくる瓦礫である。

「誰かいない！？ 助けに来たよ！」

屋敷の構造は、私の領地と同じだった。吹き抜けの中庭があり、それを壁のように2階建ての建物が囲う。1階には、領民の部屋がアパートのように並び、中庭には回廊と繋がれた離れがある。ここが領主部屋だ。2階は、食堂や調理場、浴場、そして行ったことはないが、女神の祭壇がある。

時間はあまりない。どこから探すか迷いそうになった時、炎の音に混じって、微かな泣き声が届いた。

はっとして中庭を見やると、領主部屋の扉、その前に座り込んで泣き叫ぶ小さな姿がある。

領主部屋に繋がる廊下が燃えていたが、防御魔法を頼りに、そのまま領主部屋まで駆け抜けた。

呼吸すら辛いほどの熱気が体を包むものの、ゼオンの防御魔法のお陰で、痛みや火傷はない。HPへのダメージもなさそうだ。

「もう大丈夫だよ！」

領主部屋に辿り着き、泣きじゃくるライオン耳と尻尾の小さな女の子を抱きしめた。痩せた体とボロボロの服に胸が痛む。間違いなく、彼女がクルトの妹だろう。

すぐに見つかったことにほっとしながら、違和感に気付いた。

「あれ、一人だっけ？ もう一人いるはずだよ。えーとソソちゃん」とミラちゃん……」

「うえ……ッ、うつく、ソソにいちゃあ……」

「ソソお兄ちゃんは、どこ？」

「おにいちゃあ……」

訊ねるけれど、彼女　ミラは泣きやまず、言葉になっていないので、もう一人の居場所は分かりそうにない。防御魔法が切れる前に、一先ず女の子だけでも外へ連れ出さなくては。

そう判断して、ミラを抱え上げようとしたところで、泣き声が甲高い悲鳴に変わった。ミラは小さな目を見開き、暴れ出す。

急な変化に驚きながら、ミラの視線を追って後ろを振り返り、

「何、どうし　！」

瞬間、頭を重い衝撃が襲った。

ぐらりと揺れて視界がブラックアウトし、自分の体が地面にぶつかるのが分かった。

この火事は、魔法の炎。故意に何かによって引き起こされたもの。

畏。

その単語が浮かんだ瞬間、遅れて激痛が走り、悲鳴を上げる間もなく、私の意識はふつりと途切れた。

13話（後書き）

ややこしい設定にしたおかげで、年齢の話をするたびに、頭の中で間違えないように何度も計算するはめになりました。

ゼオンとその姉は、12歳のときに年齢が同じになり、その後ゼオンが追い越していったんですね。たぶん。計算間違えてなければ…。

これから登場人物を出すたびにこの計算をやるのかと思うと、わりとぞつとします。

14話(前書き)

残酷描写があります！苦手な人はお気をつけてください！

私は、目が覚めてすぐに意識がはつきりするタイプだ。寝惚けたり、布団ですつとぐずぐずしてしまふようなことはない。

だから、頭の痛みと共に目が覚めて、すぐに冷たい床から体を起こそうとした。

「いつ……何これ」

できなかつた。手について起き上がろうとしたけれど、両腕は背中に回され手首で縛られている。手首が縄に擦れて痛い。

今度は、痛む頭を揺らさないように気をつけながら、腹筋のみの力で体を起こした。

見渡すと、知らない場所だった。小さな部屋だ。

大理石のような真っ白で冷たい床、壁も同じように真っ白だ。

正面の床は一段高くなっており、その上に横長の台が置かれている。青いガラスのようなものでできた台は、細かな文様が刻まれており、淡く発光している。

その台にもたれるようにして立つ男が、起き上がった私を見た。

「ああ、目が覚めましたか。怪我は大丈夫ですか」

愛想の良い笑みを浮かべる30代ほどの男は、獣耳も尻尾もなかった。黒目黒髪、特徴のない印象に残らないような、日本人らしい顔立ち。明らかに、この世界で生まれた人間ではない。

「ミヤイカノさんですよ？　ここから遠くない新しい領地の領主」

「貴方は……」

「ああ、申し遅れました。わたしは、江田奨です。向こうでは、I

「T企業に勤めていて、こちらでは、ヴァルデー王国コーダ領で領主をしてます」

「ヴァルデー……。それで、ここはどこ？　なんで私は殴られて連れ去られたの」

手も頭も痛いし、よくわからない状況に内心とても緊張している。けれど、自分でも思ったより冷静な声が出た。混乱を表に出したら、何故か負けるような気がしたから。

「女神の祭壇ってわかります？　領主の屋敷に必ずあって、領主……まあ、プレイヤーしか入れないんですよ。領主以外では、扉も開かない。便利でしょう？　ここでゆっくりお話するために、炎が女神の祭壇には来ないよう注意したんですよ」

「まだアズサ領の屋敷の中なんだ」

少しだけほっとした。道はわかっているから、いざとなれば上手く逃げられるかもしれない。

「ええ。お話さえ終われば、ちゃんとお帰しますから。あと、わたしの方が遥かにレベルが高いので、貴方の魔法はあまり効きません。無駄なことはせず、落ち着いて聞いてくださいね。それに、扉の向こうにはわたしの部下が待機してます。部下が手荒な真似をして悪かったです、そんなに扉ばかり見つめないでください」

「……」

人を殴って、縛り上げて『お話』もなにもないだろう。

「荒っぽい方法で、カノさんを連れてきたのには理由がありました。本当は、貴方の領地が戦争制限の外れる1v20になったら、すぐに使者を出して話しをしに行こうと思っていたんです。けれど、ど

うやらセルヴィリアの聖王や、リーシャ帝国の王族と面識があるみたいじゃないですか。

「ヴァルーデだけ取り残されては適いませんから、少し、急いでしまつて」

聖王は隆人のことだろう。けれど、

「リーシャ帝国との繋がりなんて、ないよ」

「おや？ ……もしかして、知らされていなかったんですか。それは失礼」

「……何よ」

「カノさんの新しい領民になった人間のゼオンさん。彼は、リーシャ帝国現女帝の弟ですよ」

「はぁーッ!？」

思いつきり混乱を表に出してしまった。

「いやいやいや、でもないだろう。あれで王子様とかなない。確かに姉がいるとは聞いたけれど、あんな王子様なんていたら、世界の乙女の夢がブチ壊されてしまう。」

「ないない。あれで王子様は、ない！ それに現女帝の弟って、明らかにアイツ、日本人じゃないし。実のお姉さんも、この世界の生まれでしょ」

「ああ、正確には王子ではありません。『女帝』の称号は、国民からの称賛であつて、本当の身分は『皇帝妃』ですから。ゼオンさんは、『皇帝妃』の弟ですね」

「ややこしい。つまり、本当の皇帝は日本人のプレイヤーだけど、その奥さんはこの世界の人で、ゼオンの姉ということだ。」

それでも、ゼオンはただの一般市民ではないのだ。リーシャ帝国

に戻らないために、私の領民になったということは、故郷で何かあったのかもしれない。王宮ってドロドロしてそうだからなあ。イメージだけ。

一つ溜息をついて、頭を切り替える。驚きはしたけど、そんなことをしている場合じゃない。

「ミラ……女の子はどうなった」

「先程、カノさんのお仲間が保護したようですよ。外の炎もどうやら収まったようですし。さ、わたしの話も聞いてくれますか？」

再び表情を取り繕って、無言で江田を見上げる。

「カノさん、ヴァルーデに入りませんか？」

「……その国については、悪い噂しか聞いたことないんだけど」

「ひどいですね。実は、そんなに悪いところでもないんですよ？ わたしは5年前にこちらにきて、自分からすぐヴァルーデの領地になったんですけど、正解だっと思っています」

「攻められたわけではないの？」

「ええ。自分でつく国を決めたんです。そのころでは、ヴァルーデが一番好戦的な国だったので、迷わず決めました」

「……好戦的な国って。戦争もあるってこと？ どうしてそんなところ……」

私が目を見張ると、江田は初めて笑顔を崩し、心底驚いたという顔をした。

「ゲームクリアのために、決まっているじゃないですか！」

「はっ？」

「ああ、もしかして、貴方は『マイグレーションオンライン』、やってなかったんですか？ 国産ヴァーチャルシューミレーションゲー

ム」

その話は、隆人に聞いた。ここが、ゲームを元にした世界だ、と。

「知っているはいるけど、やってなかった」

「そうなんですか。わたしは、やってたんですよ。面白くって、ハマってました。仕事から帰ってから、夜中にインするのだけが楽しみで。ともかく、『マイグレーションオンライン』は、よくあるタイプの国盗りゲームなんですよ」

国盗りゲーム。広大なマップをいくつもの国や勢力に分れて戦い、一つの国や勢力が、マップを全て統一するのが目的とされる。

ヴァーチャルゲーム機は高いので持っていなかったけれど、パソコンのゲームが主流だった時代に、友達に頼まれて一緒にやったことはある。途中で飽きて止めてしまったけれど。

「ゲームクリアって……世界、統一……？」

「もちろんです！ わたしがヴァルデー王国についてから、いくつもの地域を征服しました。軍の強さについては、ヴァルデーがどこより飛びぬけています」

笑う江田に、何故か抑えきれない怒りが湧きあがった。お腹が熱い。

「ゲームだったらそれもいい。けど、ここはゲームじゃない！ ゲームを元にした異世界、そう聞いたよ。領民だって、ゲームの駒じゃない。ちゃんと生きてるって、知ってるはず！ 戦争って何よ、アンタのゲーム感覚のために、人を殺すの！」

「……確かに、ゲームでは、ありませんね。ゲームでは、領民はただのNPCだった。こんなに生き生きしてませんでした」

「だったら!」

「でも、ゲームをクリアしないと。そうじゃないと、わたしたちは帰れません」

「帰る……?」

「ええ。元の世界に」

一瞬、沈黙が降りた。

この部屋は、外の音を遮断するのだろうか。二人で黙ると、物音一つしない。

一度深呼吸をして、熱くなった気持ちを静める。

怒りと共に込み上げる疑問を、整理した。

「ここはゲームじゃなくて、半ば異世界よね。世界統一した後、元の世界に帰れるってどうしてわかるの」

「勇者は魔王を倒したら、元の世界に帰るでしょう?」

帰れずに魔王と共に死亡とか、結局異世界でハッピーエンドとか、色々なパターンがあると思うのだが。

考えが顔に出ていたのか、江田は私を見て、少しだけ寂しそうに苦笑した。

「……まあ、そうとも限りませんよね。では逆に聞きますけど、ゲームクリアを目指さなかったら、どうなります? 他の国に攻められる、あるいは、平和に小さな領主として暮らす。どちらもありませんけど、帰れる確率は、ゼロです。」

それなら、一番望みのありそうな、ゲームクリアに掛けたい。何もしないよりは、帰れる確率は、高いはず。何もしいまま、諦めたくない」

その言葉だけを聞くなら、潔い、合理的な考え方だと思える。彼の言うことは、別に間違つてはいない。

江田はさらに言葉を重ねた。

「わたしは、どうしても、帰らなくちゃいけないんです。せめて、帰る努力をしなくては」

「向こうの世界に、なにか大事なものであつたの？」

聞くと、江田は初めて、本当に嬉しそうな笑顔を見せた。

「新婚だつたんですけど、今度、子供が生まれるんです」
「……」

元の世界だつたならば、この言葉に、おめでとつございませうと言えたのに。

「カノさんも、帰りたいでしょう？ だったら、軍に関してはこよりも強いヴァルデーにいる方が、圧倒的に有利です。ヴァルデーは、確かに獣人蔑視の国ですが、さすがに同郷のプレイヤーに対しては、下手な扱いはしません。むしろ自分から傘下に下れば、恩恵があります。」

みんなで、一緒に現実に帰りましょう！」

熱くなる江田とは、逆に、私はどんどん自分が冷静になつていくのを感じた。いや、冷静ではないかもしれない。ただ、気持ちが凍りついていく。

「私は、帰りたいと思つたことは、一度もないよ」

握りこぶしを作って演説でもしそうな勢いだった江田は、ぴたり

と動きを止めた。

私は、手を使わずに、なんとか足だけで立ち上がった。背筋を伸ばして、江田と同じ目線になる。

「だから、ヴァルデーには入らない。戦争に巻き込まれたり、獣人をひどく扱う国に行く理由はない」

「……では、お誘いはここまで、ですね。残念です。それでは」

江田の目が、冷える。

「それでは、脅します。ヴァルデーに下らないならば、1v20になったのと同時に、あなたの領地を攻めさせていただきます」

「！」

「この部屋、女神の祭壇は、プレイヤーしか入れません。同盟を組んだり、領地が集まって国を作ったり、傘下に入ったり 降伏をしたりするときは、この部屋で行うというのがルールだからなんです」

「……ここで、いますぐ傘下に下れって？」

「はい。戦争は1v20からしかできませんが、下るのは、いつでもできるんですよ。もちろん、世界一の強さを誇るわたしたちの国が、出来たてのカノさんの領地に負けることはありません。犠牲を少なくするなら、今ですよ」

ヴァルデーに下る気は全くない。ありえない。

けれど、1v20で攻められたら、確かに太刀打ちできない。すでに私は1v9だし、あと少しレベルが上がったくらいでは、領地は村から町レベルになった程度だろう。一国に勝てるわけがない。

「……アズサ領みたいになら、1v20にせず、隠れて暮らすことはできる」

考えて、でてきたのはそんな言葉だった。

江田は肩をすくめて、無理ですと即答してくれた。

「アズサ領は、森の奥に隠れていたから、そうできたんです。この辺りでは数少ない獣人の領主を求めて、多くの獣人が領民になりたがるはず。」

人口はすぐに増えますし、建物もそれに伴い増える。さらに食料や商業を発展させなければ、領地は維持できない。維持しようとしているうちに、1v20なんてすぐ来てしまいますよ」

「……それなら、別の国に行くって方法もあるわ。貴方の言い分は、脅しになんてならない」

具体的にどこの国に行くかなんて分らないし、そもそもどんな国があるのかも知らないけれど。

言いながら、実際にそれもありませんと考えた。

江田は世界統一なんて言うてはいるが、先程、聖セルヴィリア国やリーシャ帝国との繋がりを怖れていた。どの国も簡単に潰せるといっわけではないらしいし。

私が一歩も引かない姿勢を見せると、江田は切り口を変えた。

「そんなに、領地や領民が大事ですか」

「貴方には、現実に向こうの世界だけかもしれないけど、私にはこっちが大事」

「こんな言い方したくないですけど、それほど領民に信頼されてないかもしれませんよ？ もし、信頼されていたなら、どうしてゼオンさんは身分を貴方に明かさないんです。例え、ゼオンさん自身が言わなくても、領民の中には彼の身分を知っている人はいたはず。どうして彼らは貴方に教えないんでしょうね」

「……」

イリエは、リーシャ帝国にゼオンの身分を問い合わせたはず。

「それに、どうしてわたしが、アズサ領に来れたんだと思います？
どうして聖王との繋がりを知っているんでしょう？」

「情報が、漏れてるとでも？」

「漏れてるんですよ、実際」

畏を仕掛けられるのは、そこに私があると知っていたからだ。火事を起こして、味方を分散させて、上手く私を一人にした。

細かい情報がなければ、確かに無理だろう。

人口は既に、数え切れないほどいる。一人や二人、裏切り者や内通者がいたっておかしくはない。

「確かに、そうだね。でも、数人のそんな人たちに怯えて、他の数百人を見捨てるわけじゃないでしょ。話がこれだけなら、私はもう帰る」
「やれやれ」

江田は、疲れた表情をして、一度目を揉みほぐした。

「それなら、帰すわけにはいきません」

縄で縛られている時点で、薄々そうじゃないかと思っていたけれど、やはりすんなり帰ることはできないようだ。

予想していたので、慌てはしない。

私は一つ大きく息を吸った。

迷わず、足元に青い魔法陣を展開する。

光る陣を見て、江田は笑った。

「わたしには、効かないと言いましたよね」

「誰が、アンタに攻撃するって言ったのよ。もう一度だけ言っとく。私は、ヴァルデーにはつかない。アンタたちが、うちの領地の何を狙ってるか知らないけど、これは変わらないから！」

『フレイア』！」

呪文で小さな炎を生み、躊躇いなく自分にぶつけた。

じゅつと何かが焼ける音がする。熱いなんてものじゃない、痛いなんてものじゃない。許容量を超えた痛みは、ただの電気信号のようで、形容できない辛さだ。けれど、最弱攻撃魔法の炎なんて、一瞬で消える。

全身から汗が吹き出すが、歯を食いしばる。渾身の力で、焦げて弱くなつた縄を引きちぎつた。

「なっ……」

江田が慌てて、扉の前に駆け出し、出口の前に立ちはだかる。

「どいてッ！」

「すごいことする人ですね……でも、無理です。私はLv69ですし、扉の外にも部下がいます」

「扉の向こうには、私の仲間だっているわ！ それと、アンタの目標は好きにすればいい！ 反対する気はないけど、私の領地を巻き込まないでッ」

炎は消えたけれど、腕はまだ痛みを残している。きっと火傷で状態異常がついているのだろう。

素早く薬指の指輪を擦り、戦闘画面を確認する。

案の定火傷になっており、数秒ごとにHPが削れていく。HP最大845が、504まで減っている。

でも、構わない。この世界は、便利なことにあとで治癒魔法さえかけてもらえば、痕も残らないからだ。取りあえず、ここを出てイリ工達と合流できるなら、HPが1になっていたとしても平気だ。

「世界統一なんですから、巻き込まないわけにはいきません」

「なら言わせてもらおうけど！ きっと貴方は……ううん、私達は帰れないよ」

「……何故、そう決めつけるんですか」

江田が、背中から装備していたナイフを手に取り、構えた。ナイフを使う職業は『盗賊』か『狩人』。

「ここへ来た時のこと覚えてないのかな。私は、覚えてる。……あのね、私達って、多分向こうで死んじゃったんだよ」

死んだ人間が、向こうの世界になんて戻れない。向こうの人達にしてあげられることなんて、ない。

これを言うのは、可哀そうかもしれないけれど、

「貴方は、家族には絶対に会えない！ 貴方は家族を置いて、死んだのよ。死人は何もできない！」

彼が帰りたと思うためだけに、私の領民が殺されるわけにはいかない。

けれど、私が引かないのと同じように、江田も揺らがなかった。

「……なら、ゲームをクリアすれば、生き返れると信じます！ カノさんは何なんです！ ゲームをクリアするのが目的じゃないなら、貴方のこの世界で生きる目的はっ、目標は、何なんです！」

江田が右手でナイフを振りかぶった。その腕を払い、軌道を逸らす。

同時に一步踏み込み、申し訳ないが相手の急所を蹴りで狙う。江田はすぐにナイフを切り替え、私の火傷した腕に突き刺した。

「ああああッ」

悲鳴が喉を貫き、のた打ち回りたくなるのを堪えながら、即座にバックステップで距離を取る。HPは4割を切った。

けれど、幸い、ナイフは私の腕にある。江田が別のナイフを装備し直すのと同時に、腕からナイフを引きぬき、構えた。血で、手が滑りそうになる。

ナイフで攻撃しようが、魔法で攻撃しようが、ステータスを均等に振っていた私には関係ないことだ。

相手を倒すのではない。逃げられれば、それでいい。

魔法陣を展開し、

「『フレイア』」

小さな炎を生み、江田のナイフを持つ手にぶつける。そのまま駆け出し、炎を払う江田に真っすぐナイフを投げつけた。

私のDEXが低いからか、江田のAGIが高いからか、すばやく避けられ、ナイフは高い音を響かせて、床に落ちた。

けれど、江田は、目論見通り避ける動作で扉の前からどいたのだ。駆け抜け、ナイフを拾い様に再び江田に投げつけながら、扉を開けようと手を伸ばす。

しかし、その手を後ろから江田が投げたナイフが貫いた。

もはや、悲鳴も出ず、その場に体が崩れ落ちる。

固い床に体をぶつけ、投げ出された手に嵌る指輪の画面は、HPが2割を切ったことを告げていた。出血がさらにHPバーを短くしていく。

「無駄と言ったはずですが」

「わ、たし……も、言っ、て……世界統、一なんて、ッ、無駄！」

起き上がれないまま、目の前に立ち見下ろしてく江田を、首だけ持ち上げて睨み返す。

江田の冷たい目を見て、殺されるかもしれないと思った。彼は、きつといままでたくさん……帰るために、そうしてきたのだろうとも思った。

帰れたところで、その腕で子供を抱けるのか。

這うようにして、扉に向かおうとする私に、江田がナイフを振り上げた。

扉に、手が届いたけれど、開ける力は、もう入らない。

真っ白な扉に、私の手形の血の痕が付くだけだった。

「あい、て、」

振り下ろされるナイフを目の端で捉えながら、瞳を閉じた。

私の願いに応じるかのように、扉が開いて、眩しい光が差し込んだように思えたのは、最後の幻だったのかもしれない。

14話（後書き）

長くなりました。途中で切れるところがありません。

江田さんは、きっとエリートだと思います。真面目に勉強して、真面目に働いて、ちょっとゲームはするけど、実直に生きて、家族大切にしていたのに、異世界に飛ばされて、可哀想な人です。

主人公もやたら可哀想なことになっています。

ここまで戦闘を入れるつもりはなかったんですが、やたら抵抗するのでこんなことに。負けず嫌いなあ……。

長いので誤字脱字が多発しているかもしれません。見つけたらご報告していただけると、嬉しいです！

15話

重い何かと何かがぶつかり、カッンと武器が落ちる音がした。

「！」「」

誰かの声を聞いた。

ふつと体が軽くなって、押し掛かっていた痛みやだるさが引いていくのを感じる。ひどく暖かい。

落ちかけていた瞼を持ち上げると、体を支えられていることに気付いた。

「……どこからドーやって登場したの、安田くん」

「扉から普通に入っただけだ」

ぼやけた視界に、いつもの水鏡と同じ、覗きこむような姿勢の隆人が映った。タイミングが良すぎて、なんだか泣きたくなくなってくる。

隆人はどこかが痛むような顔で、私の頭をわしゃわしゃ撫でた。助けに来てくれて、怪我をしたのだろうか。

「……痛いのか？ 怪我したのか？」

「いや。俺はなんともない……」

隆人をよく観察したけれど、言う通りどこにも怪我はないように安心した。

自分の怪我也確認したけれど、服にたくさん血が付いている以外、どこにも怪我の痕跡はなかった。HPを確認すると、最大まで回復し、さらに状態異常も消えていた。隆人のかけた魔法だろう。

お礼を言いつつ立ち上がる。意識を失っていたのは一瞬のようだ。

江田は、既に構えを解いていた。

「僧侶の衣……貴方は、もしかして」

飾り気が少なく、丈の長い青服を着た隆人を江田は驚いたように見つめている。けれど、隆人は黙ってちらりと一瞥しただけだった。

「行くぞ」

そう言って、私の背中を扉に向けて押す。

江田のことが少し気になったけれど、私に言えることは何も無い気がして、押されるままに祭壇を出た。

屋敷の中の炎は既に収まり、ところどころ煤けてはいるものの、それほどひどく燃えたわけではないようだった。江田が上手く炎を調節したと言っていたとおり。

扉の外には誰もいない。部下がいると言われていたが、隆人がなにかしたのだろうか。

きよるきよると辺りを見回していると、私の後から出てきた隆人が、瓦礫を使ってなにやらがちゃがちゃと扉を固定していた。

「安田くん、それって……」

「これで出られんだろう。手下どもは気絶させて眠り薬をかけておいたから、1日は寝続ける。そいつらが起きて助けに来るまで、閉じ込めておく。ちょっとした仕返しだ」

観音開きの扉に、長いつかえ棒のようなものを置いている。

仕返しというより、お仕置きかイタズラだよなあ……。

「外に宮井の領民がいる」

促されるままに屋敷を進み、出口へ向かう。煤けた廊下に2人分の足音が響いた。

「どうして安田くんがここに！ イリ工達が呼んだの？」

「外にいる人達ではない。そろそろ様子を見に行こうかと思ってい
たら、水鏡で狸耳の女性に呼ばれた」

「バルバラさんが……？」

アズサ領に向かうことは伝えてあるけれど、携帯電話がない世界だ。なぜピンチになったことが伝わったのだろう。

「ああ。なんでも、宮井の保護した子供が、アズサ領に行くのは罠
だと言っただらしくてな」

最初から罠だったのか。子供を使ってアズサ領に向かわせ、仲間
と切り離し、捕えた。私自身がアズサ領に向かうことも想定済みだ
ったなら、よほどよく知る人物から情報が漏れているのかもしれない。
い。

「なんでクルトは、教えてくれたんだろ」

「兄弟を人質に取られ、宮井達を罠にはめる様に指示されていたら
しい。が、どうも子供はその裏をかこうとしたようだ」

私が正直にクルトの弟妹を迎えにアズサ領へ向かうと言っていたら、
クルトはその時点で罠について教えようとしていたのだ。しかし
黙って出かけたため、クルトは情報を伝えられなかった。

多分任せておいたバルバラが、弟妹を心配するクルトにそれとな
く迎えに行ったことを告げたのだろう。そこで、クルトは慌ててバ
ルバラに全てを話した、といったところか。

大人ぶって、説教しておいてコレだ。クルトに偉そうに言えたも

のではないと頂垂れた。

「でも、うちの戦闘員をアズサ領に来させずに、なんで安井くんを？」

「わざわざ滅んだ領地に呼ぶなど、裏があるとしたか思えんからな。魔法で飛んで来れるほど、レベルの高いものもいなかったようだし」
「来てくれて、ありがとう。本当に嬉しかった」

外へ出る前に、改めてお礼を言うておく。一国の王がそんなに簡単に動けるとは思わない。それなのに、友情を優先して駆けつけてくれた。どれほどほっとしたことか。

けれど隆人は、大したことではないと呟くだけで、振り向かずに屋敷を出てしまった。

うーん。何かちょっと不機嫌だろうか。それとも、普段からこれくらいだろうか。

中学のところとはすっかり喋り方も雰囲気も変わっているので、イマイチ掴めない。

唸りながら、私も外へ出た。

外は既に夕刻。

よく晴れていたけれど、地面は濡れていた。きっとゼオンが起こした雨だろう。

屋敷自体は外観も損なわれていなかったけれど、アズサ領の家々は、かなり激しく燃えたらしい。ところどころ黒くなって倒壊していた。寂しい風景に、西日が射している。

森への延焼は避けられた。というより、そもそも江田なら森を燃やす気はなかったと思う。

「カノ様！」

「おい、生きてつか!？」
「貴様、不謹慎なことを言っなっ」

夕日に目を細めていると、イリエとゼオンとデイサ、そしてデイサと手を繋いでいる2人の幼い子供が駆け寄ってきた。

「心配かけちゃって、ごめん」

イリエが、私の服の様子を見て息を飲んだ。つられて私も見下ろすと、血でところどころ赤黒くなっている上に、焦げたりしている。

「あー……大丈夫、もう治してもらったから」

「どいつです、こんなことしたのは!」

「ヴァルデーの、コーダ領ってところの人だよ」

「領主ですかっ」

「……えーと」

具体的に教えてくれたら斬りに行く。そんな勢いで問い詰めるイリエに、もう一度大丈夫だからと言って、視線を子供たちへ移した。

「ミラと、君がソソだよな? よろしく」

笑いかけると、二人とも恥ずかしそうに身じろぎしながら、デイサの後ろに隠れてしまった。イリエがもう一人もちゃんと見つけてくれたらしい。怪我はなく、元気そうで安心する。デイサもアズサ領が燃えた時の混乱は収まっている。

6歳と4歳の子供たち。誘き寄せるのには、子供を使った。それなのに子供を使って、傘下に下るよう脅すことはなかった。そうさなれていたら、とても困ったのに。子供たちを最後まで利用することはなかった。

その理由を思い当ってしまいそうで、子供たちから目を逸らした。考えすぎ、だろうか。

そうこうしているうちに、イリエは追及を諦めて、隆人に礼を述べていた。隣に立つゼオンも隆人を見ていたが、何故か少し気まずそうな顔をしている。普段はぺらぺら軽口を叩くのに、大人しい。

「ご助力感謝致します。私たちでは、どうすることもできませんでした」

「いや、構わない。それより、もう日が暮れるぞ」

「はい。カノ様、みんな、急いで帰りましょう」

馬のところまで戻らなくてはならない。

イリエが先頭に立ち、デイサがミラを抱え上げ、片手をソソと手を繋いで歩き出す。

そこで、はたと思い出した。馬を二頭しか連れてきていないのだ。

「ありや、帰りの人数増えるの忘れてた……」

隆人は瞬間移動の魔法があるのでいいとしても、2人子供が増えるのだから、馬が足りない。誰か気付くべきだった。

「うーん。デイサは一人で馬には乗れないだよね。」

一頭はデイサがミラを抱いて前に乗って、後ろをイリエ。もう一頭はソソを前に乗せて後ろにゼオン、でいいかな。安田くんは魔法で帰ることになっちゃうけどいい？」

「カノ様……ご自身も数に入れてください」

「あ、そっか。じゃあ歩くね」

「無理です！ さらっと言わないでください。夜になると魔物が増えますし、そもそもそんなお身体で」

「怪我は治ってるって」

「いいえ。戦闘で負った怪我ならば治癒魔法で治せますが、疲れは治せません」

隆人がイリエを見て一つ頷き、

「よし、なら俺が宮井を送ろう。本当は何人が送れるが、子供や馬はさすがに無理だから、すまないな」

胸ポケットから一枚、純白の鳥の羽を取り出した。細長くスラリとしたそれを、隆人はポイツと空へ放り投げた。

ふわりと舞った羽に見蕩れた瞬間、どこから火が点いたのか、羽は空中で音もなく燃え上った。もったいない。手を伸ばしたけれど、届く前に燃え尽きて、灰になってしまった。

何をしたいのかわらず、首を傾げていると、地面に影が差した。日が沈んでしまったかと思い、空を見上げると、

「魔物！　じゃ、なくて、鳥……？　巨大鳥!？」

2階建の屋敷の軽く2倍はある鷲に似た鳥が、優雅に舞い降りてきた。赤く鋭い瞳を光らせ、辺りの瓦礫を翼の勢いで吹き飛ばしながら、着陸する。のっしのしと近づいてきて、隆人に擦り寄った。

巨大鳥の背中には、なにやら鞍のようなものが乗せてあった。

嫌な予感がする。鳥は、飛ぶよね。うん、飛ぶ。でも乗り物ではないはず……。

隆人は巨大鳥を軽く撫でて、私を振り返った。

「さあ、帰るぞ」

馬に乗りたいです。ぜひとも。

今日はよく悲鳴を上げる日だった。

けれど、その中で最大級の悲鳴を上げたのは、シームルグと呼ばれる巨大鳥に乗って、大空へ飛び立った瞬間だった。

「だああああ、だから嫌だってばッ、無理無理降ろして降ろして、絶叫系ホントに乗れないんだってばああ！」

羽を筆るほど強く鳥にしがみつく。後ろで支える隆人は、あやす様にばんばん背中を叩いてくれた。

「飛んでる感じがするのは、飛ぶ瞬間と降りる瞬間だけだ。シームルグもちゃんと気を配ってくれるから、落ちはしない」

「落ちる落ちないの問題でもないんだけど……。あ、でも確かにもう平気かも……」

涙目になったものの、勢いよく揺れたのは最初だけだった。安定したのか夕焼けの中に浮かんだ今は、叫ぶほど怖くは無い。高いところ自体は平気なので、下を見下ろす余裕もできた。

しがみついていた体を恐る恐る起こすと、少し強めの風が髪をさらった。

「おお……綺麗」

月並みな言葉しかでなかった。けれど、心からの言葉だった。真下には、夕日に染まる三日月型の湖。上から見たことは無かったけれど、本当に不思議な形だ。

「安田くんは、すごいペット持ってるね」

「ペットの範疇に入るのか……？ 一口に魔物といっても、比較的穏やかで飼い慣らしやすい種類のものがある。腕の良い『狩人』ならば、捕えて調教できるらしいな」

「えっ、じゃあこれ捕まえた人がいるの！？」

「ああ、知り合いの『狩人』に建国記念に貰ったものだ。とはいえ一人のときは大抵魔法で移動してしまうから、あまりコイツで移動することはないが」

「はー。スケールが違うなあ……」

感心しながら、伸びあがって景色を見ようとすると、隆人に頭をチヨップされた。

「もう少し慎重になれ」

「う、それは今回のことも含めてマスカ。もしかして怒ってマスカ」
「当たり前だっ！」

一喝いただきました。やっぱり怒ってましたか。

心の中でさえ敬語を使ってしまう。

「子供を迎えに行くのはいいが、何故自分で動くんだ！ トップは動くな！ 信頼できる奴を作って、任せろ！」

「はい……」

「例え宮井一人で解決できたとしても、何でもそうしてしまっただけ、組織力は上がらん！ 確かに、自分で動いた方が、早いこともある！ だが、上に立つものは、手を出さずに我慢することも必要な

だぞ！ それに、あれほど一人での戦闘は避けると言ったのに！」

「返す言葉もございません」

「いいか、他のことに口を出す気はないが、戦闘は本当に避けてくれ」

「……はい」

これまでに2回戦闘に出て、2回ともかなりのピンチだったことは言わないでおく。

優雅な空の旅なのに、すっかり説教タイムだ。

けれど、それほど心配してくれたのかもしれない。そう思うと、なんだかくすぐつたい。ありがとう、ともう一度心の中でお礼を言う。

口や顔には出さなかったけれど、尻尾はご機嫌でゆらゆらと揺らしてしまった。

隆人の視線が痛い。

「まあ……無事で良かった。それで、江田とは何があったんだ」

「あれ、江田さんのこと知ってるの？」

何も言わなかったから、知らないのかと思っていた。

「名前だけだがな。国王は飾りもので、実際は江田がかなりの実権を握っていると聞いたことがある」

「うわーやつぱりすごい人なんだ。江田さんと少し話して、ヴァルデーに来ないかってお誘いがあったけど、断っただけ」

「……。……そうか」

めっちゃ疑ってますよこの人。断って交渉決裂して、無理矢理突破しようとしてずたずたになったのは内緒にしておこう。怒られそ……いや、余計な心配をかけるから。

ちらりと横目でアズサ領のあたりを振り返る。森に隠れてもう見えなけれど。

「安田くんは……安田くんの目的ってなに？」

「目的？」

「うん。この世界で、何がしたいのになって。江田さんはね、ゲームクリアしたいんだって。そうすれば家族のところへ帰れるかもしれないから」

「宮井は、どうなんだ？　ここへ来たばかりではあるが……」

日が地平線に沈み始め、少し風が冷たくなってきた。それと同時に、私の領地も近付いてくる。

「私の目的は、向こうじゃできなかったことをすることって思ってた。ここなら、それができるかなってそう思って頑張ってみたけど、なんか江田さん見てたら、自分が情けなくなっちゃった。」

江田さんのやり方を獣人領主の私は認めるわけにはいかないけどさ……」

「けど？」

「江田さんは、本当に自分のしたいことを貫いているっていうか……。おかしいな、私もそうしてるつもりだったのに、よくよく考えてみたら、違ったの。」

領民のために頑張ろうって思ってたけど、本当は、本当の本当は、頑張りがかったのはあの人のためだったのに。

それが無理だから誤魔化して、領民に置き換えてただけなんだ、きつと」

「……よく、分らん」

「うん。私も自分で何言ってるのか、イマイチわかんないや……」

領地に灯りが点っているのが上空から見える。辺りが薄暗くなるにつれて、ぼつぼつと暖かい光が浮かんでくる。

「だが、経緯や理由はどうあれ、領民のために頑張ることは、何も問題ないだろう？」

「……そうだね。ただの、気持ちの問題。ありがと。」

安田くんは　　どうわあああッ」

領地の手前まで着いて、シームルグが下降を始めた。慌てて体を伏せて、揺れと浮遊感に耐える。これが無ければ、空の旅もいいものなのに。

「俺は、ただ」

私が一生懸命しがみついていると、ぽつりと後ろから眩きが聞えた。

「俺は、ただ生きたいだけだ」

何か返事をしようとしたけれど、歯を食いしばって目を固く閉じ、地面に着くのをひたすら待つ内に、何と言いたかったのか忘れてしまった。言葉も感傷も、下降の勢いで吹き飛んでしまった。ああ、グロッキー。

嘆いているうちに、目の前に小さな私の領地が広がった。

15話（後書き）

乗り物に悩みました。魔法の絨毯やドラゴン、ロック鳥やグリフィン、天馬…とか。いや魔法の絨毯は持ち歩かないだろうとか、ドラゴンじゃつまらないとか、ロック鳥はでかすぎるとか、天馬じゃ思わず主人公が笑ってしまうとか……。

悩んだ末に、マニアックな霊鳥になりました。

せつかくいいとこどりで久々に登場したのに、保護者から脱せない隆人。残念すぎます。もうちょい頑張れ。

2章もあと1話で終わりです。ここまで読んでいただけで、とてもうれしく思っております！

追記：またもや変な文字が冒頭に入っていました。すみません…

16話

シームルグで領地に乗り込むのは目立ちすぎるので、領地の手前、草木が生い茂り視界が阻まれるところに降りた。

隆人は、シームルグを撫でて労い、短めの羽を一本そつと抜き取った。羽を燃やすことで呼べる鳥なので、抜くのを忘れると困るのだという。

シームルグは、隆人を赤い瞳でじっと見つめた後、音を立てずに飛び去って行った。

領地の境界を表すのは、青く光るラインだけであり、柵も外壁もない。境界内に魔物はいれないので、魔物用に柵は必要ないかもしれないが、人や獣対策には必要だろう。レベルが上がればそのうち作れるようになるはずだ。

境界の少し向こうに、家々が並んでいる。元々与えられている領地が広いので、まだ建物が少なく、端の方は空き地ばかりだ。

その青いラインをくぐろうとしたところで、隆人に止められた。

「待て。その格好で入るべきじゃない。大騒ぎになるぞ」

「あ、あー……確かに」

イリ工達の反応を思い出す。領民全員が私の顔を覚えているわけではないだろうが、それなりに知られているはず。外出していた領主がボロボロになって帰って来た上に、もし原因が人間のせいだと知られたら……パニックになるかもしれない。

少なくとも、人間に対する悪感情は暴発しそうだ。

着替えを取ってきてもらいたいが、隆人に頼むわけにもいかない。王様の上に、人間だから。

「仕方ない、イリ工達が来るまで、あそこの木の下で待つよ」

ほどよく隠れられそうだ。根元に腰を降ろし、幹にもたれる。

空を飛んできたため、馬に比べるとかなり時間が短縮できている。イリ工達が到着するまで、しばらくかかるだろう。

「そうか。なら俺もそれまで付き添おう」

「王様って忙しいと思うけど……大丈夫？」

数日領主として働くだけでもてんでこ舞いだったので、王様ともなると想像がつかないほどの多忙さのはず。

魔物が出たところで、この距離ならばすぐに領地に逃げ込めるから、私の安全は問題ない。

既に夜になるうとしているし、さすがに隆人を引きとめておくのは、気が引けた。

「1日くらい休んだところで傾くわけでもない。火急の案件もないしな」

「なら、いいんだけど。あ、そうだ。ちょうど安田くんに聞きたいことがあったんだ」

幸い時間はたっぷりある。この辺りで、ずっと疑問に思っていたことを整理しておきたかった。

「なんだ？」

「あのさ、このゲームって、具体的にはどんなのだった？」

「……どういう意味だ？」

「えーと、いつ発売で、どのくらい人気あったかなとか。何人くらい遊んでたのかなとか、ゲームクリアってされてたのかな、とか…

…」

ゲームのことについて詳しく分れば、あるいは、トリップの理由や、トリップした人物などの共通点が見つかるのではないか。

もちろん、隆人がそれについて知っていれば、既に考えているかもしれない。けれど、自分でも考えてみたい。せめて、知っておきたいと思う。自分が置かれた、巻き込まれた状況くらい、正確に。

これまで、それを隆人が教えてくれなかったのは、初心者で覚えることの多い私を混乱させないためだろう。

隆人は一つ頷いて、長くなると前置きして語り始めた。

「この『マイグレーションオンライン』が作られたのは、12年前だ。実は、初期の物はパソコン用で、それを5年前にヴァーチャルゲームでリメイクしたらしい。」

ヴァーチャルゲームというものが登場したのは、8年前。ヴァーチャルゲームは、発売されてすぐ大人気を博したが、社会問題に発展してしまった」

「え、社会問題なんて知らないけど」

さらに、ヴァーチャルゲームが流行り出したのは、自分が中学生の頃だったはず。

「俺達はまだ幼かったからな。」

ヴァーチャルゲームは、頭に特殊なヘルメット型のマシンを装着して遊ぶものだ。脳の5感を、体からゲームに切り替えて、違う世界にいるかのように遊ぶことができる。とはいっても、グラフィックの限界があるから、まるで現実のよう、とはいかなかったが。

そして、このシステムには弱点があった」

「ログアウト不可能になっちゃった！……みたいな漫画は読んだこ

とあるけど」

「さすがにそれはファンタジーだ。

機械自体に問題はなかった。問題なのは、プレイヤー達だ。

ヴァーチャルゲーム機ができると同時に発売されたのは、当然ながらゲーム最大の人気を誇るRPGだった。もちろんネットワーク通信可能な、MMORPGというジャンルだな。

数多くの商品が出回り、毎日何万人もの人間が遊ぶようになった。熱中するものは、昼夜を問わずログインしていたらしい」

「で、学校に行かなくなったり、会社に行かなくなったり？」

「それらの問題は、ヴァーチャルゲームが出る前からあったらしいぞ。

ヴァーチャルゲームだけの問題は、プレイヤーが長時間続けて遊びすぎて、身体の限界を超えていることに気付かないことだ。

5感の全てをゲーム内に切り替えているからな。現実世界で、身体が疲れても、眠くなっても、空腹になっても、異常が起きても……ゲーム内のプレイヤー達は、全く気が付かない。

そのために、病気になったり……最悪の場合、死に至る事件が多発した」

「なんか……想像以上に重い話だね」

「企業も苦心した。ゲーム内の時計表示を大きくし数時間ごとに警告をするようにしたり、数時間で強制ログアウトするシステムにしたり。

それらによって多少は被害も減ったが、警告程度では無視するものは大勢いる。強制ログアウトなんてシステムでは、ゲームが立ちゆかず、人气が去り潰れてしまう。

結局被害を完全に無くすことはできずに、ヴァーチャルゲームは

「靡れていった」

「……バッドエンドじゃん……」

夕日が沈み、暗闇に包まれた木の下で、夜風にぶるりと身震いした。

「だが、企業もせつかくの新発明を諦めるわけにもいかなかった。よって、視点を変えたんだ。RPGでなければ、と」

「お、それはもしかして……」

「そうだ。この『マイグレーションオンライン』が、俺達が中学のころにヴァーチャルゲームで登場した。

領地経営、国盗りシミュレーションならば、常時接続してもあまり意味が無い。建築物を指定して、数時間放置、数時間後に戻ってきてみれば、建築物が完成し、人口が増えている。

戦争なども、相手を指定し、戦闘方法や使うメンバー、技を選んでもおけば、自動戦闘だ。数時間後に、結果と戦利品などが反映される。

という感じでな、時間を置いて遊ぶのが基本になった。

同時に作れる建築物も多くないため、一回のプレイ時間は格段に短くなった。社会人や忙しい人も気軽にでき、なおかつ健康を損ないにくい。

そして、自分の領地にどんどん建物が立っていくのを体感できるのが人気だった。

ヴァーチャルゲームというジャンルを、新しいシミュレーションとして上手く再生させたというのが正しい」

「それで、私知ってるブームは、中学のころだったわけか。はい……考えるもんだねえ」

アイデア勝ちというやつだ。

一方で、RPGとしてのヴァーチャルゲームは、視覚のみをゲーム世界に繋げるという方法で、なんとか生き残ったと隆人は言う。しかし結局は、5感全てでどっぷりとゲームに浸れるシミュレーションの方が人気を保ったらしい。

「『マイグレーションオンライン』は、何万本も売れ、一大ブームとなったから、プレイ人口は数え切れないほどいるはずだ。クリアは……俺が生きていたときは、まだされたことがなかったはずだ。マップも大きかったからな」

「そっか……。あー、私も若い頃にゲームやっとくべきだったかな」
そうすれば、戦略や経営をもっと上手くできていたのかもしれない。今更言っても遅いが。

私の意見に、隆人はじろりと半眼になった。

「……反省点が違う気がするが」

無茶な戦闘については、反省してます、はい。

しかし、あまり有益な情報は得られなかった。やはり、ゲーム世界へのトリップは、向こうのゲーム事情とは関係がないものらしい。少しでも取っ掛かりがあれば、帰りたい人は帰れるきっかけが見つかるかも、と思っけれど、そうそう上手くいかないか。

気を取り直して、もう一つ質問。

「ネタキャラが生まれるような設定のゲームって、文句言われなかったの？」

隆人は一瞬黙りこみ、憐れむような視線を向けてくれた。

「『マイグレーションオンライン』の欠点として、よく上げられるものは、『全く役に立たないランダムシステム』と『種族職業による使いやすさの違い』だった……」

欠点まで異世界トリップしなくてもいいのに。

私がつくり頂垂れると、遠くから馬の蹄の音が届いた。

「またな」

「うん。いつも色々ありがとう」

イリエ達が現れ、着替えを頼んでいるうちに、隆人は自分の国へ帰った。魔法陣を出して、一瞬で帰還。瞬間移動は味気ない別れ方だけれど、相変わらず便利そうだ。

ゼオンやデイサ、子供達を先に領地へ帰し、イリエだけが着替えを持って戻ってきた。

差し出してくれた新しい服は、長袖Tシャツのような薄いインナーと、スカート。その上に、ポンチョ型の上着を羽織るタイプ。

受け取って、木々の深いところに隠れ、手早く着替える。

袖を通しながら、お礼を言う。

「わざわざ、ありがとう。でもこれ、どうしたの？ 新しい服だよ

ね。高くなかった……？」

カツカツとは言わないまでも、余裕のある経営状態ではないので、思わず金銭の動きには敏感になってしまった。

「服屋を始めたサーナからの贈り物なので、大丈夫です。元々お針子だったので、自分で店を持つのが夢だったと、そのお礼だとはしゃいでいました」

「そうなんだ！ うわー、嬉しいな。後でお礼言っておく！」

私が標準的な体つきというのもあり、サイズはぴったりで、着心地も良かった。

無茶な戦闘して破らないように気をつけよう。どうしても戦闘するときは着替えようと決めた。

すっかり夜になってしまった領地へ戻り、屋敷へ辿り着くと、待ちかまえていたバルバラとクルトが飛び出してきた。バルバラに至っては、そのまま突進。ではなく、私を抱きしめてくれた。

「ああ、良かった！ 罨だと聞かされたときや、ひやひやしたよ！」

「大丈夫、大丈夫。怪我もないよ」

治したのはノーカウント。クルトが責任を感じすぎても困るからだ。

クルトは、私が無事であることを確かめると、ぐっと唇を噛みしめ、涙ぐんだ。

何度か、口を開けたり閉じたりして、言いたいことが言いだせないような表情をしている。

私は、バルバラに解放してもらおうと、クルトの前に屈みこんだ。

「まったく。やってくれたねー」

「……」

「もう、泣いたって許さないから」

手を伸ばして、クルトの額にそっとかざし、

「秘儀、高音質デコピンッ！！！」

「いだっ」

ぱかんと小気味良い音を立てて、指で弾いた。

高校時代友人と共同開発した、従来のデコピンを超え、良い音を立てる秘儀のデコピンである。やり方は企業秘密だ。

音の響きを重視している技なので、威力はほとんどないが、クルトは驚いて額を抑えた。

「子供で対処できないことは、大人に言うこと。一人で溜めこまないこと。オツケー？」

一瞬茫然としたクルトは、我に帰るとライオン耳を震わせ、悔しそうに顔を真っ赤にした。

「う、うるさいっ！ だいたい、お前だって正直におれに教ええないから！ おれには、あいつらの裏をかく、すんげー策があったつてのによ！ お、お前が台無しにしたんだからなっ」

「はいはい。それで、結局何があったのか、教えてくれる？」

「……おれの家族は、アズサ様が亡くなった後で、アズサ様が紹介してくれた別の領地の領民になったんだ。」

けど、そこがヴァルーデに襲われて……。逃げるときに、母さんとはぐれたけど、約束してたんだ。アズサ領で落ち合おうって」

説明しながら、その時のことを思い出したのか、クルトの声が震えた。

バルバラが、優しくクルトの背中を撫で、続きを促す。

「道は、覚えてた。ソソとミラを連れて必死で逃げた。ナサとイル……他にも……兄弟はいたけど、あいつらは母さんと逃げて……。アズサ領に着いて、なんとか数週間待ったけど……。来たのは、母さん達じゃなくて、アイツ等ツ、ヴァルデーの人間達だったツ！アイツ等に、ソソとミラが捕まって……。俺はミヤイ領に行つて、そこで騒ぎを起こして領主を誘き出せつて言われた」

きつと最初逃げた時から、後をつけられていたのだろう。

「でも、人間の言うことなんて、信じられなかった。領主を連れて行ったところでソソとミラが、助かるかもわかんない。

先に罠だつて教えたなら、領主は来てくれないかもしれないから、飢えた子供をどうするのか、その様子を見てから、全部話すつもりだつたんだ！

だから……ッ、おれは、騙す気なんて、全然なかったツ！」

「うん」

「だから、謝らない！ けど、けど……。ソソとミラを……。助けてくれてっ、……。ありがとう！……！」

「……うん」

このお兄ちゃんは、弟妹を守るために、ずっと一人で頑張っていたのだ。小さな頭で、考えて考えて、苦しんだに違いない。

罠だつたとしても、私はアズサ領に行けて良かった。子供が助けられて、良かった。

ソソとミラはバルバラの孤児院で引き取ることになり、クルトも盗みの罰の労働一カ月の後、孤児院で暮らすことになった。

親を探してあげたい気もするが、アズサ領に戻すのは危険すぎる。もう少し時が経って、落ち着いたら、大人と相談してクルトが決めよう。

さすがに疲れたので、食事は摂らず、すぐに部屋へ帰って眠ることにした。

なんだか長い一日だった。柔らかい布団に体を横たえると、レベルが干してくれたのか、香ばしいお日様の匂いがする。

目を閉じて、今日の出来事を思い出しているうちに、ようやく安らかな眠りが訪れた。

人口や仕事、レベルの問題に、食料の問題。これからの発展方向や、Lv20になる時のこと。

ただ必要なものを建て、食料などをその場その場で対処してれば良い時期が終わったのを感じる。

ここから明確な方針を立てて行かなければならないのだ。

それが、領主である私の仕事。

16話（後書き）

2章終了です。ここまでお付き合い頂き、本当にありがとうございました。

出来事に対して、後手後手で処理していくのは必要ですが、それだけでは今後やっていけません。どうしたいか、どうするべきかを考えていくのが第3章になりそうです。

s i d e ? R y u t o (前書き)

隆人視点のサイドストーリーです。
あんまり異世界してません。

Side? Ryuto

花が咲き乱れ、地面は花卉の絨毯で覆われていた。ガーデング
好きの侍従が、俺の自室の横に作ってくれた小さな庭園だ。

建国し王となってから半年、昼下がりの休憩では、書類仕事に疲
れた目をここで休めるのが日課になっていた。

花の良く見える場所に置かれたテーブルにっこうとして、俺はぴ
たりと足を止め、踵を返した。

景色を眺めて微笑む、見知らぬ女性がいたからだ。

「どういうことだ……」

「見ての通りです。陛下のお話相手にとお思いまして」

執務室へ戻り、領主時代からの側近に問い詰めると、含みのある
笑みを返された。

「陛下、この前水鏡使った時、また上手くしゃべれなかったと落ち
込んでいたじゃないですか。俺が思うに、女性慣れしなさすぎなん
ですよ。まずは普通に女性の知り合いをつくることからですね」
「落ち込んでない」

「えー。俺の目にはそう映りましたけど。ま、ともかくせつかく用
意したお相手なんですから、少しくらいはお話してきてください。

ソレニク神官長のお嬢さんで、陛下好みの凛々しい人です」

「俺の好みを勝手に分析するんじゃない……」

あながち外れていないところに頂垂れた。

もついいと言い捨てて、めげない側近から離れ、執務室を出た。

建国から早半年。王になってからというもの、その手の話題や要求は多々あったが、全て断ってきた。特に理由があったわけではないが、忙しすぎて余裕がないからだ。

しかし側近や臣下も諦める気配がない。確かにいずれは妻帯するかもしれないが、今現在そんな気はさらさらないというのに。

だが、相手を連れてこられたからには、放置するわけにもいかない。

神官というのは、戦闘職ではない聖職者だ。

戦闘には向かないが、女神に仕えて役立ちたいという国民が多かったので、聖セルヴィリア国で新しく作った職業である。

『僧侶』以外の聖職者で、治癒魔法は使えないものの、主に国の祭祀や医療の開発、王城の小神殿、巡礼者などの管理を任せている。特権階級というわけではないが、市民からは人気のある職種だ。

人数も増え続けており、組織としては大きい。そのトップの一人である神官長の娘とは、断り辛いところを衝いてきた。

散らばる花弁を踏み、庭園へ戻ると、こちらの姿を認めた女性が立ちあがり、上品にお辞儀をした。

「お初にお目にかかります。ソレニクが娘、カタリナと申します」

少し幼さの残る顔立ち。18歳ほどだろう。だが、目を奪われたのはそこではなかった。

「獣人なのだな」

「はい、母譲りで御座います」

ふはふはとした白い犬耳と尻尾の娘。ソレニク神官長は、れっきとした人間族だった。

うちの側近は本当に嫌がらせが得意だと感心する。
俺が、誰を思い出すか、分り切ってやがる。
もちろん、数日前にこの世界に飛び込んできた、かつての同級生
のことだ。

中学1年生の頃からずっと同じクラスだった奴がいる。
俺は、その宮井榎乃が大嫌いだった。

「よっし、じゃあガンバロー！ 目指せ優勝、そして担任の奢りッ
ッ！」

高く響く声に続いて、おおーという歓声があがった。

中学2年は中だるみの時期だ。他のクラスは、夏の体育祭ごとき
でここまでの盛り上がりはない。

にもかかわらず、俺のクラスがやる気と熱気に満ち溢れているの
は、扇動した人物がいるからに他ならない。

そいつは、運動ができると有名で、月一回の全校集会では、毎度
毎度スポーツ大会の優勝で壇上に上がっていた。まあ勉強の方は、
毎度毎度赤点で、補習呼び出しメンバーに上がっているらしいが。

性格も明るく前向き、しかし生意気すぎず、周囲との距離をよく
計って動くためか、クラスのリーダー的存在になっていた。

今も、体操服姿で円陣を組み、みんなのやる気を漲らせた。

「まずは、榎乃の100mだよな！ 校内新記録、立ててよ！」

「勝てたらね」

「いつてらっしゃーい！！」

クラスに見送られながら、最初の競技の選手達が移動していく。同じように榎乃は屈託なく笑って、声援に手を振り返し、トラックのスタート位置へと向かって行った。

俺は、テンションの高いクラス仲間を見ながら、静かに椅子へ腰を下ろした。グラウンドには、トラックの外周に沿うようにして、クラスごとの区画分けがされており、そこには運び出した椅子が並べてある。椅子の背もたれには、タオルや、ポンポン、はたまた応援垂れ幕などがぶら下がっていた。

俺は、競技には参加できない。ドクターストップだ。

そもそも運動は苦手なので、特に出たい競技があったわけでもないが、何にも参加せず見ているだけというのは、暇な一日だ。いっそ休みたかったが、そう言えば悲しむ両親のために、楽しみにしているフリを続けた。

間もなく、乾いた銃声でスタートが切られ、ひび割れたアナウンスがグラウンドを賑わせた。ときどき囁むけれど、プロでも教師でもなく放送部なのだから仕方ない。

『女子100m、スタートしました。1組目は1年生、2組目は2年生、3組目は3年生、最後はお楽しみ女子教員100mです。去年の優勝者は、宮井榎乃さん。教員優勝者は、久保田先生です。男子リレーの出場者は入場門に』

1組目ゴールしました。続いて

2組目の榎乃が、スタート位置に立った。クラスの連中は急いで立ち上がり、各々ポンポンやタオルを振りかざす。

数人でせーの息を合わせて、

「榎乃おーっ！ 頑張れえー！」

「宮井、ファイター！！！」

「4組必勝ー！ ファイツ、ファイファイ！」

クラスごとに作った変な応援歌まで歌い出す。最初から、クライマックスのようなテンションだ。

榎乃はちらりとこちらに笑みを向けてから、ゴールを真つすぐ見つめた。その凜とした、しかし静かな表情に、男子よりも女子から人気があることを、俺は密かに知っている。

「位置について。用意」

一つに結わえた長い黒髪が、構えと同時にはらりと揺れた。

銃声が鳴り、校舎に響いて反響する前に、選手達は地面を蹴った。前かがみのスタートから、徐々に上体を引き上げ、勢いよく前に飛び出していく。

榎乃は、スタートダッシュの時点で、圧倒的に差をつけた。その後も、周囲をどんどん引き離し、一人ゴールへ駆け抜けていく。

振り上げられた足の動きは、しなやかで、一步の歩幅が大きい。蹴る動作で飛ぶように前へ進んでいく姿を、黄色い歓声だけが追いかけた。

そして、白いテープを纏い、榎乃がゴールする。

『ゴールしました。1着、2年4組 2着3組ゴールしました。』

3着

俺のクラスである4組は、もちろん、さらにテンションを上げて行った。俺を残して。

いらいらした。作りものっぽい『いかにも』な盛り上がり方も、綺麗な思いつ出のために、こういふときだけ団結したように見せかけるクラスも。

それを、分つてて扇動する人気取りの人間も。とても鼻についた。あいつはさぞかし、体育祭を楽しめることだろう。自分の一番の強みを見せられるところで、わざわざクラスを盛り上げて。自己顕示欲の強いことだ。

太陽が真上に来て、職員テントの影が短くなった時、ようやくお昼休憩になった。

各々弁当を持たずに、家族との待合場所へ飛び出していく。家族が弁当を持ってくるからだ。

体育館や校舎の一階が解放され、日陰を求めてぞろぞろと集まり、弁当箱を広げていく。

「隆人。お弁当持って来たわよ。お父さんが、体育館裏の日陰に場所取りしてるから、行きましょ」

「分つた。てか、後で行くから、わざわざ来んなよ」

「だって逸れちゃうじゃないの」

クラスの区画まで親が迎えに来ることは、小学校では珍しくないものの、さすがに中学では恥ずかしい。

体の弱い俺を気づかってくれるのは嬉しいけれど、過保護っぱく見えるのは勘弁してもらいたい。

「おう、隆！ 飯か。また後でなー」

「あれ、坂田は食わねえの？」

「俺は昼後の競技係なんだ。めんどくせーけど、行ってくるぜ。あと俊みたらテントに来てって言つといてくれ。あの馬鹿、仕事忘れてやる」

「ああ。頑張れよ」

まだ席に残っていた数人と会話を交わしつつ席を立つと、母が少し嬉しそうに目を細めた。

「なんだよ」

「ううん。楽しそうで良かったと思って」

本当はちつとも楽しくないと言いたかったけど、やめた。

母はきつと雰囲気だけでも思い出作りに楽しんでほしいのだろう。ただ見ているだけのものかしさを訴えたら、一緒になって悲しむだろうから言えない。

「あ、飲み物買ってくる。先、行って」

「持ってきてなかった？」

「もう空になった。暑いし」

「そう。水かお茶にしてね。……炭酸とかジュースは駄目よ」

「わかってる」

昼飯の後には薬を飲まなければならないから。

解放されていない校舎の裏、人通りの少ない昇降口の近くに自販機がある。せつかくなら、ここも解放すれば、よく売れるものを。

しかし、人混みから抜け出せて、少しだけほっとしつつ、財布を

取り出したところで足を止めた。

自販機の横に榎乃がいたからだ。

幸い俺には背を向けているので、気付いていない。

そのまま立ち去ろうとしたところで、ガコン！と重い音が響き、榎乃の行動に気付いた。

おにぎりを、自販機横のゴミ箱に投げ捨てている。

「お、お前っ、何してるんだよ！ もったいねえ！」

思わず声に出して、しまったと口を塞いだが、遅い。

榎乃は弾かれたように振り返った。

「あ。えと、ちょっとお腹……空いてなくて。家に帰るころには、たぶん暑さで腐っちゃっ……」

「だ、だからって捨てることはないだろ」

叫んだ手前引き下がれずに、言葉が続けると、榎乃は暗くほほ笑んだ。

「ん。そうだね、ごめん。あ、安田くんご両親来てるんだよね。さつき見てた。おにぎり、まだあるんだけど、いる？」

差し出されたのは、コンビニのおにぎりだった。一番安い、シーチキン。

「自分の家族で食べるよ あ……」

「いないから。どっぞ」

「え、あ、うん……」

榎乃が母子家庭だと聞いたことがある。忙しくて、来てもらえないのだろうか。

地雷を踏んだ気がするのに、顔色一つ変えない榎乃を見て、流石に気まづくなり促されるままに受け取る。

どうすれば良いのか分らず、微妙な沈黙が流れそうになった。

「そつだ、安田くん。ご飯食べた後ヒマ？」

「え、ああ。まあ俺やることねーし……」

「じゃあ、手伝ってくれない？ ちょっとした裏仕事。結構面白いんだよ。力仕事じゃないし、実は職員テントで競技が見れるから、涼しくてお得なんだなーこれが」

にひひと悪戯っぽい笑みを浮かべて、明るい口調で切り出された。ぼかんとした後、そうか競技に出ないなら裏方で楽しめたのかと驚いた。その発想はなかった。

「……やる」

「よし、じゃあ、1時くらいでいいかな。体育館の放送室わかる？」

あそこに集合ー！

「ああ」

返事をする、榎乃は嬉しそうに手を振って、人気のない校舎のほうへ去ろうとした。

「お、おい。お前、これからどーすんだよ。昼食わねえんだろ？」

「んー。体育祭にしか出ないという幽霊でも探しにいこっかな」

「……はあ？」

「知らない？ 西崎中の七不思議の一つ！」

「えー……」

予想外の答えに、固まっていると榎乃は今度こそ振り返らずに去って行ってしまった。なんだあいつ。

首を傾げながら、お茶を買い、急いで両親のもとへ向かった。1時から、お手伝いがある。

「幽霊は見つかったのかよ」

「うん。子供の笑い声が不気味に響いた時が一瞬あったけど、あれは幽霊じゃなくて誰かの妹とかだろーな」

「へー。で、俺はなにすんの」

言われたとおり体育館の放送室へ行き、ちゃんと榎乃がいることに安堵した。なんだか、こう、さっきは消えそうな雰囲気だったから。幽霊を探すというのも、気を使われないためのセリフだった気がする。

小さく殺風景な放送室には、なにやらスピーカーやコード、ミキサーなどが溢れていた。校庭の喧騒は遠く、静かだ。

「うん。あのね、これ放送部の機材なんだけど、さっきからマイクとスピーカーの調子がおかしくて。」

あと、音声は流れるんだけど、ラジカセに上手く繋がってないのかBGMが流れなくて。どうもコードが悪いらしいんだよ」

「いや、俺パソコン以外機械は分らねえけど」

「大丈夫。機材の調節とかは放送部がやるから。私達は、使えなくなったコードの撤収作業」

そう言って、放送部がアナウンスを行っている職員テントへ向かった。

一言二言放送部員と話して、コードを受け取っている。
濡らした雑巾をこちらに一つ渡してくれた。

「泥で汚れちゃってるから、拭いてから仕舞わないといけないんだ
つて。ここでパイプ椅子に座って観戦しながらお手伝い。優雅でし
よー！」

「わかった」

何メートルもある太いコードを、きゅきゅつと雑巾で拭っていく。
綺麗になった部分を榎乃が持ち、くるくると特殊な巻き方をしなが
ら片づけていた。

トラック内では、1年生対抗綱引きが盛り上がりを見せている。

「なんで、宮井がこんなことしてるんだ？ 放送部じゃないよな」

黙って作業するのも気まずいので、当たり障りのないことを話し
ながら進めた。

「うん。今は水泳部かな。夏が終わったら陸上部に助っ人に行くけ
ど。本来はマラソン部だよ」

「……マラソンは陸上部じゃないっけ」

「違うよー。珍しいけど、独立してる。あ、でも走ってるだけじゃ
なくて、持久力つけるために、縄跳びとかもするんだよ。でも私、
二重跳びどころか、後ろ跳びもできないの」

「宮井でもできない運動ってあるんだな」

「なんか、先生にはリズム感が悪いって言われた……。だから、ダ
ンスの体育の成績ひどかったんだよー」

榎乃は、どんどん話を脱線させながら、コードは綺麗にまとめて
いく。嫌いだけど、不思議なやつだ。

「それで、何で放送部の手伝い？」

「ああ。この体育祭の放送ってさ、学校から頼まれてやってるらしいんだけど、毎年丸投げされるんだって。アナウンスも今はちゃんできてるけど、競技してる選手の名簿とかも、言わなきゃ渡してくれないし。」

「こんな大掛かりな機材使うのは体育祭だけだから、放送部も結構手順アドリブしながら頑張ってるのに、先生達はわかんないからって知らんぷりだよ。」

放送部がやってくれなかったら困る癖にさ」

自分が放送部ではないのに、心底憤慨したように漏らす。感情移入が激しいタイプなのか。

ちなみにここは職員テントなので、すぐ隣りに思いつきり教師陣が座っているのだが……。

「で、放送部の友達が困ってたから、忙しくて大変なんだよアピールついでに、お手伝い。それに、こういう裏方って楽しいじゃん」

「まあ、一般生徒が知らない裏事情とかあるのは、面白いな」

「安田くん、結構捻くれてるよね……」

話す間に、コードが片付いた。

次は放送部が機材の調節に行く間に、アナウンスを頼まれた。

「はあ？ いや、アナウンスなんてやったことねーよ！」

「大丈夫。べつに上手くなくていいから。選手名読み上げるだけ。そしたら競技が始まるから、その後は機材の見張りしてればいいよ。結構盗まれるんだ。次の競技までには、放送部も戻ってくるし」

「いや、女の声でアナウンスした方がいいだろ？ 宮井やってくれよ」

「ごめん、次、私の出番なんだ。障害物競走の、アメ食い」
「おい、待て。おい！」

マイクを手渡し、榎乃は入場門へその俊足で駆けて行った。逃げた、だと……。

わなわなしながら、マイクのスイッチをオンにし、放りだされた選手名簿と原稿を読み上げた。

『次は、障害物競争です。選手が入場します。1年1組』

自分の声が、マイクを通してスピーカーから別の音になって、校庭中に広がった。きつと、どこかで見ている両親は、驚くだろう。俺が何も参加できないと思っていたクラスの中も。

手汗でマイクが滑らないように必死で握り締めながら、また一人、選手名を読みあげた。

『4組、宮井榎乃さん。5組、志村章吾さん』

閉会式では、一日中盛り上がっていたくせに、また俺のクラスは悲鳴に近い声を上げた。2年の優勝クラスになったからだ。もちろん、うちの得点王は、あいつだ。

俺達はトラック内で体操座りをしながら、こっそり肩を叩きあったり、女子は涙を流しあったりした。

次は個人競技の賞状授与だ。テントの奥で、校長や読み上げる先生にマイクを渡したり、賞状授与のBGMを流す準備をしている放送部が見えた。

各競技で一位になった人のみ、名を呼ばれ壇上へ向かっていく。榎乃は、呼ばれて賞状を受け取り、一度戻ってまた呼ばれて賞状

を受け取り……最後には3つの賞状を束ねて持って帰って来た。
豊作豊作、と笑う功労者を、クラス中で労う。

けれど、俺はそこには混じらなかった。

壇上の榎乃が、全く嬉しそうな顔でないのを見ていたから。哀しげな顔でもない。ひたすら無表情だった。

俺は、彼女が嫌いだった。

けれど、彼女は別に目立ちたいわけでも、勝利を楽しんでいるわけでもないのだと気付いた。

だってそんなことには全く興味のない顔をするくせに、閉会式後、迎えに来た家族と帰っていくクラスメイト達を、何か言いたげな顔でじっと見つめ続けていたから。

「宮井」

ぼつつと人々を眺めている榎乃を呼ぶと、彼女は苦笑しながら振り向いた。

「あ、ごめん。疲れて聞いてなかった。何？」

「いや、まだ何も話してないけどさ。……裏方、楽しかった。さんきゅ」

何より、両親が喜んでいた。お手伝いを終えて、テントから出た俺に駆け寄って、今の隆人でしょ！と嬉しそうにはしゃいでいた。
あんなに楽しそうな両親を見るのは久々で、それだけでなんだか来てよかったなと思えたのだ。

……俺は、身体が弱い。昔からそれは分っているけれど、最近両親の顔がいつになく暗いのだ。薬の種類も最近良く変わったり、増えたり。

俺は、本当は何の病気なのだろう。言えないほどなのか、もしかしたら 助からないのか。

それなら、せめて、今のうちに両親の笑顔をたくさん見たいと思った。子供のころから、寝込む度、入院する度に、きつと自分が先に逝くことは分っていた気がする。

「あはは労働させられて喜ぶなんて、変わり者だなあ。楽しいなら、ちようどいいや。来年も手伝ってくれるわけだね」

にやにやとからかう榎乃に、俺は大真面目に頷いた。

「望むところだ」

そして、3年でも同じクラスになり、榎乃の評価は、嫌いから別なものに変化したのだ。

ほぼ同時期に、自分の病気も、助からないことも、両親が苦渋のすえ明かしてくれた。

「ソレニク殿には、いつも迷惑ばかりかけている。何か、文句でも言っていないか」

「まあ、まさか。口を開けば陛下を褒め称える言葉ばかりですわ。父はとても心酔しております」

当たり前障りのない話をしながら、はるか昔の記憶を思い出していた。

凜としたところが、カタリナと榎乃、同じタイプとは言えるだろう。

「陛下はもつと怖い方かと、父の話で勝手に想像しておりましたけれど、とてもお優しいのですね。お会いできて光栄でした」

「ああ。私も良い気分転換であった。ソレニク殿にも、よろしく言うておいてくれ」

「ありがとうございます」

異種族の両親から生まれたと言うが、ソレニク40歳での子だと聞いた。ソレニクは今49歳。カタリナは18歳。親子で異種族だが、一応今は違和感のない年齢だ。ちなみに母親は、23歳で産み、現在41歳だとか。

最初から夫婦の年齢が大きく分かれているので、生きる早さが違っても、それほど問題はなさそうだ。

わざわざそんな娘と話をさせた辺りに、『相手が獣人でも諦めるな。歳の差なんて！』という側近のメッセージが込められている気がした。

Side? Ryuto (後書き)

隆人の思い出話でした。久々に現代っぽい話題で書けたのが楽しかったです。

中2の時点では、自分の病気を知らなかったようです。優しそうな隆人の母親を見ると、切ないですね。

さすがの隆人も中学時代はこんなおっさんくさいしゃべり方ではありませんでした。しかも親が来ると恥ずかしいとかいうお子様。イベント時だけの青春っぱさについていけない中二臭さ……！（いや中2なんですけど）

青臭い少年ってイイですね……。

17話

本日もまた良く晴れた昼下がり。

高く澄んだ青空のもと、屋敷にフランス人形が訪ねてきた。

くるくる巻かれた亜麻色の髪、陶器のように白くつややかな肌と、ふっくりした唇。瞬きの音が聞えそうなほど長い睫毛。さらに目を引くのは、横に長く尖った耳。エルフィン族であること。

ガラスのケースに入れて観賞するために作られたかのような容姿だ。

彼女は、フリフリのロングドレスの端をつまんで、私に丁寧なお辞儀をした。人差し指には、私と同じ、青い石の指輪がはめられている。

「はじめまして。アタシは、シン八領領主、新葉悠よ。しんははるか悠って呼んで頂戴」

優雅に笑う悠に、一瞬呆気にとられてしまう。同じ日本人……と思えないくらい可愛い。どこのお姫様だ。

外見のキャラメイクなんてなかったのに、どうしてここまで美人が生まれるのか。

羨望を隠しながら、私もお辞儀を返した。

「この領主の宮井榎乃です。えと、よろしくお願ひします。まだみなさんお見えになっていないので、先に中へどうぞ」

「はあい。ふふ、こんな可愛い子が仲間になってくれるなんて嬉しいわ」

悠は扇子を品良く口元に当てて微笑む。明らかに悠の方が見目麗しいのだが、厭味に聞えない。これが、本物の美人である。

屋敷を案内しながら、この分だと他の同盟仲間もキャラが濃そう
だと思い、不安に駆られた。

話は、1週間前に遡る。

アズサ領の事件があつてから、私は大いに悩んだ。ヴァルーデへの
対策である。

これが決まらない限り、領地を發展させるどころか、發展させて
良いのかも分らない。

一人で、悩んでいても答えはでないので、相談しようと思った。
相談しようと思ったのだが、誰に相談していいのかも悩む。人を
選んで相談したら、それって鼻屑になる？ いやいや、でも全員に
相談したら、パニックになるし。でも黙っているのは、事態の隠べ
い？ 私ってまるで悪い政治家？

そんな風に、アズサ領に行つてから3日間、建築や書類仕事など
をこなしながら、すっかり考え込んでいた。

そして休憩の散歩中、見かねたゼオンに、またもやお店に連行さ
れ、お茶を突き出されることになったのだ。

「ほれ、茶だ。つたく、また休憩時間に悩みながら歩きやがって。
今度はなんだつてんだよ」

「えーと……」

ええい、考えていたつてしょうがない。どうせ一人で悩んだとこ

るで答えは出ない。

聞いてきた人には正直に話すことにしよう。つまり、隠しているわけじゃない。積極的に広めなかっただけ。これでいこう。

なんだか逆にズルイ結論に辿りついて、アズサ領であったことを話した。

さすがに江田のことやゲームのことを言うのは躊躇われたので、1v20になるときのことだけを打ち明けた。

ゼオンはしばらく黙って話を聞いてくれた。

「と、いうわけでして。……どうすればいいかな。ホントに来るとしたら、真正面にやり合っても負けちゃうだろうし。レベルアップをできるだけ抑えて、やっぱりどこか他国に入るとか、かな」

「他の国に入るのは……よくねーな」

珍しく陰りのある声で返された。

「領民らは、人間の国には、どうせ入りたかねーだろ。例えそれがヴァルデーじゃなからうと」

「……じゃあ、獣人がエルフィン之国なら？」

「それが、難しいってんだ。そもそも獣人が治める国は今現在、存在しねえ」

「え」

「なんでか知らないが、獣人の国は昔から少ない。そもそも、獣人とエルフィンは、領主自体が多くない」

それは、多分、みんな人間になるからだ。私だって、ランダムシステムでなければ、獣人にはならなかった。元のゲームを知り、システムや種族の特徴を知っていれば、進んで別の種族になる人もいるかもしれないけれど、大半は人間を選ぶだろう。いや、特徴を知っていた場合、エルフィンにはなっても、獣人にはならないかも。

成長の早さの違いは大きい。

「それでも前はあったらしいがな。一つ、大きな国が。そこが唯一の獣人の逃げ場だったから、獣人の多くは、その国に行った。けど、そこはヴァルデーに攻められた。2年前だったか、でかい戦に負けて、結局、ヴァルデーのもんになっちまった」

「……じゃあ、エルフィンは？」

「エルフィンの国は、リーシャ帝国だけだ。エルフィン以外の種族も少ないが普通に暮らしちゃいる。でも、好戦的な国だぜ。よく他国と派手にやり合ってるし、入ったら戦と無関係じゃいらねえ」
「それは……嫌だなあ……」

甘い考えかもしれないけど、できれば平和にほのぼの暮らしたいです。そして、平和にほのぼの暮らさせてあげたい。庶民根性丸出しで申し訳ない。

「だろ？ つーか俺も故郷に帰りたいかねえし」

「……皇帝妃の弟なの？」

故郷の話題ついでに、ストレートに聞いてみた。ずっと聞きたかったのだけれど、機会がなかったからちようどいい。

ゼオンは、ボールを顔面に受けて何が起こったか分かりません、というような表情で、ぽかんとした。一拍置いてから、勢いよく立ちあがって慌てだす。

「おま、それ、どこでっ」

「捕まった時にたまたま聞いたよ」

お茶を啜りながら、平然と返すとゼオンはテーブルの上に脱力した。

「はあ……んだよ、ばれてたのかよ。くっそ、イリエのやつに土下座までして黙っててもらったのに」

そんなことしてたのか。イリエもほとほとゼオンに冷たい。

「そこまで、秘密にする必要あったの？」

「……お前な。リーシャ皇帝妃の弟つてのは、色々有名なんだよ」「いや、知らないけど」

「まあ、お前は新米領主だからな。とにかく、俺は有名で、名前が知られたら利用される可能性があるほどなんだっつ。だから、一応偉いさまのお前には内緒にしといたんだよ」

「偉いさま……」

そんなものになったつもりは、なかったのだけれど。ゼオンが有名というのも初耳なので、利用など考えたことすらない。私にとつては、ただの、お出かけに便利な高レベルの『魔法使い』でしかない。便利といっても、利用しているわけではないはず。

ゼオンはがりがりと言髪をかき、せつかくの美しい髪を無残な姿にしながら、溜息をついた。

「ま、お前はそんなことしねーか。見るからに策略とか苦手そーだしな」

いや、そう言ってもらうと、事態を隠ぺいしている悪い政治家もどきの身としては心が痛いです。

こっそり罪悪感に蝕まれたので、話を戻そう。

「まあ、ゼオンのことはいいや」

「いいのかよ、おい」

「うん。利用できるかと思ってないし。今まで通りでいいんでしょ？」
「ああ」

ちよっぴり安堵しましたという顔でゼオンが頷く。そして、表情を引き締めた。

「そんで、ヴァルルーデ対策のことだけだよ。他国に入るのは得策じゃないやねえ。」

「けどよ、助言はできるぜ。『不戦同盟』って知ってるか？」

そうして一週間前、ゼオンから『不戦同盟』の話聞いたのだ。

「それで、アタシ達の同盟については、どれくらい知ってるのかしら。聞きたいことがあったら、他の皆が到着するまでに説明するわ」

女神の祭壇。自分の領地の祭壇に入るのは初めてだったけれど、アズサ領のそれと何ら変わりはない。無機質で生活感のない場所だ。人が生活するための場所ではないから、当然かもしれない。けれどここは、同盟を結ぶことができる場所。

悠は慣れているようで、すたすたと中央の青い台に近付いた。

「えっと、戦いをしたくない領主達が、お互いを守るために作った同盟だと聞きました」

「そ。同盟内で戦うことは、もちろんないわ。好戦的な国や領地からも、同盟に参加することで、身を守れる。アタシ達、同盟のリーダーを敵に回すと厄介だから、向こうから避けてくれるの」

リーシャ帝国は好戦的な国だから、ゼオンは名前しか知らないと言っていた。けれど、リーシャ帝国もヴァルデーも、『不戦同盟』に参加しているものを標的にはしないという。

その話を聞いて、さらに『不戦同盟』について知っている者を集め、情報を聞き出し、私は、同盟に参加することを決めた。

戦わずに、隠れずに、従属せずに領地を守れるなら、ちょうどいい。

決めた後で、領民に現在の状況と同盟について、ちゃんと話した。特に、反対意見もせず、思った以上にすんなり賛成してもらえてほっとしている。多分皆、ヴァルデーに下りたくないという気持ちが大きいのだろう。

そして、同盟参加希望を、同盟のリーダーであるという悠に手紙で送ったのだ。

顔も知らない領主にいきなり手紙を出すのは緊張したが、今の状況を包み隠さず書き記し、丁寧でかつ誠意溢れる文になるようレールヤイリエに苦心してもらった。いや、私文章力ないから……。

ともかく、後日快い返事が届き、今日の良き日に同盟を結ぶため、ミヤイ領に同盟のリーダー達が集うことになったのだ。

「『不戦同盟』参加のルールも知ってるかしら？」
「年間20万ゴールド、ですか」

主食のテクー一枚が100ゴールド程度だ。大体1万ゴールドあれ

ば、領民は1、2カ月暮らせるだろう。そのため、20万ゴールドは安くは無いが、領地の維持費と考えると高すぎるということもない。

もちろん、今現在ミヤイ領にそんなお金はないので、決済は1年の終わりにしてもらっけれど。初心者なので勘弁して下さい。

「そう。これは、別にアタシが決めたんじゃないよ。元々のゲームのシステムで、同盟には20万ゴールドって決まっていたの。ちなみに同盟設立はもっとかかるのよ。アタシ、たいへんだっただから」

「悠さんは、ゲームやっていたんですか？」

「うん。その様子だと、榎乃さんはやってなかったのね。レベルが低いうちから同盟に参加するから、てっきり経験者かと思ってたわ」
「1v9で同盟って、早いんですか？」

ちなみに、1週間経ったけれど、レベルアップはしていない。食料調達の狩りや釣り、新しい民家の建築などがあつたけれど、その程度ではレベルアップしなくなっていた。高レベルになればなるほど、間隔は大きくなるのだろう。経験値ゲージなんてものもないので、あとのくらいでレベルアップするかは、分りにくい。多分、近日中には上がると思うけれど。

「1v20になって、どっかの国に攻められそうになって慌てだして同盟参加！ っるのが多いかしら」

「あはは……レベルはまだですけど、似たような状況にはなってます」

「みたいねえ。手紙にあつたわ。全く、江田の坊やも困ったものよね」

可愛らしい雰囲気のは、見たところ同じ歳くらいにしか見えな

い。けれど『江田の坊や』と自然に呼ぶところに違和感を感じる。
エルフィンが人間より歳をとるのが遅いけれど
詳しく聞こうと思ったところで、祭壇の扉がノックされた。

「やっと、来たわね」

悠がつぶやくと同時に扉が開かれ、そろそろと4人の日本人が祭壇の白い床を踏んだ。

ぱちりと扇子を閉じて、悠は笑う。

「手紙で書いたと思うけど、この4人が『不戦同盟』のサブリーダーだよ。さ、同盟を結びましょー！」

17話（後書き）

同盟は、たぶんギルド的なものだと思います。悠がリーダーの『不戦同盟』以外にもたくさん同盟はある、はずです。国とは違って、お互いが自分の領地を独立して治めています。そして、ようやくエルフィン族が出てきました。

「待て、ハルカ。俺達の紹介くらいは、してくれ」

嬉々として同盟を急かす悠に、ツツコミを入れたのは、入ってきたサブリーダーのうちの1人だった。

というか、よく知ってる人物だ。彼はどこにでも現れるなあ。おかしなところで感心しながら、数日ぶりに会う隆人を眺めた。せっかく良い同盟に入っているなら教えて欲しかったが、不親切なのではなく、きっとそこまで口を出すのを躊躇ったのだろう。変なところで、隆人はいつも気を遣ってくれる。

「えー。サヤはともかく、男どもの紹介なんてどうでもいいじゃないの」

サブリーダー4人をせっかく呼んだのに、紹介もせずにスルーした悠は、なにやら非常に理不尽なことをたまった。

理不尽なのだが、口を尖らせる仕草は、女である私が見てもキュンキュンするほどだ。美人ってすごい。

隆人が、相変わらずの綺麗な顔に呆れを浮かべる。

悠はぶつぶつ言いながらも、わざとらしくため息をついて、サブリーダー達の傍へ寄った。

「はあ……仕方ないわね。じゃあサクツと説明しちゃうわ」

ピツと素早い扇子捌きで、悠は一人のサブリーダーを示した。

高飛車で失礼な態度のはずだが、悠がやるとなぜか様になりすぎて、文句がでない。

「まずはこの、白髪の素敵なナイスミドル。彼は、鬼頭雄吾^{きとうゆうご}。キト
ー領領主。人間で、56歳。職業は……なんだったかしら？」
「『狩人』だ。全く、お前はいつになっても覚えん気だな」

溜息混じりに悠の説明を補足したのは、そのナイスミドルさんだ。
少し低めの身長をしゃんと伸ばして立つ彼は、ふさふさした白髪
まじりの灰色の髪をきっちり整えている。整髪料もない世界でどう
やっているのか謎だ。

目立つ特徴は無いものの、きりつとした表情とたるみない皺に、
歴戦の重役とでもいうかのような威厳と貫録が刻まれている。
身なりも上品に整ったクリーム色の落ち着いた物を纏っており、
無駄に豪華でなく、またみすばらしくもない絶妙のセンスだ。
おじさんとお爺さんの狭間ほどの年齢だけれど、瞳に淀みはなく、
こちらを真つすぐに見据えてくる。

「よろしくお願いします」

「ふん。よろしくな」

なんとというか、隙が無い人。そして、人を自分の目でしっかり判
断しようとする人だ。値踏みするのではなく、見定める目。

私の父親は早くに亡くなっているので、実は年配の男性とお話し
たことはあまりない。学校の先生くらいだ。正直ちよっぴり怖い。
後ずさるうとする足を頑張つて踏ん張る私を見つつ、悠は説明を
続けた。

「細かいことは後で教えるとして、次行くわよ。」

その隣のぼんやり和風なごみ系大和撫子。いえ、むしろ座敷わら
しかしらね」

「……………あたし？」

ひどい形容に、一拍どころか三拍くらい置いてから、ぼんやりと無表情に首を傾げたのは、言われた通りの和風系美少女だった。眠たげな目で不思議そうに見つめてくる。

「もー、可愛いわサヤっ！」

なぜか悠がハイテンションになって美少女に飛びついた。彼女の頭をぐりぐり撫でながら、悠は私に目を向ける。

「この子が、栗栖沙耶くりせいや。クリスマス領領主よ。人間の15歳。『盗賊』よ」

「よろしくお願いします」

「……。よろ、しく……」

私の挨拶になぜか3秒ほど間を開けてから、沙耶は一瞬だけ微笑んだ。そしてすぐ無表情に戻ってしまう。ああ、もったいない。

悠がフランス人形なら、沙耶は日本人形と例えられる。真つすぐに伸びた艶のある黒髪は、シャンプーの宣伝に出れそうなほど美しく流れてる。

それと対になるかのように、真つ白い頬と、幼いものの整いすぎた顔。表情のない時は、まるで本物の人形のようなのだ。

悠も作り物かと疑うの美しさがあるけれど、生き生きしている。

沙耶にはそれがなかった。

悠は一通り沙耶をぐりぐりすると、ようやく体を放して、再び扇子を動かした。

「そして、そこの絡みづらそうな獣人の彼」

悠の言葉に驚いて、沙耶の横に立つ人物の頭に目を走らせた。 1

90?はありそうな長身の男性の頭には、虎の獣耳が確かにちよこんと乗っていた。もちろん尻尾もある。

「珍しい獣人領主よ。トーノ領領主、遠野^{とおのしん}芯。虎の獣人で、37歳だったかしら。すごおく強い『戦士』よ」

光の角度によつては少し赤く見える短い茶髪。厳つい雰囲気をもっとアップさせる無精ひげ。

長身であり、またがっしりと筋肉質な男前さんだ。いかにも歴戦の勇士といった空気を纏っている。

虎の耳と尻尾という可愛いギャップがなければ、子供に泣かれるんじゃないかというほどの引きしまった表情だ。

「よ、よろしくお願いします」

「ああ」

芯は重低音で響く声と目で僅かに頷いた。

同じ獣人ということ、聞きたいこともちらほらと頭の隅に思い浮かぶ。機会があったらゆっくり話してみたい。怖いけれど。

挨拶を交わしたのを確認して、悠は次の人物を示した。

「で、うちの同盟の中で唯一、国を作ったのがその地味な青い人よ」

「あ、えっと、安田くんは知ってます」

地味というより、他のメンバーのキャラが濃すぎるのではないだろうか。

胸中でツッコミながら悠の説明を止めた。

悠は、長い睫毛をばさばさして、目を見開いた。

「あら、知り合いつて？ まさか、日本で？」

「はい。中学の同級生でした」

頷くと、悠は一瞬何かを言いかけ、躊躇い、やがて首を振りながら再び口を開いた。

「それは……。いえ、そうなのね。喜べはしないけれど、貴女が同盟に馴染みやすくなるのなら、いいわね……」

少しトーンの下がった声で言うのは、私達が死んでしまったからだろう。死んでしまったから会えたので、手放して喜ぶことはできない。

悠が言葉を選んでるのが、よくわかった。隆人も黙って悠のつぶやきを聞いていた。

自分が死んだということを出すと、なんだか心が静かになる。穏やかになるのではなく、形容しがたい空虚さが、ふっと心に行きわたるのだ。

しみりした空気になりかけたところで、沙耶がふらりと動いた。ゆっくりと、祭壇の正面、青く発光する台の前に立つ。

「……同盟……しよ？」

彼女は意外に気配り屋さんなのかもしれない。

悠の指示で、胸元までの高さの台へと手をかざす。6人の手がそれぞれ台の上に置かれると、台は青い光をさらに強くした。

ガラスのような感触の台だけれど、冷たさは無く、むしろ手へ暖かいものが流れてくる気がする。

大小様々、そして荒れた手や美しい人形のような手などが並んだのを確認し、悠は口を開いた。

「『同盟勧誘』」

言葉と同時に、台の上に音もなく画面が展開した。

指輪で出す画面と似ているけれど、全員に見やすいよう画面が大きくなっている。

書かれている文字は少なかった。

> 『不戦同盟』からカノミヤイへ同盟勧誘が来ています。同盟に参加しますか？<

「音声で答えればいい。『はい』か『いいえ』だ」

戸惑う私にすかさずアドバイスを入れたのは隆人だ。
感謝しながら一つ隆人に頷いて、

「『はい』」

しっかりと答えると、画面が少し変化した。
文章が加えられている。

> カノミヤイが合意しました。サブリーダーは承認しますか？<

承認のためにサブリーダーが来たのか。
納得していると、4人が素早く答えた。

「『』はい『』」

声が揃うと、青い光が台から溢れた。光は真っ白な床や壁に反射して、私達の目を射抜く。

一瞬で視界が真っ白に染まった。

ぎゅっと目を瞑った時に、ばさりと何か大きな布の音が響いた。

指で目を抑え、刺激が収まるのを待ち、そっと目を開く。

他の人もそれぞれ目を擦ったり抑えたりしている。

悠だけは素早く扇子を広げて顔を背けていたので、けろりとしていた。抜け目ない。

私は、布の音がした祭壇の後ろを見やって、思わず歓声を上げた。

「おおお！ 旗!？」

真っ白いばかりだった壁に、一枚の旗が掲げられていた。

濃い緑の布地の中央に、白い鳥のマークが描かれている。シンプルでわかりやすいデザインだ。

近寄って手を伸ばし、そっと触れる。

「それが、アタシ達のシンボルマークよ。仲間の証ね」

いつの間にか横に立っていた悠が、はしゃぎながらがばりと抱きついてきた。

悠は女としては背が高い方なので、平均的な背の私は抱きしめられると、ちょうど相手の胸あたりに肩があたった。あ、意外に胸が無いなこの人。

見た目よりも力強いハグに驚いていると、悠はそのまま嬉しそう

に笑う。

「ふふふ。これで仲間よ！ 獣人の女の子の領主なんて久々だわっ。しかもこんなに獣耳と尻尾が似合うなんて！ 素晴らしいわ」

「は、はあ……」

いきなりフレンドリー。そして褒めちぎられた。

獣耳と尻尾が似合うと褒められるとは。ここは、素直に喜んでいいのだろうかと思う。嬉しいような、微妙なような。

反応に困っていると、悠は少し体を放して、きらきらと大きな瞳を輝かせた。

「ね……。触っていいかしら。耳をッ！」

「え、ええ？」

悠の手をわきわきしている。徐々に近付いてくるその手と熱意に、思わず少し後ずさると、ようやく救い主が現れた。

「おい、セクハラ。いい加減、離れるんだ」

後ろからドレスの襟を掴んで、ぐいと悠を引き離してくれたのは、隆人だ。頼もしい。

ほっとしつつ感謝の視線を送ってみた。

隆人は盛大に溜息をついて、悠の襟をそのまま引っ張り、ぼいと横に投げ捨てた。

「きゃあっ」

「宮井、セクハラは訴えていい」

どこにだ。ツッコミを入れる前に、悠は動きにくそうなドレスで

ありながら素早く身を起こした。

「ちょっと！ リュート、女の子に対して扱いが酷いわっ。この世界三大美女と謳われるアタシの顔に傷が付いたら、どうしてくれるの！」

「誰が『女の子』だ！ そして誰が美『女』だっ」

珍しく声を荒げながら、隆人が切り返した。

けれど、今。何かおかしな文を聞いた気がする。

何が間違っているのだろうか。

ぎぎぎときこちない仕草で首を巡らし、他のサブリーダー達を見る。

ナイスミドルの雄吾と獣人戦士の芯は、こちらをやりとりを気にせず何やら話し合っている。

困って沙耶を探すと、いつの間にか背後に彼女はいた。気配、しなかつたんだけど……。

沙耶は、ゆっくりと頷いた。

「……あれ、男」

あれ、とは。固まる私に、沙耶はさらに言葉を重ねた。

「ハルカは……男」

「ええええッ！ 嘘ッ、だって、だって、ええええ!？」

いやいやいやフランス人形が男って！

叫びながら、悠を凝視してしまう。

女にしては高めの身長。160?後半から、170?くらいはありそう。

ドレスで上手く誤魔化しているけれど、確かに、胸は無かった。

じつと肩辺りを見る。そういえば、さっき抱きつかれたとき、柔らかなさは無く、むしろタツクルかと思うような強いハグだった気が……。
そして、若干ハスキーなその声は……。

嫌な汗が背中を伝った。悠は目が合うと、何故か照れた。

「ふふふ。バレちゃったかしら？」

私は、静かに顔を覆った。

女としての自信が空っぽになりましたとも！

噂には聞いたことがある。本当に顔の可愛い男は、着飾るとそのらの女の子よりも遥かに輝く場合があると。

けれど、実際に身近にいたとは！

頂垂れる私の肩に、暖かい手が置かれた。

沙耶が、無表情ながらもどこか同情するような瞳をくれた。

彼女はやっぱり優しい。

……。いや、あれ？ 沙耶は『彼女』でいいのだろうか。もしか

「……………だいじょうぶ。ハルカ以外は……………普通」

沙耶は見透かしたようにフォローしてくれた。

私はその言葉に安堵し、悠はその言葉にむくれた。

「サヤひどいわっ。アタシも普通よー！」

「どこがだー！」

すかさず隆人がツッコミを入れた。

「最初のトリップの時に、キャラメイクがないからいけないのよ！ 性別選択があったなら、アタシ、ちゃんと女の子になったのにつ。せめてゲームの時のキャラを使ったかったわッ」

獣人やエルフィンが若干体が変わってしまうけれど、基本は日本と同じ体や外見だ。性別も……。

「諦める。そして男なら、簡単に抱きつくな」

「もーッ。煩いわね、リユートは！ どの風紀委員長よ。あ、もしかして風紀委員長とかやってたのかしら？ それは似合いそうね。どうだったの、カノちゃん。カノちゃんって呼んでいいかしら？ あ、駄目ね。呼べないんだっただわ。それはともかく」

悠は一息でどんどん話を脱線させていく。

どこから答えればいいのか、戸惑っていると沙耶が小さく首を横に振った。

「……ほつといて、だいじょうぶ」

「あ、はい……」

結構ずばずば言うなこの子。悠は、時折隆人にツッコミを入れられながらまだペラペラと喋っているけれど、沙耶はそれには構わず、旗に向き直った。

「それより……旗。これ、同盟の。指輪の……ステータスにも」

教えられた通り、軽く指輪に触れて、ステータス画面を表示する。能力や数値に変化はないものの、『カノミヤイ』という名前の横に、小さくマークが入っていた。旗と同じで、緑の地に白い鳥が

描かれている。

「本当だ。これは、えーと、サブレー」

「……。平和の……ハト……」

沙耶の沈黙に、呆れが混じった気がする。お菓子しか思いつかなくてごめんなさい。

反省しつつ、指輪の画面を消す。

平和の象徴が鳩というのは、どこかで聞いたことがある。

『不戦同盟』と言うし、平和の象徴がぴったりということだろう。

「教えてくれて、ありがとうございます。沙耶さん」

お礼を言うと、沙耶は少しだけはにかんだ。

「……呼び捨てで、いい。……うちは、みんな、そう」

「でも」

明らかに年上にして目上の雄吾や芯を呼び捨てるわけにはいかない。

そう思ったが、悠にツッコミ疲れた隆人が説明を加えてくれた。

「いや、呼び捨てだ。リーダーのハルカも。ユーゴも、シンもな。」

日本ではアウトだろうが、この同盟ではそうしておけ」

「……怒られない？」

「ああ、ルールだ。これは領民のためだな。同盟だから手を組んでいるのであって、お互い領主としての立場は対等だ。領民達に、どこかに隷属するわけではないと示すのも大切なんだ。まあ、目上の人に敬語を使うくらいはいいが」

色々と難しそうだ。要するに、他の領主にへーこらしていると見られてはいけないのだろうか。

そこでふとあることに気付き、隆人を見上げた。

「じゃあ、私も『安田くん』って呼んじゃだめなんだ？」

「あ……そ、そうか。そう、だな」

隆人が何故か顔を強張らせた。そして目を逸らしてしまう。なんだ、この反応。

「あれ？ 駄目だった？」

「いや、構わん。というより、そうしないといけないが……」

「じゃあ、『隆人』ってことで、改めてよろしく」

これで正式に同盟仲間なのだ。なんだか嬉しくなっただけで笑みが零れた。

「ああ。ええと、その、よろしくな。みや……じゃなくて、その。

あー……か、カノ……」

浮かれる私に対して、隆人は苦虫を噛みつぶしたような顔で挨拶を返してくれた。

浮かれすぎるなという忠告だ。隆人は過保護気味だけれど、面倒見がいい。

心の中で感謝していると、青い台の方から、雄吾と芯という顔の厳しい二人組に呼ばれた。

「全員、戻れ。カノ、お前にはまだ説明せねばならんことがある」

「は、はい……」

口調は厳しくないものの、張りのある雄吾の声にやっぱり緊張しつつ、台へ駆け寄る。

後ろで、隆人がなにやら溜息をつきながら、ついてきた。

18話（後書き）

長らくお待たせした上に短くてすみません。
そして某人がどんどんヘタレになっていきますね……。

19話(前書き)

挿絵表示があとがきにあります。苦手な方はご注意ください。

雄吾が青い台の上に、何やら書類を広げいていた。

こちらの紙はどうやって作っているのか、あまり質は良くない。

雄吾は少し黄ばんだ一枚の皺の寄った紙を、同じく皺の手で広げた。

端から覗きこむと、それは初めて見るこの世界の地図だった。

3つの大陸が描かれており、それぞれ東西にのびる大陸、南北にのびる大陸、ほぼ円形の大陸だった。他にもぱらぱらと島があるが、どれも小さい。

そして海ではない地表の部分は、ハチの巣のように正六角形をいくつも敷き詰めたマスが描かれていた。

さらにところどころに黒く塗りつぶされた正六角形があり、その横には何やら文字が書きつけられている。

不思議に思ったところで丁度雄吾が一つの黒い正六角形に触れた。

「この塗りつぶされた部分が、領主のいる領地のマークになっておる。まあ、おおよその位置と大きさ作られているから、面積やら方角やらは、さほど正確ではないがな」

なぜ正六角形をしているのかは、私にもすぐ想像がたった。

領地の境界線が、正六角形なのだ。一つの角に領主の屋敷が置かれている。

恐らく塗りつぶされた部分の横の文字は、領地の名前だろう。見れば、『ヤマダ』や『ササキ』といった領地もあって、なんだか不思議な気分になった。

正六角形のマスで区切られた地図には、山や川のようなものも書きこまれている。

じっと目を凝らして、私はようやく探していた地形を見つけて声

をあげた。

「ソコ湖発見！」

三日月型の湖は、東西にのびる大陸の東の方に描かれていた。そこから少し先に、ようやくミヤイ領の文字を発見する。ミヤイ領はこの大陸のかなり東端だ。

マス1つ分だけ塗りつぶされた、小さな領地。

悠が横から手を伸ばし、ミヤイ領からしばらくやや斜め左下につまりやや南西にたどり、数十マス分を塗りつぶした大きな領地を叩いた。

「これが、困ったちゃんのヴァルーデ王国。南、南と言うけれど、ミヤイ領から見れば正確には南西の王国ね。なかなかのサイズでしょう？　ちなみに、塗りつぶされたマス分全部に領主がいて、それを一つずつ侵略されたわけじゃないわ。少し離れた領地を一つ征服したら、国からその地まで真っすぐ直線状に領地が拡大するのよ。つまりもしミヤイ領が侵略されたら、ヴァルーデ王国の領地は南からここまで一本の線に黒く塗りつぶされるわけ。もちろん、間に別の領主のマスがあったら、その周辺はヴァルーデの領地にはならないけど」

嫌なたとえを、悠は明るく笑って説明する。私は悠の説明を懸命に頭の中で噛み砕いた。

「なんだか、リバーシみたいですね」

必死に考えて、思い浮かんだのは白と黒が表裏一体となってせめぎ合うボードゲームだった。悠は、うーんと唸る。

「コマは正六角形だけど、言われれば似ているかも。他の領地を侵略しなくても、自領地に隣接する空きマスなら自領地にできるし。その辺りも、そっくりだね」

ヴァルルーデ王国は東西にのびる大陸全体から見れば、4分の1を占めるほどの大きさだ。ただか1マスのミヤイ領など足元にも及ばない。

敵に回した国に大きさに、溜息を禁じ得なかった。

雄吾はそのやりとりを気にせずに、東西にのびた大陸全域をぐるぐると指でなぞった。

「ともかく、それぞれの大陸に名がある。ここがエリサルディ大陸」

また覚えづらい地名がでてきたぞ。

密かにひるむ私に構わず、雄吾はさらに南北にのびた大陸に指を伸ばした。

「これが、ロディ・リオ大陸。そして、この円形の大陸。これがセルヴィリア大陸だ」

ん、と私は首を捻った。前の2つの大陸はいいとして、最後の円形の大陸の名は、どこかで聞いたことがある。

気付いたか、と言って後ろから隆人が補足を入れてくれる。

「俺の国の名が、聖セルヴィリア王国だったろう？ 大陸名からとっているんだ」

「ということは、隆人の国は、この丸っこい大陸の中にあるの？」

その名を探そうと身を乗り出すけれど、セルヴィリア大陸は1マスも塗りつぶされていない。

悠がからからと笑った。

「探せないでしょう？ だって、塗りつぶさなくてもわかるから、塗りつぶしてないもの。セルヴィリア大陸丸ごと、聖セルヴィリア王国なのよ。すでに大陸というよりは、島国よねえ」
「はあああつ!？」

思わず、奇声が喉から飛び出した。地図をよく見れば、確かに塗りつぶされてはいないものの、円形の大陸の中央にどどんと『聖セルヴィリア王国』と文字がある。

大陸丸ごと自国ってなんですか。
茫然と隆人を振り返る。

3つの大陸のうち、一番大きいのがエリサルディ大陸で、一番小さいのがセルヴィリア大陸だ。セルヴィリア大陸はエリサルディ大陸の4分の1にも満たないので、ヴァルーデ王国の方が大きいのは明らかである。

けれども、1つの大陸を全て制覇するのは、並み大抵の努力ではないだろう。そもそも不戦同盟に参加しているということは、他領地に戦いを挑めないはずなのに。

視線を受けて、隆人はまるで悪事の言いわけをするかのように、慌てて口を開いた。

「いやいや、武力でもって大陸を統一したわけではない。大陸内の他の領主たちと一緒に国を作ったんだ。たまたま俺がそのまとめ役になっただけだ」

「にしたって、ある意味怪物よねえ」

悠がからかうように肩をすくめた。

隆人以外にそれに反論するものは、もちろんいない。

「ていうか隆人、前にミヤイ領と聖セルヴィリア国は、京都から東京くらいの遠さだって言ってたなかった？」

ふと思いついて尋ねると、隆人はそうだなと肯定した。私は、地図を示す。

「なんか、ちょっと地図で見ると、聞いていたより遠い気がするんだけど？」

「いや、シームルグに乗れば、京都から東京間を新幹線で移動する程度だぞ？」

「……シームルグは空飛ぶから、新幹線じゃなくて飛行機で考えるべきじゃないかな……」

基準の違う隆人に頭を押さえながら、私は理解した。

つまり、聖セルヴィリア国とミヤイ領は、空を飛ばない限り、かなり遠いと！

そして、脱線した話を戻すのは雄吾の役目なのか、再び雄吾は淡々と地図の説明を始めた。

「でだな。今この地図を説明したのは、理由がある。『不戦同盟』に参加しておるのは、わし等も含め33人の領主だ。カノ、お前が33人目だな。全ての仲間の領地を覚えろとは言わんし、必要もない。だが、リーダーとサブリーダーの領地は覚えてもらう」

「はい」

雄吾が懐から羽ペンを取り出し、その場で地図にメモをしていく。5つほど大きく赤丸をつつたところで、雄吾は手を止めた。

「今、丸をつけた領地が、わし等5人それぞれの領地だ」

エリサルディ大陸は、東西に広く伸び一番面積が広い。そして、全ての大陸の中で一番南に位置している。

エリサルディ大陸のちょうど真ん中には東西を分断するかのよう
に大きな山脈があつた。その山脈の中に、一つ目の赤丸がある。

『トーノ領』と記されているので、獣人仲間である芯の領地だ。
領地自体は広くなく、4つ分のマスを塗りつぶしてあつた。

山脈に隔てられた大陸の東側には、大きく塗りつぶされたヴァル
ーデ王国がある。そのさらに北東に小さくミヤイ領がある。

東側には、リーダー、サブリーダー達の領地はないらしく、赤丸
がなかった。

私は、西側に目を移す。西側も土地の真ん中あたりは、様々な領
地が並んでいた。領地の密集地といっても過言ではない。

そんな過密地を避けるかのように、エリサルディ大陸最西端に、
赤丸を見つけた。

十数マス分塗りつぶされたそこは、『シン八領』とある。

同盟主である悠の領地だ。ミヤイ領からは、大陸一つ分横断しな
いと届かない距離。訪れようとすれば、一体何日かかるのだろうか？

と、同時にミヤイ領から出した手紙は、どうやってあんなに早く
悠の元へ届いたのか疑問が湧いたが、それは後で訊ねることにし、
再び地図へ視線を落とした。

エリサルディ大陸の山脈に隔てられた西側、その北の方に、南北
に長いロディ・リオ大陸がある。

エリサルディ大陸とロディ・リオ大陸は海を隔てているものの、
かなり近く、2大陸が接するほど近い場所もある。

3つ目の赤丸は、その2大陸の接点になる部分につけられていた。『キトー領』とあるので、雄吾の領地だ。わずかに接する大陸のその周辺が少し広めに塗りつぶされている。

そこからさらに北のロデイ・リオ大陸を辿っていくと、大陸の南西部に、また赤丸がついている。キトー領からさほど遠くないところだ。

そこが『クリス領』であり、どうやらかなり広い領地だ。

ロデイ・リオ大陸の北の方には、ぼつぼつと他の領地があり、大陸の北半分は、大きく塗りつぶされていた。同盟とは関係ないものの、思わず見ると、『リーシャ帝国』とある。

これが、ゼオンの故郷かと驚いた。ヴァルーデ王国とあまり変わらないほどの大きさだ。

ロデイ・リオ大陸の東、エリサルデイ大陸の山脈あたりから北上した海に、円形のセルヴィリア大陸があり、そこは大きく赤丸がつけられていた。

もちろん、隆人が治める聖セルヴィリア国だ。

すべて確認し終えて、私は、溜息とも感嘆ともつかない声を漏らした。

ずっと黙って見守っていた沙耶が、いつの間にか横に並び、よくできましたと頭を撫でてくれる。

年下の子に撫でられるのは情けないかもしれないけれど、気持ちがいいのでそのまま有り難く撫でてもらった。

「ミヤイ領も並べて見ると、上手く世界のすみずみに広がったな」

隆人が、ぼつりと地図を見てつぶやいた。

「あら、ほんと。東、西、エリサルデイ大陸の真ん中、2大陸の接

点、セルヴィリア大陸丸ごと、ね。でも惜しい、北端と南端は取れてないわ」

世界征服を目指すわけでもないのに、悠が言う。

リバーシではないのだから、角を取ればいいというものでもないんじゃないだろうか。

そう思ったが、雄吾の次の説明がそれを覆した。

「良いか、カノ。このリーダー、サブリーダーの5つの地と、同盟参加者の地は結ばれる」

「結ばれ……？」

「そうだ。同盟参加者の地から、リーダー達の地までは、路みちができる。他の領地は通れないため迂回することもあるが、ほぼ最短距離の路が、敷かれる。自動的にな。」

そして、これまでの普通の道とは少し違ってな。この路は女神の加護を帯びる。もっと具体的にいえば、領地と同じで、魔物を寄せ付けぬ。青い境界線はないが、同じ効果を持つ路ができるのだ。まあ、海を通らねばならんセルヴィリアはちと例外だが、地続きの他の4つの場所までは、安全に行き来することが可能になる」

言いながら雄吾は、羽ペンで、ミヤイ領から、セルヴィリアを除く他の4つの赤丸を、線でつないだ。

ミヤイ領が東端近くにあるため、トーノ領を通って西端のシン八領というエリサルディ大陸の横断路ができあがった。

さらに、キトー領、クリス領のあるロディ・リオ大陸にもつながる。さすがに横断路はできないが。

繋がった点と線を見て、悠は歓声を上げた。

「きゃあ、すごいわ！ エリサルディ大陸端から端まで、安全に行

き来できるじゃないの。カノちゃん、グッジョブ！」

びしつと悠は親指を立てた。私はそれで角を取りたがっていたのかと納得する。

雄吾が浮かれる悠に目を向けた。

「遠いことは変わらん。それと、魔物は寄らぬが、人は別だ。盗賊や追剥が現れるかもしれないし、敵対する他領地が路を塞ぐこととてできる。完全に安全な往来などない。だが、魔物が出ないというだけでも、領民にとっては格段に違うはずだな」

「ええ。商人や旅人は喜ぶわね。33人同盟仲間がいるっていつても、20人近くは隆人の国に入ってる手下の領主たちだったから、路としては使えなかったし。他の数名もエリサルディ西側の過密地ばかりだったから、なかなか東側への便利な路ができなかったのよ」

リーダー格以外の同盟仲間同士では道は結ばれないし、ややこしいのでまだ場所も教えてもらっていないが、東側には少ないのかと少し落胆した。

ヴァルルーデ王国が大きく陣取る東側に、仲間がいれば心強かったのだが。

少しだけ気を落とす私に、悠が安心させるように微笑んだ。

「大丈夫よ、東側とは言えないけれど、地図上ではヴァルルーデ王国が一番近いのは、実はトーノ領だもの。険しい山脈を越えられないからヴァルルーデ王国も手を出さないけれど、楽観していられるわけでもないの。ね、シン？」

獣人仲間にして、ヴァルルーデ王国に近い仲間と聞いて、私の尻尾が期待でゆらゆらと揺れた。

1人だけ輪から外れて、壁に寄りかかるようにして立っている芯

へと、皆の視線が一斉に集まる。
彼は、今までずっと沈黙を守り通していたので、どんな人物だかとても気になる。

「シン？」

悠に話かけられても、芯は軽く俯いたまま、返事を返さなかった。機嫌でも悪いのだろうか、少し心配になったが、機嫌を悪くしたのはむしろ悠の方だった。

ドレスを翻して、芯に駆け寄ると、悠は扇子でピシヤリと高いところにある芯の頭をはたいた。

「うあ、あー……」

芯は顔を歪めて、ようやくこちらを見た。悠は、その鼻さきにびしりと扇子を突き付ける。

「シン！ 貴方、いまの説明、ほぼ最初っから寝てたわね！？」

「……？ あー……おはよう……」

憤る悠を気にせず、芯はくあつと大きく口を開いて欠伸をし、がしがしと短髪をかいた。虎耳がぴくぴくと動く。

「アタシ達が頑張って説明してるときにっ！ ちょっとは協調性って言葉を学んで頂戴！」

腰に手を当てて怒る悠を、芯はまあまあなどと言いながら宥める。私は、なんだか予想と違う人物像に驚いて、救いを求める様に沙耶を振り向いた。

こういうときのフォロー役は沙耶なのだと、短い時間で私も学ん

だ。

沙耶は、こっくりと頷く。

「シンは……マイペース……」

マイペースじゃない人がこのメンバーの中にいただろうか、私は首を傾げた。

19話（後書き）

少し短いですが、地図に頭を凝らしたので、こんなくらいで挿絵表示として、ごくごく簡単な図を載せておきます。

分かりづらい場合は、ご参照ください。しかし絵心のなさは泣けま
す。ほんとに粗末な図なので、位置関係把握以外には役立ちません。
出てきた国名、領地名くらいしか乗っておりません。マスとか地形
とか無視です。

作中ではほぼモノクロでしたが、分かりやすいように多少カラフル
にしてあります。

> i27004 — 3514 <

「昨日は大きい魔物を狩ってたから、ねっむい……」

「シン！ 胸を張って言いわけしないで頂戴。まったくいつまで経つてもぼんやりフラフラした男ね。馬鹿真面目なりユートと足して2で割れないかしら？」

「リユートと割られるのは嫌だなー」

お小言をこぼす悠にずれた返答をしながら、芯の視線は私に向けられた。

「何の話してたの？」

「あ、えつとトーノ領が一番ヴァルーデ王国に近いって話しです」

かなり脱線していた話を元に戻す。ヴァルーデ王国に関する情報は、できるだけ持っておきたい。

身長差で首が辛いけれど、頑張つて芯を見上げる。

芯は、あー……と気の抜けた声を出した。

「そっか。でも多分負けないよ」

強面に似合わず気さくな口調で、妙に自信たっぷりな口調だけれど、その前に『不戦』だから戦つてはいけないのでは。

私の疑問に答える様に、雄吾がかぶりを振った。

「戦争を起こさないようにするのが、同盟の目的だ。だがな、戦っていないわけではないぞ。『不戦』とは戦争否定の意味ではない。実際には戦わなければ、領地など守れん。それは、この世界であるうと元の世界であるうと同じだ」

「ユーゴもつと具体例を上げなきゃ、わかりにくいわよ」

リーダーである悠が、先程までの綺麗な笑みを消して、真剣な瞳に変わった。整った顔から笑みが消えると、なにか迫力がある。

私も思わず、背筋を正してしまふ。

「自分を守れないなら攻められても文句は言えないわ。それが世の中でしょう?」

「そう、でしょうか……」

そんな弱肉強食の世界なんだろうか。戦いたくないって思っているのは駄目なんだろうか。

私の不満気な返事を気にした風もなく、悠は続けた。

「そうね……例えば、貴重品は必ず身につけるとか。インターネットでは実名や住所、電話番号などの個人情報安易に渡さないとか。こういうのって、やって当たり前自己防衛よね。そんなこともせずに被害にあったからって、誰が哀れんでくれるのかしら?きつと、『身を守らなかつたお前も悪い』って言われちゃうわ。」

雄吾が言ったのは、そういった最低限の自己防衛のために、戦争以外の手段で戦っていると言っことよ」

「戦争以外の手段って何ですか」

問うと悠は真面目な表情を崩し、ひょいと肩をすくめて見せた。

「簡単なことよ。他国や他領地が攻めにくい領地にしてしまえばいいの。アタシを含め、ここにいる5人の領地はみんなそうしているわ」

「みや……。……。カノ、俺の領地について話したことを、覚えているか」

隆人に聞かれたので、もちろんと頷いた。この世界に来たばかりの時、隆人が話してくれた。

「隆人が『僧侶』だから、医療が発達してて、女神信仰が盛んな聖地だよ。国名に聖なんて文字がついてるのも、多分そのためだよ？」

「そうだ。この世界に出回っている医薬品の8割が俺の国で作られている。山や海、自然に囲まれた島国だから、貴重な薬草などが多くてな。さらに恵まれない地域や疫病の多い領地などに、優秀な医者も派遣している。」

もし仮に、同盟仲間が敵国に攻められたなら、俺はその敵国に対して、医薬品を売らないし、医者も派遣もしない」

あたしも、と傍から細かいがよく通る声が隆人の後を追った。沙耶だ。

「あたしも……売らない。仲間が攻められたら……。クリス領が、頑張って作った食べ物……。そんな人達には、売らない……」

「沙耶の領地は、食べ物を作ってるの？」

「そう……たくさん。あたし、『盗賊』で……戦ったことは、ないけど、ステータス、STR（攻撃）を高くしたの……」

ぼつぼつした説明を、いままでの知識を総動員して頭の中で整理する。

沙耶は人間だから、商工業が得意な種族。伸びやすいステータスは、確かDEX（器用）とLUC（運）だ。伸びやすいといっても、それほど顕著ではなく、少しだけらしい。その代わり、特別伸びにくいステータスもないという。

そして職業は『盗賊』と言っていた。『盗賊』の特徴は、攻略本

で読んだことがある。

『盗賊』だと、早い時期から建てられる建築物は、LUCに影響される酒場などの娯楽系や、STRに影響される農業系だ。STR（攻撃）が農業というのは掴みにくいイメージだが、攻撃力という意味よりも、実際には力という意味が大きいらしい。

まとめると、

「つまり人間だけどSTRを優先して上げて、『盗賊』のおかげで早くから作れる農業系に力を注いだ、ってこと？」

「……うん。そう」

正解を出せた私に、隆人もほつとしたように笑った。

「なんだ、ちゃんと勉強できているな。サヤの領地は、種族よりも職業に合わせて発展させたということだ。人間族ならば、種族によるステータスの伸びやすさ伸びにくさは、多少のことだから、そんな風にもできる。『初心者ならば、人間族が使いやすい』とゲームで言われていたくらいだ。

その代わり、獣人族やエルフィン族のように突出した能力を發揮しにくい器用貧乏とも言われるがな。

ちなみにサヤは、伸びやすいDEXもちゃっかり上げて、食物の加工業も発展しているぞ。特に保存の効くものは、クリス領産のものが世界の市場どこにでも出回り、大部分を占めているはずだ。職業と種族の組み合わせを上手く活かした」

「おいしいもの……食べたかったの……。でも、仲間……ひどいことしたら売ってあげない」

きゅつと口を引き結んで、沙耶が決意のほどを表した。そんな顔をして怖くはないけれど、真剣さは伝わってくる。

沙耶の肩を悠がそつと叩いた。

「そうね。アタシも売ってあげないわ」

「悠のシン八領は、何か作ってるんですか？」

「ええ。アタシの職業は教えてなかったわね。ユーゴと同じ『狩人』よ。『狩人』は、DEXに関する市場や鍛冶屋なんかの商工業と、AGI（速さ）に影響される既舎なんかの移動系の建物を早く建てれるわね。アタシのステータスは、DEXとLUCを上げたけど。さて、アタシの領地の特徴は何かわかるかしら？」

いたずらっぽく目を輝かせて悠が問題を出した。

男性だとわかってても魅力的なその顔に緊張して、私は思わずそのまま答えた。

「娯楽工業？」

「……う、うーん、そんな言葉あるのかしら？ 正解は、工業製品よ。でもね、ただモノを作ってるだけじゃあないの。LUCを上げて娯楽系の建築物のランクをどんどん上げて、みんなのセンスを磨いたのよ。」

かつこよく言ってしまうえば、工芸品ってところかしら。デザインや装飾を凝ったり、または機能性重視したり。色んなモノを生産しているのよ。もちろん日用品から楽器なんていうものまでね。

でも、他国への切り札になるのは、きっとアタシ達の作る武器や防具ね」

「武器……」

「敵に回すと厄介って、言ったでしょう？」

私が息を飲むとと、悠は上品で丈夫そうな扇子で口元を覆って目を細めた。

「センスの良い職人や、腕のいい武器職人がたくさん暮らしている

のよ、アタシの領地には。他と比べ物にならない精度の武器を作れる人もね。

まあ、アタシはエルフィンだからDEXやLUCを伸ばすのにはかなり時間が掛っちゃったけど、元々ゲームやっていたから覚悟の上だったわ」

だが、と雄吾が説明を引き継いだ。

「だが、モノを売らないと言ったところで、市場に出回ってれば意味がない。市を掌握できていなければならん。それをしているのが、わしの領地だ。2つの大陸と海を挟むわしのキトー領は、物流市場の拠点だからな。

わしはこやつらのように、面倒くさい組み合わせはしておらん。シンプルだ。人間族のDEXとAGIの伸びやすさそのまま使って、『狩人』が早く作れる市場と運送業に力を入れただけだ」

雄吾は青い台の上に腕を組み、シンプル・イズ・ザ・ベストとばかりに、説明もシンプルにこなした。

悠は、そんな雄吾を呆れた表情で迎えた。

「確かにシンプルだけど、だからこそ難しいのよ。やろうと思えば誰でもできる特徴だからこそ、ユーゴみたいに他の領地の市や物流まで掌握しにくいんじゃないの。」

まあ、元の世界にいた時から似たようなことやってたっていうし、経験からくる実力でしようけど」

「経験、ですか？」

「そうよ。カノ、実はあのユーゴって日本じゃかなり大物だったらしいわよ」

雄吾の皺ひとつ一つから発散される貫録は、その大物としての過

去から来るのだろうか。

雄吾は褒められても嬉しそうな顔を全く見せなかった。

「ふん。4領の特色はこんなものだ。同盟仲間であれば、どんな小さい領地に手を出されても、わしらのこの対応を受けるはめになる。医療、食料、工芸品から武器までも手に入らなくなる。」

もちろん、わしの領地自体も力を貸すから、敵国の市場も機能させぬ。だが、それだけでは足りん。大きな力は敵からは魅力や不安にも見えてしまうからな。そこでストッパーとして、さらにシンのトーン領だ」

「はいはい。起きてるよー」

ひらりと手を上げた芯に再び注目が集まる。ずっと黙っていたけれど今度は寝ていなかった。

「見ての通り獣人で『戦士』だから、強い人が多いんだ、ウチは「戦力、ってことですか？」

「まあね。ウチの領地は山の中でちっぽけだけど、その周りの山脈はすごいよ。強い魔物の住処だし、山道は険しいし、麓に広がる森は迷宮だし。」

でもそんなところだから、世界中から腕の立つ冒険者が集まるんだ。もちろんウチの領民も屈強の冒険者たちばかりだよ。強いのはもちろん、危険なんて慣れっこだから度胸もある。」

けど、兵士みたいな軍隊戦闘はやったことないから、苦手なんじゃないかな。そういうのが得意なのはヴァルデー王国で、俺達が強いのは少数精鋭一騎討ち。」

ちなみに、強い魔物を倒すだけじゃなくて捕まえる冒険者もたくさんいる。そいつらの強さも合わせれば、自分で言うのもあれだけど、すごいよ。」

実際に戦争で戦ったことは無いけど、これだけ力を見せつけてお

くと、敵への牽制になるかも」

雄吾が市場を管理し、悠と沙耶と隆人がそれぞれの得意分野で相手を困らせ、芯がその戦力で睨みを利かせる。

領地の力自体で、領地を守る。これが、不戦同盟の戦い方なんだ。言うのは容易いが、それをできているからこそその同盟リーダーなんだろう。自分の領地について堂々と語れる5人に、気後れしそうだ。

私は、こんなふうになれるのか。こんな特別な人達の横にいられるのか。

こっさりスカート裾握っていると、悠が察したのか、大丈夫よと言葉をくれた。

「貴女の領地は、アタシ達が守ってあげる。だから安心して発展して頂戴。けどね、その代わり、いつかは守れる側になって欲しいの。何年先でも、何十年先でも構わないから」

「……はい」

「それに、アタシの決めた同盟ルールがあつてね。実は、レベルが20以下の領主には特別な手助けがあるの。まだ右も左もわからないでしょ？」

だから、新米さんには師匠をつけることにしてるのよ」

「し、師匠って、領主の？」

初耳だ。確かに手助けは欲しい。喉から手がでるほど。それは、ヴァルルーデ王国への対策に悩んだときに痛感した。

領民は大事だ。けれど、領民を守るために言えないことがあるときは、誰かに相談したい。助言が欲しいとずっと思っていた。

私が一人前なら自分で判断できるかもしれない。けれど、まだ知らないことばかりの状況で、誰に相談してよいか分らないのは、辛

かった。

わずかな時間だけど領主をやってわかったことがある。
領主って、孤独なんだ。

「ふふ、カノって本当に気持ちが悪くて尻尾にでちゃうのね。何考え
てるか大体わかったわ。シンはそんなことないのね。
期待に添えるか分らないけど、貴女の師匠はシンにするわ。いい
でしょうシン？」

「俺への確認は後なの。まあ、予想してたけど。いーよ」

芯は驚きもせずすんなり許可した。

「同じ獣人だから、領民の反発もないし、種族同士の悩みも分るわ。
これ見よがしに同盟の戦力が師匠としてカノに近ければ、ヴァル
デ王国も考えるでしょうし。」

良い人選だと思うけど、どうかしらリユート」

話を向けられた、隆人の顔がひくついた。

「異論無しだ。だが……なぜ、わざわざ俺に聞く？」

「あら、決まってるじゃない。ねえ？」

くすくすという笑いは悠と沙耶のものだ。美女二人は何が面白い
のかとても楽しそう。

笑いをおさめながら、最後に悠は私に向かった。

「師匠はシンよ。いいわね？」

「はい！」

緑の同盟旗が掲げられた白い祭壇に私の返事がよく響いた。

20話（後書き）

たいへんお待たせいたしました。すみません！

そして長々と説明回本当にごめんなさい。読むのもたいへんだと思います。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

さて、これでかなりゲームシステムは出そろったので、システム用語説明を登場人物説明のようにアップしようと思います。

分からないときは、ご覧くださいませ。

21話

長い一日が終わり、自室に戻った私は、一直線にベッドへダイビング。

「どわっはあ！ 疲れたあー」

こちらのベッドは布を丁寧に重ねてあるものの、スプリングなんてないので、思いつきり体を打つけれど気にしない。

それくらい、疲れ果てていた。ぐったりとうつ伏せになりながら、ふかふかした枕に顔をうずめる。

今日は書類仕事も戦闘もピンチもなかったけれど、緊張しっぱなしでいつも以上に疲れてしまった。

初めての同盟、すごい先輩方、新しい師匠。一度に情報を詰め込まれて、ばんぱんだ。

寝巻にも着替えず寝転がる私に、夜食を持ってきたレーレルが苦笑した。

「お疲れさまでした。もうお休みになれますか？ それでしたら、お夜食は召しあがらないほうが、お体によろしいかと」

レーレルの持つお盆をちらりと眺めて、顔がほころぶのを止められない。

「ううん、ちょっとだけお勉強してから寝るよ。夜食は置いておいてくれるかな」

お勉強とはいっても、参考書片手にかりかりするわけではない。今日貰った世界地図を覚え、各領地の特色などをまとめておきたいのだ。

「無理はならさないでくださいませ。それと、あの、シン様のことなのですが」

レーレルが遠慮がちに切り出した。

体を起こし、ベッドの隅に腰掛ける様に体勢を変えてから、続きを促す。

「芯がどうかした？ 指南役でしばらくミヤイ領で暮らすって説明は、領民たちも納得してたように見えただけど」

師匠になった芯を除く四人は、屋敷を出ると、瞬間移動を使ったのか、一瞬で帰ってしまった。

聞いたところによると、あの瞬間移動は、領主の専用スキルというもので、魔法を使えない職業でも一定のレベルに達すれば習得できるらしい。

ちなみに隆人は『絶対に1人で戦闘するなよ』と何度目かになる念を押して帰っていった。心配症だなあ。

そして残ったのは、私の師匠としてしばらくの間はミヤイ領に留まることになった芯のみだ。

それに関しては、同盟参加の結果報告と芯の紹介として説明し、ちゃんと領民の賛同を得た。

同盟参加の結果については、無事に加盟したこと、『路』ができたこと、年間20万ゴールドについてのみをごく簡単に説明していた。

「はい、それは問題ありません。ではなく、シン様のご滞在中のお

部屋として客室にご案内しましたら、広くて落ち着かないとおっしゃられて」

「広くて嫌って……領主なのに。それで、どうしたの？」

「はあ、屋敷の領民用の空き部屋を見て、ここ使っていないなら使っていないかなとおっしゃって、その部屋でいきなり寝てしまわれました」

マイペースというか、自由な人だなあ、お師匠さん。

帰ろうと思えば、トーノ領に瞬間移動で帰れるので、別段ミヤイ領に泊まる必要はないのだが、行き来するのが面倒くさいらしい。いいのでしょうかと不安がるレーレルに、手を振って、大丈夫だと答える。

「空き部屋に問題はないんだよね？　なら、本人がいつって言うるし、大丈夫でしょ」

「はあ、かしこまりました」

狐耳をへによんとさせ、眉を八の字にしたまま、おやすみなさいませと挨拶してレーレルは退室した。

他の土地のお偉いさまが滞在するということは、初めてなので世話をする人々もとても戸惑っていた。

隆人が来た時は、数人に姿を見られただけで素早く帰って行っただし、ゼオンは身分を隠しているからノーカウント。

芯はそれほど口うるさいタイプには見えないけれど、失礼をしたらと思うと私だって正直戸惑っている。

例えば、仕事をするときに、私は寝室に机やら書類やらを持ち込んでやっている。仕事を見てもらう時に寝室というのは、そこからしてアウトだろう。

「発展どころか、まずは仕事部屋作りからだよねー……」

そこからかと言いたくなるほどの、先の長さに気が遠くなりながらも、いそいそと夜食に手を伸ばした。

自分は冒険者のように野宿もするし、何でも食べることに馴れている。だから客人として扱われるより、ただの居候として扱ってほしい。部屋は空き部屋を借りるし、食事は食堂で普通にとりたい。

翌日開口一番にそう宣言した芯に、私は気が楽になったけれど、領民達はどよめいた。

領民の気持ちはわからないくもない。『無礼講だ！』と言われて本当に無礼にするわけにもいかない。しかし丁寧すぎても不満に思われるかもしれないといったところだ。

それにどうやら、領民にとって芯は、『珍しい獣人領主にしてちゃんと領地を修めている強い憧れの人』らしく、尊敬の的だ。領民達は、むしろ丁寧に扱いたいのではないだろうか。

その辺りの領民の反応は、しばらく芯が暮らすうちにどう変化するのか分らないので、静観しておくことにした。

そして、

「まずは相談なんです。トーノ領では仕事ってどこでやってます？　なんていうか……この屋敷、書齋みたいなのがないから、どこでしていいのか……」

希望どおり食堂で朝食を摂っている芯の向かいに座り、さっそく相談してみた。

芯はテクにかぶりついていた手を止めた。

「ああ、確かに最初に思ったわ。屋敷つて要するに、城みたいなものなのに、執務室っぽいのがないとか、欠陥だらけだ。」

ゲーム時代は、そもそも執務室なんかいらなかったから、設定されてなかったんだらうね」

「あ、芯はゲームやってたんですか」

「言っただけだったわけ。やってたやつた。サヤとユーゴはやってなかったらしいけど。」

ついでに言うておくと、この世界ね、ゲームで設定されてる部分以外は、すごくアバウトだから、気をつけて」

「あ、アバウト？」

寡黙そうに見えてすらすらと話す芯は、説明上手だ。一度水を口に含んで一息ついてから、芯は再び言葉を紡いだ。

「そ。例えば、1つの建築物を建てるためにいくつ材料が必要かなんていう、ゲームに必須の情報は、詳しく作られてるよ。」

けど、今の仕事部屋が無い状況みたいに、ゲームでは考える必要がなかったけれど、実生活では必須の部分って、結構抜けがあったりするわけ。

それでも浴室とかどうしても必要な部分は追加されてるけど、何がまだ抜けてるところがあるんだ」

「地味に困りますね」

「うん。まあ、最初の質問に答えると、俺は自分の生活スペースは領民の部屋にしたよ。それで、最初にもらった馬鹿でかい寝室のベッドを撤去して、そこを仕事部屋にした。」

領民たちが書類整理とかする時に、寝室とかじゃあ困るから」

なるほど、寝室で仕事をするのではなく、寝室を移動させるのか。あの巨大なベッドをどかせば、広い部屋なので、人が良く出入りする程度の広さにはなるだろう。

ついでにベッドを売れば、少しは儲かるかもしれない。

「ま、俺が考えたんじゃないやなくて俺の師匠やってくれたハル力が考えた方法だけだね」

感心する私の顔を見て、芯は得意気に虎模様の尻尾を揺らした。

そうと決まればさっそく仕事部屋を作ろうということと、手早く食事を済ませた。

ベッドをどかし、もう少し大きい机を置いて、さらに住民名簿や資料を置く棚などが必要だ。

屋敷内の管理を仕事にしているレーレルを含む数人を呼んで、計画を話すと、何故か猛反対された。

「いけません！」

レーレルは、普段はおっとりした口調を珍しく荒げている。

「それでは、カノ様のお部屋が！ 領主様にわたくし共と同じ部屋を使わせるなんて、そんなこと」

「いや、私は全然構わないんだけど……」

「いいえ、いけません。……シン様、他にご提案はないのでしょうか？」

困惑気味のレーレル達に問われて、芯はあっさりと答えた。

「ないよ。けど、屋敷がランクアップしたら、屋敷全部も広くなるけど、領主の離れが二階建てになるから、下を仕事部屋にして上を寝室にすれば？ カノが領民を部屋を使うのは一時的ってことにしてさ」

屋敷にランクがあったのを初めて知った。
屋敷ランク2になるには、私のレベルが12になれば良いらしく、
Lv9の私にとってはあと少しだ。
芯の確な指示に、『じゃあそついうことで』と話はまとまり、
ようやく落ち着いて仕事の出来る環境が整いだした。

「カノ様、資材の在庫の件でご報告が」
「入領希望者が30名来ました。どうやら、領主のいない小さな村
から全員が来たようで」
「昨日の狩猟の結果の報告に来ました」
「カノ様、すみません」
「失礼します、領主様」

仕事部屋を決め、領民が用件ごとに気軽に訪ねられるようになって
たと同時に、一気に仕事が増えた。
内容ごとに対応する係でも決めて、結果だけ領主に送る、といっ
たやり方のほうがスマートなのだろうけど、なにせ人手不足なので、
すべての案件が私のところへやってくる。

仕事部屋の前はいつも長蛇の列。

もちろん用件の優先順位があるので、レール達が用件だけ先に
聞いて、優先順位の高いひとから先に仕事部屋へ来れるように手配
してはいる。

領民達の用件を聞いて、返事をし、時には相談して次の方向を決める。

その間に、師匠である芯には、ミヤイ領の現状を把握してもらわなければならない、合間合間でそちらの説明もしながらである。

そんなことを3日間やっていたら、

「ふはは、これが噂の肩コリかー。初めて体験しましたよ……」
「うーんデスクワークの勲章だね」

生まれて初めて肩コリを体験し、お師匠さんに褒められた。

模様替えした仕事部屋は、快適だ。良い風の入る窓際に大きな机が置かれている。作りはしっかりしているものの、ところどころ薄汚れた中古の机だ。そこが私の席。

机の向かいには、ちよっぴり座りやすい2人掛けのソファを持ちこんである。長い間話し合わなければいけないときは、領民がそこに座るのだ。人が来ていないときは、休憩時に私が寝転がることもある。

芯の席は、小さな木のスツールのみだ。本人がどこからか持ち出してきたもので、私の机の横側にちよこんと並んで座ることが多い。壁際には簡単な棚を作ってもらって、攻略本や書類をまとめてあった。羽ペンのインクや、木製のペーパーウェイトなどの文房具も置かれている。

物は少ないながらも、仕事がかどる部屋だ。だからといって、3日間ほぼここに缶詰なのは多少辛いものがあるけれど。

午後の穏やかな風が吹き込む中、各店の一週間分の収支報告を見つつ、腕をばきばきと回す。只今どこにいくら税金をかけるか芯と検討中だ。

税金のかけ方なんて素人の私ができるはずもないので、芯の領地がやっている方法を聞き、参考にしながら使えそうなものを取り入れていくつもりだ。

もちろん税の取り方は、芯自身が考案したわけではなく、芯の師匠である悠に教えてもらったやり方らしい。その悠も自分で考えたわけではなく、既に成立していた他国の方法を参考にしたという。税や法律関係など、必須でありながらゲーム設定で省かれている。曰く『抜けている』部分は、私のような一般人だけでは作れない。師匠制度は、その辺りをフォロワーするために作ったので、経験者であれ初心者であれ、1v20以下の加盟者には師匠がつくのだとか。

教えを受けて、そのやり方を領民に相談し、納得が貰えたら採用、という方式になるだろう。

「肩コリってもっと、肩が痛いとか重いとか想像してましたけど」「けど？」

「実際は、なんかこう、常に肩がつりそうな感じなんです。芯は肩コリないんですか？」

「ないよ。自分の領地にいるときは、よく狩りで体を動かすし、ストレッチや筋トレもしてるから」

がっしりとした腕を曲げて、力瘤を作っで見せてくれた。

芯はいつも仕事部屋にいるわけではなく、たまにふらっと街の様子を見に行ったり、屋敷内の仕事ぶりを観察にいたりしている。

普段気の荒い冒険者たちを領民に持つだけのことはあって、芯自身がとても戦闘に強く、それでいて行動はフリーダムだ。

昨日は、思いつきで領民達の狩猟についていったらしい。やたら大きい魔物を狩ってきていた。

羨ましいことこの上ないが、私は暇がない上に、前回の騒動から絶対に行かせてもらえない。

「最近してないなあ、筋トレ……」

高校生の時は、毎日欠かさずにやっていた習慣が、短期間でいつの間にか抜け落ちていく。

そういえば、私高校生だったんだっけ。しかも大学も決まっていたんだっけ。

こちらに来てから目まぐるしくて忘れていた。懐かしさに思わず手を止めて嘆息をこぼす。

「筋トレなんてしなくても、もっと人手が増えて仕事を分散できるようにすれば、自然に仕事は減るよ。肩こりも治るんじゃない？」
「それが問題なんです。部署ってというか係ってというか、それぞれの要件を取り扱うところを作って分けたいんですけどね。」

でも仕組みが安定するまでは、仕事を分ける方が仕事が増えそう
で」

その仕組みの作り方も当然芯に例を上げてもらっているけれど、人選などを考えると、上手くいくのはまだまだ先だ。

そもそも屋敷などで公共事業に勤めてもらっている人達は、店屋や大工、戦闘職とは違い、手に職のない人々だ。オマケに他の地域から逃げてきたり、故郷が減んだりで、まともな教育を受けておらず、読み書き計算も危うい。

人手が足りないというのは、つまり仕事を任せられる人がまだ少ないということだ。仕事を任せるために、まず教育の必要があるのだ。

私が考え込んでいると、芯は手持ちぶさたなのか、羽ペンでペン回しという無謀なことに挑戦しながら、顔を上げた。

「安定しちゃえば、楽だよ。俺なんか任せつきりだから、ミヤイ領にいても全然平気だし」

「トノ領のほうのお仕事は、本当にいいんですか」

「ウチの領地は大きくないからね。特別問題が起こらなければ多少
いなかったところで何とも。王様のリユートや、市場仕切ってるユ
ーゴならそうはいかないだろうけど。」

ウチくらしいまでの規模の領地なら、領主がしばらくいなくても日
常生活に問題は無い、くらいの仕組みを作つとくのがいいよ」

「ガンバリマス。あの二人はもつとたいへんなんですねー」

「もはや超人だよなー。流石師匠と弟子」

芯はまたペン回しを失敗し、ぽろりと羽ペンを落とした。

羽ペンを見ていた私は、驚いて顔を上げた。

「え、じゃあ、雄吾が隆人の師匠？」

「そうだよ。ユーゴ厳しいからさ、やたらスパルタで教え込んだら
しいね。その時からかな、リユートがユーゴみたいな喋り方になっ
ちやっただのは」

「あはは、そんな経緯が！ 確かに似てます！」

「だろ？ 『しななければ、ならん』とか、そういうお堅い口調！」

芯につられて、声を上げて笑う。笑いながら、こつそり師匠が雄
吾でなくて良かったと思つてしまった。

笑い声が外まで響いたわけではないだろうが、同時に軽く部屋の
扉がノックされた。

「あは、あ、はい、どうぞ」

「どしたの、なんだか楽しそうじゃないかカノちゃん」

ふつくらした体を揺らしながら、部屋に入ってきたのはバルバラ
だった。タヌキの丸っこい尻尾がゆっさゆっさと揺れている。

バルバラさんは孤児院院長になってからというもの、食事は子供
達と摂るので、食堂にはあまり顔を出さない。そのため、しばらく

会っていなかったけれど、今日も元気そうで安心した。

「バルバラさん、怪我はもういいんですか？」

「あっははは、いつの話をしてんだい。とっくに治ってただろ？」

その通りなのだが、バルバラを見ると未だに怪我のイメージが拭えない。

「あ、芯は会うの初めてでしたね。孤児院長をやってもらってる『僧侶』のバルバラさんです。前に一緒に狩りに行って大怪我しました」

黙って尻尾をぶらぶらさせつつ待っていた芯に、バルバラさんを紹介する。

「なるほど。怪我は怖いねー。よろしく」

どこかズレた挨拶をしながら芯が軽くバルバラさんに笑いかけた。真顔でいるときは、声の掛けづらい芯の顔だが、笑顔になった途端にどこか無邪気な顔になる。

そのギャップに照れたのか、バルバラは勢いよく手を振った。

「あたしなんか、シン様がよくしなくてくださいな。困っちゃうまいますよ。」

ところでカノちゃん、ちょっと院について相談があつてね」

「もしかして、子供の数ですか」

「おや、気付いてくれたのかい。さすがにね、多すぎて回らないんだよ。24人もいると。それに多分、これからまた増えるだろ？」

「デスネー……」

孤児24人に対して面倒を見るのは、バルバラの他に2人、つまり合計3人しかいない。

孤児院完成からわずか数日で人数が膨れ上がっている。

領民人口全体は300人と少しだ。そのうち24人が孤児という割合は、かなり大きい。

元々獣人は子供が多く生まれると聞いていた。さらに、この辺りにはまもな獣人領地がなかったり滅んだりした。その影響で孤児が多い。

なぜ体の弱い子供ばかり生き残るのは謎だが。

「ヴァルーデの影響もあるね」

芯がきつぱりと告げた。あっさりと答えをくれそうな人物が横にいた。

「つまり、戦争のせいですか？」

「んー。それもあるんだけどさ、ヴァルーデって獣人おれたちを嫌ってるじゃん。

で、ヴァルーデ国内では扱き使われてる獣人がたくさんいるんだよ。口が悪い人は『奴隷』なんて表現する。流石に実際はそこまでじゃないけど」

「じゃあ、どこまでなんですか」

「食べ物食べさせてもらえなかったり、理由なく殺されて文句が言えないほど酷いってわけじゃない。悪く言えば、家畜みたいな扱いを受けてるわけじゃない。

けど、ヴァルーデの人間とは着るものも食べるものも違うし、教育も受けない。将来は既に決まっっていて、男は大体兵士、女はどこかの豪邸の下働きで一生を終えるって。

あそこは、好戦国だから、兵士が多く必要なんだよ。でも国民を徴兵して、兵士の被害がひどいと、お上が恨まれるじゃん。だから」

だから獣人を使う。

領民には聞くに聞けなかった内容をようやく知ることができた。獣人は国民の数には、入っていないんだ……。そこで、生きていくのに。

内容に胸をつかれながらも、続きを促す。

「そ、それで」

「兵士にしても、ヴァルーデに反意を抱かれてたら使いづらいからね。子供のころから兵士になるべく育てて従順な兵士にしたい、とさらに、裏切らないように人質を取りたい。

だから、職業も生活も自由がないけれど、家族だけは持つことを許されてる。獣人同士で家族をもたせて、子供はやっぱり男なら兵士、女なら下働きに出される。女達　つまり奥さんや娘が人質つてわけ」

芯はわざと軽い調子で素早く説明した。あまり口にしていたい内容ではないし、聞きたい内容でもないからだろう。

そして、バルバラに聞かせたい内容でもない。もちろん、獣人として生きてきたからには、内容は知っているのかもしれないが、敢えて口にしてるところを見せるのは辛い。

「でも、獣人の人数が増えすぎて反乱を起こされても困る。あくまで、人口は人間より下じゃないと何か起きた時対応できないかもしれないからね。多数っていうのは、武器なんだよ。

けど、獣人の出生率は人間よりはるかに高いから、そう上手くいかない。仕方なく、人質や兵士として必要以上の子供は、ある程度育ったら国から追い出される。僅かな食糧だけ与えて。　殺すと、兵士の反感を買うからね」

「それで、親のいない子供が、多い……」

「そ。それでも、ヴァルルーデが子供を放り出してる数に比べると、ミヤイ領に来てる数はかなり少ないけど。ちなみにコレ、二度と説明させないですよ。……気分悪い」

溜息とともに締めくくって、芯が頂垂れた。

兵士や下働きとして一生使われ続けるか、外へ追い出されて僅かな希望を求めて彷徨うか。その2択。

呼吸と声が震える。

「ど、どうして……？ だって、このゲームができたのは12年前って聞きました。なら、12年以上前に、トリップした人なんていないはずでしょう！ 世界そのものが作られてなかったなら！

ヴァルルーデは建国してから長いって聞いたけど、それでも最長12年のはずですよ。なら、一生なんて、そんなたくさんの孤児なんて」

「ヴァルルーデは、建国してから11年目。最初の王様の方針で、建国当時から獣人差別があった。それでもって、11年で獣人おれたちは22歳分老けるんだってば。まあここまで酷くなったのは5年前くらいからだけど」

「あ……」

そうだった。私達にとつて、11年は短い時間じゃなかった。

絶句すると、黙って聞いていたバルバラが苦笑した。

「なにを言ってるのか途中からよくわからなかったけどさ、とりあえず増える子供達、なんとかできないもんかね」

「うーん。トーノ領で引き取ってもいいんだけどな、問題があつてさ」

「問題？」

私とバルバラが揃って首を傾げる。

「ウチの領地、弱肉強食の世界なんだよー。魔物も多いし、厳しい土地だし。子供は全員スパルタ方式で鍛えないと、弱肉強食の世界で生きていないんだわ。」

ミヤイ領に来て、多少顔見知りを見つけたんだけど、あれはウチの領地のスパルタが合わなくて、出て行った人だった。

つまり、えーと、死ぬ気で鍛えられるから、向いてない子供には、辛いと思うよ？ 希望者があればいーけどさー」

そもそも増え続けるのに、2領地で引き取り合っているだけでは、解決にならない。

だからといってヴァルーデ王国をうんぬんできるわけでもない。

「じゃあとりあえず、孤児院を拡大して世話役を増やすか、孤児院を増やす方向しかない、か……」

つぶやきながら、ふと心の隅が考えていたことが、浮かび上がった。そうだ、どうせなら。

勢いよく顔を上げて、芯とバルバラの顔を交互に見つめた。

「どうせなら。まとめちゃいたい！」

「えっと、ごめんよく分らない」

「だからね。子供がこれだけいると、孤児院だけじゃなくて、教育も必要でしょう。」

だったら、今まで教育を受けなくて、働けない大人も、全部ひくるめて教育！ ついでに、手に職つけたり、進路決めさせて職業斡旋できる大きい学校を作りたい！

ついでに孤児や働けなくて屋敷以外に住む場所の無い人のために、

寮つばいものを作って、修学年齢になった孤児を院じゃなくて寮生活にすれば、院の負担が減るでしょ？ 費用はどのみち公費で出すから変わらないし」

意見を求めると、芯は少し考えるように間を置いた。

「教育制度、ね……。学校っていう建築物なら、1v13で建築可能になるから、そんなに遠くはないかな。

俺のそこは、小学校みたいな低い年齢向けの学校にして、最低限の読み書き計算をさせたら、あとは家庭で教育してるけど。

親の後を継ぐってというのがこの世界の基本スタイルらしいから。基本的には商人の子は商人、農家の子は農家の方法を家庭で学んでそうなるね。それ以外になるなら、専門の人に弟子入りする、と昔からそうらしいよ。

けどそうだな、ミヤイ領は放浪や逃亡生活で仕事を持ってない人や孤児が多すぎる。店や職人も少ない状況で大量に弟子入りさせるわけにもいかない」

私は大きく息を吸った。きつとこんなことを提案すれば色んな問題もまた増えるけど、それが私の仕事なんだから構わない。

「だから、まとめちゃう学校を作りたいんです。というか、きつと必要なんです。

将来がなかった子供達に、せつかくなら色んな将来も選ばせてあげたいじゃないですか。

子供から大人まで通えて、寮として生活の場で、学校として勉強の場で、専門学校のように具体的な職業について訓練できる場。

「そんな、学校が」

21話（後書き）

成長が早いという獣人の特徴を悪用されております。書いていて、結構堪えました。

ちなみに今職に就けているのは、だいたいアズサ領出身やトーノ領出身の領民など、領地に定住したことのある人々でしょう。

さて、提案は上手くいくのでしょうか。

22話

浴場のタイルを踏み、中へ進むと、淡い柑橘系の香りが鼻をくすぐった。

この世界では、風呂がつく家なんてものはなく、大きな浴槽を持つのは屋敷の浴場のみだ。

民家などでは、大きめの盥たらいに湯を張って済ませるのが普通だった。建築物のデザインはたいていが中世風なので、もつと風呂設備は整っておらず習慣もないのではと思っていたが、意外にこの世界の人達はお風呂好きらしい。

屋敷から離れて暮らす人でも、3日に一回は浴場に通っていた。もちろん、無料で男女別だ。

当然私も領民と同じ浴場を使うのだけれど、さすがにお風呂場で気を使われるのも困る。少し時間をずらしてこっそり入ることが多かった。

タイル張りの広い部屋は、日本で見る昔ながらの銭湯とは少し違い、部屋の中央に真円の浴槽が設けられている。

当然ながら、シャンプー台や蛇口ではなく、手桶で湯を掬って身体を洗う。

浴槽に浸かる前に体を洗うのがマナーなのは、日本と一緒だ。

安い古布を手ぬぐいのようにして身体を擦っているイリエが、私に気付いて軽く頭を下げた。

「こんばんは。イリエだけ？」

「はい。もう遅い時間ですから」

イリエの横に並んで、石鹸を泡立てながら、ちらりと流し目を送

る。

この世界の戦闘では、魔法で癒せば傷は残らない。イリエの姿を見て、その法則に感謝した。筋張ってはいるものの、玉のような肌には傷一つなかった。

わしゃわしゃと頭をこねる様に洗う。もちろん、獣耳も。最初はどろ洗えば良いのか非常に戸惑ったのだが、今ではすっかり手慣れたしまった。

そして、尻尾も。これが中々困ったもので、私のユキヒヨウの尻尾は長い。黒猫のイリエも短くはないほうなのだが、それよりも長い。

真つすぐ垂らせば、蹠くわくの少し上ほどまで届くこの尻尾は、まるくて太めでもある。毛も多いので、獣人になってからは入浴時間が格段に増えた。

それでもきつと、狼や狐の尻尾よりは手入れが楽なんだろう。

「学校計画のほうは、どうですか」

「建築資材は確保できたかな。あと昼の提案通り、子供は昼間に勉強して、大人は夕方つて分けることにしたよ。勉強で働き手が減るのは、まだウチの領地じゃキツイから」

思い立つたら即行動、善は急げ。思いついてすぐに師匠や領民達を集めて話し合った。まだレベルは9でしかないのですが、実際に建築できるのは先だが、決めておくことは色々である。

領民に意見を求めると、大人でも教育を希望する人が予想より多かった。だが、働き手を昼間に集めては領地の経営が回らないので大人は夜間学校のようなシステムになる。この世界の夜は、電灯の代わりに魔法の光があるので比較的明るく、勉強に支障はないだろう。

ひとまず用意する科目は初等科と呼ぶ。つまり読み書き計算、簡

単な地理と生活のルールのお勉強だ。

泡を洗い流して、滑らないように気をつけながら、湯に浸かった。肩に湯をかけながら、よく揉みほぐす。

「ああー……」

「お疲れですね」

「まあねー。今日のお湯の香り好きだなー。この香りって花？」

「ベルガモットですか。柑橘系の果実ですよ」

透明な湯を手に掬う。入浴剤は入れていないのに、こちらのお風呂は毎日良い香りがした。これは獣人だけにある風習らしく、理由は

「ベルガモットは、ノミ予防、殺菌に効果があるらしいです」
「……そ、そう……」

あんまり聞きたくなかった。愛想笑いを返しながら、ずるずると顎を湯につける。

「あ、リフレッシュ効果もあるらしいですよ」

私の顔を見て、慌ててイリエが付け加えた。

獣耳と尻尾があるということは、もちろんノミや害虫にも気をつけなければいけないわけで。

お湯の香りは、だいたいノミ予防効果のある香りだ。

精油とレーレルは言っていたが、日本で言うアロマオイルのようなものだろう。ユーカリなんて香りもあるらしいけれど、一体この世界のどこにそんな木があるんだか。

「イリエにお願いがあつて、さ」

「はい」

「イリエって読み書き計算、できるよね。夜間の学校の先生、イリエにお願いしたいんだけど……」

「私、ですか？」

軽くストレッチをしていたイリエが手を止めてこちらを見た。

「うん。字も綺麗だし、きりつとしてるから大人でも言う事聞きそ
うだし。自警団の方は、昼間をお願いして。それにね、夜間は人数
が多いから先生が二人くらい必要なんだけど　もう1人を、ゼオ
ンにお願いしようかなって」

怖々と目を合わせると、イリエの形の良い眉に、くつきりと皺が
寄っている。予想通りの反応だ。

「……何故ですか」

「ええと、ゼオンは読み書き計算もちろんできるし、多少は違う地
方の説明もできるし……。なにより魔法が得意だから、そのうち初
等科以外の科目で魔法ができれば、そこでの先生お願いしたくて。

それと　やっぱり、会って話せば、多少は皆との関係も変わる
かなって……」

尻すぼみになりながらブツブツと説明した。

もし初等科の後に科目を新設するとなれば、魔法関係はゼオンに
しかできない。相変らず他の領民との接触は避け、引きこもりがち
なゼオンに、だ。ゼオンにはまだ提案していないけれど。

「それは、わかりました。領民も……人間とはいえ、まあ他大陸の
人間なら、なんとなく嫌ではあつても憎くはありませんから、受け

入れてくれるでしょう。けど、何故そこで私なんです」

「みんな最初はゼオンに話しかけにくいと思うのね。それで本性知ってて、一番気軽に会話が成立してるのってイリエだから、イリエと一緒になら」

「私は、アイツが大嫌いですが」

人間うんぬんではなく、単純に犬猿のなからしい。

「うう、私ができるなら、代わってあげたいけど……」

読み書き計算、それが問題なのだ。まず、使っている文字が違う。暗号のような不思議な形をした文字は、何故か私にも読める。そして、これまた何故か、日本語で文を書こうとすると、手が勝手にこちらの文字で文を書いてくれる。

そのために文字でのやりとりに困ったことはないのだが、自力で習得したわけではないので、他人に教えることができない。

計算にいたっては、どうやら日本とは習い方が違うようだ。九九や筆算などがあるのかも謎である。

地理や生活習慣ならば、教えるどころか私も生徒になりたい。

イリエは、落ち込む私の様子を見て1つ溜息をつき、眉間の皺を解いた。

「何故、私が教育を受けているのか、わかりますか」

黙って首を振ると、イリエは浴槽の隅に頭を預けて、天井を見上げた。

「私は、前にも言いましたが……ヴァルーデ王国の出身です。ヴァルーデに暮らす獣人は、教育を受けさせてもらえません。知恵をつ

けてもらっては困るからでしょう。女である私は、本来兵士ではなくどこかの屋敷の下働きをするはずでした。サーナ達のように」

「……うん」

「けれど、私の家族は父や兄が戦争で亡くなり、母と私だけになってしまいました。女だけで人質としての価値がなくなると、生活は格段に苦しくさせられます。だから、私が兵士になって母を助けようと思ったんです。運が良かったのか、男よりもめきめき強くなりましたけど」

イリエは寂しそうに眼を伏せた。

長話になっても、この世界のお湯はぬるめなので、問題ない。

「そう　男よりよっぽど強くなって、戦に出て。たくさん……『手柄』を立てました。普通、獣人の兵士に昇級はほとんどありません。せいぜい班長程度です。けれど、私は実績のおかげで異例の出世をさせてもらって……」。

その時に、読み書き計算などの知識が必要になるということで、学ばされました」

「そっか……」

「おかげで母も、獣人の中では良い方の生活をした、と思います。滅多に会えなかったので、わかりませんが。少し前に母が病気で亡くなって、私は兵士である理由もなくなりました。『手柄』を立てる理由も」

「それで、ヴァルーデから逃げたの？」

ゆるゆると首を振ったイリエのプラチナブロンドの髪から、少しだけ水滴がはじかれて輝いた。

「いいえ。私は、『手柄』を立ててきたんです。『手柄』って何かわかります？」

「ええと戦で……敵を多く……やっつける……」

しどろもどろの答えに、イリ工先生は苦笑した。

「はつきり言ってくださって構いません。そう、たくさん殺しました。敵である　ヴァルーデ以外の獣人を」

「……でもそれは」

「仕方ないことですか？　いいえ、手を抜いたって良かったはずです。怒られたって生活が苦しくなっただって酷い目にあっただって、そんなことは手を抜かなかつた理由になりません。

……だから母が亡くなって、どうせなら、償おうと思ったんです。私が憎いであろう敵の獣人に、手柄を立ててもらおうって。結局は、敵の獣人に助けられてしまって、今こんな遠くに来てしまったんですけど。　カノ様」

「え、うん」

「私みたいなヤツが、他の人に教えられることなんて、持っていない。殺すことしか、してこなかった。教えられることなんて、何もないんです」

だから教師はできない、と。

ぼちゃりと音を立てて、天井からたまった水滴が落ちてきた。

「イリ工は……ずっと、守ることだけを、してきたんだよ。上手く言えないけど、イリ工はずっとお母さんを守ってきたんでしょう。領地を作る時は、魔物から人を守って、今は、自警団で私達を守ってくれてる。……たくさん、してきてるじゃん。私には、たぶん、できない。できなかつたこと……」

「それは、他を傷つけて、自分のものを守ってるだけです」

「だったらそれを続けてよ！」

自嘲の笑みを浮かべて、イリエは膝を抱えた。私にイリエの苦勞が分るはずもない。

自分で自分を傷つけようとするイリエが、無性に苛立たしくて、するつと私の口から言葉が飛び出た。

「選んで人を傷つけたなら、どうせもう後戻りはできないよ。償いなんてしたって、帰ってこないもん。そんなの自己満足だもん！」

「カノ様……」

「だったら ああ、上手くいえないけどさ！」

開き直って貫くしかないじゃない。その生き方を途中で投げたりしないで。一度は守ることに徹するって決めたなら、私たちの領地を守って、領民の将来を守って」

「開き直る資格なんて、私にはありません」

「そうかもしれないけど、私は開き直れとしか言えないよ。イリエが後悔したり過去に捉われるのは自由だけど、私はイリエ達の未来を作るために、いるんだもん。私には過去はどうにもできない。

何を言われたって私の立場からじゃ、開き直って将来を見てとしか言えないよ……」

力んでいた力を抜いて、くたたりと浴槽にもたれる。

偉そうなことを言えるわけでも説教できるわけでもない。

私がか正論のような綺麗事をいったところでイリエの過去が救われるほど、簡単な過去ではないのだから。

私には多分、無理矢理前を向かせることしかできないんだ。領民には、悲しい過去を持つ人が、たくさんいるはずなのに、何もできないやしない……。

誰にもなく首を振って、頭を切り替え、イリエの碧の瞳をひたと見据えた。

「イリエ、先生になって。教育で皆のこれからを守って。ずっとず

っと守って」

「ふふ……ひどい。ひどい、屁理屈です、それは」

唇の端から笑い声をこぼしてしばし俯くと、イリエは顔を濡れた手で覆い、小さく小さく頷いた。

22話（後書き）

まずは先生ゲット。

きゃっきゃうふふするお風呂場シーンのはずが、なぜか重くてすみません。

尻尾は乾燥とブラッシングも欠かせないのだろうと思います。

ちなみにユキヒヨウの尻尾は本来1メートルくらいあります。さすがにそれだけあると邪魔なので、人間サイズに合わせて尻尾もデフォルメされているよという認識でお願いします。

23話

《テテーン！ テッ、テッ、テッ、テエエーン！！！》

翌日、私がゼオンを口説き落としかけているちょうどその時、
久々のファンファーレが響いた。

妙に恥ずかしいこのファンファーレによって、ついに私は1V1
0だ。

「うわ、びっくりさせんじゃねーよ」

ゼオンは磨いていた杖を取り落としそうになり、慌てて両手でキ
ヤッチしながら文句を投げてきた。

相変わらず怪しげなモノが散乱しているゼオンの部屋だが、今日は
ゼオンも真面目に働いており、商品の杖のチェックをしているらし
い。

「ごめんごめん。でも、レベルアップは突然だからねー。たぶん建
築中だった練兵場1ができたんじゃないかな」

「完成した様子見に行かなくていいのかよ。店じゃなくて練兵場な
ら、お前が責任者だろ」

「うん、後で行くけども。ゼオンが首を縦に振ったらね」

私の今日のお仕事は、ゼオンを先生にすることだ。

朝一番で、まだ寝ていたゼオンに店を開けさせ、お昼直近のいま
でえんえんと先生になれと説得中である。

私の説得に辟易したのか、ゼオンは珍しく仕事なんぞして、俺は
忙しい帰れ、のアピールを始める始末。

「だから俺はやらねえって言ってんだろ」

「ゼオンしかいないって言うてるでしょ。とりあえず、お茶空になったからもう一杯よろしく」

「……お前、俺の家で寛ぐのに慣れてきやがったな……」

マグカップを突き付けると、ゼオンは嫌そうにしながらお茶を淹れ直しに立ち上がった。

意外と押しに弱いということが最近わかってきている。

ゼオンが、何やらゴソゴソと山積みになった本の下からお茶っぱを取り出すのが見える。私はツツコミを入れるべきか悩みながら、軽く薬指の指輪を撫でた。

「ステータス」

見慣れたステータス画面が音もなく立ち上がる。

前回は成長ポイントを使って極端に低かったLUC（運）を上げたので、今回は極端に低いMND（精神）を上げる。

MNDが上がれば、教会1のランクもそのうち上がるだろう。教会を間借りしている孤児院を大きくするためにも、必要なステータスだ。

成長ポイントを10消費して、MNDの値は5つ上昇した。

《ステータス：領地Lv10 領主カノミヤイ、獣人

HP900 / MP83

STR（攻撃）：20

DEF（防御）：29

DEX（器用）：22

AGI（速度）：22

INT（知力）：20
MND（精神）：15
LUC（運）：20

成長ポイント：残り0》

これで、大体のステータスの凸凹が減って来ただろうか。むしろ問題は今後の振り分け方だ。

「建築物」

声と同時にぱつと表示が切り替わった。

《『魔法使い』 建築可能なアイテム

LV9：練兵所1、宿屋1

LV10：本屋1、墓地1》

「ぼ、墓地で……」

果たして墓地は建築物なのか。今まで領地に欠けた人がいなかったたので、気にしたことがなかった。

必須と言われれば必須のものだけれど、あまり使われて欲しくない場所だ。

急務、というわけでもないのに、きっと必要になった時に建築することになるだろう。宗教関係なので、おそらくランクに関係するのはMNDだが、墓地のランクアップってなんだろう。敷地が広がってたくさんの人を埋葬できるとか……。

「あつてほしく、ないなー……」

誰であっても、そんなことにはなつて欲しくない。
ちよっぴりテンションが下がりながら指輪を再びなぞって画面を消すと、ゼオンが振り返った。

「あん？　なんか言ったかよ」

「ううん、なんでもない」

「ほい、茶。それ飲んだらとつとと帰れ」

「ありがとう。ついでに、学校の先生もお願いします」

受け取りながら、さり気なく付け加えるけれど、ゼオンは再び杖を手に取り、忙しいアピールをし出した。手強い。

「ゼオン、どうしてそんなに嫌がるの？」

「俺じゃなくて、領民がそんなの嫌がるだろーが」

「うーん、聞いてみたんだけど、ね。イリエとかレーレルにも。ヴアルーデ王国じゃない人間で、さらにリーシャ帝国みたいな全然別の大陸の人間とかなら、近寄りにくいだけで、憎んでいないって言うてたよ」

「お世辞だろ」

「レーレルはともかく、イリエは何があってもゼオンにお世辞は言わないと思うよ……」

昨日のイリエの様子を思い出してちよっぴりお茶の味が苦く感じられた。

あれは……私が泣かせたことになるんだよな、やっぱり。

最終的には、承諾してくれたけれど、辛い話を思い出させたことには責任を感じてしまう。

「そうだ、言い忘れてたけど、ゼオンの他に夜間担当の先生はもう

一人いるんだ。イリエにお願いしたんだけど」

「お前な……。その情報で俺が先生になりたくなるはずねえだろ」
「でもゼオン、さつきも言ったけど、そのうち魔法関係が科目になつたら、やっぱりゼオンが必要なんだよ。それに、ほら、前に研究の協力者がほしいって言ってたじゃん」

「ああ、あつたな」

「生徒に教えるがてら、研究を手伝わせるってことができるかも、だよ」

現在は私が唯一の獣人『魔法使い』だけれど、これからは領民が『魔法使い』を選択することがあるかもしれない。

私にでも手伝える研究なら、新米『魔法使い』でも問題ないはずだ。一応これが、前に頼まれていたことの解決策だと思つたのだが。

ゼオンは、杖を置き、今度はなにやら本をぱらぱらとめくり、こちらを見ないまま嘆息した。

「確かに、頼みはしたけどよ。お前は獣人の領主だろ？ 俺の頼みなんかより、獣人の方を優先してやれ。嫌われるぞ、領民に」

そう言つて脅すゼオンに、思わずむっとして、真つ向から睨みかえした。

「ゼオン、私はここの領主なんだよ。獣人の イリエやフェレやバルバラさんやレーレルや……皆のための領主だし、ここに住んでる限りはゼオンのための領主でもあるんだよ。」

考えなしに言ってるわけじゃない。私が嫌われるのより、人間っただけで窮屈そうにしている領民がいるほうが、もつと嫌だ！

「先生になるだけで、上手くいくと思えねえよ」

「このまま家に引きこもつても、上手くいくはずがないって思う。きっかけがないと」

睨みあい、そのまましばらく反応を待つと、ゼオンは全く違った問で返してきた。

「……俺が先生に向いてると思うか？」
「うん」

ちょっとチンピラ風で研究や生徒に対し熱心な先生のイメージだ。悪ぶっても根がいい人なところとか、研究に熱心で人に説明するときは生き生きしているところとか。……人づきあいが苦手っぽいところとか。

意外に先生としての人気は出ると思う。何より、魔法の話をして
いる時は、多少は良い人そうに見える。

そう告げると、ゼオンはますます溜息を深くした。ぼさぼさに絡んだ紺の髪を、ばりばりと掻きながら私に背を向ける。

「……帰れ」
「ゼオン」

「制度と校舎が出来てから、また来いよ。俺にも準備があるからな」
二人目の先生は、照れ屋のようだ。

昼間の先生をレーレルにお願いすると、

「やってみたかったです。ありがとうございます」

と即答してもらえた。先の二人とは大違いである。

レーレルがこの出身かは聞いたことがないものの、彼女は読み書き計算、この辺りの地理、多少の礼儀作法まで完璧だ。

今までは、屋敷内で働く人を取りまとめもらったり、私の手伝いをしてもらっていた。レーレルが屋敷の仕事から抜けると少し忙しくなるけれど、頼ってばかりいるわけにもいかない。

先生が揃ったところで、残る問題は制度面とレベルだ。

制度面は、初等科以外の科目や職業教育コースの新設と、学年だ。まず科目が決まらなければ、何学年必要かも判断できないので、後回し。

— 先ず、レベル上げが優先となった。

1v9 辺りから、レベルアップが遅れ始めており、同盟加盟前はむしろ有り難かったけれど、今ではレベルアップはどんどん来てほしいところだ。

良いレベル上げ方法は経験者に聞くべし、というゲームの法則に則って、芯に相談すると、あっさりと回答をもらえた。

「レベル上げ？ 今1v10になったんだよね。それなら簡単。領地を拡大すればオッケー」

それなりに整理されている仕事部屋の本棚から、お馴染みの攻略本を抜き出す。

芯は、勢いよくページをめくり、机の上に大きく開いた。

「ほら、これな。自分の領地に面してる空き地は、好き勝手に自分の領地にしちゃってもいい。ま、やりすぎると他に目つけられたり、管理しきれなかったりするけど、1つくらいならいいでしょ。領地拡大は、かなり経験値が入るから、レベルくらい簡単に上がる。と

りあえず、隣の空き地、自分とこにしちやいなよ」

「そ、そんなに軽いノリでしていいのかな……」

「だいじょーぶだいじょーぶ。学校建てるスペースだって必要なんだしさ。ものは試した、やってごらん」

領地1つ分の大きさは、それほど小さくないため、いくつかの店や住居が建つていても手狭には感じない。

しかしこれから、色々な施設を増やしていけば、いつかは領地を拡大しなければならぬ。先に領地を広げておいて、今後計画的に利用すればいい、というのが師匠の言だ。

翌日さっそく領民に相談し、了承を得た。

正六角形の境界線で囲まれた領地、その北に屋敷がある。屋敷に面した北側の境界線から、1つ分北に領地を拡大することに決めた。

「で、なんでこんなにギャラリーが……」

領地の外 正確には領地北の境界線の外、かつこ悪く言えば屋敷の裏、まだ何も無いすこんと抜けた空き地を眺める。

遠くのなだらかな丘や青い空以外、建物は、何もない。

ただし、大勢の領民達が、老若男女問わずその空き地ではしゃいでいた。

領地拡大のために、若干緊張しながら外へ出た私は、思わず肩をこけさせた。

朝から屋敷がなんとなく静かだと思っていたら、こんなところで遊んでいたのか。

「一応、ここは領地外だから、魔物が出るかもしれないんだけどね！。まあ、領地の傍はあんまり魔物来ないけどさあ」

しょーがないなあ、みんな嬉しそうだなあと芯は苦笑した。苦笑しながら、遊び回る子供達の方へ駆け出して行く。そのまま子供達とすぐに打ち解けて、一緒にコロコロとはしゃぎ出した。一応、師匠は私に領地拡大を教えに来たはずなのだが。

一方で空き地に集まった大人たちはわいわいと世間話などをしながら、領地拡大の時を待っているようだ。ちらほらとお弁当を広げてピクニック気分の人々も見える。

私に気付いた人々は、いよいよかと期待した視線を送ってくれた。私はなんとなく、申し訳なさでいたたまれなくなった。

そんな、お祭りみたいに期待されても。芯から聞いている手順は、予想以上に地味だ。

「も、いいや。やっちゃおう……」

盛り上がっているところ悪いけれど、領地拡大はそんな仰々しいものではない。私だって、さくつとやって帰ろうと思っていたのだ。投げやり気味に、左手を少し持ち上げて、薬指の指輪に触れる。

「領地拡大」

声と同時に、指輪の上に淡く画面が展開した。

> 『領地拡大』 選択マス座標 4 5 6 , 5 4 4 の土地を自領地に追加しますか? <

座標、というのはゲームで位置を示すための数値だったらしい。

横と縦それぞれの数値から位置を割り出す……とかなんとかか。

選択マス、というのは、私が今立っている空き地のことだ。

私は、誰にともなく軽く頷く。

「『はい』」

返事をし、これで終了のはず。

手を下ろそうとしたところで、指輪が鈍く輝いた。

大分この世界にも慣れてきた私は、とっさに指輪から顔を背ける。予想通り、次の瞬間には青い光が突風と共に指輪から放たれた。

光は、膨れるように空き地の隅々へと広がって　ある程度離れたところでぴたりと止まった。そつと顔を上げると、青い光はそのまま空き地の周囲に留まっている。

新しい境界線、だ。

振り向けば、屋敷の裏にあった青い線は、消えている。領地が広がったからだろう。正六角形が二つ上下に並んだ、そんな境界線に変わったのだ。

思ったよりもパフォーマンズになったなと領民達を見やると、彼等は何やら興奮し合って喜んでいた。なにがそんなに嬉しいのだから、昼間からお酒を片手に持っている人までいる。さらに屋敷の窓からは、働いていた人々も手を止めてひよつこりと顔を覗かせている。

《テーン！　テッ、テッ、テッ、テエーン！！！》

ついでに、レベルアップのファンファールのおかげで、盛り上がっている人々がどよめきながらこちらを向いた。

全員の注目を浴びて、ぎこちなく笑い返しながら、そそくさと屋敷に戻る。見られていると、どうにも落ち着いてステ振りができない。

建物の影に入って、完全に視界が途切れたところで、画面を展開。

「ステータス」

《ステータス：領地Lv12 領主カノミヤイ、獣人

HP1002 / MP110

STR (攻撃)	: 24
DEF (防御)	: 34
DEX (器用)	: 26
AGI (速度)	: 26
INT (知力)	: 21
MND (精神)	: 16
LUC (運)	: 22

成長ポイント：残り20》

経験値が多いとは聞いたが、一気に2つレベルアップしている。建物を建てる労力と比べると、簡単すぎて少し切ない。

今回は、孤児院と学校のために、MNDとINTに10ポイントずつ成長ポイントを振り分ける。INT26、MND21になった。そして、建築物の表示に切り替える。

《『魔法使い』建築可能なアイテム

Lv11	: 薬屋1、倉庫1
Lv12	: 屋敷2、民家2
DEF30	: 練兵所2、武器庫1

》

ランク2の建物可能が増えている。どれも魅力的な建築物ばかりだが、資材を気にせず次々に立てることはできない。次のレベルでは、いよいよ学校も建築可能になるのだ。資材の確保と、建築物の優先順位も明確にしなれば。

でもとりあえず今は。

屋敷からちょこつとだけ顔を覗かせると、まだ何も新しい領地で宴会を始める領民達が見えた。日頃は余裕のある生活でないため、働きづめだ。たまには、領民達もこうして楽しんでほしい。しばらく彼等の様子を眺め、領地が広がった喜びの余韻に、私もちよつとだけ浸ってみる。

そのままこつそり屋敷に戻りかけたところで、

「あ、こんなところにいらっしやっただんですか。皆、探していたんです」

「領主様、お久しぶりですー。一緒に飲みましょうよ」

「おや、見つけたのかい。ほら、カノちゃん、うちの子たちと遊んで行っとくれ。どうせ今日はみんな宴会で、仕事になりゃしないよ」

今日は鎧姿ではないイリエと、お店はどうしたのか酔っ払っているサーナ、そして腰あたりにくっついた子供を宥めているバルバラに見つかった。

「ほら、宴会だつてよ。もちろん、参加だよ。あ、ちなみにこの世界のお酒は16歳から飲めるよ」

いつの間にか後ろに立っていた芯にぐいぐいと肩を押される。

「でも、仕事が……。決めることもいっぱい」

「まーまー。そんなに急ぐことはないって。いい？ レベルアップとか、領地拡大とか、楽しめる時に楽しんでおくべきだって。カノは最初から大変だったから忘れちゃったかもしれないけど、こういう最初のころの一つ一つの成長が、ホントが一番面白いんだからさ。楽しもうよ」

ばしんと気合を入れて背を叩かれ、よろめいたところをサーナに腕を組まれた。

兎耳をへによへによさせ、赤い顔をしたサーナに、青空の宴会場へと連行される。どこからか持ち出された古布が地面広げられており、その上に食べ物や飲み物が並んでいる。子供たちにはさすがにお酒ではなく、果物のジュースが振る舞われているようだ。顔見知りの人たちが、こっちこっちと手を振って呼んでくれた。これだけの人が集まっているなら、きっと今ごろメインストリートのお店は軒並み休業中になっていることだろう。

資材も食材も余裕はないけれど、楽しむときには楽しめと師匠に言われ、私もしぶしぶ杯を手にとった。

まだ昼間だというのに次から次へと笑いが起こる。誰かが歌ったり踊ったり、一緒に手を叩いたりしながら、たまには領民と一緒に騒ぐ、こういうのも大事なんだと実感する。領民たちと久々にゆっくりにおしゃべりもできた。

レベルアップや問題解決を焦っていたけれど、どうせやるなら、領主も領民も楽しいほうがいい。

アズサ領の事件以来、少し焦りすぎていたことにふと気付いた。同盟に参加した今は、そんなにキリキリとする必要はないはずだ。ようやく少し、張りつめていた気持ちが緩むのを感じた。

緩めすぎて次の日、初めての二日酔いでベッドに突っ伏すことになっただけれど、たまには皆で楽しむことも、いいかもしれない。いずれは、お祭りやイベントのある領地になったら、嬉しいなと頭の隅で考えていた。

23話（後書き）

>ステータス<

領地Lv12 カノミヤイ、獣人

HP1002/MP110

STR（攻撃）：24

DEF（防御）：34

DEX（器用）：26

AGI（速度）：26

INT（知力）：26

MND（精神）：21

LUC（運）：22

>領地設置建築物<

・ランク1

領主の屋敷、畑、道、民家、市場、鍛冶屋、魔法店、革屋、雑貨屋、
服屋、厩舎、教会、練兵所、宿屋、本屋、墓地、倉庫、薬屋、武器庫

・ランク2

屋敷2、民家2、練兵所2

ゲームで一番わくわくするのは、最初のころの成長ですね。最初
っから不憫&ピンチばかりで張りつめていましたが、そろそろ主人
公も周囲と一緒に楽しみながら頑張ることを思い出せたようです。

金属と金属のぶつかり合う音が、周囲の空気を震わせた。

自分が相手でも無いのに、思わず目をつぶってしまう。おそろおそろ再び目を開けた時には、勝敗は決していた。

「止め！ 勝者ゼフ！」

短く鋭いイリエの声が、審判を下した。

勝者は、疲れを見せながらもガッツポーズをとり、敗者は座り込みながら苦笑している。土の匂いをのせた風が、二人の髪と尻尾を優しく撫でた。

イリエは二人に少しだけ戦闘についてアドバイスを入れると、離れて観戦していた私をくるりと振り返った。

「どう思われますか」

「え？ ……えーと、皆がんばってるね？」

正直なところ、戦闘についての良し悪しなど、初心者私には全くわからなかった。

先日完成した練兵場1、その訓練を見に来たのだ。

練兵場は、自警団の訓練に使われる。ついでに自警団の集会場や休憩所にもなっているらしい。

練兵場自体は、広めのグラウンドに小さな石造の建物がくっついている程度の粗末なものだが、ランク2に改築すればもっと機能的になるだろう。

しかし、現在自警団で働いている戦闘員は40名。さらに、志願して見習いになっているものが、7名なので、今はまだこれくらいの建物でいいのかもしれない。

そのグラウンドで、訓練見学の最後、手合わせを見ていたところだ。

今見せてもらった試合は、見習いで1v5同士の戦いだった。技術面で私から言えることなどないものの、本人たちのやる気がひしひしとは伝わってきた。

勝利したゼフという青年が、兜をとって犬耳を見せながら、礼をした。

「ありがとうございます、領主様」

「うん、がんばってね」

血気盛んな若者だけれど、その仕草は様になっていた。おそらく、イリエあたりには厳しく躰けられているのだろう。

当のイリエは、学校の先生に転職するため、団長の地位を降りなければならぬ。夜間の先生であるため、自警団を辞める必要はないが、さすがに団長との兼任は難しい。

次の団長は、副団長であったフェレだ。

私と並んで観戦していたフェレは、軽く首を振った。

「ゼフ、お前な。こないだ指摘したとこ、直ってないだろ。それじゃ試合で勝てても、実戦じゃ役に立たないぞ。後で特訓しておけ」
「は、はい！ すみません！」

前に一緒に狩りに行った時は、気さくな戦士というイメージだったけれど、副団長としてのフェレは口調こそ柔らかいものの、指導は容赦がなかった。

それはやる気がある見習いたちにとっては、有り難いことである。そのためか、フェレは団員達に慕われているようだった。

これなら、イリエも一安心だろう。

「シン様は、どう見ますか」

イリエの瞳が、私から後ろに立つ芯に移った。
一緒に来ていた芯は、困ったように眉根を寄せ、

「まあ皆、がんばりなよ」

と、私と似ていつつもニュアンスの全く違う言葉を口にした。
暗に、弱すぎ、と言っている。それとも、手ぬるい、だろうか。
日々弱肉強食の世界だという芯の領地から見れば、そう思っても
仕方ないことだ。

芯は、近くに並べてあった武器から、一本の木剣を手にとると、
にやりと唇の端を上げた。

嫌な予感がして、私はじりりと後退りする。
そんな態度に構うことなく、芯は告げる。

「俺達も手合わせしない？」

「どこをどー見ても、私が負けるじゃないですか」

予想通りのお誘いに言い返すと、芯はきょとんと瞬きした。

「そりゃそーだよ。ま、領地もでかくなつたし、カノも身の守り方
くらい覚えとかないとさ。練習、練習」

「そうですけど」

何も、最強の戦士様と手合わせしなくても。
言い返そうとしたところに、

「何でも、外に出かける度に大怪我してるらしいじゃん？」

とどめを刺された。イリエとフェレが横で苦笑いを浮かべている。毎度皆さまにはご心配をおかけしております。

芯の言うことはもつともで、少しは戦えた方が良いはずだ。溜息をついて、諦めを示し、私は並べてある武器から杖を拝借した。

「……お手柔らかに、お願いします」

一歩踏み込めば、相手に攻撃が当たる距離。
一歩下がれば、相手の攻撃をかわせる距離。

どこかで習ったというわけではないが、武道をやっていない私でも間合いというものは知っている。

ただし、この世界の『魔法使い』にとっては、相手の攻撃をかわせる距離でと攻撃をあてられる距離ではイコールではない。『魔法使い』は遠距離攻撃が本分なのだから。

といっても、逃げ場がなくなるほど下がっては、追いつめられた時に反応できない。

逃げ場を残しつつそれなりの間を空けて立つと、芯がふうんという意味深な呟きを落とした。

杖を構えて、戦闘ウィンドウが浮かぶのを目の端で確認する。

「ま、気軽に攻撃してごらんよ。俺HP高いから遠慮しなくていい。後で『僧侶』に治癒魔法かけてもらうから」

「はい……では、遠慮なく」

今現在私ができる中で、威力の高い魔法を思い浮かべる。

威力が高いほど発動は遅い。じりじりと魔法陣が展開するのを見つつ、

「『アクア・ウィップ』！」

杖をかざして、呪文を唱える。

噴き出した水流の鞭が、渦を巻きながら数本にわかれ、四方からうねりつつ芯を襲う。

しかし芯はわずかなステップで全ての鞭をかわし、そのまま前進に転じる。

私もすぐに次に魔法を展開する。今度は威力は小さくとも、発動が早いものを選ぶ。

芯の攻撃が届く位置に踏み込まれたところで、至近距離で雷の下級魔法を放つ。

「『サンダー』」

ひねりのない呪文だが、まさしくその通り、小さな雷撃が、芯に当たる。

芯は避けずにそのまま前進し、木剣を振りかぶる。魔法を放ったばかりの私はすぐに回避することはできない。

当たる　　はずが、芯は木剣を振り下ろせずぴたりと動きを止めた。僅かに震えながら、しかし芯はそこから動けない。ばちばちと耳障りな効果音が耳に届いた。

その隙に私は大きく下がりながら、戦闘ウィンドウを確認する。

芯のHPゲージの横に現れている状態異常は、『麻痺』。数秒間相手の動きを止めることができるはず。

今度は時間があるので、威力の高い魔法を展開し始める　　が。

「えっ？」

いつの間にか、芯が目の前に迫っていた。彼のまつげが数えられ

るほど。

胃の浮く、私の苦手なあの浮遊感を覚えると同時に、視界が回転する。

衝撃と背中に土の感触を覚えながら、青空と 私の上静かに突き付けられた木剣が目に入った。

「そこまで!」

イリエの声が遠くから響いた。と同時に、いつの間にか増えていたギャラリーの歓声が聞えた。

「痛たたた……最近、座りっぱなしで弱ってる腰打った……」

ゆっくりと腰を刺激しないように、地面から起き上がる。髪と尻尾からぱらぱらと砂が落ちた。後で洗うのがたいへんそうだなとげんなりする。

耳の毛についた砂をせっせとはらっていると、芯が笑いながら近づいてきた。

「悪い、悪い。ま、後で治癒魔法してもらって」

「はい……」

「あはは、悔しそうだねー」

顔に出ていたようだ。手合わせだろうと訓練だろうと、負ければ悔しい物は悔しい。そして、その負けが自分の誤算から来るものならば、もっと。

「うー……。『麻痺』ついたのに、なんですぐ動けたんですか」

「そりゃ、俺レベル高いもん。相手のAGI（速度）のステータス

が高いと、状態異常の効果は変わる。カノのDEX（器用）が高くなれば、もう少し効果時間は延びるけどね」

とんとんと木剣で肩を叩きながら、芯は感想を述べる。

「まあ、属性と状態異常を組み合わせさせて魔法を使ったのは上出来だけどね。カノLUC（運）は、『魔法使い』にしては高めだから、状態異常の発生確率も低くない。そこを狙ったんだね？」
「そうです。あーあ、状態異常までは上手くいったのに」

魔法の種類は大きく分けて2つ。攻撃魔法と治癒魔法で、これは職業による制限がある。

そして攻撃魔法の中では、さらに属性が5つにわかれ、それぞれ強弱関係がある。

雷や風を扱う風属性。水を操る水属性。炎を生む火属性。植物を発生させる緑属性。地面から攻撃できる地属性。

そして風　つまり雷は水に強く、水は炎に強い。炎は植物に強く、植物は地に強い。地面は雷に強い。

「最初のアクア・ウィップは、攻撃を当てる目的じゃなくて、水属性をつけるため、か。ダメージは出なくても、水しぶきは避けきれないからなあ。で、次のサンダーでの『麻痺』を出やすくした。うん、悪くない。ていうか、よく頑張つて考えたねー」
「……いつまでもネタキャラじゃ嫌ですもん」

毎度大怪我をしていけば、一応戦い方くらいは考えるようにもなる。勝てない敵に出会ったら、『麻痺』で時間を稼いで、逃げるという手段がとれるように。今回は、手合わせなので逃げられないが。

「でも、惜しいかな。逃げる時なら有効かもしれないけど、今回み

たいな時は、もうちょっと他の手段がいいね。状態異常を使うところまでは考えたんだからさ。

逃げられない時は、じわじわ削るって手があるでしょ」

「じわじわ？」

「うん。魔法は普通、遠方から一気に大火力、ていうのがいいんだけどね。一対一で逃げられない上に、強い敵なら、削るしかないでしょ。だから、削る状態異常、とかね」

「あ、火傷とかですか」

「うん、あと緑魔法に、毒とかなかった？　なんか、植物っぽいやつで。それとかね。」

カノはステータスを結構均等に上げてるから、そのうちDEXとLUCも高くなる。そしたら、もっと状態異常も効果的になるんじゃない？」

「なるほど。ありがとうございました。ところで……。」

「この、ギャラリー何」

建物の入口から身を乗り出している団員たちに流し目を送る。軽く20人はいるようだ。

一瞬の出来事だったのに、いつの間にか集まったんだ。観戦していたイリエが、慌てて団員達に駆け寄った。

「お前達、何をしている！　指示した訓練は！」

「も、申し訳ありませんでしたッ！」

粗末な鎧や革鎧に身を包んだ団員たちは、押しあいながら焦ったようにばたばたと建物へ戻っていった。

それを見届けてから、フェレが私に頭を下げた。

「すみません。あいつら、興味津津で。まあ、領主様同士の手合わせなんて、見たくなるのは分るんすけどね」

「ああ、うん、いいんだけど……」

負けたのを見られたのが恥ずかしいだけで、杖を返しながら、バツが悪く感じた。

顔を再び読んだ芯が、気にするなとフェレに手を振った。

「負けず嫌いは悪いことじゃないよ。向上心に繋がるし」
「でも、適わない相手ばかりです」

同盟のリーダー達はもちろん、外のモンスターや……江田などなど。

思い出して、周囲の強さに苦笑を堪え切れない。

「最初はそんなもんだ。むしろ最初から適わない相手にも悔しいって思えるのは大事にしときな。ウチの坊主なんか、俺に適う訳ないって、最初から諦めてる。それじゃあ伸びない」

「はあ、坊主……?」

「ああ、俺の息子」

「息子お!?!」

背後で、がちゃんと音を立てて片づけていた武器が散らばった。

イリエとフェレが驚いて、取り落としたのだ。

その音にむしる芯が驚いた顔をした。

「あれ、言ってなかったっけ。俺、こっちで結婚して子供4人いるんだけど」

「子供、4人!? ああでも、獣人だと普通なんだっけ? え、じやあ芯って一体いつこっちに。ていうか相手はこの世界の? ああつ、全然トーノ領に帰ってませんけど、大丈夫なんですか!?!」

「ま、待って。そんなに聞かれても答えられない」

身を乗り出して問い詰めてしまうと、芯は両手を上げて降参を示した。

「ごめんなさい。驚いて……」

「あはは、驚かせてごめん。俺が来たのは6年前。一番上の息子が5年前に生まれて今10歳ね。そいつがもー、生意気な盛りで困るんだよ。まあ、俺が狩りとかで領地を空けるのはよくあることだから、だいじょーぶ。むしろ、それくらいでダメになる息子じゃ俺の後継ぐ時に困る」

「じゃあ、こつちに来てすぐ結婚……?」

「うん。まあ、あれだ。ノロケてごめん。一目惚れってやつ、かな。こつちの来て最初に会ったのが彼女で、びびびつと来て。で、そのまま求婚した」

「い、異世界トリップの衝撃とかなかったんですか!??」

「いやあ、あつたけど。それより恋に落ちた方が衝撃的で」

照れながら、ぶんぶん尻尾を揺らす芯に啞然とする。

ふ、フリーダムすぎる。恋に落ちる前に色々と他に驚くべきところがあるはずだ。

「え、それでOKされたんですか!??」

「もちろん」

どうやら、相手の人もすごそうだ。現れた領主がいきなり領民女性に求婚して、いったい当時はどんな騒ぎだったのだろう……。

いや、むしろそれが当然なのかと自分の常識を疑い、イリエをフエレに視線を送る。二人は、察して、ふるふると同時に首を振った。芯は、そんな私達の驚きを楽しんで眺めていた。

「恋すると、ほら、領主業も頑張ろうって気になってさ。いいもんだよ。恥ずかしいからこの話題もう終わり。さ、帰ろうよ」

芯はくるりと踵を返して、誤魔化す様に尻尾を勢いよく振りながら出口へ向かった。

そんな芯を見て、彼はこの世界で家族を持って、完全にこの世界に腰を降ろしていることを実感する。

私は練兵場を去る背中を眺めながら、南西にいるもう一人の日本人のことを思い比べていた。

24話（後書き）

ちよっぴり芯をクローズアップ。37歳という年齢からすれば、驚くほどのことでもないかもしれませんが。

火や水といった属性については登場したこともありましたが、せっかくなのできちんと説明してみました。

25話

物の少ない殺風景な教室に、7歳から13歳までの小さな獣人達が集まると、なぜかそれだけで教室が明るくなったような気がした。およそ30人の子供達は、低めの長机で落ちつかなさそうにそれぞれ尻尾を揺らしていた。

それも仕方ないだろう。彼のほとんどが学校というものが何なのか、まだ理解できていないはずだから。

生徒の数人と目が合う。長机の真ん中に座り、無邪気に笑うのは熊獣人のラウラ。端の席で頬杖をついているのは、ようやく盗みの罰が終了したライオン獣人のクルトだ。

長机の並ぶ教室の一番前に立ち子供達を眺めると、胸を圧していた私の緊張は、一瞬ほぐれた。

学校建設を決意してから慌しく半月が過ぎ

資材を揃え、人員を集め、レベル13、14にまでなり、制度を整え、ようやくランク1の小さな校舎と寮（として使われるが正確には宿屋ランク2の建物）を建築できたのが1週間前。

寮に子供の生徒を入れ、一週間子供達が寮生活に慣れるための期間を設けた。

そして一週間後の今日が、いよいよ開校の日だ。

さすがに初日から授業というわけではなく、今日は開校式のみだ。開校式自体も仰々しいものではなく、領主が軽く挨拶をし、先生がこれからの学校生活や制度について説明するというものだった。

これら子供達のために昼間、そして大人の生徒のために夜間と、2回行う予定だ。

領主の挨拶は正直いらないのでと先生陣にお願いしたのだが、最初くらいははじめが必要だと一蹴されてしまった。

半月かかって取り組んだ計画は、この領地初めてのことだ。時間と手間、そして金銭面もかかっているだけあり、領民の期待と私の緊張度は同じ分だけ高まっていた。

そこへ挨拶まで入れられたのだから、獣人の子供達を眺めながらも、私の心臓は気を抜けば口からぼろっと出てしまいそう。

出ないように、というわけではないが、緊張を抑える様に胸の前で手を組んで、私は子供達に向かって口を開いた。

「おはよう。領主の榎乃です。長々と挨拶されると、つまらないだろうから、短めにするね。」

今日から学校ってというのが始まって、皆は生徒って呼ばれるんだ。生徒のここでのお仕事は、色々なことを学んで、元気に育つこと。

それだけなんだけど、私からは1つだけお願いがあつて「

声を一度出すと、話そうと決めていたことがスラスラと零れた。

それをどこか一步離れた所から眺めているような気さえする。

「そう、お願いがあつて。あのね、夢を持ってほしい」

獣人であるために将来がなかった子供達に、色々な将来を選ばせてあげたい。

ふと、教室の後ろ、机のない壁際で見守る、レーレル、ゼオン、イリエら3人の新米先生たちと目があつた。

レーレルはにっこりと目を細め、ゼオンはにやりと唇の端を上げ、イリエは聞く姿勢を少しも崩さず見つめ返してくれた。

辛い過去を持つ人達に、頑張つて未来を見て欲しい。

そのための学校なのだ。半月かけて、ここまでできた。

「なりたい職業とか、具体的なこととかじゃなくてもいいから。これからしたいこと、やりたいことをたくさん考えて。」

そのために、学校を作ったの。本当は、成り行きで領主になった私が、夢なんて語るべきじゃないけど……。

あれ、でも、もしかしたら」

話しながら、緊張の代わりに違うものが込み上げたことに気付いて、言葉が途切れた。

子供達は大きな目をじつと向けながら不思議そうにし、先生陣は僅かに怪訝そうな顔をした。

私は組んでいた手を解いて、自分でも驚きながら、用意していた挨拶を変更する。ゆるゆると顔がほころぶのが分った。

「今、気付いたかも。私の夢。」

苦勞してきた皆が、自分で幸せな将来を選ぶ場所。辛いことがあっても、前も向いて頑張れる場所。

そんなところが作りたいって思ってたの。その第一弾が、この学校なんだけど、ミヤイ領も、そんな場所にしたい。

それ自体が、私の夢だったみたい。

うん、皆の夢を叶えられるような領地にするから。だから、皆も、安心して夢を持ってね。

学校生活、がんばってください」

思いつきで喋ったので、途切れ途切れの挨拶になってしまったけれど、にっこり笑って一礼し、すたすたと教室の隅へ移動した。

入れ替わりにレーレルが教室の前へと進んでいく。学校生活の説明に入るのだ。

ゼオンとイリエの傍に並ぶと、こっそり2人が話しかけてきた。

2人は夜間の授業担当だが、初日だけは様子を見に昼間も来ている。

先生になったとはいえ、ゼオンは相変わらず布や飾りの多い服を着ていたが、さすがに普段ボサボサの長髪は整えられていた。

「お前、途中から思いつきで喋つたら」

「う、なんか思いついちゃったんだもん。流されて領主やってきたようなもんだけど、いつの間にか私も目標ができてたかなって」

最初はとりあえずこの世界で生活するために領主になって。

領民と仲良くなりながら頑張ってるうちに大事に思えるようになって。そのうちヴァルーデ王国やらアズサ領事件やらバタバタしていたので、自分がどんな領主になりたいか、皆がどうやって暮らして欲しいかなんて具体的には考えてなかった。

けれど、最近発展させながら、いつの間にか目標が定まっていた気がする。

ゲームをクリアするのが目的じゃないなら、貴方のこの世界で生きる目的はっ、目標は、何なんです！

思い出して、苦い笑みがこぼれた。江田に以前受けた質問を、今ならはつきり答えられるだろう。

そんな私に構わず、ゼオンは教室の様子を眺めて、

「ま、いいんじゃないの」

と呟いた。それは挨拶が良かったのか、目標が良かったのかどっちなんだろう。

考えていると、イリエが眉を吊りあげた。

「貴様、もし生徒が夢を語った時にそんな態度は取るなよ。馬鹿にしていると思われるぞ」

「別に悪いこと言ってるねえだろ。じゃあお前はなんて言うんだよ」

「『応援する』と言えればいいんだ。応援しています、カノ様」

最後だけ笑みを浮かべてイリエは私の方を向いた。

「あ、有難う、イリエ」

今日からは鎧姿ではないイリエだが、その凄みの怖さと笑顔の綺麗さは変わらない。

ゼオンが呆れたようにイリエから一步離れた。

「お前こそ、その人によって態度変えるのよくねーぜ。生徒にやったら依怙贖肩だろーが」

「はっ。大事な生徒にやるはずがないだろう」

確かに、イリエはゼオン以外には親切かつ礼儀正しい。親しい人に対しては面倒見も良い。

ゼオンに対しては、今、鼻で笑ったけど……。

「あ、あのー。先生同士も、仲良くお願いね？」

ピリピリした空気を宥める様に言うと、

「努力します」

「できればな」

同時に玉虫色の返事を返してくれた。

予想通りの反応に諦めて、後は大人しくレーレルの話に耳を傾け

た。

「皆は今日から、3日に一回学校へ来て、お勉強します。
7、8歳の子は、これから3年間。9、10歳の子は、2年間。
11、12歳の子は1年間、この教室でお勉強です。難しい言葉で
言うと、初等科といいます」

柔らかく穏やかな声が、制度についての説明を続けていた。

8歳になる年の初めに入学し12歳になる年の終わり（1年で2
つ歳を取るため、13歳もいる）に修了する3年間の初等課程だ。
はつきりいつて小学校そのものだが、家業の手伝いなどでこちら
の子供は毎日学校に通えるわけではない。そのため3日に1日の開
校となっていた。

12歳であるクルト達のように最初から最終学年である場合は1
年しか通えないが、望めば、夜間学校の方で大人に混じって勉強を
続けられるようにするつもりだ。

「ここでのお勉強が終わったら、それぞれなりたい職業……お仕事
を選んで、さらに3年間そのお仕事のためのお勉強をします。この
3年間は、難しい言葉で、専門科といいます。

これも終えたら、いよいよそのお仕事で働くことができ、皆は
大人になります。専門科については、また今度詳しく説明しますね
今日は、まず皆がこの学校で守っていくルールを」

幼い子供はきよとんとしながら話を聞き、少し大きい12、13
歳の子供達は真剣に説明を受けていた。椅子からこぼれる小さな尻
尾達や、後ろからでも見える耳の動きでそれがわかる。

微笑ましくて、思わずくすりと笑いをこぼすと、ゼオンが正解だ
つたなと口を開いた。

「正解って、何が？」

「1週間先に寮を開きといて正解だって話だ。普通、学校なんてものに通ったことのねえ子供が、こんなに行儀良く椅子に座って話を聞き続けられねえよ。ちゃんと寮でしつけてもらったんだろ」

「そういうものなの？」

寮に入っているのは就学年齢に達した孤児や生活の苦しい子供だ。生徒30人中20人が、寮で暮らし始めている。料理や子供達の生活面倒を見る世話係に4人雇っているけれど、ちゃんと暮らせているらしい。

「特に、チビと12、13歳あたりはな。間の年だと割と大人しいもんだが、チビ達は椅子に座ってるだけでも偉いもんだぜ」

「年上のほうの子達は？」

「やんちゃで大人の言う事聞かなくなる年だからな。座れって言えば、『なんで座らなきゃいけねんだよ』とか言ったりしてな」

「な、なるほど、やけに具体的な例をありがとう……。ゼオン、子供達の面倒とか見たことあるの？」

やけにしたり顔で解説するゼオンに首を傾げる。

ゼオンは、私の視線に気づいて、墓穴を掘ったという苦い顔をした。せつかく綺麗に整えてある紺の髪をがりがりとかく。

「……昔な。小さいヤツらにも魔法教えてた」

「と、いうことは大人にも？」

「……まあな。教えつつ、研究手伝わせたり、な」

つまり、これからの計画と同じように先生をしていたと。

「じゃあ、ひよっとして私が先生に任命したのって、すごく適任な

んじゃ」

「適任だったら最初から引き受けてるっての」

ならばどうして、と聞きたかったが、腕を組んで目を伏せたゼオンは、話したくないというオーラを放っていた。

以前に何か嫌なことでもあったんだろうか。

興味はあるものさすがにそこまで踏み込んで聞くのも憚られる。その後は、私語を慎んで教室の様子を眺め、滞りなく昼間の開校式は終わった。

「初等科3年間で習うべきことを、貴方達夜間の方には1年で習得してもらおう。読み書き計算など、全て、生きていく上で必須になる知識だ。この1年で無事に習得できたなら、希望者は職業訓練を行う専門科に進むことができる。既に職を持っている人は、1年の初等科のみで学校を卒業だ」

「ちなみに、1年で習得できなかつたら、昼間のガキンちよどもと一緒に授業受けさせるから、死ぬ気でがんばれよ」

「ゼオン、嘘をつくな、？を！ 1年経っても習得できなかつたものについては、もう1年だけ学校で学ぶことが許される。だが、2年経っても習得できない場合は救済措置はない。厳しいと思われるかもしれないが、こちらも遊び半分で作っているわけではない。やる気のないものには、知識は習得できず、職業にもつけないものと思え」

「イリエはこう言ってるけど、まあ一応やる気のある奴は、バック

アップするから、安心しとけよ」

ほのぼのとした昼間とは雰囲気的全く違う、イリエとゼオンの身が引き締まるような説明が続いていた。

昼間よりも少しかしこまった挨拶を終えた私は、教室の後ろからひやひやしながらそれを眺めている。

今まで教育を受けられなかった13歳以上の希望者が対象であるため、昼間よりも生徒は多く60人ほどいる。生徒数が多いため、昼間とは別の教室だ。扇形に広がった教室は、中学高校の教室ではなく、入試で訪れた大学の講義室を思わせる形をしていた。夜間ということ、部屋の中央にはミラーボールのような魔法の照明がつけられている。水鏡ほどではないものの魔法を発動させる道具は基本的に高価だったが、学校を開くことで、領民達に将来の選択肢が増えるならば、決して無駄な費用ではないはずだ。

生徒達は、既に職を持っていても教育がなく、下働きでしか働けない人や、手に職はあるものの勉強をしてみたいという人など、それぞれ様々な事情を抱えている。

顔見知りもちらほらと生徒の中に混ざって

「ちよ、師匠！」

椅子にふんぞり返るあり得ない生徒を見た。小声で密かに叫んでから、こっそりと彼の席に近付き、後ろから肩を叩いた。

「芯！ なにやってるんですか！ なんで生徒になってるの!？」

「ん？ あーカノ。挨拶御苦労さま。意外に様になってたじゃん」

「ありがとうございます　じゃなくて！」

「あはは、今のツッコミいいタイミングだ」

芯はにこにこしながら生徒たちの席にしっかりと座っていた。相

変わらず自由すぎる。

芯の顔を知っている他の生徒達は、不思議そうな顔をしながらちらちらとこちらを眺めていた。

「昼間にいないなと思ったら、こんなところで遊んでないでくださいよ！」

「いやいや視察つてとこで。やつぱほら、生徒の立場からね」

「だからって本当に生徒になる人はいませんよ普通。これから夜間学校に通う気ですか……」

「んにゃ、まさかー。そこまで暇じゃない。けど、たまに見にこようかなつて。カノは忙しくて来れないでしょ」

確かに、当分は気になるものの、忙しくて学校に来ることはなかなかできないだろう。

しかしそれにしただって余所のお偉い領主様を生徒にしてもいいのだろうか。仕方なく、私は切り札を持ち出した。

「……先生達の許可、とってくださいるなら」

「げ、くれるわけないじゃん。あの2人が」

「生徒になるなら先生の言うことは聞かないとダメですからね」

「えー……」

芯は不満気に溜息をついた。教壇に立つイリエとゼオンを見やる。

「初等科については以上だ。専門科の説明に移るが質問はないかな？ ないな。では、専門科についてだ。専門科では、3年間の職業訓練を行うために、細かくコースをわけろ。

大きく分ければ、戦闘員、農業、工業、商業、それと先生や役人になるための高等学問、この4つだ。それぞれの課程を修了すれば、そのまま仕事に斡旋してもらえよう手配する」

「まずは初等科の勉強が終わってないとダメだからな。専門科の開校は、早くても半年後を予定してるぜ。建前ではな。本音は先生不足でしばらく開校は無理らしいぜ」

「本音と建前、両方言ったら意味ないじゃん……」
「ないねー」

思わず説明にこっそりツッコミを入れると、芯はうんうんと頷いた。

実際、専門科の予定が遅れているのだ。そもそも職につける人が少ないから専門科を作っているのに、教える人手が足りているはずがない。

戦闘員コースは自警団見習いとして訓練させることができるが、特に工業、商業コースについては全く目途が立っていないかった。

「見切り発車だねえ」

師匠の厳しく正しい評価に項垂れた。

「う、でもとりあえず初等科だけは早めにやっておいて損はないですもん」

「まあね。で、提案なんだけどさ」

芯が椅子から垂れた尻尾をぶらぶらさせつつ面白そうに笑う。

「なにか解決策が？」

「うん。不戦同盟のシン八領とキトー領から先生ができそうな人を呼んだら？」

「シン八領は、えーと工藝とかですっけ」

「そ。で、キトー領なら、優秀な商人がごろごろいるはず。商業の

拠点だし」

確かに、その2つの領地ならば優秀な人材は豊富に抱えているだろうし、領主に頼めば良い人を推薦してくれるだろう。

けれど、懸念もある。

「でも、わざわざこんな遠くの領地に先生しに来る人なんて、いるんですか？」

復習がてら前に貰った地図を頭の中で思い描き、首を傾げた。シン八領は確か大陸の反対端だ。キトー領にいたっては、別大陸だったはずである。

「そりゃ遠いけど。でもほら、同盟のおかげで一応『路』が繋がってるから安全に来れるし。あとね、シン八領とキトー領を出たいって思ってる人もいるはずなんだ。

あそこはさー、職人とか商人とか、当たり前だけど実力至上主義なんだよね。そうじゃなきゃ良い物なんて作れないし、市場なんて掴めないからさ。実力に従って、地位や名誉が与えられるし、領民達も良い職人や商人になろうと努力する」

「それってダメなんですか？ 頑張ろうってモチベーションになると思うんですけど」

私にとってはそれは自然なことに思えた。

スポーツだって、強い人、成果を上げた人が、先輩後輩に関わらず尊敬されていた。実際に成果を上げている人達は、人一倍努力してきたということでもある。努力に従って評価できるのだから、実力主義とは分りやすく便利だと思っていたのだが。

「ダメってわけじゃないけど。でも、頑張っても上手くないかなかつ

た人もいる。言っちゃ悪いけど、才能の限界ってあるし」

「それは……たしかに……」

「努力すれば、よっぽど苦手な人出ない限りはそこそのところまでいけるみたいだよ。けど、領主お墨付きの職人や商人になるには、それだけじゃ足りない。ハルカやユーゴ達だって、同情なんかで下手な職人や商人抱え込むかわけにもいかない。そんなことしたら、不戦同盟自体を危険にさらすからね。だから、あそこの領地で挫折した人達は、肩身が狭い」

「……シビアですね」

私だって不戦同盟に守られているから、他人事ではない。

芯の領地は、魔物と戦い力をつけるために弱肉強食スパルタがモットーの領地だという。そしてキトー領とシン八領は、実力主義にならざるを得ない。

『不戦』の要であるのだから、それも当然かもしれない。

「でもそうして挫折を味わった人達だからできるってこともある」

「それが、先生ですか？」

「逆にね、トップの天才肌の連中だと、人に物を教えるのは下手だったりするんだよ。つまづいたこととか少ないし、むしろ『どうしてこんな簡単なことができないのか理解できない』って人の方が多い。つまづいたり、悩んだり試行錯誤して乗り越えた人達の方が、他人がつまづく場所がわかるっていいのかな」

「それで、シン八領やキトー領で成功している職人や商人じゃなくて、そういう人達を呼ぶと？」

「うん。基礎は習得できて別領地では通用するけど、シン八領やキトー領みたいなどころでは肩身の狭い思いをしている達人崩れの凡人たち」

「さくつと心をえぐるような表現ですね……」

「ああ、別にそういう人達を馬鹿にしてるわけじゃないよ。彼等だ

からこそ、任せられると思う仕事があるんだから。それを活かせばいい。達人連中なんて教えるの下手だし、プライド高いし、どうせハルカもユーゴも貸してくれない。一子相伝の技とか、門外不出の技法とか言いだすから。適材適所ってやつだよ」

シンハヤキトー領が飛びぬけた技術持つ達人連中を、さすがに同盟仲間だといつても領地外に出す危険は冒さないだろうと芯は説明した。

私の領地に必要なのは、むしろ基本の職業訓練が行える人であるから、達人などでなくても問題はないのだ。

どうやら人材面で希望はあるらしい。

「でも、芯、懸念がもう一つ。シンハ領ならエルフィン族かもしれませんが、キトー領だと、人間が来るんじゃないかなって」

エルフィン族に対して、領民達は別段特別な感情を抱いていないむしろ、この辺りでは滅多に見かけないらしく、悠が来た時はこっそり姿を見てみたいと思っっている人も多かった。

しかしキトー領は、領主の雄吾が人間であるため、人間の数が多い領地のはず。別大陸の人間だから、と領民達はゼオンを渋々受け入れているけれど、さすがに2人以上それでは嫌がられるかもしれない。

「うーん、確かにシンハ領はほとんどエルフィン族しかないね。ただ、キトー領は、物流の拠点だし、大陸同士の窓口でもあるから、人の流れも激しい。人間だけじゃなくて、エルフィン族も獣人もいる。ユーゴのことだから、頼めば獣人の人を推薦してくれると思う」

「じゃあ、最後の心配。……費用面は……？」

「……かかるだろうね。人を派遣してもらった時の旅費と、先生に払うお給料。まあでもそこをケチってたら進まないよ」

「ですよね……」

そう、そこは私がなんとかやりくりするところだ。

ずらりと並ぶ生徒達を見ながら、こっそり祈る。願わくばこの中に、上手いこと財政をやりくりできる人材が生まれますように。

芯は、なにやら片手で指折り数えながら、口を開いた。

「でも、工業商業コースが決まったから、後は……高等学問と戦闘員コースか。高等学問は初等科の発展系だから問題ないとして、戦闘員コースの先生は、ゼオンと自警団だっけ？」

「いえ、自警団と医療知識のある『僧侶』たちですよ」

戦闘員コースとはつまり、『戦士』『狩人』『盗賊』『僧侶』『魔法使い』を指す人達のための専門科だ。

中でも『僧侶』は特殊で、自警団ではなくお医者さんのようなことを任されている。戦闘での傷を癒すなら、普通の傷も治すことを期待されてしまったため、医学や薬の特別な知識が必要なのだ。だから希望者は戦闘訓練ではなく、医療知識のある『僧侶』たちの弟子として訓練を受けてもらう。

「あれ、じゃあ『魔法使い』はどうするのさ」

「戦闘のために『魔法使い』になりたい人は、自警団見習いに参加していくってことですよ。戦闘訓練が必要なんですから。……希望者いないかもしれませんが」

「ふうん。じゃあゼオンは何コースの先生？」

「ゼオンが研究したり教えたがったりしてたのは、魔法を改良した生活系魔法や生活系魔法道具についてなので、工業コースの一分野ですかねえ」

生徒は『魔法使い』になる必要があるものの、その力は戦闘では

なく開発に注がれることになる。戦闘訓練は必要ないので、工業コースだろう。

だが、芯はおかしいかと首を捻った。

「ゼオンってさ、リーシャ帝国のゼオンでしょ？」

さらに声を小さくして、周囲に聞えないようにし、ささやくように質問してくる。

「あ、やっぱり有名なんですか。ええと確か『皇帝妃』の弟、でしたっけ」

本人も嘘かまことか俺は有名なんだと言ってた。

ボソボソと小さな声で肯定すると、芯は躊躇いがちに言葉を紡いだ。

「……一応……立場的に、他国の戦争に対する備えはチェックしてるからね、俺は。……リーシャ帝国は、独自で開発した広範囲攻撃魔法で、色々な戦争に勝って大きくなったんだ」

「魔法の開発ってまさか！」

「うん。それは、『女帝』の弟の研究チームで開発したものだって言われてる。だからってつきり、戦闘員コースだと思ってたんだけど……。今は生活系魔法開発、なの？」

聞かれて、すぐには返事ができなかった。以前、見せてもらった魔法は、確かに地味なものだったはず。

思い返してゆっくりと頷く。

「……そのはず、です」

「なら、いいけど。……一度、ちゃんと彼に話を聞いてみた方がいい

いかもしれないね」

「はい……」

芯は、教壇で慣れたように説明を続ける。ゼオンに視線を戻し、その後は開校式が終わるまで、珍しく無言のままだった。

25話（後書き）

いつの間にやら半月経過レベル14です。細かいステータスは、また今度紹介します。昼間に師匠がいないと思ったら、何故か生徒の席にいました。イリ工達も気づいているけど、開校式中はつっこめないで、後でツツコミを入れたんだと思います。気になってしょうがなかったに違いありません。

瞬間移動を使って、いきなり相手の部屋に乗りこむことは、マナ
ー違反である。また、屋内への瞬間移動は、物や壁に衝突する危険
があるため、緊急時以外は使うべきではない。

領主の屋敷の前、青い光を纏って瞬間移動してきた来訪者を迎え
ながら、芯が隣でそう教えてくれた。

来訪者は、魔法陣が消えると同時に扇子を口元に当て微笑む。

「半月ぶりね、カノ、シン。二人とも元気そうね」

「お久しぶりです。わざわざ来ていただいて、すみません」

「構わないわ。むしろ、いきなりウチに来たシンの方が迷惑よ。先
に水鏡か何かで一言言いなさい」

悠は腕を伸ばして、高いところにある芯の頭を扇子でぺちりと叩
いた。

学校開校から一日。

昨日の芯の提案を受け、さっそく悠と雄吾に手紙を書こうとする
と、芯は『そんなのめんどくさい』と言い残し、いきなりどこかへ
瞬間移動した。

ぎよつとしながらも待っていると、数分後に芯は屋敷の前に何事
もなかったかのように戻った。そのまま、いつもの軽い口調で『ユ
ーゴとハルカんとこ行って話してきた。今からハルカが来るって』
と宣言。

私はともかく、屋敷で働く人々はそれを聞いて飛びあがった。も
てなしなど碌に出来ないが、それでも失礼がないようにしなければ、
と屋敷は一時大混乱である。便利すぎる瞬間移動も困りものだ。

そして芯の言葉通り、悠はすぐに訪れた。刺繍の細かく入った深緑のフリフリドレスを翻して。こういう衣装なども、悠の領地で作られているのだろうかとふと疑問に思う。

「お仕事の都合は、大丈夫でしたか？」

「ええ、平気よ。今日は元々たいして予定が入ってなかったの。ユーゴは忙しいから来れなかったけれど。」

「アタシもユーゴも先生の派遣はもちろん構わないわ。いいの見繕って、送るから。遠いから少し時間が掛っちゃうかもしれないけれど、いいかしら」

「大丈夫です。ありがとうございます！」

勢いよく頭を下げる。快く承諾してもらえて良かった。提案してくれた芯にもお礼を言つと、芯は軽く首を傾けた。

「一言で用事が終わるなら、ハルカは何しに来たんだ？」

「あら、せっかかない天気なんだもの。ミヤイ領を見てみたいわ。」

「この間来た時は、屋敷以外には行けなかったでしょう？」

「そういつわけだから、カノ、これから領地を案内してくれない？」

「あ、えーと、はい」

緊急の用事は特になかったはずだ。今日の予定していた仕事を頭に思い浮かべ、ずらせることを確認してから頷く。

悠は、白くて綺麗な、けれど少し大きめの手を伸ばして、私の手を取った。そのまま何故か手を繋がれる。

「それなら、行きましょう！ あ、シンはお留守番ね」

「へ、何で？」

「女の子同士のお出かけを邪魔しちゃダメなのよ」

悠は得意そうに、空いている方の手を腰に当てた。
芯は気分を害した風もなく、ただ不思議そうに今度は耳を動かした。

「いつも疑問に思ってたんだけど、ハルカは女装した『男』？ それとも心は『女』？ どう扱っていいかイマイチ分らないんだけど」
実は私も気になっていたけれど、なかなか聞けなかった質問だ。

繋がった手の先にある悠の顔を見ると、彼（もしくは彼女）は、可愛い顔に似合わない意味深な笑みを浮かべていた。

「そんなの決まっているじゃない。

気分によって変わるのよ」

「……さいですか」

思えば、友人達と最後に出かけたのはいつだったろう。

元の世界にいた頃は、受験シーズンということもあって、ほとんど遊びには行けなかった。私自身の受験は終わっていたものの、友人達はセンター試験でさえ終わっていなかったのだ。

受験の無かった頃は、部活動があった。筋トレや大会に向けての練習に取り組む日々で、やはりゆっくり遊ぶ暇などなかった。

今だって、悠にとっては視察だろうから、遊びとは言い切れないけれど。

何やら楽しそうな悠に手を引かれながら、少し新鮮な気持ちで領地のメインストリートの石畳を踏む。

エルフィン族である上に豪華なドレス姿とその美貌で、悠は浮きまくっていた。道行く領民達が驚いて振り返るけれど、悠は気にした様子もない。

屋敷から真つすぐ伸びるメインストリート。その両脇にある多くの店を前に、悠はキョロキョロと目移りしていた。

レベルが14まで上がったため、ステータスも上がり、ランク2に改装された店も増えている。

中世ヨーロッパ風なのか、ランク2では石造りに明るい茶色の屋根の建築物が多く、建ち並ぶと綺麗だった。

「結構たくさんお店があるのね。まずはどこから見ようかしら。カノ、お勧めはある？」

「ごめんなさい、お店はあんまり行ったことなくて」

行ったことがあるのは、実は魔法店だけである。建築中の様子を見ていたり、散歩がてら外から眺めてはいたものの、お買い物ものに来る暇などはほとんどなかった。

「そう。じゃあ、まずは無難に市場から行きましようか。場所は分かって？」

「もう少し先です」

数メートル先で道を曲がると、ずらりと露店のひしめき合う通りに出た。

こんなに領地に人がいたのかと驚くほどの人数が集まっていた。簡素な布で作られた天幕が張られ、地面に敷いた布の上には、ありとあらゆる商品が並びんでいる。道の脇には、高く品物が積まれて

いたり、動物が繋がれていたりして、さらに市場の混雑を煽っていた。

週に3日の市場、そこでは地方を渡って行商する商人たちにより、まだ店が出ていない種類の物や、遠い地方からの商品、資材などが売り買いされる。まだまだ物資不足の領地にはかけがえのない機会だ。

仕事や家事の合間に、必ず領民達は訪れているようだった。ついでに市場の開く日と学校のある日は被らないように配慮もしている。

「思ったより賑わってるわ。見たところ、ランク2の市場かしら」
「この前ランク2に改築したので、ちよっと商品や店も豪華になってるらしいです。確かランク1の時は、テントが無かったような…」

「…」
ちらりと眺めたことしかなかったが、ランク1の時は敷物の上に商品が並べてあるだけだったはずだ。また前より、商人の数も増えているようだった。

商人たちの中には、ミヤイ領の領民で、市の日にだけ領地に帰って来る人もいれば、どこの領民でもなく旅を続ける行商人もいる。どちらが増えたのかは正確には良く分らないが、ランク2の宿屋が建ったので、旅の行商人が増えたのかもしれない。

伸びた髭のでっぷりとした商人が、悠と私の姿を見て思わず商品を落とすようになっていた。

やはり、人混みの中でも目立っている。

そもそも獣人の場合、変装してお忍びでお出かけということもできない。耳と尻尾の模様ですぐに領主とばれてしまう。変に隠せば、人間が混ざっていると間違われる恐れもある。

諦めて、堂々とお出かけを楽しむむしかなさそうだ。

「あら！ 美味しそうなジャムね」

いつの間にやら悠はドレスの裾にも構わずしゃがみ込んで、赤いジャムの小瓶を手に取っていた。

「買っんですか？」

「いいえ。アタシは持っているから要らないわ」

ぱつさりと言いきる悠の横で、こっそりもみ手をしていた商人が顔をひきつらせている。申し訳なくて、彼に愛想笑いを送った。

「あー……そういうことは小声で言ったほうがいいよ……」

こちらが領主だから、商人は文句を言えない。そこが可哀そうだ。

「ねえ、見て御覧なさい、カノ。ここに、マークが入っているでしょう？」

「え？ あ、底に……花のマーク……桜？」

悠が持ち上げた瓶の底に、マークの入った紙が貼られていた。ピンクの塗料で描かれた、小さな桜の花の形をしている。赤い中身の色からすると、桜のジャムではないはずだが。

私の疑問を待っていたかのようなタイミングで、悠は口を開く。

「そう、桜よ。このマークは、サヤの領地　クリス領のシンボル。この品は、クリス領から長旅をしてきたのね。ちゃんと『路』が機能しているわ」

「領地にシンボルなんてあるんですか」

「あら、言っただけでなかったかしら。1v20になるとね、自分で付けれるのよ。1v20で初心者保護が消えるけれど、それは同時に初心者卒業の証。一人前の領主として、できることも増えるわ」

「へえ……じゃあ、悠の、シン八領のシンボルは何ですか？」
「私のところも花よ。分りやすいからそうしたの。何か当ててみて頂戴」

フランス人形のような派手な美貌、そのフリフリロングドレス、よくわからないことになっている性別　色々な要素が私の頭を駆け巡り、

「……薔薇」

「ご名答。分りやすいでしょう？　ちなみに、キトー領は天秤、トノ領は交差する斧、聖セルヴィリア国は初級治癒魔法『ヒーリング』の魔法陣ね。ああ、それと覚えておいて損はないわ……ヴァルデー王国は確か王冠がシンボルよ」

悠は教えながら立ち上がり、商人に小銭を手渡した。買ってもらえるとは思っていなかった商人は、驚き、慌てて営業スマイルを貼り付ける。

私も立ち上がりながら、疑問を口にした。

「あれ、買ったんですか？」

「ええ。はい、プレゼント。向こうの大陸でしか採れない木の実なの。食べたことないでしょう？　あげるわ。せっかくだから、後で食べてみて」

「わあ、ありがとうございます！」

無駄遣いはできないものの、実は少し気になっていた。自然に顔が綻ぶ。ついでに尻尾も揺れた。

その後も、あれやこれやと珍しい品を見ては、悠が丁寧に解説をしてくれた。

悠は財布の紐がかなり緩く、ぽいぽい色んなものを買っていた。市場の商人達の好奇と恐れの入り混じった視線が痛い。悠は、薔薇のシンボルのついた商品を見かけると、大陸を渡って自領の生産品が届いていることが嬉しいらしく、それも買っていた。

「自領のものを別の領地で買うつて意味あるんですか？」

「もちろん、ないわ。アタシの領地に帰ればいくらでも売ってるもの。いいじゃない、気分よ、気分。さ、市場の店は一通り覗いたわ。次は、大通りの店に繰り出すわよ！」

「え、ま、待つて待つて」

勢いよく大通りに飛び出した悠が最初に入った店は、サーナの営む服屋だ。まだランク1の店舗であるため、木造の簡素な店構えだけれど、花や手作りの飾りが店を彩っており、女性が入りやすい雰囲気になっている。サーナの努力が垣間見えた。

カウンターで何やら刺繍をしつつ店番をしていたサーナは、珍客を見てぽかんと一瞬口を開け、次いで歓声をあげた。

「きゃあ、いらっしやいませ！」

「サーナ、久しぶり。ごめんね、急に来ちゃって」

「そんな、来ていただけで嬉しいんですよ！ 今日は何かお求めですか？ あ、こちらの方は……」

駆けよってくれるサーナは、ふと私の横の人物に目を移し、その耳と姿に首を傾げた。この辺りにエルフィン族は滅多にいない。

私が説明するよりも速く、悠はサーナに近付き、その手を取った。

「初めまして、サーナちゃん。アタシは大陸西端のシン八領領主ハルカよ。貴女、兎耳つてとっても可愛いわねえ」

可愛いものって大好きよ、と笑う悠に、サーナは気の毒な程目を見開いていた。某ご隠居に印籠を見せられた庶民の気持ちがちょっと分った気がする。

「あ、え、し、失礼しました！」

「あら、いいのよ、アタシ達のことは気にしないで頂戴。それよりも商品を見せてくれるかしら。そうねえ、小物が欲しいのだけど」

おどおどするサーナに優しく話しかけながら、悠はここでもまた何品か手に入れていた。

次に本屋、鍛冶屋、雑貨屋と回りながら、持ちきれないほどの商品を悠は購入し続けた。

抱えきれなくなったところでようやく悠は、疲れた様子を見せた。

「ふう、満足。お腹が空いわね。お昼過ぎになったし、食べてから帰りましょうか」

「良かった……。それなら、ランク1ですが酒場が奥にあったはずです」

酒場は人が多く出入りするためか、ランク1であっても他の店より少し大きく作られていた。

食事自体は領主の屋敷で無料で食べられるため、多くの領民は店で食べたりはしない。一見儲からないようだが、夜はお酒を求め領民達でそれなりに賑わっているらしい。

とはいえ、昼食の時間帯では、店内はがらんとしている。

木製のテーブルと椅子が寂しく並ぶ中へ入ると、悠は壁に貼られたメニューを扇子で示した。

「あのメニューの端から端まで一品ずつ。全部お願いするわ。カノ

も気にしないでたくさん食べてちょうだい。デートなんだもの、奢るわ」

「これ、何のお魚かしら？ 美味しいわ」

「つかぬことをお伺いしますが、悠の、そのドレスってコルセット着けてます？」

「ええ。男の体^{アタシ}に合わせてあるから、特注のものだけね。それがどうかしたかしら」

1つのテーブルでは足りず2つのテーブルをくつつけて、所狭しと並べられた料理を次々に口に放り込むながら、悠は首を傾けた。目で追えぬほどのスピードで次々と皿を制覇していく悠だが、そのスピードでありながらも食べ方が上品なところがまた恐ろしい。高価そうなドレスには、一点のシミも付けていない。

既に私は一皿魚料理を美味しくいただいて、満腹だ。こっそり膨れたお腹を擦りながら、溜息が零れた。

「コルセットとか着けてると、苦しくて物が食べられないって聞いたことあったんですが……嘘だったんですかねえ」

「苦しいわよ？」

と言いながらも、悠はまた1つお皿を空にした。最初は不安げに見守っていた店員も、今は目を見張りながら喜んでいる。私もなんだか喜んでいいるなら、まあ、いいかという気持ちになってきた。

「そうだ、カノ。ステータスを見せてくれる？」

「え？ はい。『ステータス』」

慣れた動作で指輪を擦り、悠が見やすいように手を掲げた。

《ステータス：領地Lv14 領主力ノミヤイ、獣人

HP1132 / MP145

STR (攻撃)	: 28
DEF (防御)	: 40
DEX (器用)	: 30
AGI (速度)	: 30
INT (知力)	: 32
MND (精神)	: 27
LUC (運)	: 24

成長ポイント：残り0 《

また1つ器を綺麗に片づけ、悠はステータス画面を眺めながらなにやら頷いた。

「ありがとう。かなりレベルアップしたわね。DEFが高いのは…
…獣人だから勝手に伸びたの？ INTが高いのは、学校のためかしら」

「一応、そうです」

数値が30を超えると関連する建築物のランク2が建築可能になった。おかげで、練兵場、宿屋、市場などをランク2にすることができた。学校も既にランク2にできるのだが、資材の都合で先送りになっている。次のレベルアップではMNDを30にして、早く孤児院もランクアップさせたいのだが。優先すべき建築物が多くて、中々追いつかないのが現状だ。

何故か悠は、羨ましいわ、と唇を拭いつつのたまった。

「羨ましい、ですか？」

「ええ。だって、アタシのところはそんな大規模な学校なんてやってられないもの。ミヤイ領の学校は、6年間……だいたい12歳分年をとる学校でしょう？」

「ええつと……そうですね」

「エルフィン族でそれをやろうとすると、なんと、24年制の学校になるのよ！ やってられないでしょ」

「……。……そうか、4倍するとそうなりますね」

24年間学校に通うという言葉に顔が引きつった。

こうして、実際に年数の経過を計算してみると、エルフィン族と獣人の成長スピードの違いに、改めて薄ら寒さを覚えてしまう。

「しかも、生徒数も少ないのよ。子供が全然生まれもないんだもの。大規模な学校を建てる意味がないわ。生まれたら、幼いうちの数年だけ初等学校に通わせて、後は家業の手伝いでもしながら、ゆつくり時間をかけて育てるの。」

職人を目指す領民にとっては、いくらでも修行の時間があるから、不便とも言い切れないけれどね」

「それで、長年をかけた熟練の技が出来るんですか」

「ええ。時間だけはたっぷりあるのよ、アタシ達は。……だから夢の途中で挫折した職人たちだって、他の道に進む時間はたっぷりあるはずなの。思いきって他の領地に行くチャンスが与えられて、丁度良かったかもしれないわ。」

「ごちそうさま。美味しかったわ」

話しながらいつの間にか、全ての料理が片付いていた。時間はたっぷりあるといいながら、悠の食べ方が神速の領域だったのは何故

だろう。

代金を受け取った店員が、厨房で大騒ぎする声が店内まで響いてきた。

そちら見やりながら、悠と同時に苦笑した。

「あの、奢っていただいて、ありがとうございました。あと、さっきのジャムも」

「気にしないで頂戴。アタシね、副業でドレスやアクセサリーのデザインなんかもして、かなり稼いでいるの。もちろん、ほとんどは領地の資金につき込むけれど、それでも多少は余るのよ。だからと言って、普段は使う暇もないし」

「わざと……たくさん買ってくれましたよね？」

ミヤイ領に、たくさんのお金を落とそうとするかのように。要らない物まで買ったということはないものの、明らかに買いすぎだった。

恐る恐る聞くと、悠はちゃんと人差し指を唇にあてた。

「そういうところは、口に出しちゃダメよ。……アタシは欲しいものを買っただけ。ミヤイ領を見ておきたかったし。想像していたより活気があって、皆元気そうで安心したわ。シンとも上手くやれているようだし、少しは同盟の名が役に立ってるかしら」

「もちろんです。本当に……ありがとうございます」

改めて頭を下げる。同盟があるから、安心して発展できている。

師匠までつけてくれたから、ようやく初めての計画である学校開設に漕ぎつけた。

まだまだ不安定で問題も多いけれど、これほど心強かったことは無い。

「良かった。……あのね、しばらくは、アタシも暇がなくて直接は来られないだろうから」

悠が、ずっと浮かべていた笑みを消した。悠が真顔になると、その美貌からは、人を圧する空気が出る。

思わず、息を飲んで悠の言葉を待った。

「次に、アタシがこの領地に来る時は、きっと貴女が1v20になる時だと思うの。この調子なら、きつと2、3ヶ月も経てばなると思うわ。」

大丈夫よ、アタシ、数カ月後のミヤイ領を楽しみにしているわ」

26話(後書き)

《ステータス：領地Lv14 領主カノミヤイ、獣人

HP1132 / MP145

STR(攻撃) : 28

DEF(防御) : 40

DEX(器用) : 30

AGI(速度) : 30

INT(知力) : 32

MND(精神) : 27

LUC(運) : 24 《

>領地設置可能建築物<

・ランク1

畑、民家、鍛冶屋、雑貨屋、教会、本屋、墓地、倉庫、薬屋、武器
庫、酒場

・ランク2

屋敷、道、民家、練兵所、市場、鍛冶屋、服屋、魔法店、厩舎、宿屋

3章は、サイドストーリーをあと一本挟んで、終了です。

ここまでお付き合いくださりありがとうございます。まだまだ続きますがよろしく願います。

拍手お礼小話』とある領民の娯楽』(前書き)

拍手お礼になっていた小話です。サーナ視点。時期は、2章の終りから3章にかけて。

拍手お礼小話』とある領民の娯楽』

音程の高い笑い声が、外まで漏れていた。子供達の声だ。

そこに、力強い、なぜか母の暖かみを感じさせるような声加わった。バルバラだろう。

私は荷物を抱え直し、なんだか嬉しくなりながら、小さなオンボロ教会の隣にある木造の民家　孤児院の戸を叩いた。

「バルバラさん、おはようございまーす。服屋のサーナでーす！子供服届けにきましたー！」

「おや、サーナちゃんかい。よく来たね」

扉を勢いよく開けたバルバラが、私の頭をぽんぽんと叩いた。バルバラには、何故かいつも小さい子扱いされる。

不満に思う訳ではないけれど、なんだかちよっぴり釈然としないまま、家の中へお邪魔した。

家の中には、簡素なテーブルと椅子が2つ。

そして、手作りなのか、木製の少し歪んだ小さな机と椅子がたくさん並んでいた。子供達用だろう。

大人用の椅子に座って、遊んでいる子供達を眺めていると、ことりと木製のマグカップが目の前に置かれた。

よっこいせと掛け声をかけて、バルバラが隣の椅子へ座る。

「悪いね、何着も作ってもらった上に、届けてもらって。ホントはあたしが取りに行くべきなんだけどね」

「ううん。お金はカノ様からもらってるし、小さい服作るのも楽しいし。ここの明るい雰囲気も好きだしー」。

そうそう、今回は、女の子男の子、どっちでも着られるものにし

「だから、使いまわしてみて！」
「色々と助かるよ」

領主からの依頼で、孤児院の子供達の服を作らせてもらえるのは、私にとつても有り難かった。

まだ、余裕のない領民たちは、あまり服屋でお金を落としてはくれないのだ。もっと生活必需品から揃えてしまおうし。

何より、私はお客であるバルバラとおしゃべりするのが好きだった。

「あれ、もう一人のお世話の人は？」

「ああ、今買い出しに行ってるよ。今日は市の日だから、買い込まないと。この子ら、すごく食べるんだ」

「増えたもんねー、子供」

「どんどん賑やかになってきちまったよ」

テーブルに頬杖をつきながら、バルバラが子供達を見守る。

5人ほどの子供達は、何やらころころと転げまわっている。どんな遊びなのだろう。体、柔らかいんだな。

でも、前に来た時は、3人しかいなかった。だから急に追加で子供服と言われて、持ってきたのだ。

「ここにゃいないけど、実はもう1人いるよ。とんだ悪ガキだけどね！」

「そっかあ……」。

ねーねー、バルバラさん。噂なんだけどカノ様がまた外でお怪我したって、ホント？」

子供達に聞えないように、ちょっと声を響める。実はこれを聞くのも、ここへ来た目的だったりする。

バルバラは、明らかに嫌なところをつつかれたという顔をした。こげ茶の頭が揺れる。

「あたしゃ、なーんにも知らないよ。今は元気なんだからそれでいいじゃないか」

「バルバラさんって、素直だ。何かあったか、ほら、吐いて楽になったどうよ。ネタは上がってるんだよ！」

「はあ、若い娘って、そういう噂に早いから怖いんだよ……」

溜息をついたので、これは答えがもらえるか！？と思いきや、バルバラはぶるぶると首を振った。

「えー教えてくれないのっ？」

「そのことについてだけは、言えないのさ。口止めされちまったし。ただ、その代わりといっちゃなんだが、例の事について、新しい情報ならあるよ」

ぴつと指を立てて、バルバラは子供達には見せない、にやりとした笑いを見せた。

例の事、といえば私達の間では、あの話題と決まっている。期待に胸が膨らんで、私は木製のマグカップを握り締めた。

「え、え、何なにつ。最新情報！？ 例の2人に新展開の予感！？」「いや、あたしは、カノちゃんがちよっぴり困った状況になったときに」

「うんうん」

「聖王さまとお話しちまったよー！」

「どっしてどっして、何をー！？」

きゃーと黄色声を上げてしまい、子供達がきょとんこちらを見

つめた。

思わず手で口を押さえて、ひそひそ声に戻す。軋む椅子をずらしてバルバラに近寄る。

「で、で？」

「いや水鏡って知ってるだろ。あの馬鹿高いつて有名なやつさ。

カノちゃんつてば、あれを聖王さまから頂いて、よく連絡とってたらしいじゃないか」

「あ、レーレルとイリエが言ってた。それ、すごいよね〜。王様の財力！つてやつ？」

「でさ、あれを使って、カノちゃんのピンチを聖王さまに伝えたのさ。ちよつと助けが欲しくてね。

そしたら、聖王さまの顔が真っ青になったと思った途端

「とたん！？」

焦らす様に一拍置いたバルバラが、肩を震わせた。

「カノちゃんのお部屋に瞬間移動して来たんだよ！

けど慌てすぎたのか、飛んできた来た位置が悪くて、水鏡のあるテーブルに激突！　すごい音立てて、テーブルと水鏡ひっくり返してんのさ」

「えええ、大丈夫なの、それ！」

「いや、痛かったらううよ？　絶対青あざになってるよ。水鏡の水でずぶ濡れだし。一瞬よろめいてたし。

けどね、涙目でぐつと堪えると、そんなことには構わず、あたしに詳しい事情を聞かせるように頼んだのよ」

「うつわ〜、がんばるね〜」。

でも、それ絶対、あれだ。時間の問題だよね！」

「でもさカノちゃんつて、なんだかちよつとそっち方面には、ぼやっとしてないかい？」

あたしや、まだまだかかると思うねー……」
「それはそれで、聞いてておいしい状況だけどー。あ、じゃあ賭けしよ！ いつ、どう発展するか！」
「よし、じゃあレーレルとイリエにも賭けさせようよ。賞品は果物の」

南の方の人間は口にしたくもないくらい大嫌いだけど、別大陸の人間は良い人もいるという。

だから南の人間と他の人間は別種族として捉えている。人間とはいえ、別大陸には嫌悪感もあまりない。

遠い聖セルヴィリア国の聖王様は、人間だけど賢くて優しいと旅の人などからいつも聞かされていたし。

まさか、そんな遠くの有名人がこんなに身近な話題になるとは思っただけだ。

最近の私やバルバラの

いや、年頃の女性領民の大好きなネタは、領主と異国の王様の関係というものなのだ。ときどきである。

このネタは女性領民なら誰でも知っていて当然の娯楽。

領主が気さくな女の子であり、好かれているからこそ楽しめるネタなのだけど。

いやあ、やっぱり噂話ってこういうのが一番楽しい。

次の進展を妄想して、今日もいっぱい働く元気が湧いてきた。

拍手お礼小話『とある領民の娯楽』(後書き)

情報が漏れてるんだよ、どこの話じゃないです。

領民の間ではゴシップとして楽しまれています。筒抜けか……！

まだ娯楽の少ない領地ですので、ゴシップは美味しいおかずになります。

拍手お礼小話『月下老女』(前書き)

お礼小話のくせに、暗めです。なぜこうなったのか……。

拍手お礼小話『月下老女』

月の色が濃い夜。

白い屋敷が月明かりに照らされて、静かだった。

次々と人が去る中で、屋敷に残る彼女も、静かな人だった。同時に、いつも寂しげな人だった。

「アズサ様、私はやっぱり最後までここに」

「およし」

「でも、まだ」

「ラウラのためにも、早く引越しておあげ。この老人が死ぬところなんて、見せるわけにやいかないだろ」

「……」

白い屋敷の領主の部屋。その大きな寝台に横たわる体は、あまりに細く小さく見えた。

元気なころはキツチリ結っていた白髪は、布団の上に投げ出され、白猫の気品ある耳は、力なく垂れたままだ。

誰もが感じた。緩やかな死に向かっている。

アズサ様が床から起き上がれなくなつてから、既に4ヶ月が経とうとしていた。

誰よりも覚悟が早かったのは、当のアズサ様だった。戸惑う私達に構わず、50と数人ばかりの領民にそれぞれ新しい移住先を示した。

前々から、自分が死ぬ時のために、移住先は探してあったのだという。

身支度の整ったものなどから、順番にぼつりぼつりとアズサ領を去った。

残りは、10人。そしてついに、私たち3人家族が、アズサ領を去る番になった。

明日一番で、この森を発つ。アズサ様に決められたことでも、どうしても踏ん切りがつかず、こうして1人で夜中に部屋を訪れてしまった。

「デイサ」

私がアズサ様の手を握り締めたまま俯いていると、僅かな力で握り返してくれる。

「……デイサ、アンタはあたしが領主で、良かったかい？」

いきなり、何を聞くのだろうか。そんなこと、ここの領民なら決まりきっている。

私は、できる限り大きく素早く頷いた。

「もちろんです。そんな、そんなの当たり前のことです」

「ふふ、こんなお婆さんが領主で、さぞ嫌だったろう。いつ死ぬかも分らないし、いつボケるかもわからないからねえ」

「アズサ様は一度だって、私達の声を聞き逃すことはなかったじゃないですか。」

二度同じことをおっしゃることさえも、無かったじゃないですか「たまたまだよ。ここまでやってこれたのは」

皺くちやの顔が、笑みの形を作ろうと動いた。

こんなに弱っていても、アズサ様の言葉はゆっくりだがいつも淀みがなく、はっきりしていた。

だから、みんな思っていたのに。この方は、まだまだ元気なはずだ、と。

「デイサ、うれしかったよ。アンタが領民で。アンタだけじゃない、みんなが領民で。」

「……覚えてるかい、あたしの故郷の話をしたことがあっただろ？」

「ええ。優しい息子さんとお嫁さん。可愛いお孫さんがいらして、幸せに暮らしていたと」

「ふふふ。……あれね、嘘だよ」

僅かに濁る瞳が、少しだけ茶目つ気を帯びて輝いた。その瞳は私にはなく、遠く遠くに向けられている。

「そう、嘘だよ。息子の家族はいたさ。一緒に住んでもいた。」

けどね、一度だつてご飯と一緒に食べたことはなかったし、孫なんて話さえ、させてもらえたことなかった」

「えっ……」

「二階建ての家だった。私が家族と会えるのは、家族が出入りのために玄関に居る時だけ。」

「ご飯の時間になると、冷えた料理が、いつの間にか机の上に置いてあるんだ。」

孫が二階で元気に走り回る音が、天井から聞えるんだ。

あたしが孫の様子を知るのはその時だよ。上の家族が仲が良いのを知るのも、その時だよ……」

ふと、アズサ様の唇が、歪んだ。色の薄い唇が、力なくわなわなと震える。

「あ、アズサ様……」

「……寂しかった……！ いっそ、一人で暮らしたいほど、寂しかった……！ 見ているだけなんて……」。

息子達が幸せなのはいい。一緒に幸せになりたいなんて、この老人じゃ思わないさ、だけどね。

たまにでいいから、こつちを見て欲しかった……。
迷惑かけるつもりもない、それだけだったのに……。

あたしは、きつと、一人で死ぬんだと思ったね。

同じ家でも、気付かれず、いつの間にか死ぬんだと思った。あるいは、誰も来ない病院で一人で死ぬんだと思った。

それが、嫌で悔しくて。寂しいまま死ぬなんて嫌で。だから、あたしは自分で

「アズサ様ッ！」

折れそうな体を布団の上から精一杯抱きしめる。彼女は泣いていなかった。

ただ小刻みに震える体が哀れで、その震えを止めたくて、抱きしめた。

けれど、抱きしめた感触が余りに頼りなくて、涙がこぼれたのは私だった。

「アズサ様、ここにいます！ 私はまだここにいるじゃないですか。最後までいます、私やっぱ最後までここにいますから」

自分でも驚くほどの大声がでた。

その声にあズサ様の震えは、ぴたりと静まり、私の頭に小さな手があやす様に乗せられた。

「子の母親がお泣きでないよ。そんなことが言いたいんじゃない。あたしは、この地で、皆に必要とされて、傍にいてもらえて、一緒にご飯を食べれて。」

ただただ、幸せだったのさ」

「でも」

「だからもう、そばにいてもらわなくなつてね。

あたしには聞えるんだよ。あんた達の笑い声が、いつだって思い出せるんだ。一緒に笑ってくれたもの。

だから、1人で死ぬのも、なあにも怖くない。もう、なあにも…

…。

……ありがとうね、ありがとう。それが、言いたかった」

月明かりに、アズサ様の笑顔が照らされた。長い間生きぬいて、安心したような綺麗な笑顔。

私達の、大事な大事な方の最高の笑顔を、目に焼き付ける。私が体を起こし涙を拭くと、アズサ様はそっと目を閉じた。

「1つだけ頼まれておくれ。あたしは、いままで、名前を覚えてなかった」

「アズサ様、ではないのですか」

「そりゃ苗字つてやつだよ。あたしらの故郷にはもう一つ、大事な人に呼ばれるための、名前があるのさ。

じいさまが死んでからは、誰も呼んでくれなくなつたけど……。アンタ達には、覚えてほしいよ」

「ええ、忘れません。絶対、忘れません」

じつとアズサ様を見つめると、彼女は大きく息を吸った。

別れ、なのだ。

「あたしの名前はね、香之^{かの}。

アズサ領の梓香之は、最期まで幸せだったと、必ず覚えておいておくれ」

「ええ。……ええ、もちろんです。カノ様

」

そうして旅立った私は、数週間後、新たな土地で訃報を受け取った。

拍手お礼小話『月下老女』(後書き)

暗くてごめんなさい。本編には全く絡まない裏話でした。

s i d e ? S h i n (前 書 き)

芯視点。残酷描写あり、です。
苦手な方はご注意ください。

深呼吸して朝の空気を吸い込む。目を閉じて数秒、そして、心して目を開く。

物の少ない大きな部屋の真ん中に鎮座する馬鹿でかいベッド、その上で俺は溜めていた息を吐きだした。

そう、ここは領主の屋敷、その寝室のベッドだ。

自領地でログアウトした場合は、次に起動した時に、このベッドからスタートするようになってる。

プレイヤー達にはお馴染みの部屋だ。俺にとっても。

だが、間取りや家具は同じでも、いつものゲームと明らかに違うところがあった。

綺麗すぎる。もっと言えば、リアリティがありすぎる。

ヴァーチャルゲームがら感全てで体感できるゲームとはいえ、所詮は造り物の映像だ。

グラフィックの限界があった。たとえば、俺のゲームでの体はこんなに皺の1つ1つ、産毛の1つ1つまで書き込まれてはいなかった。

遠目で見れば荒が目立たない者の、近くで見ればぬるりつるりとした不気味な体だったはずだ。

触感もそうだ。物に触れている感覚まではゲーム内でも再現出来ていた。だが、滲む汗や、体の細かい温度などは到底再現出来ていなかったはず。

どうやら本当にゲームの世界へトリップしてしまったらしい。

汗の滲んだ手で、くらくらしそうな頭を押さえる。

押さえた時に、何か柔らかいものに触れた。
なでる。引つ張る。掴む。

鏡を見ていないのでわからないが……耳だ。予想が正しければ、
獣耳だろう。

キャラ作成画面は覚えている。それでもその時はただ夢を見てい
るのだと思っていた。せつかくなので、いつも使っていたキャラと
同じ設定にしておいた。獣人の『戦士』。初心者向けで扱いやすい
キャラ設定だ。

夢を見たわけではないのか、夢を見続けたのか。それともこれが
現実なのか。

考えようとして、どうせ答えは出ないと言う答えに10秒で至り、
そこで俺は思考を止めた。

考えるよりも、何か手掛かりを 自分でも何の手掛かりを探し
ているか分らなかつたが、とにかくベッドでぐずついても始ま
らない。何かを、しなくては。

分らない焦りに襲われてフラフラと起き上がるうとしたところで、
しかしノックもなくいきなり扉が開かれた。入って来た人物に、思
わず俺は動きを止めた。

「あ、起きてる。じゃないや、起きてらっさる。ん？ これで合っ
てるんだっけか。起きてらるる？」

首を捻りながら、入って来たのは、若い女性だった。20代前半
くらいだろうか。

元の世界では見たこともないような美人だった。
すらりと高い身長に、ポニーテールに結わえられた白銀の髪が揺
れている。髪から、ぴよこりと見えているのは、どうやら白い獣耳

だが、白クマ、だろうか。耳だけでは何とも判断できない。目が合うと、にかつと気持ち良い笑いを投げかけてくれ、その瞳は紫に輝いた。つり目がちで大きい瞳から、どことなく勝気そう見えた。

だが、その美しさに関わらず、それより目を引いたのは 彼女の、荷物だ。

彼女は抱えていた荷物を、俺によく見える様に掲げてくれた。

「見て見て。いやあ、うまそう……じゃない、うまそうなことでございます。領主様が来たつてことで、朝からちよっくら狩りに行つたんだ。せつかくだから領主様に自慢してやるうと思つて……思つてございます」

デタラメな敬語を使いながら、何やら説明してくれる。むっと錆びた鉄の匂いが、寢室の空気を淀ませた。血の匂いだ。

「……それ……何？」

荷物から目を離せず、ようやく俺の口から零れた言葉はそれだけだった。

彼女は得意気に空いている左手を腰に当てた。

「鹿！ まあ体のところは、今、料理中だから頭だけだけど！」

彼女の右手が鷲掴みにしているのは 鹿の頭だった。枝のように大きく広がるその角の片方を握っている。

……しかし虚ろな鹿の瞳から目が逸らせない。

鹿の首の下は幾重にも布が巻かれて、切断面が見えないようにしてある。布に、うつすらと血が滲んでいるのが見えた。

この辺りではつきり分った。

ここは、異世界だ。夢でもなんでもない、俺の知らない異世界の現実だ。

そして、元の世界の常識は、全く通用しないらしい。

俺はベッドから起き上がる気も失せて、そのまま両手を投げ出して再び寝転がった。

体から焦りと、そして色々な感情が抜け出ていった。

異世界であると言ふ事は確認してしまった。それなら、次は何をすればいい。帰る方法を探すのだろうか。

だが、どうやって来たのかも分からないのに帰れるはずがない。

俺は、気が付いたらキャラ作成画面にいたのだから。何も分からない。い。

何をしたいのか、どうすればいいのか、右も左も分からないならば、今はただ、茫然とするしかないだろう。

目を閉じようとしたが、深い悟りに至る俺には構わず、彼女はベッドに近寄ると、俺の手をとった。彼女の手の暖かさが、じんわりと伝わってくる。

「さ、起き上がって、もうすぐ鹿料理だ！ 領主様が先に食べてくれないと、あたし達だって食べれないんだ。さっさと来い……じゃなくて、来やがれでござる。ああーもう、めんどくさいなあこの言葉遣い。だからお世話役なんて嫌だっつたのに」

血の匂いと、彼女の手の暖かさ。少し乱暴な言葉遣いと仕草、よく通るその声。

何故だろうか。途方に暮れているはずなのに、それらの全てが心

地良く感じた。何はともあれもう少しこのままでもいい、などと言う声がどこかから聞こえる。

不思議な感情に引つ張られるままに体を起こし、彼女の紫の瞳を見返した。

「えーと、君、名前は？」

「あたし？ アリア」

「アリアさん。俺は、遠野苺。初対面で申し訳ないけど、頼みがあるんだ」

「何？ とりあえず面倒見ろって言われてるから、遠慮なく言えばです」

右も左もわからないなら、感情のままに動くしかない。ともかく、今一番強く浮かんでいる感情のまかせて、俺は口を開いた。

「結婚しよう」

「ストーリープツッ！ 待って待って、付いていけない！」

ここまでのストーリーを語ったところで、弟子が騒ぎ出した。いいところなのに。

「ついていけないって言われても。本当のことだしなあ。仕事の息抜きに、どんな出会いだっただのか聞きたいって言ったのはカノだよ

「？」

「言いましたけど！ 予想以上に理解の難しい話だからですよ！」

俺がひよいと肩を竦めると、カノは仕事机の上に頂垂れた。顔を覆った手の平から、くぐもった声が漏れてくる。

「異世界トリップして、起きて。ここまではいいですけど、どうしてもそこから、鹿の頭を持った女性が現れて、どうしてもここで求婚するんですか……」

理解できないとばかりに、カノは頭を振った。

弟子は頭で考えすぎではないかと、俺はたまに感じている。他事にしたってそうだが、特に恋なんてものは、考えて答えの出るものではない。

どうして、その相手なのかなどと言われたところで、そう思ったからだとしか答えられない。

だが、弟子が悩み続けるのも可哀そうだ。

俺は、涼しげにお茶を啜って喉を潤してから、考え付くままにぺらぺらと説明を始めてみた。

「簡単だよ。つまり、俺は異世界トリップに戸惑って、現実感があるやふやになっただけだ。夢なのか現実なのかとね。そこへ、鹿の頭という強烈なアイテムを持って、彼女が来てくれた。俺は、鹿の頭から弱肉強食、生と死の無常、盛者必衰の理、そして現実感を持ち、答えをくれた彼女に救われた。で、恋に落ちたんじゃない？」
「う……うん。芯が言くと、それっぽく聞えるのは何ででしょうね……」

しっかりしていそうに見えて、弟子は騙されやすく困る。

それっほいだけで、普通に考えればありえないと分るだろう。俺

だって分っている。そして、ありえないと分つていても、止められないのが一目惚れという奴だ。

「あ、ちなみにその鹿の頭は剥製にして、今でも寝室に飾ってるよ。奥さんからの最初のプレゼントだし」

「…………お肉は？」

「美味しく頂いたよ。さて、カノ。この話から学べることは何だと思っ？」

師匠らしく質問を出してやると、カノは真面目に考え出した。

唸りながら、考えている時の弟子は、視線が斜め上を彷徨う。

たっぷり数秒かけてから、お手上げとばかりに両手を上げつつ、カノは答えた。

「相手を落とす極意は奇抜なアイテム？」

「どうか。俺は、『へたれていないで、男らしく直感で行動すべし』だと思っけどね」

「なんで、そんな窓の外見て遠い目しながら言っんです？」

カノは、疑問符を浮かべつつも、積み上がっている書類仕事を再開した。

俺はそちらを振り返らず、窓辺に頬杖をついて、言葉だけをカノへと放った。

「遠いところにいる相手に、言ってやりたいからかな」

s i d e ? S h i n (後 書 き)

電撃婚、鹿頭ラブストーリー。

なんでしょうね、それは。自由人の頭は開いてみてもやっぱり理解
できません。

奥さんが思った以上にワイルドな人でした。

27話

「ねえ、お母さん」

「ん、なあに？ ああ、宿題？」

「うん、作文。『家族について』だつて」

「まあ、今時、問題になりそうな古臭い課題ね」

「でも難しいの。先生は、『一緒に住んでる人や、血のつながってる人』って言ったけど。」

お母さん、家族ってどこまで？ 血のつながってる人なら、お婆ちゃんやお爺ちゃんは、入るの？ おばさんは？ 一緒に住んでるポチは入れちゃいけないの？」

「榎乃。難しく考えちゃダメ。目を閉じて、まず、『家族』と言われて思い浮かんだ人。 思い浮かぶのは、誰？ それが、榎乃の家族よ」

「お母さんと、お父さんとポチ」

「そう、じゃあ作文を書くのは、その人達についてよ。ちなみに、

お母さんも、榎乃とお父さんとポチが家族」

「良かった！ ちがってたら、かなしいもんね！」

「そうね、それはきつと……哀しいことね」

「家族？」

鸚鵡返しにしたその単語に、私と芯は書類を捲っていた手を止め

た。領主になって、一か月と少し、その間の各店舗の収益を記した書類である。

いつも通り、仕事部屋で嫌いなデスクワークに精を出していたところ、困り顔で自警団の兵士がとある報告に来たのだ。

この兵士は、練兵場で見かけたことがある。犬獣人のゼフという若者だ。彼は今日、屋敷の門番担当だったそうだ。

自警団も人口増加やランクアップのおかげで、隊員が増えた。最近では、街の見回りや門番など、治安維持に役立っている。弱いなりに、有事の際の訓練もしっかりしている。

だが、今はそれが問題なのではない。

問題は、門番から告げられた訪問者だ。

「……はい、そうなんです。ゼオンの家族という方が、今、やたらと豪華な馬車で屋敷の前にいらっしやっつて、領主様に面会をと」

「どんな人？」

「エルフィン、若い女性の方です」

私は、芯の方に向き直って、素朴な疑問を投げかけた。

「芯、家族の定義について考えたことありますか？」

「そりゃ、なくはないけど。でもそんな難しいこと考えなくても、この場合、明らかにゼオンのお姉さんじゃないかなー」

「ですよねえ、ゼオンは未婚ですし。つてことは、つまり」

芯は私の言葉に頷くと、門番に聞えないよう、声をひそめた。

「リーシャ帝国の皇帝妃様、かなあ」

「……ですよねえ」

どちらともなく同時に頷きあつて、ふうと頭を押さえる。穏やか

な午後の崩れ去る音がした。

叫び出したのは、私だった。

「つて、何で！ そんな遠方の偉い御方が！ ど、どどど、どうしましよう！？ 居留守の出番ですか、それとも死んだフリの出番ですか！？」

私の慌てぶりを見て、不安になったのか門番もオロオロとし出す。平然としているのは、芯だけだった。

「とりあえず俺は、ゼオンを呼んでこようかな。昼間だから、学校じゃなくて店にいるはずだね」

「待ったあ！」

さつさと扉の外へ向かおうとする芯を慌てて追いかけて、袖をはしつと掴む。ついでに掴んだ布を手首で捻り、逃げられないようにする。

「逃げるんですか芯！ 弟子を置いて！」

「逃げるつて、攻めてきてるわけじゃないんだし。カノに面会なんですよ？」

「め、めめ面会つて、そんな、偉い御方と、どうすれば！？」

「偉いつて言つても。リユートや同盟メンバーにもちゃんと今まで対応できてたじゃないか」

何をいまさら、と芯は瞬きした。

それとこれとは勝手が違う、と叫びたくなった。

隆人は王様である前に同級生という意識があった。同盟リーダー達は、確かに偉い方々だけれど、あくまで仲間内である。江田は、偉くとも敵である。

ところが、今回は遠い帝国のトップ、さらに今のところ味方でも敵でもないという。絶対に失礼があつてはならない。

「そんな、繊細な対応いきなり無理です！」

「けど、来ちゃったものは仕方ないさ。リーシャ帝国として名乗らなかつたんだからお忍びなんですよ。向こうが言い出すまで、知らない振りして、一般人として対応してればいいんじゃないかな。その間にゼオン呼んでとっとと用事済ませて帰ってもらうのが一番だよ」

「う………そうですね」

「ま、良い経験だと思いなよ」

芯はあやすように、私の肩を叩いて、袖を奪還し、去って行った。ポツンと残された私に、門番がおずおずと口を開いた。

「ええと、お通ししても？」

「……オネガイシマス」

裏返りそうになる声を必死に押さえて、私は諦めとともに頷いた。

片付け上手でも下手でもない私の緊急片付け方法は、ブルドーザー方式である。すなわち、ごちゃごちゃした片付けられないものたちを、見えないところに押し込めて終了。

Lv14になっても、資材不足のためまだ領主の屋敷はランク1だった。そのため私の寝室は、領民の部屋の一角になっている。見られたくないものは、私の寝室へ。持ち出したくは無いが見られたくない重要な書類は、ともかく仕事部屋の机の下へ隠した。

応接室が欲しいなどという贅沢は言わないが、せめてお客様に失

礼にならない場所が欲しい。

切実にそう思いながら、仕事部屋をなんとか応接間風に整えた。私の応接間風とはは、2人掛けのソファに低めのテーブルを挟んで向かい合わせることだ。

さらにちよつと花瓶を置けば完璧。

整えきつたところで、ちょうど扉がノックされた。

「どうぞ」

返事をする、静かに扉が開かれた。

静かな靴音と共に現れたのは、『女帝』という称号には似つかわしくない小柄な少女だった。18歳と聞いていたが、丸みを帯びるふつくらした輪郭のためか、より幼く16歳程度に見える。

弟と同じ紺の長髪だが、弟のそれよりきちんと手入れされている。髪は、半分程が結びあげられ、残りは腰まですらりと流されていた。お忍びのためか、衣服は一見そう豪華ではないものの、細かな飾りや刺繍が施された上品なローブに身を包んでいる。ローブの丈が長いことも、少女を幼く見せている原因の1つだろう。

額で揺れる涙形のサークレットが印象的だった。

柔らかく細めた瞳は、やはり弟と同じ琥珀色。

彼女は、お淑やかに礼をとった。

「はじめまして、領主様。突然の訪問をお詫びいたします。わたくしは、この領地でお世話になっているゼオンの姉、レベカと申します」

「こちらこそ、初めまして。ミヤイ領領主の榎乃です。どうぞ、お掛けになってください」

詳しく名乗るつもりは、ないようだ。内心ほっとしつつ、そして早くゼオンが来ることを祈りつつ、切り出す。

「それである、ご用件は？」

「弟に、会いに。それと、弟が御世話になっている領主様に一言、挨拶申し上げたくて。いつも、弟が御世話になっております」

ぺこりと頭を下げられる。偉ぶった振る舞いなどは、微塵もなく、それよりも上品で、可憐な箱入り娘という言葉が似合いそうだ。

「いいえ、こちらこそ、いつもゼオンには助けられています。今、屋敷に呼んで参りますので」

「ご親切にありがとうございます。ところで、カノ様、わたくしの正体についてはご存知でいらっしゃるでしょうか？」

実はリーシャ帝国皇帝妃なのですけれど、と微笑まれて、私の精一杯の笑顔が崩れそうになった。数秒で知らんぷり計画が破たんするとは。油断した後であるだけ辛い。

急すぎて驚くフリも間に合わなかった。これが、完全に相手のペースというやつだろうか。

今更取り繕っても仕方ないので、溜息と共に茶番を終了させることにした。

「はい……実は、聞いています。位の高い方への対応は、まだ未熟ですので、知らんぷりさせていただきました。失礼になっていたら、ごめんなさい」

ついでに、色々とかミングアウトもしてみた。後で何かやらかすよりは、とりあえず先に謝っておけという社交術を元の世界で聞いたことがあったからだ。

レベカは、私の答えに、目を丸くした。

「まあ、カノ様は正直でいらつしやるのですね。けれど、わたくしにはそれ程気を使わないでくださいまし。わたくしは、ただ陛下に嫁いでこの位を手にしただけなのですから。元々は弟と同じ、ただの『魔法使い』です」

「いえ、レベカ様のお噂はかねがね。ですが、あの……どうしてレベカ様ほどの御方が、わざわざこんな遠い小さな領地へ？ ゼオンのことだけなら、人を遣わされればよろしいのでは」

「ええ、実は」

語ろうとしたところで、再びノックの音がし、レベカは言葉を途切らせた。

彼女の瞳が期待の色を帯びるのを見ながら、私も同じ人を期待して、扉の向こうへ返事をした。

「どうぞぞ！」

入室したのは、やはり期待通りの人物だった。私にとっては天の助け、レベカにとっては待ちわびていた弟である。

レベカは、ゼオンの姿を見ると、それまでの淑やかさに反し、さっと立ち上がった。そのまま駆け出し、

「ゼオン！」

ぎゅっとゼオンに抱きついた。レベカの背丈は私よりも低いいため、ゼオンの腰のあたりにしがみつくような格好になっている。

当のゼオンは、慌ててきたようで、だらしのない普段よりもさらに数段だらしなく、髪も服もぼさぼさの様子だった。抱きつかれて眉根をよせ、一度私に謝るように目配せをした。

ええと、ゼオンが24歳の弟。レベカは18歳。で、レベカは2年で1つ歳をとるエルフィンだから、大体36年生きているお姉さ

ん。

頭で計算しなければ、目の前の光景とイマイチ結びつかない。見た目は、妹の対応に困る兄、だ。

ゼオンの後ろから、静かに芯が入室して、部屋の扉を閉めた。

兄妹　ではなく、姉弟の再会を邪魔してはいけないだろうか、それとも椅子くらい勧めた方がいいだろうかとこっそり悩んでいると、ゼオンがレベカの体を引き剥がした。

「なんで、アンタがここにいるんだ？　わざわざ馬車でリーシャ帝国から来たのかよ」

「ええ。ゼオンがミヤイ領にしていると聞いてから、一月近くかけてここまで」

瞬間移動を使わなかったのだろうかと疑問に思って、はたと気づいた。確か、瞬間移動は、領主専用スキル。つまり、この世界の人では使えないのだ。

しかし、遠路はるばる時間をかけて来た姉に、ゼオンは冷たい視線を返した。

「そんなに俺に用があったのかよ」

「4年も前に家を飛び出したとき、音信不通だった弟がいれば、何日かかっても会いに来るのは当然のことです」

「4年なんて、アンタらにとっては、たいした時間じゃねえだろ」

「わたくしにとっては、一月もたいした時間ではありませんでした」

何故か突き放すようなゼオンの態度に、レベカは全く動じず、静かに答えた。

そのまま、しんと会話が途絶える。

想像していた再会とは、少し　いやかなり違う。果てしなく気まずい。考えてみれば、ゼオンは家出して国に戻りたくないと言っ

ていたのだから不穏な空気になるのが当然なのかも。

「と、とりあえず、ゼオン、座ろうよ。レベカ様も」

「ああ、取り乱してしまい、申し訳ありません」

レベカは素直に謝って、向かいのソファに再び腰を下ろした。ゼオンは、私の隣に渋々といった様子で座った。

芯は、扉に背を預けて立ったままだ。

レベカは懐かしむような顔でゼオンを見上げた。

「……成長しましたね」

「アンタは変わらなさすぎだ」

そしてまたぱったりと会話が途絶える。

しばらくして動いたのはやはりレベカだった。ゼオンから私の方へと視線を移してくる。

「弟に会うのが本題でしたけれど、カノ様にお会いするのとても楽しみにしていたのです」

「はあ、どうも。ですが、何故でしょう。ただが新米領主なんです」

お世辞はともかく、私は遠路はるばる会う理由があるほどの人物なんかではないはず。

私がそう言うと、レベカは、はにかむように頬を手で押さえた。

「誕生早々、巨大化した猪に喧嘩を吹っ掛けた勇猛果敢な雪豹の子供が現れたと聞いたものですから」

見てみたくなって、と少女は言う。若干憧れと関心の籠った眼差し

を向けられて、私はこめかみに手を当てた。

云わんとしているところは分らなくもない。

「巨大化した猪って、まさかヴァルデ王国、ですか」

「ええ。終着点しか目に入っていない凶体が大きいだけの愚かな猪です」

「その例えに色々聞きたいこともありますけど　とりあえず、噂に尾ひれが大量についてるような気が」

— 先ず間違った認識を訂正しておきたい。

結果はどうあれ、まず、吹っ掛けてはいない。いないはず。たぶん。

ただ、売られたものを買わなかったかと言われれば、ぐうの音も出ない。

他に選択の余地はなかったし、後悔もないけれど、しかし、あれはやっぱり衝動買いと言えるだろう。

そして、勇猛果敢どころか、畏にかかって誘拐されてぼこぼこになつていたのが事実である。むしろ、無謀。

どこから誤解を解くべきか悩んでいると、ゼオンが不機嫌そうに溜息をついた。

「んな挨拶はどうでもいんだよ」

良くない。社交辞令はともかくとして、変な噂の方はたいへんよろしくない。さらに猪の例えあたりも詳しく聞きたい。

ゼオンをこっそり睨みあげたが、彼はその視線をすんなり受け流した。

「カノにちよっかい出すんじゃない。それより、本題を言ったらどうだ」

「……怖いんですね」

ゼオンと同じ琥珀の瞳が、ためらうように一瞬陰った。

「ゼオン、帰ってきて下さい」

独り言のように溢された言葉は、誰もが予想していたものだった。わざわざ本人が会いに来て、顔だけ見て満足するはずもない。そして、今までの空気からゼオンの答えも当然予想できる。

「断る。アンタだけで帰るんだな」

「ゼオン」

「早く、帰れ」

取りつく島の無いゼオンの態度に、部屋中の空気が張り詰めた。蚊帳の外である私と芯はかなり居た堪れない。

仲直りするしない、帰る帰らないはゼオンが決めることだが、どちらにせよ状況が進みそうにないのを見て、仕方なく私が間に入っ
た。

「……ちょ、ちょっと待ってください。ええと、家族のことに口を出すのもアレなものですけど、でもあのこの場合、話が進みそうにないのですね。」

とりえず、その、ゼオンの家出の原因があるなら、それをどうにかしないとですね。あとできれば、私達にも多少状況を説明していただけると」

まあまあと両手でなだめるジェスチャーをしながら言うと、ゼオンの表情が少しだけ和らいだ。

「粗茶ですが」

いつの間にお茶を用意して来たんだか、芯がテーブルの上にカップを3つ差し出した。

芯は名乗る気はなく、静観するつもりだろうが、同盟サブリーダーの領主様が何も自ら給仕しなくても。しかもタイミングを見計らって。この人、秘書役演じて少し楽しんでいるんじゃないだろうか。非常にツツコミを入れたいけれど、そんな空気ではない。我慢しながら、お礼を言い、カップを受け取った。

安物だが口当たりの良いお茶で、話し疲れた喉を潤す。すっきりしたお茶の香りで、部屋の空気もまた少し和らいだ。

一息ついたところで、ゼオンが口を開いた。

「俺が、国を出たのは、皇帝妃サマが俺を騙したからだ」

「それはっ、誤解です！」

首を振る彼女に見向きもせず、ゼオンは私に向き直った。

「巻き込んでワリイ。申し訳ついでに全部言つとな、俺は、リーシヤ帝国にいた時から、魔法の開発をしてた。いくつか開発して成果も上々、弟子までついて、そのうち国から依頼されて魔法研究するようになった。」

俺が最後にあの国開発してたのは、領地の外で暴れ回る大型魔物を倒すための強力な魔法だった。でもそれを

ゼオンは一拍置くと、静かにレベカを睨み据えた。

「それを、アンタは他領侵略のために使いやがった！ 何十人いや、何百人にあの魔法を使った！？ 綺麗事抜かすわけじゃねえけど、俺は、魔物に苦しんでる連中のために開発したんだ！ それ

を、戦争の道具にしやがった。そんな国に、いられるわけねえだろ！」

「誤解です。……いいえ、わたくしが誤解していたのです。わたくしは、ゼオンがまさか気付いていないとは思っていませんでした」

レベカは、視線を彷徨わせて言葉を続けた。

「好戦的なリーシャ帝国で、そんな魔法の開発を依頼されたなら、魔物のことなど、建前に決まっているでしょう。たとえ、そうでなくとも、多数で連携することによる強力な攻撃魔法、そんなものを生みだしたなら、使われる覚悟くらいあったのだらうと思っっていました」

「な」

ゼオンが腰を浮かせたけれど、レベカは動じない。

こんな顔をどこかで見たなと私はふと思った。江田と似ているんだ。冷え切った。あるいは何かを割り切った、為政者の顔。レベカの場合、幼さの残る外見と中身とのギャップから、さらに未恐ろしさが醸し出されているように感じた。

「まさかゼオンが気付いていなかったとは思いませんでしたから、ゼオンを裏切るような形になってしまったことは謝ります」

「それで、俺が国に帰ると思うのかよ」

「いいえ。でも、ゼオン。どこにいても同じことではないのですか」

レベカは、琥珀色の瞳を私に向けた。

「ねえ、カノ様」

「は、はい」

「貴女は今、ゼオンが強力な攻撃魔法を使えると、知りました。万

が一、領地に危機が訪れたなら　ゼオンの魔法を頼らないと言えますか」

温度が急に下がり、部屋中の視線が集まった気がした。彼女は、付け足した　わたくしなら迷いません。

私は、思わず空気の塊を呑みこんだ。つまり皇帝妃である彼女はこう聞いたのだ。

『領地のために大事な人を裏切り、さらに　大量に人を殺す事をも辞さないか』と。

27話（後書き）

いきなり重苦しい展開ですみません……。ところ、リーシャ帝国の皇帝は、少女趣味なんだろうかね。きつと間違いなく悠の唱えた世界三大美女（約一名怪しいですが）の一人。

迷ったのは、答えではなく、誰に向かって答えを告げようかということだった。

尋ねたのはレベカだけれど、答えるべきはレベカへではない気がしたのだ。

だから私は、少し目を伏せて答えを口にした。

「選択肢としては、あります」

そう言うと、レベカが賛同を得られたかのように表情を緩めたので、私は静かに首を振った。

「けど、そんな危機に陥らせないことが私の仕事です。それに、」
「それに？」

「……新米だけど、これでも不戦同盟の仲間ですから。他領侵略や戦争に、ゼオンの魔法を使うことは有り得ません」

きっぱり告げると、彼女が何か言う前に、ゼオンが私の頭をぺしぺし叩いた。

「だよ。分つただろ。俺は、帰らねえし、もう攻撃魔法なんて開発しねえ」

レベカは不思議そうに首を傾げる。

「ゼオン、……わたくしには、分かりません。どうして、貴方が辛そうにするのです？ 魔法を使うと決めたのは、わたくしと陛下。それで多くの人を傷つけたのも、全て、わたくしと陛下の責任なので

す。そうやって全ての責任を負うために、わたくし達はいます。まして、戦に使われると予想もしていなかったのなら、貴方には何の罪もありません。

それに、戦争をしていれば、どのみち敵には被害が出ます。けれども、ゼオンの魔法のおかげで、味方の被害だけでも減らす事が出来ました。ですから失った命の合計の数としては

「もういい！ それ以上、しゃべるんじゃないよ。アンタがそうやって、人を数でしか考えられなくなったから、俺は国を出たんだ」

レベカ of 言葉を遮って、ゼオンは急に立ち上がった。

高い目線からレベカを見降ろし、哀しげに首を振る。

「アンタが何を言おうと、俺はここに残る。2度と会いたくもねえから、もう来るな。……ワリイ、授業の準備があるから、俺は、行くわ」

最後の言葉だけを私に向けて、振り返らずにゼオンは部屋を逃げる様な速さで出て行く。

「ま……っ」

レベカは引きとめる台詞を考えていたようだが、扉が鈍い音を立てて完全に閉まると、諦めてソファに項垂れた。

私は、一瞬ゼオンを追うべきかとも思ったけれど、お客様をそのままにしておくわけにはいかなかった。

そして　ゼオンのことは置いておくとしても、残ったこの空気をどうしよう。またもや気まずい空気だ。

何と声を掛けようかしばらく戸惑っていると、レベカが先に顔を上げた。

「……失敗、してしまいました」

「どうして、ゼオンにそんなに帰ってきて欲しかったんですか？」

「……魔法のため、ですか？」

「いいえ、違います。もし国のためだったなら、無理矢理連れ帰るくらいのはします。今回は、ただのわたくしの望みです。親もいないわたくしにとつて、あの子は、たった一人の家族ですから。ただ、それだけです」

「あれ、でも、レベカ様は結婚してらっしゃいますよね？ リーシヤ帝国の皇帝陛下と」

だから皇帝妃と呼ばれているわけだし。私が聞くと、彼女は数回ばちばちと瞬きして、

「あ ええ、そうです。陛下も、もちろん……家族ですわ」

レベカは何かを誤魔化す様に、冷えてしまったお茶を口に含んだ。彼女の反応を見て、私は勝手に確信した。やっぱり王宮って後宮や大奥みたいなのところがあって、果てしない女の戦いでドロドロしているに違いない。あんまり触れられたくないところなのだ。

「皇帝と結婚ってたいへんそうですもんね……女の戦い。お察しします」

「……はい？」

私なりに励ますと、レベカはきよとんとしてから、初めて声を立てて笑った。

「ふふふ、カノ様って、本当に面白い方なのです。……ゼオンは帰ってきてくれそうにありませんが、カノ様に会えただけでもここまで来て良かったと思えます」

「それは、どうも、です」

お世辞に曖昧に笑い返すと、彼女は何故か懐かしそうに遠くを見た。

「本当です。カノ様は、昔、わたくしがお慕いしていた方によく似てらっしゃいますから」

「えー!? えーと……えー……」

今度こそ反応に困って無意味に『えー』を連続させてしまう。皇帝妃がそんなことを言っているのかとか、相手は男ですよねとかツッコミたくなるが、そももいかない。

レベカは私の反応を十分楽しんでから、わたくしも聞いていいかしら、と切り出した。

「カノ様は　どんな状況で、この世界にトリップしていらっしやいました?」

一瞬、聞き間違いかと思い、近くに立つ芯を見やれば、芯も珍しくぎよつと固まっていた。もう一度レベカを見るが、彼女はただ答えを待っている。

基本的に、この世界の人は、私達が異世界トリップしてきただなんて、思っていない。女神に祈りを捧げたら、派遣されてくるのが領主、そう捉えていたはずだ。バルバラやイリエに、そんな風に聞いたことがある。レベカはこの世界の人なのに、何故そんな問ができるのか。

咄嗟に返事を返せずにいると、レベカは私の戸惑いに気付いた。

「ああ、『領主は女神から遣わされる』と、領民は信じていましたっけ。わたくしは、夫である陛下に、聞いておりますから。領主様

方は、どこか別のところからいらっしやって、この世界は 領主様方にとってはただの架空の遊戯だったのだと」

間違っていますか、とレベカが聞く。

正確には架空というより、仮想のゲームだが、それを言ってもレベカには分らないだろう。

思えば、別にトリップしてきたということを隠す必要も特にない。領民達が女神を信じているから言わなかったただけだ。

だからただ私は肯定し、前の質問に答えた。

「……大体は、あつてます。それと、私がトリップしたのは、交通事故で。あ、交通事故っていうのは……うーん……運悪く馬車みたいなものに轢かれた、という感じですよ」

「本当に？」

「へ？」

聞き返されると思っていなかったところで聞き返されて、ぼかんとした。

嘘をつく理由などないし、紛れもなく事実なのだが。何かおかしいなところでもあっただろうか。

「本当、ですよ？ えっと、細かい描写は……あんまり聞かない方がいいと思うんですけど。お肉が美味しくなくなっちゃうかもしれないので」

「そう、ですか。ああ、細かい描写は、結構です、結構。変な質問をしてごめんなさい、少し気になることがあります。でも、こちらのことですから、お気になさらないで」

「はあ」

質問の意図が全くわからないので、つつい生返事をしてしまっ

た。レベカは、安心を誘う笑みを浮かべて、ローブの裾をつまみながら立ち上がった。

「わたくしも、そろそろ帰らなくては。今日は本当に失礼いたしました」

「あ、ゼオンのことは」

「……今回は、諦めます。わたくしの我儘ですから。どうか、弟をよろしく願います」

レベカに合わせて立ち上がりつつ、それは次回があるという前フリなのかと考えてしまった。正直、嫌だなあ、それ。

カノ、と後ろから静かに嗜める声が聞えて、私は、はっと我に返った。どうやら顔か尻尾あたりに出ているらしい。

取り繕おうとレベカを見れば、彼女は気にしている様子もなかった。内心ほっとする。

「カノ様、親切にしてくださいただいたお礼に、ひとつだけ。

いつか　そうね、『罰』と『牢獄』の意味がお分かりになったら、どうぞわたくしの元を訪ねてきてくださいませ」

「は、い？」

突然の不穏な単語にまた疑問符が浮かぶ。この人は本当に、脈絡なく意味不明なことを言う。

この感想もきつと顔に現れていたのだろうけれど、彼女は何も言わずに優雅に一礼してくれた。

「それでは、今日はありがとうございました、カノ様」

「いいえ。帰り道も、お気をつけて」

おざなりな挨拶を返すと、彼女は屋敷を去っていた。

再び芯と私だけになった仕事部屋で、どちらともなく顔を見合わせた。それほど時間が経ったわけではないのだが、なんだかすごく疲れている。

「な、なんだったんでしょね、今日の」

「弟に姉が会いに来たんでしょ。ついでに連れて帰ろうとしたら振られた」

芯がひよい肩をすくめて、まとめる。残ったカップを片づけながらも、私はなんだか釈然としなかった。なんというか……もやっとする。

「それにしても、お姉さんが引き下がる時、あっさりしすぎじゃありませんでした？」

「どうかな。まあ、不思議で関わりたくないタイプの人だとは思っただけど」

ずれた返事が返って来た。

机の下にブルドーザー方式で片付けた書類を取り出しながら、芯を振り返る。芯は、ソファの位置を元に戻していた。

「なんだか、わけのわからないまま巻き込まれて、わけのわからないこと言われて、やっぱりわけのわからないまま終わったんですけど。良かったんですかねえ」

「俺に聞かれても。それはゼオンに聞いてみなよ」

詰め込み型教育である夜の学校だが、さすがに深夜まで授業をするわけではない。次の日に仕事のある大人たちばかりだから、支障が出てはいけないのだ。そのため、おおよそ人々が就寝準備を始める小一時間ほど前に、授業が終わることになっている。

校舎は、屋敷から北に伸びた空き地　以前レベルアップのために自領地にした区域に建っている。

公共の施設であるためか、ランク1でも、白い石造りで少し威圧感のある建物となっている。さすがに屋敷よりは小さいものの、練兵場などに並んで大きい建物の1つだった。

校舎の隣には、ランク2の、少し立派で広い建物がある。本来は宿屋であるこの建物を、ミヤイ領では学校寮として利用していた。

最近はやも暖かい。四季のあるこの領地が、次第に夏に向かっているのを感じながら、私は校舎にもたれてゼオンが出てくるのを待っていた。

校舎の魔法灯　何やら魔法陣が描かれているミラーボールのよ
うな照明だ　それが、消えるのが見えた。

しばらくすると、大勢の大人がはき出されてきた。顔見知りには軽く手を振りながら、さらにしばらく待つ。どうせゼオンのことだから、一番最後に出てくるに違いない。

「何やってんだ、お前」

「わざわざ心配して待ってたのに」

目当ての人物が出てきたのは、やはり誰もいなくなってからだっ
た。もたれていた校舎の石壁から体を起こす。

「夜中に一人でフラフラしてんじゃねえよ、馬鹿。送ってく面倒ができるだろ」

「屋敷なんてすぐそこだし。それに忘れられがちだけど、私、一応戦闘できるよ」

弱いという問題点があるけれど。その言葉は口に出さずに、ゼオンの横に並んで歩き出す。

「レベカ様、帰ったよ」

「ホント、悪かったな。迷惑かけて」

「途中で逃げ出したことも、謝ってくれるといいな。すっごく、気まずかったから」

「……悪かった」

ゼオンが、降参を示すように、両手を上げた。

この辺りにはまだ石畳の道は敷いていないので、つま先で小さな石を蹴りながら歩いた。

謝ってから数秒置いて、ゼオンは溜息をこぼした。

「なんか言ってたか、あの後」

「うん、それなりに。ゼオンはたった一人の大事な家族だってさ」

「……昔は、あの人もあんなんじゃないかった」

ゼオンは、歩く速度を少し緩めた。足の長さが違うので、若干私がか小走りになっていたのだ。

けれど、速度を緩めた理由は、それだけではないだろう。何やら聞いてほしそうな雰囲気、私はゼオンを見上げた。

「昔って、皇帝妃になる前？」

「だな。まだ領地が小さい時から、領主を励まして仕事を手伝ってた。領民にも慕われてた。ま、それは領主が領民に慕われてたから、つてのもあるけど」

「その領主が、今の皇帝だよ。ゼオンの義兄になるのかな。今は、どうしてるの？」

レベカが皇帝の話題で動揺していたことを思い出しながら尋ねると、ゼオンも少しだけ苦い顔をした。

「国になった後すぐ、ちょっとした事件があつたんだ。その時から、ずっと病気で寝込んでしまってる。それで、姉貴が『女帝』って笑われるほど、皇帝の仕事をこなさなきゃいけなくなった。姉貴が変わつちまったのは、その辺りだな」

「事件つて、戦争とかじゃなくて？」

ゼオンの目が彷徨つたのを見て、はぐらかされるかなと思った。

しかし、二歩ほど進んでから、ゼオンは首を振った。

「いや……。仲の良かった領民に、襲われたんだ。6年前か。俺から見ても、当時の皇帝は頑張ってた。けどよ、頑張つても、現状を不満に思ってる領民たちが、いたらしい。そりゃそうだ、国になつてすぐなんて、どこにも生活の余裕はねえ。苦しい連中もどうしたつて出てくる。一応、そいつらを助けるためにも色々やってたらしいが……。対策なんて、実際に暮らしが楽にならなきゃ、領民にとってはねえのと同じだ」

「わー……耳が、痛いなあ」

重苦しい空気を茶化しながら、半分は本音だ。ミヤイ領だつて、余裕のある生活は誰もしていない。衣食住を提供しているから、今はなんとか不満が出ないだけだろう。それとも、領民の今までの暮

らしが、もつと酷かったからか。あるいは、ヴァルルーデ王国という恐怖があるから、領民の関心がそちらに向いているだけか。

いずれにせよ、もう少し領地が落ち着いたなら、ミヤイ領でも似たような不満や問題が溢れ出てくるに違いない。

ゼオンは、近づいた屋敷を見上げた。

「お前なら大丈夫だ　　と言ってやりてえけどな。皇帝ん時も、俺はそう思ってた。事件が起こって、皇帝なんて、報われねえもんだと思っただぜ。姉貴があんな風になっちまったのも、そうやって上から目線で考えねえと、やってられなかつたから、だろうな。それを許せるかって言われたら別だけだよ。……だけどお前は、」

ぼむと頭の上に、ごつい手が乗った。たいして力を入れていないつもりはないのだろうが、大きい手だから、私の頭はぐらりと傾いた。抗議の意味を込めて見上げると、琥珀の瞳と目が合った。

「お前は、あんな風になるなよ」

「……了解」

敬礼なんて、この世界の人に通じるかはわからないけれど、頭から手をどかし、ぴしっと笑顔で、その真似事をしてみせた。

屋敷の灯りが近くなったところで、ゼオンは立ち止った。屋敷にはたくさん人がいるし、近づきたくないのだろう。そういえば、仕事以外では引きこもっているゼオンが屋敷を訪れたのは、今日が初めてだったと気付く。

「じゃあな」

「うん、じゃあ、おやすみ。」

あ、ゼオン、もう一つだけ」

「あん？」

思い出して引きとめると、既に背を向けていたゼオンは、肩越しに振り返った。

「レベカ様に、えっと、『罰』と、『牢獄』とかって言われたんだけど……、それって何のことだか、わかる？」

屋敷の灯りで、ゼオンの顔は影になって見にくかった。目を凝らしながら尋ねると、どこか疲れたような声だけが返ってきた。

「知ってる。けど、俺はあんまり信じてねえ。だから、気にしなくていいぞ、あの人はたまに理解不能なこと平気で言うからな。もう寝ろよ」

「そっか。ありがと、おやすみ」

手を振ってから、門番に挨拶しつつ屋敷の中へ戻る。その姿が消えるまでゼオンが見守っていてくれたことに、私は気がつかなかった。

28話（後書き）

謎は謎のまま、でした。

ちなみに、この世界、特にエルフィンは結婚が早いので、レベカは15歳で結婚しています。早く結婚しないとなかなか子供ができない上に、15歳っていつても既に30年生きてるので、あまり変なことではないようです。

拍手お礼小話『駄目駄目ハロウィン』（前書き）

ハロウィン用のお礼小話でした。

季節もののため、本編より少し未来（秋くらい）のお話です。
隆人視点。

拍手お礼小話『駄目駄目ハロウィン』

朝方になると、白い息が空気に浮かび上がって見える。そろそろそんな季節になった聖セルヴィリア国のある夜。

執務室にノックの音が響いて、側近がいつも通り返事を待たずに入室した。俺もいつも通り、顔も上げずに書類を捲る音で答える。

「陛下、お客様がお見えです」

「もう夜だ。急用でない神官どもなら明日に回せ」

「いえ……違う方々です」

含みのある言い方に、ようやく顔を上げると、側近は神妙な顔つきをしていた。

建国以前からの付き合いで、お互い何も言わずとも相手の考えくらは察知できる。

それほどの臣下だが、たまに変なところまで気を回してくるところが残念なヤツである。

「なんだ。緊急か？」

「はい。陛下……」

やけに芝居がかった動作で、側近が俯き、一拍溜める。

こういう時はたいがい悪ふざけだと分っているので、冷やかに聞き返した。

「で、何だ？」

「なんと お化けでございまあああす！」

「は？」

側近が叫んだ途端、ふっと執務室の魔法灯が消えた。同時に、扉が大きく開かれる音がし、何やら大人数の足音が近づいて、

「Trick or Treat !」

側近のものより高い声が聞えると同時に、目の前に4つのカボチャ……いや、顔形にくり抜かれた灯り入りカボチャ ジャック・オー・ランタンが、浮かびあがった。

なるほど、小さな魔法灯をカボチャの中に仕込んで、元の世界のそれになんら見劣りしない出来栄だ。

少しの懐かしさを覚えて、黙ってカボチャを眺めていると、数秒白けたような空気が流れた後、ぱっと執務室の灯りが戻った。

側近が馬鹿げたことでも計画したのだろうと高をくくっていたのだが、

「……」

予想外の登場人物に用意していた言葉を忘れた。

目の前には、3人の小さな獣人の子供と 1人の若い獣人女性。彼女は、珍しくしかめっ面をして、ユキヒヨウの獣耳をひくひくさせながら、カボチャを引っ込めた。

「ちょ、無反応、良くないよ！ 見て、子供達がオロオロしちゃったよ！」

「陛下、どっちらけですよ。せっかく演出しましたのに。大人げないです」

いつの間にもやられ顔で、側近が傍に寄って来た。

お前にだけは言われたくないと思いつつも、側近の促すまま視線を下げた。

すると、失敗したのかと不安そうに見上げる幼い子供と目があつた。虎の耳がしょんぼりと垂れている。

カノは、子供の肩に手を置くと、懸命に励ました。

「大丈夫。隆人は、驚いたけど、顔に出なかつただけだよきつと。成功してるから、大丈夫！　ね、隆人！」

「あ……ああ！　すまん、驚いて声もでなかつた。いやあ、怖かつた」

慌てて子供の傍に屈みこみ、頭を撫でてやる。他の子供達も順番に撫でてやつた。

虎の獣人の三兄弟だ。そのうち2人は双子で、同じ顔をしながらくすぐつたそうに同時に笑つた。

確か、シンの長男と、次男三男の双子だ。誰のお手製なのか、安っぽく光る黒いマントを身につけて、カボチャを大事に抱えている。一応小さめのカボチャのようだが、幼い子供達では抱えるのもたいへんそうだ。一番下の子がいなかつたが、おそらく、幼すぎるため、夜の外出には付いてこなかつたのだろう。

一方でカノは黒マントではなく、黒ずくめだった。どこかの映画で見たような、全身黒のワンピース。もしか、魔女をイメージしているのだろうか。

元々『魔法使い』なのだから、要らないと思う。……いや、似合っているけれども。

「カノ、ハロウィンなんて良く覚えていたな」

ゲームだった頃には、運営会社のサービスで、夜中に大量のカボ

チャモンスターが出現するわけのわからないイベントがあったものだ。

だが、2年暮して分ったが、この世界には、ハロウィンやクリスマスなどのイベントはなかった。

クリスマスはともかく、ハロウィンなんて子供のお祭りだと思っていたので、すっかり10月31日の今日だということを忘れていた。

感心すると、カノはようやく困ったような笑みを浮かべた。

「えへへ、行きなり来てゴメンね。実はミヤイ領でカボチャが大量に採れちゃって。カボチャが大好きって言ったら、どうもすごい数のカボチャを植えていたらしいんだ。

そこに魔法で新開発した肥料を使ったら、たいへんなことになってねー……。

せっかくだしお祭りついでに、領民や芯の子供達にカボチャのお菓子や料理を配ったんだ」

「で、俺はどうすればいいんだ？」

「Trick or Treat。でも今回はちょっと変更。……ようし、皆、あの台詞を言ってあげて」

カノは最後の言葉だけ子供達に向かって言うと、セーの声を合わせた。

「『お菓子』もらって『くれないと、悪戯しちゃうぞ!』」

子供達は小さな手のひらで、クッキーやマフィン、ブラウニーを差し出してくれる。

1人1人にお礼を言いつつ、受け取る。側近に目配せすると、彼は当然とばかりに頷いた。

「さ、ちゃんと渡せた賢いお化け様には、ご褒美です」

いつの間に用意したのか、別のお菓子を示して、側近は子供達を手招きした。子供達は高く響く子供特有の歓声を上げながら、ぱたぱたと側近の方へ集まって行く。

こちらの世界で生まれ育った彼等は、ハロウィンの意味など詳しくは知らないだろう。けれど、楽しめていればそれでいいと素直に思えた。

「はい、隆人。私からはコレ」

残ったカノが、何やら小さな箱を取り出し、中身をそつと見せてくれた。心のどこかで緊張しながら覗く。

中には、

「……煮っ転がし？」

「あ、……あのー、ゴメンね。子供達のお菓子は、領民が作ってくれたやつなんだ。

私は、せつかくだし、手作りをと思ったんだけど……。思えば、お菓子とか作ったことなくて。

普通の料理なら、出来るから、こんな風に煮っ転がしてしまいまして……。

あ、でも味付けは！ 味付けは自信あるから！ みりんとか無かったから色々工夫して……」

カノは誤魔化すように手を振りながら、こちらの反応を窺っている。

その顔にふつと笑い、箸がないのでそのまま手づかみで煮っ転がしを口に放り込んだ。

和風の味が、口の中に沁みた。懐かしい味わいが恋しかったのだ、食べてみてようやく気づいた。

「美味しいな。ありがとう」

心からそう言うと、カノは笑顔に戻った。後ろで尻尾が上機嫌に揺れているのがよく分る。同時に、視界の端でこちらをチラ見する側近が目に入った。

「どういたしまして」

「しかし、貰ってばかりではな。子供達と一緒に菓子持って帰るか？」

「いやあ、私はミヤイ領に戻ったら、まだ大量にカボチャとそのお菓子あるから……」

「そうか。それなら、別の機会にお返しでもしよう」

「でも、バレンタインとかじゃないし……。お返しの日みたいなので、ないでしょ？ クリスマスとか？」

きよとんとした目で聞かれ、思わず言葉に詰まった。

クリスマスは、少し……ハードルが高くないだろうか。

だからといって、バレンタインデーやホワイトデーにするわけにもいかない。だがその他に良い機会はあっただろうか。

カノは、こちらの返事を待っている。だが……。

焦った拳句、俺の口はいつの間にか動いていた。

「お……」

「お？」

「お歳暮で返す……！」

拍手お礼小話『駄目駄目ハロウィン』（後書き）

本当は10月31日に本編に出したかったのですが、間に合いませんでした。

お歳暮で返されたらお中元でさらに返せばいいんでしょうか。駄目だこの人。

タイトルの意味はもう、そのままです。

ハロウィンのお話どうしようかな、なんかアイデア出ないかなと考えていたら、

最後のこのシーンから思いつきました。なんて、可哀想な扱い……。

「こいつ、ほんつとだめだな！」とツツコンであげてください。

遅くなりましたが、皆様ハッピーハロウィン、です！

領主になってからというもの、自分でどこかに出向くよりも、用事のあるお客の話聞くことが増えた。

お客達にはわざわざ領主を訪れるだけの理由がある。各々の理由や事情によって悪い物を連れてきたり、良い物を運んできたりする。その中には予想できるものもあるし、できないものもある。

だからお客を迎えるときは、いつも少しだけぴりつとした小気味良い緊張を伴う。

ちなみに、ビッグニュースというやつは、たいてい予想外の産物だ。驚かされてこそそのビッグニュースだから当然かもしれない。

『女帝』という珍客来襲から数日後。相変わらず仕事部屋で、やっぱり相変わらず師弟で書類仕事をこなしていると、今度は2人組の可愛いお客がやってきた。

「久しぶりですカノ様！」

「失礼いたします」

少しばかり勢いよく扉を開けて飛び込んできたのは服屋のサーナだ。つづいて後ろから、兵士姿の男性がきりつと一礼しながら入室した。

不思議な組み合わせに首をかしげつつ、私も椅子から立ち上がる。

「サーナ、元気そうで良かった。ここに来るなんて珍しいね。どうかしたの？」

屋敷の外で店を構えているサーナとは、なかなか出会う機会がない。会うのは、前回悠と街めぐりをしたとき以来だ。

喜びながら出迎えると、サーナは少しばかり頬を紅潮させた。彼女はちらりと隣に並んだ兵士に目配せをした。

兵士は戦闘職業にもよるけれど、大体同じ、簡素な防具を見につけているので、見分けがつきにくい。しかし、彼は見知った人物だった。

顔や背格好で覚えにくい時、獣人は獣耳で覚えるのだ。彼は、茶色の犬耳。

「ああ、ゼフさん！ こんにちは」

たしか練兵場で団長のフェレにしごかれていた、と心の中で付け足す。

人口が増えるにつれて、どうしても領民個人との接点は減るので、そんなエピソードしか持っていない。申し訳ない。

若干後ろめたいながらも愛想笑いを浮かべて挨拶すると、ゼフは何やら緊張した面持ちを浮かべた。次いで、その場で気をつけの形をとる。

傍で見ていた芯が何やら、はあん、と得心したように吐息をもらした。

「領主様、御無礼を承知でお願いがございます！」

「は、はあ。なんでしよう？」

余りに勢いのあるゼフの様子に、わずかに後退りしつつ頷く。

見かねたサーナは、笑いながらゼフを制止して、言葉を引き継ぎ、口を開いた。

普段から元気いっぱいである彼女の顔は、何故か今日、一段と輝いている。一步前に出たサーナに、窓から差し込む光が当たって、彼女の輪郭が柔らかくなった。

「カノ様、あたしたち、結婚するんです。それで、もし、あの、失礼になるかもしれないですけど、でも、結婚式にカノ様にも、それと、もしお願いできるのなら、シン様にも来ていただけたらって」「え?」

血痕　ケツコン?

馴染みのない言葉は、耳を素通りしやすと思う。

重要なその単語は、するっと獣耳の毛を優しく撫で、飲み込めずに通り返して行った。

何度か瞬きをし、思わず聞き返すと、サーナが途端に眉を下げた。

「あ、えっと、カノ様もお忙しいことはわかってますから、無理はしないでください。ダメなら、えっと……」

こほん、と芯が小さく咳払いをした。はっとして見れば、芯は忘れ物を注意する先生のような顔をしている。

そこで、ようやく私の口から最初に言うべき言葉が滑り出た。

「あ、あつ！　結婚!?　サーナ、ゼフさん、おめでとう！　ホントに……おめでとう。それと、式に誘ってくれて、ありがとう。もちろん行くよ」

「おめでとう。それと、俺までお誘いありがとう。俺も行かせてもらおうよ」

続いて横から芯も祝福した。

領主陣の返事に、二人が嬉しそうに顔を見合わせた。そのタイミングと息の合い方に、やっと先程の言葉　ケツコンという言葉がしっくりきた。そうか、二人が結婚するんだ。結婚。

遅れながらも嬉しさがじわじわと込み上げてきて、私はサーナの

手をとる。両手で包むように握る。

「なんか、驚いちゃった。サーナ、いつの間にそんなことになったの？」

「実は、ここに来る前から知り合いで……。でも、状況が落ち着いてなかったから、ずっと、進展とかはなかったんです。えへへ、だからやっとなんですよ」

「そっか。そっか、良かったね！」

「ありがとうございます！」

サーナも両手で握り返してくれた。

「こっちの結婚式って私初めてだけど……。やっぱり教会でやるものなの？」

「はい！ バルバラさんに頼んで、一週間後に」

「白いドレスとか、着るのかな」

サーナの赤い髪がよく映えそうだ。想像して笑うと、サーナはとんでもない、と首を振った。

「そんな高い物、着れませんよ！ あ、でもヴェールは、今、作ってるんです」

「そっか。サーナの花嫁姿、楽しみにしとくね」

もちろん、その姿を一番楽しみにしているのは、私ではないけれど。

サーナはプロだから、手作りでもきつと良いものができるだろう。報告を終え、幸せそうな二人が帰るのを見送った後、すぐには仕事に付かず、私はぼんやりと机の上に肘をついた。

一方で、芯は平然と書類の続きをばらばらとめくっている。

「は……。結婚、ですって」

「おめでたいねえ」

「じゃなくてですね。いきなりすぎて驚きませんか？」

口に出してから、愚問であることに気付いた。問うべき相手を明らかに間違えた。

芯は手を止め、何やら渋面を作った。

「カノ、気持ちが悪と尻尾にだだ漏れてる。そんな、失言した、みたいな顔されてもなあ」

「あはは、ごめんなさい……」

「まあ俺は例外としても。こっちの獣人は10代後半くらいで結婚するから、こんなものじゃない？ カノもぼやぼやしていると、婚期を逃すよ」

「え、いやいや。普通はそういうのって、20代後半に差しかかるくらいで、元同級生から結婚式の招待状が届いて実感することじゃないですか？」

「なんでやたらと具体的なの？」

呆れたように溜息をつかれた。

確か、以前読んだ漫画や雑誌のコラムなどではそんな風に書いてあった気がする。

ちなみに、結婚式の招待状ではなく、赤ちゃん生まれました報告がたくさん来るようになったら、いよいよヤバイ、とも。

そう説明すると、芯は疲れたように首を振った。

「まあ、既に普通じゃなくなってるカノは、参考にしちゃだめだ、それ」

「……ですねえ」

数えればあと3年と少しで20代後半に差しかかるのだ。獣人だから。以前の常識は通用しないだろう。

芯の言葉に頷きながら、ようやく仕事の書類に向き直る。新しく増えた領民の分の名簿だ。

ざっと眺めたところで、ふと私は顔を上げた。

「そういえば、結婚に届け出とかっていらなんでしょうか？ 婚姻届、みたいな」

「システムとしては、ないな。教会での式で結婚が認められるものだから。そもそもゲームのときには結婚なんてものはなかったし」

「あれ、そうなんですか？」

私が首を傾げると、芯は説明モードになったようだ。書類を置いて、なにやら語り出す。

「結婚システムを持つゲームは、確かにあったけどね。少なくとも『マイグレーションオンライン』では無かったな。ゲームの基本は領地経営、発展、建国、戦争。好きな奴は魔物に挑む、くらいだったし」

「わー、殺伐」

「まあね。それに、領民はNPC っつて分るかな、話かけると同じことしか言わない、ただの人形だったから。結婚なんてするはずもなかったよ」

ひょいと肩をすくめ、説明を終わろうとした芯に、私はますます疑問が広がった。サーナの言葉と合わせると何か違和感を感じるのだ。

「でも、芯。ならこの世界の、教会で式を上げるとか、白いドレス

やヴェールをまとうっていう文化は、どこから来たんです？」

「さあ。いつも通り、システム以外の部分はアバウトなんじゃないかな。でも、多分、ゲーム時代にオシャレ装備やネタ装備としてウエディングドレスがあったから、そこからじゃない？」

「えーと、オシャレ装備って、なんですか？」

「ただ変わった衣装を着て楽しむための防具や装備品。浴衣とか巫女服とかもあったけど、ゲームの世界観を壊すって不評だったけど、探してみれば、この世界のどこかに、反映されてたりするのかな」

俺は見たことないけど、と芯が呟く。

洋風の街並みに巫女服。それは、確かに合わないだろう。

センスがないのか、巫女服にそれほど需要があったのかは分らないけれど、違和感たつぷりだ。お目にかかる機会はあるんだろうか。想像しながら、うーん、とつい唸っていると、芯はにやりと唇を上げた。

「だからまあ、婚姻届みたいなシステムはなかったよ。でもさ、力。結婚すると家族が変わるわけだよ。すると住民名簿変更しなきゃいけないから、届け出はしてもらわなきゃいけない」

「あ」
つまり、届け出てもらう仕組みが必要なわけだ。指摘に間抜けな声が出た。

そんな制度、作ってなかった。

そうか、家族って増えたり変わったり減ったりするんだ。その度に名簿に変更が出るから当然必要なことだった。結婚や出産なんて自分からはほど遠い話であったから、ちっとも気付かなかったのだ。全員の名前や家族構成、収入を把握して、それで満足して。

自分の周りで考えるのではなくて、もっと先や状況の変化までち

やんと考えてなくてはならない。

名簿を作ったのは芯が来る前だったから、私の見落としを、芯も今まで知らなかったのだろう。

「わ、忘れてました……」

反省。そして後日、慌てて届け出る決まりを作って一件落着。

式の朝、サーナの名簿とゼフの名簿に、家族として互いの名前を書き加えておいた。

孤児院の拡大のために、教会をランク2にしておいて、ちょうど良かった。

よく晴れた一週間後、街角の教会を見上げながら心で呟いた。

白い石造りの奥に長く広がる真四角の建物、そしてその上にちよこんと三角のトンがり帽子のように、青い色の屋根が乗っている。

ランク1では黒ずんでいた石壁が、少し綺麗な白い色になっており、可愛らしい田舎村の教会といった風情だ。

いかにも、乙女チックな女の子が、こんなところで結婚式をしたい、と憧れそうなの。

「あー、俺もランク2にしてから式あげればよかったな。こんなところでしたかった」

傍らの芯が、教会を羨ましそうに見上げた。俺はすぐに立ててす

ぐに式をあげちゃったから、と溜息をこぼす。

「たまに思うんですけど……男性って女性以上にロマンチックなこと、ありますよね」

「……。男はムードを重視するんだよ」

芯は何やら深い顔でゆっくりと頷いた。

よくわからないけれど、そういうものなんだろうか。

「ははは、シン様も可愛いところがあるじゃないか！」

まったく別方向から 背後から快活な笑い声が上がった。

驚いて振り返れば、普段より少し小ぎれいな格好をしたバルバラが立っている。

領民達の女性服は、ブラウスに、足首までの色のあるスカートを着て、皮のベストやエプロンをつけるというのが主流だ。なんちゃって中世ヨーロッパ風に。

けれど、今日のバルバラは、深い藍色のローブ姿だった。高価そうではないけれど、ゆったりとした衣の形と深い色合いで、上品そうに見える。

「バルバラさん、今日、カッコいいね」

「嬉しいこと言ってくれるねえ。どうだい、こんなオバさんでも、多少は威厳があるだろ？ サーナちゃんとその相手の大事な日だからね」

バルバラは、ふくふくと豊かな体を揺らして笑った。

「まだ少し時間が早いけども、まあ、先に中に入ってた方が、二人とも他の領民達にじろじろ見られずに済むさ。中の準備は出来てい

るから、入りな」

バルバラが言いながら扉を開いて促した。勧められるままに、歩を進める。

「わ……。初めて、見れたなあ」

初めて見た教会の内部に、小さく声を上げた。声は、小さな教会内によく響いた。

中は、大体想像通りではあった。

入口から真つすぐに道があり、その両脇に、3人掛け程度のベンチが規則正しく並んでいる。

壁に大きく嵌め込まれた窓からは、光がいつぱいに差しこんでいる。さすがに全面ステンドグラスというわけではなく、ところどころに小さく色のついたガラスが埋まっていた。そこから、綺麗な色の光が床に届いていた。

少しだけひんやりした教会は、女神なんて信じていない私でもどこか神秘的に思えた。

そして、数段高くなった正面には、なにやら立派な台座がある。その上に見覚えのあるモノがどっしりと置かれていた。

「水鏡……？」

黒い光沢をもつ石で作られた、大きな皿。

隆人からもらったテレビ電話のような役割を果たすアレだ。形は同じだけれど、自室に置いてあるものより、かなり大きい。1人では抱えられないほどのサイズ。2人掛かり程度でようやく持ち上げられるほどだろうか。

続いて入って来たバルバラと芯を振り返ると、近付いて見ても大丈夫、と頷いてもらえた。

なんとなく、足音を立てないように気をつけながら、そっと台座に近寄り、覗きこむ。

黒い皿の中には、やはり透明な水が張られていた。

「水鏡がどういう原理で、遠い地の人の姿を映すか、知ってるかい？」

「魔法、かな」

水面に映る自分の姿を見ながら、バルバラの問いに、深く考えず答えを返した。

「もちろん、そうさ。カノちゃんが使ってるようなやつにはね、底に魔法陣が掘ってあっただろ。あれは、水鏡によって細かい部分の形が違っててね。全く同じ魔法陣は2つの水鏡に同時に掘る。そして全く同時に完成したものだけが、対になって繋がるように決まっているんだ。そういう条件でしか発動しないようになってる」

「あれ、でも。この水鏡には、陣がない、けど……」

澄んだ水の底を見ても、つるりとした石しか見えない。

バルバラはその質問を待っていたかのようにだった。

「そうさ。教会に置かれるこの水鏡にはね、魔法陣はいらないんだ。そんな小細工なんかなくても、繋がるからさ。どこに繋がってるかは、わかるだろ」

教会で台座に据えられているのだから、繋がると思われる先は当然一つだ。

彼女達が信じている、女神さま。

この世界が元ゲームだと知っている私には、あんまり信仰できないけれど。よくあるゲームの世界設定での神話だったのだろう。

けれどももちろんそんなことをバルバラに言う気は無く、ただ頷いた。

「水面に女神様の御姿を映すことはできないけどね、教会の水鏡は確かに女神様に通じているさ。そこから、女神様は見守ってくださってる」

その証拠に、とバルバラは自信のある声で言葉を続けた。

「ほら、水面に女神様の御姿は映らないけれど　その代わりに、自分の姿も誰の姿も、映らないだろ？」

後ろから近づいてきたバルバラがにっこり笑って、一緒に水鏡を覗きこむ。

彼女の姿は、

「え……!?!」

映らない。水面は、ただ、静かに天井を映しているだけだった。

驚いて顔を上げ、まじまじとバルバラの顔を見つめる。確かに、彼女は覗きこんでいるのに、水面に目を移せば、彼女の姿はそこにはない。ふくよかな笑顔も。狸の耳も。こげ茶の瞳も。

けれど驚いて目を見開く、私の姿は……確かに、水面に映っている。

「誰の姿も、映らない……?」

「カノちゃん?　どうかしたかい?」

領民は映らない、ということなのだろうか。けれど、バルバラの目には、水面に映る私の姿は見えないらしい。

困惑して芯を振り返れば、芯はさっさと一番前のベンチに着席していた。

私の視線を受けて、芯は安心させるように笑った。

「ああ、それ。俺も最初驚いた。鏡に誰も映らないって、ホラーなんかでよくあったけど、実際に見ると怖いもんだよね」

「そう……ですね……」

芯の口調はバルバラの手前、話を合わせているという様子でもなかった。

ますます混乱しながら、再び水鏡に向き直るけれど、やっぱり私の姿は、映っていた。眉根を寄せた、紛れもない自分の顔が。

「さ、講義はこれくらいにしとこうかね。そろそろ人がやってくるし、あたしゃサーナちゃんの様子を見てこないかね」

ぼんと私の肩を叩いて、バルバラは教会の奥の扉の向こうへ消えていく。

完全に彼女が去ったのを見てから、芯の隣に腰を下ろし、

「芯、あの。この水鏡に、姿って映らないんですか？」

恐る恐る小声で尋ねる。なぜか私の姿は映っているんですけど、とは聞けなかった。

芯は少し難しい顔をして、腕を組んだ。

「映らないでしょ？ それ、不思議なんだよ。この世界ってゲームの設定だし、ゲームで設定されてないところはアバウト、それはい

いんだけど。ゲームの話の女神に、そんな設定なかったんだよね」
「え」

「うん、ゲームに確か女神がいてどうのこうのって話はあった。どうせ世界観や裏設定作りのストーリーだから、俺、読み飛ばしてたんだけど。でも、覚えてる限りでも、女神はそんな設定じゃなかったんだよ。だからといってアバウトになってるってわけでもないし。なんか、神話あたりの話が全部変わってるんだよなあ、この世界」

これは、どういうことなのだろう。

私は言葉を失って、いつの間にか流れていた汗をそっと拭いた。

29話（後書き）

たいへん遅くなりました！申し訳ありません……。人のゴシップ楽しんでいましたが、実は自身もちゃっかり幸せをゲットしていたサーナでした。パワフルですね。

映るはずの無い水鏡に、自分の姿が映ること。

ゲームとは違った神話が、広まっていること。

異世界トリップに、何か関係があるのだろうか。もしそれが分つたら 還る方法も、わかるのだろうか。

私ではないけれど、帰還を切望している人がいる。何か、糸口になるのなら。

膝の上で祈る両手を組み、考えをめぐらせていると、芯がばしりと私の背中を叩いた。小気味良い音が、教会内に反響した。

「げほっ……何するんですか！」

「式の最前列でそんな難しい顔してたら台無し。難しいことは置いとくなつて。神話関係に詳しいのは俺じゃなくて、リユートあたりだから、そのうち聞いてみれば？」

そういえば、隆人の国は信仰が盛んだとかなんとか言っていた。いつでも、水鏡 自室にある方の水鏡で、話を聞けるだろう。

「アドバイスありがとうございます。……でも、あの、ステータス考えて叩いてくれませんか？ いま、HPゲージが3減ったんですけど」

「メチャクチャそつと叩いたんだけどな。まー、3ならいいじゃん」

叩かれた瞬間に指輪から展開されたウィンドウを、撫でて消す。

本気で叩かれたら100くらいは持つて行かれそうだ。いや100で済めば良いほうかもしれない。

芯への溜息を吐きだしながら、頭を振って切り替える。そう、今はおめでたい時なのだから、考えるのはストップしておこう。

ちょうど、背後にある入口の扉が開かれ、にぎやかな領民たちの声が近づいてきた。静謐だった教会内に、和やかな空気が流れ込む。参列者たちだ。

ほとんどの領民はこちらに静かに頭を下げ、各々着席していく。

「カノ様シン様、御無沙汰しております」

「お久しぶりです」

「おはようございます」

顔見知りであるイリエとレーレル、そしてフェレの3人が、声をかけてくれた。揃って私の後ろのベンチに、腰かける。

「3人とも、おはよう。なんだか皆、今日は素敵に格好だね」

服こそ普段のままだが、いつも流したままであるイリエの細い白銀の髪は、今日は編み込んで結びあげてあった。慣れていないらしく、時々不安そうに頭に手をやっている。

レーレルはうつすら化粧をしているようだ。この世界に化粧なんてあったんだ、と妙なところで驚いてしまった。思えば悠は綺麗に化粧をしていたけれど、領民もするものだとは知らなかった。基本皆すっぴんだからなあ。

女性陣が華やかな一方で、フェレは鎧でビシッと決めていた。以前の革鎧ではなく、金属鎧だ。自衛団の団長らしく、ということなのかもしれない。

私も何かしてくるべきだったかと、いつも通りの髪を少しだけ手櫛で梳いた。オシャレにさほど興味を持ってこなかった上、こちらのオシャレはさらによく分っていないので、こういう時には困ってしまう。

参列者が全て席に落ち着き、入口の扉が閉まると、バルバラが教

会の奥から子供達を引きつれて現れた。おそらく、孤児院の子供たちだろう。

就学年齢に満たないほどの小さな子たちは、転ばないように尻尾を振ってバランスを取りながらフリフリ歩く。その可愛い歩き方で、台座の近くに並んだ。

「さ、皆そろったかね！　じゃあ始めるよ！」

バルバラの声で、教会内のお喋りがぴたりと静まった。私も背筋を伸ばして座り直す。

ぐるりとバルバラは人々を見回し、準備が整ったのを見て、子供達に合図を送った。

子供達は、一斉に息を吸い込み、それを、歌声に変えた。

そして、歌声と同時に、改めて、ゆっくりと教会の入り口が開かれた。

綺麗。

ありきたりだけれど、その言葉が一番しっくり来る、花嫁だった。ドレスではない白いワンピースを着ているため、派手ではなく清楚に見える。お団子にしてある赤い髪の上から、ふわりとヴェールが降りていた。ちなみに、兎耳もヴェールによって覆われている。

そして　幸福そうな、サーナの顔が、一番綺麗だった。失礼ながら、この世界に来てからお目にかかったどんな美女や美人よりも隣に並ぶゼフは、自警団の団員であるためか、鎧姿だ。せめて、自警団に制服を作ってあげられるくらいの余裕があれば、と申し訳なく思う。

一歩一歩踏みしめて歩き、辿り着いた台座の神に繋がる水鏡の前

で交わされる誓いの言葉と、誓いのキス。

「ごくごく普通の手順の結婚式だけれど、なによりも神聖で、なによりも幸せそうだった。

短い式の終わりは拍手と歓声で締めくくられた。

そして、教会の外に出て、青空の下、宴会の開始である。

新郎新婦を囲い、少ないながらも各々がお祝いに持ちよった酒や食べ物を楽しむ会だ。

「サーナ、ゼフさん、おめでとう」

「カノ様！ 来てくださってありがとうございます！」

宴会が始まってようやくサーナとゼフにお祝いを言いに行くことができた。

「サーナ、とっても綺麗だよ。お幸せに、ね」

「はい！ ありがとうございます！」

サーナが勢いよく頷いたところで、背後から何やら野太い歓声が上がった。

怪訝に思っただけ振り向けば、宴会の中心でバルバラと芯が飲み比べをして盛り上がっている。

「あーあー……なんか、ごめんね、うちの師匠はしゃいじゃって」「いいえ、二人の領主様に祝福してもらえるなんて、すごく嬉しいんです　でも、むしろ」

花嫁はちらりと意味ありげに夫となった人を見上げた。

ゼフは視線だけで意味を誘ったらしく、諦めたように笑った。

「……ほどほどにしてくれるなら」

「やった！ カノ様、あたしも混ぜてくださいね！」

サーナはくるりと身を翻し、酒臭い飲み比べ戦場へと、ヴェールをなびかせてびよんぴよん駆けて行った。

そういえば、前に領地拡大のお祝いをした時も、サーナは酔っ払っていた覚えがある。お酒や賑やかなことが好きなんだろう。

酒瓶をひっつかむサーナを遠くから眺めていると、ゼフが改めて私に向き直った。

そしてびしりと正しい角度で頭を下げる。

「領主様、改めて、御礼申し上げます！」

「わ、いきなりどうしたの？」

とりあえず頭を上げてとお願いすると、ゼフはようやく顔を上げてくれた。

「すみません、いきなり。けれど、どうしても、御礼を申し上げたくて」

「ええと、どういたしまして。でも私、なにかしたっけ？」

「自分が、家族を持てるなど、思ってもいませんでした」

「ゼフさん、出身は……」

聞けば、ゼフは大きく頷いた。その反応だけで、どこなのかは通じる。

「自分とサーナがいた土地は、元々は他の獣人領主が治めていたのですが。その領主は、すぐに自ら王国についてしまいました。徴兵される前になんとか数人で逃げ出して、それから各地を転々としてきたんです。その間にサーナにも出会ったんですが、領主のいない外の土地で暮らすのは苦しくて、とても家族を持てるとは」

「……そっか。でも、ここだって」

ここだって、安全というわけでは全くない。いくら同盟に加わり対策を立てていたとしても、落ち着いて暮らせるほどには、ほど遠いと思っっている。もちろん、努力は惜しまないけれど……。

めでたい日にこんなことを言うべきではないので、途中で言葉を飲み込んだ。

「領主様、そうではありません」

「え？」

「安全かどうかでも、狙われているかいないかでもないんです。それはこの辺りの土地全てに言えてしまいますし、どうせ先のことなんてわかりませんから。そうではなくて、ここでずっと暮らしていきたいと、この地で初めてそう思えたから、結婚に踏み切れたんです」

だから御礼を！ と。

何やら語ってしまった気恥ずかしさを振り払うように、ゼフは再び勢いよく頭を下げ、そして、いつの間にもやら潰れていた花嫁を介抱しに去って行った。好きな割に、潰れるのは早いようだ。一方で芯とバルバラはまだ赤ら顔で飲み続けている。

花嫁を助けに来た花婿を、周囲がやいのやいのと囁きたてた。

和やかな様子をぼんやり眺めながら、彼の言葉を頭の中でじんわりと反芻した。

この地で、ずっと暮らしていきたい。

それは、領主にとってこれ以上ない最高級のご褒美のような言葉だ。

彼らがこの地を気に入って、ここで家族を作って、ここで一緒に生きていきたいと思ってくれた。

嬉しいのは間違いない。涙ぐんでしまったところを見られなくて

よかった。

けれど、それなのに私はどうして、嬉しさより先に、羨ましいなんて感情が浮かんだのだろう。

花嫁が潰れ花婿も潰れ、『僧侶』も潰れて（宗教的に良いんだらうか……）、芯が完勝し、酒も食べ物もあらかた片付いたところでお開きとなった。

ちなみに私は、前回と同じ轍を踏まないように、今回は飲んでいない。その場は楽しくとも、翌日にどんな目に合うかは経験済みである。

べろんべろんになった芯はその場で眠ってしまったので、親切な領民達によって屋敷まで連れて行ってもらった。

私は宴会の余韻に浸りながら、夕日に染まる道をぼてぼてと一人で帰る。

まだ賑やかさを残す宴会帰りの人達が、家路につくのを見ながら歩いた。

屋敷のほど近く、畑の横を通り過ぎようとして、ふと見知った顔を見かけた。

「デイサ、こんばんは」

畑の柵の外から声をかける。夕日に目を細めながらデイサは私の姿を認め、仕事の手を休めて笑い返してくれた。

「カノ様。こんな時間に外を歩いていらっしやるなんて、珍しいですね。ああ、もしかして、サーナちゃんの結婚式に？」

畑いじりをしていた手を拭いながら、デイサは近付いてきた。

「うん。デイサもサーナと知り合いだったんだ？」

「ええ、お互い早いうちからミヤイ領にいましたし。彼女の噂話はどうしても面白いので、よく聞かせてもらってます」

「噂話？」

そんな話は聞いたことがない。首を傾げると、デイサは何やらくすくすと悪意のない笑い声をたてた。

「ふふ、いずれカノ様も聞いてみてください」

「？ うん」

イマイチ会話が理解できない私を置いて、デイサは、それより、と話を変えた。

「サーナちゃんの式はいかがでした？ 私は、行けなくて……」

「綺麗で、幸せそうだったよ。デイサは、今日は仕事だったんだ？」

「ええ、まあ」

サーナとゼフの両方に元々家族はいないため、領地内で少しでも親しい人は全員式に招待したと聞いていた。その上、ただでさえ祝い事や祭りの少ない領地だから、関係ない人でも宴会に参加していた。おそらく参加できなかったのは、仕事を休めなかった人達だけだろう。

「残念だったね。でも、仕事頑張ってくれてありがとう」

「いえ、本当は、代わってもらうこともできたんですけど……」

デイサはふっと困ったように眉を寄せた。

「私が行くと、なんだか縁起が悪いかと思って」

思いがけない台詞に目を見開くと、デイサは私に聞かれる前に理由を説明した。

「私はサーナちゃんと一緒に、各地を流れてようやくアズサ領……留まるところを見つけて、すぐ結婚したんですけど。でも、ほら

」

今、彼女の隣に夫はいない。

一瞬、どうやって励ませばいいのか悩み、気の利いた言葉が出なかったので諦めた。

代わりに、寂しげに微笑むデイサの隣の空間を埋める様に、私はよいしょと柵をまたいで彼女の横に並ぶ。私が柵にもたれると、デイサも同じようにした。

「そんなこと言ったら、私だって十分縁起が悪いけど。サーナは良い子だし、ゼフさんもちょっと勢い有り余ってるけど、しっかりしてそうだし。あの2人なら、きっと大丈夫だよ」

むしろ、縁起の悪さでいくなら私のほうが上である。だからといって、お祝いを言っではいけないなんて思わない。

私の顔を見て、デイサは数秒視線を彷徨わせてから、意を決したように顔を上げた。

「カノ様は、ご家族は？」

「ねえ……家族の定義って何かな？」

質問に質問で返すと、デイサは答えに詰まってしまった。

「あ、ごめんごめん、いじわるな問題とかじゃなくて。……どこまでをどう家族って言えばいいのか、わからなくて。だからなんて答えていいか、わからないんだ」

悩む彼女を見て、慌てて付け加える。

デイサは、また少し間を置いて、しばらく夕闇に沈んでいく景色を黙って見つめていた。そして、ためらいためらいしてから、口を開いた。

「……アズサ様も、ご家族について、悩まれていました」

「えっ？」

驚いてデイサを見たが、彼女の視線は夕闇の方だけに向いていた。高齢になってからの異世界トリップだから、こちらに新しい家族はいなかったはず。元の世界の家族の話か。

通行人に聞えないように、デイサはさらに声を響めた。

「ご家族にご自身を見てもらえず、お寂しかった、と。あまりにもお寂しくて、自ら、アズサ領にいらっしゃた、とおっしゃっていました」

自ら、それはつまり。

意味するところに気付いて、息を飲む。

デイサは、その意味をはっきりとわかっている様子はなかったが、私と静かに目を合わせた。いつものように、寂しげな微笑を浮かべていた。

「でも、カノ様はまだお若いです。たくさん出会いもおありでしょうっ。」

「……出会い、ねえ……」

ただの出会いではなく、男性と、とデイサが言っているのはわかる。

あったらどうか。数秒唸ってみたが、特に思い浮かばなかった。いままで、それどころじゃなかった気がする。

そんな私の反応に、デイサは肩を揺らして笑う。笑いながら、夕闇の向こうから駆け寄って来る小さな影を認めて、柵から身を起す。

一生懸命駆けてくるのは、デイサの娘のラウラだ。
ラウラの方へ歩き出しつつ、デイサは一度だけ私を振り返った。

「家族って変わるものですよ。変わって欲しくなかったこともありましたけど……。でも私は、良い変わり方をするためなら、何でもします。この子の、ために」

デイサは手を振って再び畑仕事へ戻って行った。

その後は寄り道せずには戻ると、朝に書き加えた2人分の名簿が机に出しっぱなしになっていたことに気付いた。

片付けながら、心の中でもう一度、お幸せに、と祝福を送った。

ミヤイ領初の新婚夫婦へ向けて。

この夫婦が良い変化をしていける、そのお手伝いができますように。

30話（後書き）

ようやく30話です。8ヶ月近くかかってここまでしか進みませんでした……。4分の1もいっていないような……。

まだまだ続く予定なので、ゆっくりお楽しみいただけると幸いです！

31話(前書き)

残酷描写っぽいものがあります。ご注意ください。

31話

「お前、身長はいくつだ？」

「最後に測った時は、160センチ」

答えてから、センチメートルの単位で伝わるのかどうか不安になった。

が、質問したゼオンは一つ頷いたので、通じたのだろう。

「体重は？」

「……それ、選ぶのに関係あるの？」

「ねえよ。聞いてみただけ」

悪びれた風もなく答えるゼオンを睨みあげるが、ゼオンはこちらを振り返りもしなかった。

久しぶりに様子を見に来たゼオンの家は、相変わらず、ここぞとばかりに物があふれている。家というより巣という言葉のほうが似合っている有様だ。

その奥からがさごそと怪し気な音を立てて、ゼオンは一つの箱を取り出した。

長細い箱をから中身を取り出し、外装はぽいと捨ててしまう。そういうことをするから部屋が片付かないんじゃないかなあ。

黙って見つめていると、ゼオンは私に中身を差し出した。

「ほれ、こいつ。やっぱりお前にちょうどいいぜ」

渡されたのは、おそらく杖だった。

おそらく、と付けてしまったのは、どう見ても80センチほどのただの金属棒にしか見えないからだ。

新品の10円玉のような　つまり、鈍く輝く赤銅色。太さは細すぎず太すぎず、握り込んだ時に一番力が入りやすいサイズで、よく手に馴染む。

特に飾りもついておらず、それだけならば、やはりただの棒に見えるのだが。

杖の両端からそれぞれ手の平サイズの魔法陣が、常時展開されているのが、特徴的だった。

「こつちの陣で与えたダメージを計算して、反対の陣でMPにする。この杖で攻撃したダメージの1割がお前のMPになるってわけだ。100与えたなら、10しかMPにならねえから、そう使い勝手が良いわけでもねえ。しかも、魔法での攻撃は含まれねえからな。そんでもって普通、杖の利点つーのは魔法の威力を底上げしてくれることだろ？　でも、この杖はその点については並以下だ。

おかげであんまり人気のない杖なんだが、突っ込んでく上にMPが少ないお前にはちょうどいいだろ」

「でも、これ本当にもらっていいの？」

ゼオンに念を押しした。

随分前に杖を折ってしまってから、特に必要もなかった上にお金もなかったので、自分の杖を持たずにいた。

それを知っていたゼオンが、レベカ訪問時に迷惑をかけたお詫びとして、持っている杖を譲ってくれと言ったのだ。

甘言につられてノコノコとやってきたけれど、タダより高いものはないという言葉も知っている。

「俺には向かねー杖だからな。人気もねえから安物だし。一応有名な杖の贋作だから持ってたんだが、一度も使わなかった」

ゼオンは売り物ではなく、大量に杖をコレクションしているらし

い。

「贗作？」

「おう。すつげえ出来の悪い贗作だ。俺が作ったわけじゃねえぞ。リーシャ帝国の腕の良い職人が真似して作ったんだが、この程度にしかならなかった。真作は　お前、アーチファクトって知ってるか？」

構えたり、振りおろしたり、防御の構えをとったり、突きを繰り出したり。私は杖を慣らしに振り回しながら、聞きなれない単語に首を傾げた。ゼオンはひよいと身軽に杖をかわして、顔をしかめた。

「屋外でやれよ」

「屋外で人に当たったらたいへんじゃん。ゼオンなら避けれるでしょ？　それに万が一当たってもたいしてダメージ出なさそう」

「……お前、だんだんあの師匠とやらに似てきてねえか……？」

まあいいけどよ、と嘆息してからゼオンは説明を再開した。

「領主が建国するとき、アーチファクトっていう性能が半端ねえ武器が作れるらしい。一つだけな。どうやって作ってんだか、領主しか知らねえっていう。ちなみにリーシャの皇帝もアーチファクトは持つてるし、ヴァルルーデ王国にもあるらしいぜ。他の国は知らねえが、まあ、まず何か持つてるだろ。」

アーチファクトには特殊な特性を持つ武器が作れるんだが、1人の領主がそれを作ると、他の領主は同じ特性のアーチファクトを作れなくなるらしい」

「じゃあ、世界に一つしかない武器になるってこと？　それなら、最初にアーチファクト作った人が一番良い特性使えるじゃない」

「だな。建国した領主　まあつまり王様なり皇帝なりになった奴

しか作れねえから、まだアーチファクトは世界にそんなにはねえらしい。国が滅べば、アーチファクトも消えるから、そのアーチファクトが持ってた特性の武器は、また作れるようになるとも言われるけどな」

ゲーム時代ならそれをめぐって戦争、とかあったんだろうな。

例えば、ある1国のアーチファクトの特性を欲しがり、そのためにその国を滅ぼそうと考える。でも狙われるほどの特性を持ったアーチファクトを持つ国を、そうそう簡単に滅ぼせるはずもない。戦や戦略は大荒れ、みたいなことがあるかもしれない。

そう考えると多くの人がハマっただけあって、中々面白いゲームだったのかな。

「それで、この杖が、そのアーチファクトの贋作なの？」

「一応な。優秀な杖職人が、リーシャ帝国皇帝のアーチファクトを見て、なんとか真似して大量生産したんだけどよ。……まあ、普通の武器にすら及ばない出来だな。見た目すら程遠い。国宝を真似しようって試み自体が無謀だったんだろ」

「ふうん。じゃあ、その国宝の杖は、MPを大量に吸収できるとか、そんな特性？」

「確か、真逆だ。通常攻撃でMPを消費するんだが、消費した分の100倍のダメージが通常攻撃に付与されるってんじゃないか？ MP消費1で100ダメージ。10消費で1000ダメージだな。」

元々皇帝は、魔法が強くて、MPが有り余っているエルフィンだ。ただ、攻撃力も防御力も低いから、接近戦には向いてねえ。だから弱点である接近戦の通常攻撃を補えるアーチファクトにしたんだろ」

「ぜんっぜん桁違いの効果だね……」

1000と少ししかHPのない私は、MP10で瞬殺されてしま

うわけだ。それほどの効果でなければ意味がないのだろうけど。

「最初は贖作も、MPを消費してダメージを増やす杖を作ってたらしいんだが、MP100消費して10程度しかダメージを増やせなかったんだと。それじゃあまりにも失敗作だから、次の贖作はダメージからMPを増やせるように効果を真逆にした、いわゆるそいつは2号だ」

建国しなければ作れないということは、領主のままである悠や苺雄吾や沙耶もアーチファクトは作れていないということになる。ただ、隆人は持っているだろうから、ぜひ見てみたいものだ。

「ま、そんな贖作杖でよければ、もってけ。ないよかマシだろ」

「うん、使わせてもらう。ありがとう。あ、そういえば」

「あん？」

ゼオンは必要なかった杖コレクションたちを、ガタガタと片づけながら振り返った。

それらを指差して、尋ねる。

「ゼオンは、杖たくさん持ってるけどさ。どんなの使ってるの？」

魔法を使ったところは何度か見たことがあるが、杖を使っているところは見たことがない。

ゼオンは紺の髪を自分でかき混ぜながら、ばつの悪い顔をした。

「あー、俺はな。杖は使わねーっていうか、上手く使えねーっていうか。魔法の威力があがるのはいいんだけどよ、重てえし上手く振り回せねえから逆に邪魔つつうか。むしろ、なんでお前はそんなにひゅんひゅん自在なんだ？」

ゼオンはもにもよると言い訳するように理由を述べ、最後に投げやり気味に聞いてきた。

言われてみれば、なぜだろう。

喧嘩なら経験はあるものの、武道などやったことはない。私が魔法や杖なしでもある程度動けるのは、喧嘩経験（あまり思い出しにくい）のおかげだろうが、杖をこつても簡単に動かせるのはおかしい。

だが 予想はできる。

異世界トリップで、いつの間にかこちらの言葉を使えるようになっていたのと、同じ感覚だからだ。

いつの間にもやら、杖の基本的な動きが頭に入っている。あとはこつ動きたいとイメージするだけで、自然に体が覚えている動きをなぞっている。

剣や槍などの動きはイメージできないため、きつと職業に合う武器だけの動きをインプットされているのだろう。

勝手に獣耳や尻尾をつけてられたのだから、言葉や動きを勝手に頭に入れられたなんて、まだマシな方だ。むしろありがたい。

そして、以前狩りに行った時より、なんだか杖を扱いやすい気がする。それは、レベルアップによるステータスの影響、だろう。

ゼオンは、領主ではないため、言葉や文字同様、動き自体は自分で覚えなくてはいけないというところだろうか。戦闘職の領民にもステータスはあるため、訓練すれば扱えるようになるはずだ。

「うーん、練習あるのみ、かな」

私は練習していないので、このアドバイスは正しくても、ちょっとずるい気がするけど。

後ろめたさを隠しつつ言えば、ゼオンも苦笑した。

「……なら、俺の杖は観賞用で十分だ」
「そつか。ともかく、これ、ありがとう。大事にする」

そろそろ夕方である。ゼオンはこれから学校で授業があるし、私も仕事に戻らなくてはならない。

御礼を最後に、どちらともなくゼオンの家を出ようと扉を開けたところで、往来から悲鳴が聞えた。

石畳のメインストリートに駆けよると、領地の入口の方に人だかりが見えた。

人々は私の顔を見て、自然に道を空けてくれた。顔パスって便利とふざけている場合ではない。

分れた人垣の向こうに、異形の姿が見えると同時に、領地中に響く咆哮があがった。

耳を塞ぎたくなるその音をなんとかやり過ごしつつ、青く浮かぶ領地の境界線ギリギリまで近寄る。

境界線のすぐ外で、馬車が横転していた。立派なものではなく、領民や行商人が使う、粗末な幌の馬車だ。

転倒し、起き上がるうともかく2頭の馬　その1頭を、鱗に覆われた異形の後ろ足が踏み潰した。嫌なものが飛び散って、目を逸らしたくなった。

馬の悲惨な最後に、周囲の人から悲鳴や息を飲む声が溢れる。

耳をつんざく咆哮。一振りです敷程度なら粉々にできそうな、太く長い尾。蝙蝠を思わせるような翼。そして、蜥蜴に似た緑の胴体。

初めて見たが、もはや、言葉に出すまでもない。ファンタジーやモンスターといえば、お馴染みのドラゴンに間違いない。

そして、ドラゴンと言えば、まず上級魔物とみていいだろう。隣に並ぶゼオンの表情で、それを確信した。……むしろ、これで下級だったら、泣く。真面目に。

どうして上級の魔物が領地の傍にいるのかはわからない。

だが本当に、境界線より内側に魔物はいれないようだ。ドラゴンの振った尾が領地内に入りそうになった瞬間、結界というかバリアというか　そんなものが一瞬現れ、ばちりと尾を跳ね返していた。少なくとも領地内の人には確実に安全である。

横転した馬車の中に人の影がなければ、それで済んだのだけ
れど。

「おい、お前の師匠、呼んで来い！」

魔法陣を展開しながら、ゼオンが私に叫ぶけれど、私は大きく被りを振った。

「だめなの！　昨日の結婚式見て、ホームシックになったとか言って、今日は自領地に帰っちゃってる！」

師匠になってからというものの、芯は毎日休みなく、ミヤイ領に詰めてくれていた。間の悪いことこの上ないが、責めることはできない。

いない人を当てにすることも、またできない。

貰ったばかりの杖を構え、私も魔法陣を展開しながら、目に付いた近くの人を指差す。

「そこの鼠耳の人、自警団を呼んできて！」

「えっ、は、はい！」

「あとその隣の人、イリエっていう強そうな黒猫金髪美女を呼んで！ 今なら学校あたりにいるはずよ！」

「ぼくですか!？」

「そう、あなたよ、急いで！ その後ろの女性、教会の『僧侶』達を呼んで！ いるだけ全員！」

「あ、わ、わかりました！」

いきなり指名された人々は、動揺しながらも各々駆けだし始めた。開かれていた戦闘ウインドウに現れていた敵の名は、見た目そのままグリーンドラゴン。HPゲージは、三万。

一瞬桁を間違えたかと思ったが、確かに0が4つだ。視界の端でそれを確認し、用意していた魔術を発動させる。

「『サンダー』！」

ドラゴンからすれば静電気程度の雷撃が、鱗に弾かれる。僅かに遅れてゼオンも、叫んだ。

「馬鹿、お前、属性考えろっ、あいつは緑だろーが！ トーチ・トワリング『炎演舞』」

回転する炎の輪が数え切れないほど、ゼオンからドラゴンの頭部めがけて放たれた。何十連続だろうか、一瞬ドラゴンがよろめく。が、ドラゴンは一つ頭を振って、こちらを見もせず、もう1頭の馬を掴み潰した。

私の魔法で削れたHPは、僅か40程度。ゼオンの魔法で削れたHPは、700程度だった。

「うっそ……。ゼオンの魔法でも、平気そう……」

愕然と呟くと、ゼオンは厳しい表情で舌打ちした。

「鱗だ。ドラゴンは魔法耐性が強い。相性最悪だぞ。しかも、どうやら境界内へは注意が向かないらしいぜ。馬車しか見てやがらねえ！」

境界内から魔法で気を引き、その間に馬車の人に逃げてもらいた
いところだが、それができない。

馬車の内部の人影は、4つだ。2人は倒れたまま動かず、もう2
人は逃げようとしているものの、どうやら怪我をしているらしく、
上手く動けないようだった。

「ゼオン、状態異常つきの魔法で動きを止められない!？」

「多分、無理だな。他のドラゴンならいけたかもしれねえけど、状
態異常使いの緑属性ドラゴンだ。耐性も強い!」

ゼオンの言葉にまるで返事をするように、ドラゴンが再び咆哮を
上げた。

ドラゴンの赤い瞳が、ぎろりと馬車の人影を映した。

一刻の猶予もない。気を引くだけでもいい。

「ゼオン、杖、有効活用させてもらおう! あと、私のいる辺りに、
火力の高い魔法を放ってね!」

「待て、まさか、お前!」

叫びだけを残して、私は境界線の外に躍り出た。

31話（後書き）

緊急時には、誰か、ではなく指さし名指しが大事だそうです。
まあ、ドラゴンが来ることはないでしょうけど、もし何かあった時は、ぜひ指さし名指しで助け合いましょー。

32話

ゼオンや領地内の人々の一際大きい悲鳴に、耳を貸す余裕は無い。引き止める声にも。

馬車とは反対方向、つまりドラゴンの背後から、しなる尾をかいくぐって駆け寄り、大木よりも遙かに太い後ろ足に、杖を叩きつける。弾力のある緑の鱗に阻まれ、攻撃が滑ってしまふ。ダメージを与えている手ごたえは、あまりない。

しかし、今はドラゴンのHPゲージは気にせずに、ドラゴンが反応するまで、連続で叩き入れた。

「ゼオンッ！」

叫んだところで、先程と同じ、飛んできた炎の輪がドラゴンの後ろ足にいくつもぶつかった。ドラゴンの足が足踏みするように動き、振り返ろうとしているのがわかる。

注意を引けたのだ。

ここまでだ。踏まれては笑えない。

尾を振る勢いでぐるりと体を反転し、獲物を変えたドラゴンと目が合う前に、私は境界内に文字通り飛び込んだ。

回転する視界が戻り、ぱらぱらと体から土が落ちたところで、身を起こす。

鼻先でドラゴンの牙が境界に弾かれた。ふおっと生温かいドラゴンの呼吸が触れる。

たかだか数歩の距離なのに、境界線があるだけで、命を分ける。生死の境がこんなにはつきりと目の前にある。

「カノ様、なんて無茶をッ！」

駆けよって来る鎧姿の一団が見えて、ほっとした。自警団と、イリエだ。

昨日の飲みすぎて少し顔色の悪そうなバルバラをはじめとする『僧侶』達もいた。

ドラゴンが獲物を見失って、うろつくと視線を彷徨わせているこの数秒を無駄にはできない。

「バルバラさん、届くなら、ここから馬車の中の人達に治癒を！」

イリエ、自警団、今みたいにちよこつと注意を引いては、境界に逃げるのを繰り返して、馬車の人達が逃げる隙を作る！ 手伝って！

ゼオンは注意を引く人の援護をお願い！」

返事をする間も惜しく、『僧侶』たちは境界ギリギリにならないで、一斉に魔法陣を展開した。

イリエとフェレは、自警団にすぐに指令を出し始める。

「1班、2班でドラゴン右方から、3、4班で左方から、5班は私と後方から、交代で攻撃する！ 前方には出るな！」

「交互に注意を引き合え！ 一度引いたら、すぐに退避しろよ！」

一撃でも食らったら終わりだ！ 見習い連中4人は馬車の人を保護して来い！ 『狩人』兵は弓で、境界内から注意を引く班の援護！」

「カノ様は、境界内にてください！」

「わかってる」

先程は私しかいなかったから、外に出た。けれど、私に万一のことがあれば、この境界自体が消えてしまうのだ。そうすれば、この場にいる全ての人が終わるだろう。

歯がゆいが、領主だからこそ自由に動けない。その自覚は以前よりできているつもりだ。

唇を引き結んで、ゼオンの隣に戻り、私も魔法での援護に徹する。

後は自警団たちを信じるしかない。

再び馬車の方向に狙いを定めたドラゴンを、自警団の数人が側面から攻撃する。

レベルが20程度の戦闘員ばかりであるため、HPダメージはさほど多く与えられない。が、一斉に攻撃しているため、すぐにドラゴンは体を自警団の方に向けた。

「退避！」

誰が発したか分らないものの、すぐに号令通り境界内に数人が逃げ込む。逃げ込む間に、反対側面から別の班が攻撃を仕掛け出す。援護するようにゼオンの魔法と、『狩人』たちの弓が同じ位置に攻撃を入れた。そこに、私も炎属性の攻撃魔法を放つ。なるべく、馬車の方向に注意を向けない。注意をひきつける。

その間に『僧侶』たちの回復魔法が、馬車に向かって飛んでいく。同時に、見習い班が馬車に辿りついていた。彼らが乗客を境界内に誘導してくれるだろう。

イリエの班は、既に後ろ足付近に待機している。別の班が上手く注意を引けたようで、ドラゴンは鬱陶しそうに再び方向を変え、体をひねり始めた。

ドラゴンの足に踏まれないように気をつけながら、今度はイリエ達が後ろから攻撃を繰り返した。

その間に、側面に再び最初の班がそつと近付いている。

ドラゴンの尾が鞭のようになり出し、後方へ注意が移ったのを見て、

「よし、退避！」

イリエらが境界内に飛び込む。

直後に、跳ねた尾が地面をえぐった。轟音と共に、土の塊が、宙

を舞う。

ギリギリのタイミングは、見ている方の心臓に悪かった。汗の滲む手で杖を祈るように握り締める。

ちまちまと狙いを定めさせない、ちよこまかとした作戦だが、馬車の人達さえ境界内に入れば、後は境界内から魔法や矢でじわじわ攻撃すればいい。

それまでの辛抱だ。それまで、誰も怪我をしないでいてくれれば。

「ゼオン先生、MP回復薬ですツ、どうぞ！」

「カノ様も！」

誰に指示されたわけでもないのに、領民の数人がMP回復薬をゼオンにも差しだしているのが見えた。人間の、ゼオンに。

なんだ、上手くやれてるじゃん、先生。

お礼を言つて、領民から回復役を受け取りつつ、心の中だからかって、再びドラゴンに視線を戻す。集中を取り戻して、再び注意を引く班のところへ魔法を放とうとすると、異変に気づいた。

「見習い班、何をしている！」

イリエの怒声がかさず飛ぶ。ドラゴンの注意は馬車から上手く逸れているものの、見習い班が馬車の前で固まっていたのだ。

目を凝らして、すぐに理由に気がついた。馬車の乗客のHPは回復しているものの、4人のうち2人は気を失って倒れたままだ。戦闘ではなく、馬車の転倒で気を失ったのか、治癒魔法では起きなかったのだろうか。乗客のうち3人は獣人だったが、倒れているうちの1人は、人間。気を失っているその人を、運ぶのか迷っている。

私は用意していた魔法を放ち終えてから、馬車に向かって走り出した。

境界線を越えても、今度は、引きとめる声は上がらない。

助けないわけにはいかない。けれど、他の領民たちは、行けないのだ。こんな状況でも、行動を鈍らせるほど、根は深い。いや、こんな状況だからこそ、だろつか。普段、押さえているものが、ひよっこり奥から顔を出すのは。

見習い団員たちを押しつけて、倒れていた人間の肩に手を回す。

「この人は私が運ぶわ。運ぶつもりがないなら、どいて！」

見習い達の顔を睨みあげる。そのうちの1人の顔には見覚えがあった。

昨日、幸せを手にしたばかりの彼だった。優しい言葉をかけてくれた人だ。そんな人でさえ。

彼らの顔に浮かぶ表情を見たくなくて、目を逸らし、

「倒れてるもう1人　その獣人の子は、運べるでしょう。動きなさい！」

胸の奥がひりつくのを感じながら、冷たく叱咤した。

命を張って、団員達が作ってくれている隙だ。ぼんやりしてはいられない。

見習い達が慌てて他の乗客を境界内に逃がすのを見ながら、私も人間を肩に抱えて立ち上がる。重いけれど、女性だから、なんとか運べそうだ。無駄に鍛えてきて良かった。

意識のあった乗客2人は、すぐに境界内に辿りついた。

あとはゼフと彼の運ぶ獣人、そして私とこの女性だけ。

それで、済む。

僅かな気の緩みに気付いたわけではないだろうが、ドラゴンの動きが急に变化した。翼が、広がったのだ。

ぶわりと繰り返されるその羽ばたきで、大風が起こる。

「ダメだ、散開！ 全員境界内へ！」

フェレの怒号と同時に、団員たちは、攻撃の手を止め、風に吹き飛ばされるように境界内へ戻り始める。

ただし、人を抱えている私達は、すぐには反応できない。風に巻き込まれ、足をすくわれ、転倒するだけだった。

体が傾くを感じながら、私はほぼ無意識に、前にいたゼフの背中を、杖で突いていた。多少傷つけたかもしれないが、その勢いで境界内にゼフと乗客が倒れ込む。

一方で私は肩からずり落ちる女性と共に、その場に倒れ、さらに風の勢いで横転させられた。頭と背中を打ち、視界が回り 簡単にいえば、もみくちゃにされている。どこか他人ごとのように、そう感じた。

風がようやく静まったところで、家3つ分ほどの高さまで上昇したドラゴンを見上げる。

ドラゴンは一度大きく体を逸らすと、そこから頭を下げ、咆哮と共に緑の吐息を吐き出した。

覚悟をしたが、痛みは訪れなかった。甘ったるいような香りが、全身を包んでいる。

痛みはなかった。HPダメージも。ただ、転倒した状態から起き上がることもできなかった。

体を動かそうとすると、じんと鈍い痺れが全身に走っただけで、ぴくりともしない。

状態異常の、『麻痺』。

起こしたことはあるけれど、喰らうのは初めてだ。舌打ちしたかったが、それさえ許されなかった。

動くのは視界だけだ。

土に頬を当て横倒しになった状態から、『僧侶』たちが解除するための魔法陣を一齐に展開したのが見えた。『麻痺』はそれで解けるだろう。

団員達が、こちらに向かおうとしているのも、ゼオンが必死の形相で、魔術を放とうとしているのも見えた。

だが、どれも ドラゴンの次の攻撃には間に合わない。既に、ドラゴンの爪が振りあがったのが見えている。

(逃げて)

呟いたつもりだったが、唇は動かなかった。

逃げて欲しいと、祈る。私が死ねば、境界が消える。そうすれば、そこで見ている皆も危ない。

そんなに身を乗り出したり、叫んだりしてないで。早く逃げて。

私の体より大きい爪を、振り下ろすドラゴンと目がかち合う。私の顔ほどもありそんな大きな瞳。

ただの豆粒を見つめるような、超然としたその瞳の片方に、トスツとちつぽけな音と共に、何か突き刺さった。

つ、と一滴の血が、ドラゴンの涙のように零れる。それだけだった。

それだけで、ドラゴンの前足はぴたりと動きを止め それどころか、瞳も翼も胴体も吐息も。ドラゴンの全ての時間が止まった。戦闘ウィンドウのHPゲージが、減るのではなく、突如として空になった。即死、ということだろうか。

そして、ぐらり、とドラゴンの体は重力に導かれて、悲鳴すら上げず地に倒れ伏す。

地響きを起こされ、頭と顎が揺さぶられるのを感じていると、ド

ラゴンの体が私のすぐそばに横たわった。

信じられないような気持でそれを見つめながら　潰されなかったのは幸運だった。

遅れて、ようやく『麻痺』の効果が解ける。

鈍い痺れが消え、よろよるとその場に立ち上がった。生まれたての子羊みたいな頼りなさで。ドラゴンのあまりにもあっけない最後に、まだ、生きている実感が沸かない。

一緒に倒れていた女性のHPゲージも、無事なようだ。とりあえず、被害ゼロで済んだということでもいいのだろうか。

喜ばしいことなのだが、喜ぶほどの気力も残っていなかったため、ただ溜息だけが落ちた。

次いで、ドラゴンの瞳に突き刺さったものに近付き、観察する。

それは黒い長槍だった。三角錐の穂先から柄、石突きまでが全て漆黒であり、青く光る蔦のような紋様が槍中を覆っている。すんなりとした形は不思議な魅力があるが、どこか不気味にも感じる。その槍には、粗末な縄が括られていた。

縄を視線で辿り、後方を振り返る。

境界内ギリギリのところ、縄を持ち、静かに立っている少年がいた。

ぴよっとした小さな獣耳だけでは判断し辛かったが、やたら、もこもこしながらくるりと立ち上がった尻尾は、栗鼠のようだ。

私よりも少し幼い中学生くらいのその子は、黒髪。堀の深いこちらの顔ではなくて、子供っぽく見えるような柔らかい顔立ちだったため、日本人かと思う。しかし、その瞳が鮮やかな赤であることに気付き、やっぱり違うのかも思う。

恐れたり褒めたりと周囲で騒ぐ領民は全く眼中にないようで、少年はただじつと私と人間の女性を見つめていた。

「えっと、キミは」

ひとまず、話かけようと口を開いたところで、

「カノ様ツ！！」

「わわ」

前方から何か赤い物が突撃してきた。

疲れきったところだったので、支えきれず、どしり立派な尻餅をついてしまった。うわあ、ほとんどの領民が見てるのに。恥ずかしい。ついでに痛い。

「あたた、尾てい骨が……」

出っ張りのある骨をぶつけてしまった。さすりたかったが、『麻痺』とは違う理由で身動きがとれない。胸のあたりに赤毛の頭がしがみついていた。

兔耳がぶるぶると震えているのを見て、私はできるだけ優しく肩を叩く。

「サーナ」

「カノ様ツ、カノ様、ごめんなさい！ ごめんなさい……ごめんなさい……、ゼフを、助けて下さったのに……わ、わたしたち……カノ様を、危険に……！」

涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、サーナが体を放した。昨日はあんなに笑っていてくれたのに。

「サーナ、大丈夫。見て、被害ゼロだから。皆、無事だよ。すごいでしょ。謝らないで、褒めて欲しいな。ね？」

別に私の力ではないのだが、わざと自慢げに笑いかけると、サーナは顔を覆って、ぶんぶんともげそうなほど首を縦に振った。

行くべき人のところへ行つてあげなよと背中を押せば、サーナはまた涙を零して、怪我をしている夫の方へ歩いて行った。怪我させたのは私だけでも。

助かって、良かった。そうでなければ、彼女たちも危なかったんだから。

ゆるゆると実感が込み上げた。

そして今度こそ、お尻をさすさすしつつも立ち上がろうとしたところで、目の前に手が差し込まれた。

ちよつと豆だらけの、でもまだ若くてつやつやな少年の手。

「どうぞ」

「あ。ありがとう。それと、さっき助けてくれて、ありがとう」

「いいえ。こちらこそ、その彼女を助けてようとしてくれて、ありがとうございます」

「彼女は、家族？」

「そのようなものです」

少年は言いながら、ぴつと縄を引っ張って槍を引き抜いた。その勢いで飛んできた槍を、難なく掴み取っている。長槍であるため、彼の身長以上の長さがあるその槍を。

槍が抜けると、ドラゴンの体はさらりと風に溶け、アイテムボックスへと変化した。

「あれは、どうぞ。貴方がたの助けがなければ、僕は死んでいましたから。恥ずかしながら、馬車の転倒でつい先ほどまで気絶していました。僕が気がついたのは、貴方の怒声のおかげです」

「ええっと、でも倒したのはキミだし」

「ドラゴンを倒したのは、ただの僕の仕事です。報酬は、雇い主か

らいただくのですから、気にしないでください」

私より幼いのに、淡々とそう言う少年は、領地の方を振り返った。

「先に助かったのが、僕の雇い主です。ミヤイ領の頼みで、キトー領から派遣された商人。僕は、彼の旅の護衛です。彼ともども、今日からミヤイ領でお世話になります」

その言葉に驚いているうちに、少年の示す方向から、ぼてぼてと重そうな足音が近づいてきた。

32話（後書き）

ゼオンの魔法は今回は、純粹に火力が高いものよりヘイト値（敵を自分に向けさせるゲームの値）の高い攻撃をしているので、基本ダメージは低めです。ドラゴン相手になければ同じ魔法で1000ダメージくらいでしょう。敵が倒れる前に、何回か魔法を当てていたので、5000くらいはHPを削っていたと思います。

久しぶり、というのが近づいてきた人物の第一印象だった。

「いやはや、どうも、助かりました！ お噂通り、ミヤイ領の領主様は、心優しく勇猛果敢でいらっしやいますなあ！」

「は、はあ……。でも、危ないところで」

「おお、そうでしたな。私の護衛のは働きはいかがでしたかな？ わ、た、し、の、護衛の働きは！」

「はあ、えっと、とても助かりました」

「そうでしょう、そうでしょう！ いやあ、早々に領主様のお役に立てたようで、なによりでございます！」

てらつと脂ぎった額を拭いながら、目の前の男は、いかにもなゼールストークで叫んだ。

慣れないテンションに生返事を返しつつ、改めて別のところで懐かしさを感じてしまう。

この世界には というのは、ミヤイ領には、あまり太った人はいない。厳しい状況下というのものもあるし、それほど余裕がないというのものもある。また、機械に頼る生活ではないため、畑仕事や力仕事が多いというのものもあるだろう。やせ気味から健康的な体つきの人々が多い。

加齢によって多少ふくよかな人や、逆に筋肉隆々として体の大きい人はいるもの。贅肉たぶたぶ、油てらつてら、ちよつと健康に悪い系のイイもの食べてます、という体格の持ち主を見たのは久々だった。

横幅は、軽く私の二人分はありそうだ。ちよつと小綺麗な旅装は、はちきれんばかりに膨れ上がっている。汗と油で張り付いた茶色の髪からは、ぴよつと可愛らしいブタの耳が垂れていた。年齢はわか

りにくい、おそらく40代前半、といったところだろうか。

「あの、まだお名前をうかがってないんですけど、」

「おお、これは失礼いたしました！ わたしは、テラトンと申します。先生を、という領主様のお望みを受けて、キトー領のユーゴ様より派遣されました。商人でございます！」

「よろしく願います、テラトンさん」

「そして、あのドラゴンめを倒した、この者の名は、レイでございます」

商人の斜め後ろに控えた少年は、ぺこりと頭を下げた。

「よろしく。2人ともたいへんな目にあってお疲れですよ。すぐに、屋敷に案内します。それと彼女の治療も。事情は休んでから改めてお伺いします」

「なんだかテンション高い人だけど、ひとまずは良い人そうだった。」

屋敷の人々に案内を頼み、先にお客を屋敷まで連れて行ってもらうことにした。

私はというと、もろもろの片づけがある。

緊張が解かれ、だるい体を押しつつ境界線内に戻ると、そこで空気を読まないファンファーレが鳴り響いた。

ドラゴンのおかげで、レベル15になったのだろう。

成長ポイントは後回しにし、怪我人や被害の有無の確認を優先する。アイテムボックスはひとまず自警団に回収させた。破壊された馬車の後片付けも願う。

まだ目覚めない女性の手当てに、『僧侶』たちを向かわせようか考えて とりあえず、バルバラをお願いしておいた。

そうして集まっていた領民たちに、もう危険はないことを改めて

告げて、不安がる人々たちに声をかけながら解散させた。

これでようやくその場での指示を終えて、屋敷へ帰ろうとすると、ゼオンが私の顔を覗きこんできた。

「おい、お前、大丈夫か。顔色ワリイぜ」

「さすがにちよつと疲れたかもね。けど、ほら、無傷だから平気。しかも……悔しいけど、私は実際にそれほど戦ったわけじゃないし。それより、ゼオンの方が疲れたでしょ」

御苦労さま、と労えば、ゼオンはさらに何か言いたげな顔をしていた。けれど結局、無理するなよとだけ言い残して、去って行った。仕事部屋に戻れば、新旧の自警団長　つまり、フェレとイリエが疲れの見える堅い表情で待ちかまえていた。二人とも、怪我こそない物の土埃で汚れた姿のままである。

「2人とも、少し休んできても良いよ？　それと、イリエ、学校は」

「あれだけの騒動でしたから、急きよ休校に致しました」

「そうだね。みんな驚いてたし、その方が良くいかもね」

頷いて、2人を来客用のソファに促したが、2人とも何故か座る気はないようだった。

「乗客のHPは全快しています。乗客は、商人とその護衛2人、それと御者です。御者も馬車も商人専用のものだそうですが、馬車は残念ながら損傷が激しく、修復不可能です。」

キトー領からの客人ということですが……。キトー領からならば、『路』があるはずですから……」

「『路』って、確か、同盟のおかげで、魔物がよらないはずだよね？」

「はい。ですから、なぜドラゴンに襲われたのか疑問です。『路』

を逸れて、危険な場所にも立ち寄ったのかと」

報告をとめて、イリエは首を横に振った。本人達に聞かなければ、分らないということだ。

フェレは、ぱらぱらと質の悪い紙のメモをめくり、イリエに続いて読み上げた。

「それと、アイテムボックスですけど、入ったのは、ええと、ドラゴンの各種素材ツすね。目、鱗、骨、肉、とか。特に大量なのは鱗と肉ツす。結構な価値のはずツすけど、まだミヤイ領の商人たちが鑑定中だそうで。ああ、それとレアアイテムで、卵が出たとか」

「卵？ 大きなオムレツを作るとか？」

どこかで聞いたような話を思い浮かべたが、もちろんフェレには通じなかった。

「……へ？ いえ、あの、食べ物じゃないツす。たぶん。俺も、初めて見るので、よく分かりませんが」

「そうなんだ。アイテムは、鑑定終わったらまた教えてね。それと、フェレ、自警団に被害は？」

「被害はほぼゼロで、矢を多少消費したくらいツす。ただ」

急に言葉を切ると、フェレはイリエと視線を交わして、その場で同時に、地に頭を伏せた。

「「申し訳ありませんでした！」「」

さすがに、ここで何のこと、と聞くほど鈍感にも無神経にはなれなかった。

結果オーライ、と言ってあげたいところだが、再び同じ状況が起

こつた時に、同じ対応では困る。

「元団長として、団の統率が不十分であったこと、お詫び申し上げます！ さらに、一番安全を優先しなければならぬ領主様を危険にさらしてしまいました。処罰は受ける覚悟です」

綺麗な髪を床につけて、イリエは体を震わせた。

「同じく、団長としてお詫び申し上げます！」

隣でフェレも同じようにぐもった謝罪を述べた。

「えーと、とにかく、まず頭を上げて。その床、実はあんまり掃除してない……」

いえ、このままで！ と、言われてしまったので、仕方なく私が
屈みこんだ。

最近、なんだか人に頭を下げられる機会が多い気がする。

「レベル20になったら、何が起こるか、分ってるよね。自警団に
お願いしてあることも、覚えてる？」

「領民の避難誘導と、援軍の支援、です」

うん、と私は頷く。

万が一、領地に攻め込まれた場合、はっきりいってレベルの低い
兵士ばかりである自警団は邪魔、というのが芯の言葉だ。

実は、レベル20近くになったら、芯のトーノ領の戦力が、ミヤ
イ領に待機することになっている。来ると言われているなら、要請
するよりも先に呼んでおこうというものだ。もし同盟のおかげで敵
が来なければ、無駄足だけれど、それが一番だ。

トーノ領の戦力は、屈強な戦闘員に加えて、『狩人』たちによって捕えた上級の魔物たちだという。

実戦初心者ばかりの自警団では足並みがそろわない上に、大した戦力にもならない。そのため、ミヤイ領の自警団は、支援と避難誘導が主な仕事になる。

それが芯と話し合った内容だった。そのことは既に自警団にも伝えてあり、練習や訓練も施している。

「そんなときに、恨みや過去があるから、勝手に敵に突っ込む、なんて団員がいたら、足を引っ張ることになるかもしれない。悪ければ、被害が出ちゃう。」

皆それぞれ事情があるのは分ってる。だから、色々思うところがあるのも、止めないし、止められない。

でもだからこそ、私情で動くことがないように、組織でしっかりと押さえてあげてほしいんだ」

説明するような口調で、自分に言い聞かせる。本当は罰したくないけれど、なあなあにするのはもつと悪いつてわかっている。

感情で動くなって自分で言ったのだから、私もちゃんと責任を果たさないで。

「命令違反をした見習い4人に、規定の罰則を。確か、えーと、見習いだから降格は、これ以上しようがないけど。それと3ヶ月減俸だったっけ」

命令違反をしたら、首。といえるほど、人手に余裕はない。そのため、減俸と降格、と自警団を作るときに、みんな決めていた。

言葉だけで見ると軽いようだが、余裕のない領地だから、元々ものすごく薄給だ。それだけでは明らかに食べていけないから、食堂で無料で食事を提供しているわけだし。

お小遣いにもならない給金から、さらに減法すると、実質ただ働きになる。

「わかりました。ついでに、降格の代わりに見習い期間の延長と、訓練雑用の追加で」

団長として進言したフェレに、頷いて、今度こそ2人とも立ち上がらせる。

私も一緒に立ち上がって、服の埃を払った。

「やっぱ掃除しないとダメだね。でも、頭を下げさせるために掃除つてのも、ね……罰も大事だけど、そんなことが起きないようにする方が、いいんだからさ」

「はい」

2人はしつかり返事をしてくれたけれど、疲労の色が濃い。

緊急事態というのは、それだけでどっと疲れが出るのだろう。イリエはともかく、フェレはまだこれから団に戻って処分やら後始末やらを任せている。

早めに帰って休むように伝えて退出を促すと、イリエは、扉に手をかけて振り返った。

「それでは、失礼します。……あ、カノ様。あの 人間の女性ですが、目が覚め次第、バルバラが報告に参ります」

「了解。ゆっくり休んでね」

今度こそ2人が去ったのを確認し、仕事部屋に一人になって、私はソファに座り込んだ。

魔物に対峙するのも、命の危険を感じるのも、ひどく疲れることだけだ。人に命令したり、さらに処罰を下したりなんてこと

は、もつと疲れる。

せめて芯がいてくれれば、と思っけてしまい、一人で苦笑した。
レベル20以上になれば、師匠の役目は終わる。芯も自領地に戻ることになるから、頼ってばかりもいられないし、頼っていても師匠をつけてもらった意味がない。

さつきから光り続けている指輪を、やや雑に撫で、ステータス画面を展開した。

これで、レベル15、と思いきや

《ステータス：領地Lv16 領主カノミヤイ、獣人

HP1320 / MP178

STR (攻撃)	: 32
DEF (防御)	: 48
DEX (器用)	: 33
AGI (速度)	: 33
INT (知力)	: 34
MND (精神)	: 30
LUC (運)	: 27

成長ポイント：残り20》

レベル14になった時から既に数週間経っていたので、かなり経験値も溜まっていたのだろう。ドラゴンのおかげで、一気に2つのレベルアップだった。

孤児院のために、MNDに10ポイント、魔法と学校のために、INTに10ポイントをそれぞれ振り分けて、画面を閉じた。

数値が30を越えていないLUC 娯楽関係施設以外は、全てランク2建築可能になったはずだ。ただ、建築可能になったために、

必要な資材もまた増える。やりくりや収入源を考えなくてはならない。

せめて、何か儲かる主要産業でもあれば良いのだけれど。

教育に力を入れてはいるが、必要最低限を無償で行うにすぎないから、今のところ儲かるどころか、支出である。工夫すれば後々大きな利益にはなるかもしれないけれど、それはまだまだ時間がかかる話だ。

人や人材が増えれば、領地としての収入は増えるものの、何か特色となるものが欲しいところ。

そして、どんな産業が良いのかと考えれば、まったく、わからない。

産業。さんぎょう。産業ってそもそもなんだ。

確か……第一次産業がどーのこーの……というのを、社会の教科書で習った覚えがある。そう、小学生のころに。

それ以降の勉強は、した覚え自体がない。

「ぞ、残念すぎる……」

答えの書いてない天井に向かって空しく呟いた。

バルバラに呼ばれたのは、お風呂も済まし、真夜中が近くなった頃だった。

相変らず二日酔いが残っているのか、顔色の悪いバルバラは、眠そうに目をしょぼしょぼさせている。

「こんな時間だけど、相手は話がしたいって言うんだよ。ああ、あの商人様はもう寝てるんだけど、女性と少年がね。どうするかい、カノちゃん」

「ありがと。気になることがあるから、早く話しておきたい。すぐに行くわ。目が覚めたなら安心でしょ？ バルバラさんも、もう休んで。あ、もう飲みすぎちゃだめだよ！」

バルバラの体を心配したというのは嘘ではないけれど、本当は、聞かれたくない話をするためでもある。

彼女がいる部屋に案内してもらったところで、バルバラには就寝の挨拶をして、孤児院に送り返した。

完全に彼女が去ったのを見てから、扉をノックする。

「こんばんは。領主の榎乃です」

名乗ると、内側から扉が開かれた。開けてくれたのは、例のリス獣人少年である。

部屋は、私が使っているものより少し小さい、領民用の小さな部屋だった。

ベッドのサイズから考えると、部屋も正方形なので、だいたい4畳半程度だろうか。

空き部屋だったため、少し埃っぽく、家具が少なかった。簡単な木の机と椅子、ベッド、魔法灯は高くて使えないのでごく普通のランプ、それだけである。少し揺れる柔らかな灯りが、疲れた目にはちょうど良く感じた。

少年は私に椅子を勧め、彼自身はベッドの端に腰かけた。

ベッドに体を起こしているのは、あの人間の女性だった。彼女の髪と瞳の色を見て、私が何かを言う前に、彼女が手で制した。

「まずは、お礼を言わせてください。話は、この子から聞きました。助けて下さって、ありがとうございます」

「いえ……。実際に助かったのは、彼のおかげですから。」

私は、この土地の領主の、宮井榎乃です。……元は、ただの高校生ですけど」

苦笑混じりに名乗ると、彼女も両手を揃えて姿勢を正した。

「私は、瀬名杏里せなあんりです。専業主婦、でした。……なんだが、この単語すつごく懐かしいですね」

黒目黒髪に、こちらのくつきりした顔とは違う、比較的丸っこい中性的な顔立ち。歳は、ちょうど年齢の分かりづらい大人の女性だけれど、30歳を過ぎているようには見えないし、20歳ほど澁刺とした若さも無い、と感じた。元の世界なら、そろそろ結婚考えようかなというセリフが似合うかもしれない。

私たちと同じ世界の出身。隠してきたようだけれど、彼女もどこかの領主なのだ。

33話(後書き)

《ステータス：領地Lv16
HP1320/MP178
STR(攻撃)：32
DEF(防御)：48
DEX(器用)：33
AGI(速度)：33
INT(知力)：39
MND(精神)：35
LUC(運)：27
》

カタカナにしても違和感のない名前や、獣耳尻尾の種類がなくなってきた新登場させるたびにハラハラします。

34話(前書き)

残酷表現というか、ちょっと反社会表現というか鬱表現というか…
…そんなものがあります。
苦手な方は、十分お気を付け下さい。

34話

領民のほとんどが寝静まった夜だ。

屋敷では、昼間の賑やかな生活音はなく、しんと静寂さが積もっている。長い話や、内緒話にもってこいの夜。

ちらちらと揺れるランプの灯りを眺めながら、まず何を聞こうか悩んだ。

「聞きたいことが山ほどあるんですけど……。とりあえず、どうしてドラゴンに襲われたのか、聞かせてください。『路』を通らなかつたんですか？」

最優先は、領地に関する疑問だ。あんな上級魔物にほいほい出てきてもらっては困る。

杏里は私の不安を拭うように、強く頷いた。

「はい。『路』を通った方が安全なんですけど。でもテラトンさんは『キトー領からミヤイ領までせっかく長い旅をするなら、近くの土地を訪れて、商売しながらの方が儲かる』と、度々『路』を外れたコースを通りました。かなり危険な土地も。」

ですがその中で、ドラゴンを引いてしまったらしくて……。ミヤイ領まで巻き込んでしまって、本当に申し訳なく思っています」

杏里が謝ると、レイが首を振った。

「僕が魔物につけられていることに、早く気付かなきゃいけなかつたんです。護衛だったんですから。すみません」

「ああ、うん、状況はわかったから。終わったことを言ってもしょうがないし。ひとまず、ドラゴンが出た原因がちゃんとわかっただ

けでいいから」

ミヤイ領自体に問題がなかったなら、一安心。
私がそう言くと、硬かった二人の表情がようやく和らいだ。

「それで、杏里さんとレイ君って……親子、ですか？」

見た目の年齢的には近すぎるかもしれない。けれど、レイは獣人で杏里は人間。こちらの世界なら、十分あり得る話だろう。

しかし、杏里は少し迷ってから否定した。

「いいえ。本当の母親は、私の友人でした。彼女から頼まれて、レイを面倒見てきたのが、私です」

「じゃあ、杏里さんは育ての親ってことですか」

「そんなところです。……私は、どうにかしてミヤイ領に来たかったので、レイをテラトンさんの護衛に雇ってもらって、私もその家族ということで無理矢理ついてきました。どうしても、カノさんに会いたくて」

「わ、私に？」

身を乗り出した杏里に、ちよっぴり仰け反りながら聞き返す。

杏里はそれには構わず、私の手をいきなり握った。

「へっ？」

「カノさんが、あの人に会ったと聞いて。そのことを、詳しく聞きたくて」

「……あの人？」

痛いほど強く握られて、手をそっと引きぬこうかと思ったけれど、
ぱたりと一滴涙が落ちたのを見て、私は動きを止める。

「あの人……褒です。ヴァルーデ王国にいる江田褒のことです。私は……彼の妻、でした」

「なっ……ええええーっ！？」

深夜であることも何もかも忘れて、私の口から驚きそのまま飛び出した。叫び声が響き渡って、2人はぎよつとして腰を浮かせた。私も慌てて手で口元を抑えながら、深呼吸して頭を落ち着かせる。何。何が誰で、誰が何だっけ。つまつて、つまり？

「江田さんの、奥さん……？ でも、名前は……」

「瀬名は、旧姓なんです」

「ああ、なるほど……じゃなくてっ！ 色々おかしいじゃないですか！ だって、江田さんは、奥さんがいる元の世界に戻りたいっで。それで、ゲームクリアを目指すっで言っでたんですよ！」

杏里は、私の言葉に息を飲んで、再び目に涙を溜めた。立ち上がったレイが、その肩にそつと手を置く。

「やっぱり……。やっぱり、そうなんですか。私は、あの人がこの世界でひどいことをしているっで知っで、でも、あの人が意味もななくそんなことを目指すと思えなくて。だから、理由を確かめたくて、直接会っでたっでいうカノさんに、聞きにきたんです。」

「やっぱり、あの人は、まだ私が生きてると思っでるんですね……。私は、とっくに死んで、この世界にいるのに……」

「ちょ、ちょっと待っで下さい！ 混乱しちやっで……。つまり、江田さんが亡くなっでた後、奥さんの杏里さんも亡くなっで、2人ともこつちの世界にいたっでたっでことですか！？ それじゃ、今、江田さんのやっでることっで」

「無駄、です。それに、ちょっと違っでんです。」

先に死んだのは、

私なんです。私は6年前に死んで、この世界の異世界トリップしたんです」

「え、え、あれ？ それって、おかしいですよ？ だって、それなら杏里さんの死を江田さんが知らないはずが ええええ？」

次々に出てくる新しい情報に、私が文字通り頭を抱えると、杏里は涙を拭ってしっかりと顔を上げた。

「レイ、ここからは2人で話たいから、少し席を外して。カノさんに、最初から、全部お話しします」

少年が静かに扉を閉めると同時に、杏里は改めて語り出した。

「私は、7年前にあの人……奨と結婚しました。そのころ、まだ大専在学中だったんですけどね。私の家は厳しいところで、卒業後は決められた相手と結婚しなきゃいけないだったので、その前に2人で逃げて、勝手に結婚しちゃいました」

「それって、駆け落ちってやつなんじゃ……。杏里さん、めちゃくちゃお嬢様なんですか……？」

「駆け落ちですね。お嬢様って そんなんじやないですよ。ただ、なんだか古い家で、お稽古ことも多くて、着るものや友人まで全て制限されてましたけど……」

それを世間では箱入り娘とかお嬢様とか深窓の令嬢とか言います。たぶん。

ツツコミは心の奥に留めて、感想を口にした。

「駆け落ちって、すごいですね……」

IT企業のエリートと、名家のお嬢様の駆け落ち。……昼のドラマにできそう。

「若かったですから、勢いだけで、色んな事ができました」

ちょっと恥ずかしそうに話す杏里。

うーん、2人とも意外にロマンチストっていうか情熱的っていうか。

でもそうか 元々江田は情熱的だ。世界をどうこうしてまで、奥さんに会いに行こうとしていたんだから。

「でも……結婚して1年後、つまり今から6年前に私は死んでこちらの世界に来てしまいました。彼を、残して」

「どうして、って聞いても、その、大丈夫ですか？」

何と聞けばいいのかかわからず、しどろもどろになると、杏里は安心させるように笑った。

「ええ。全部、お話しますから。」

……私は、お腹の子を失ったんです。それに、耐えられなくて……」

新婚だったんですけど、今度、子供が生まれるんです

耳の奥に、江田の台詞が蘇った。嬉しそうだった笑顔も。

私は、知らずに奥歯を噛みしめていた。なんて言えばいいんだろう、この、遣る瀬無い気持ち。どこにも行き場の無い、ただただ、苦い気持ち。

杏里もきつく目を伏せながら、先を続けた。

「そして、異世界トリップして……でも、私、江田の姓は名乗れませんでした。辛かったからじゃなくて、子供がいたことも結婚していたことも、しばらくの間、全部忘れてたんです。

一時的に死ぬ前のがあやふやになるのは、どうも、私だけじゃなくて、この世界に来た人達の多くの人を経験するらしいんです」「それじゃあ！ まさか江田さんも、杏里さんが亡くなったことを忘れてる……？」

「……たぶん、そうなんだと思います」

異世界トリップの時に、記憶が飛んでしまうことがある。それが本当なら、おそらく江田の記憶は、杏里がお腹の子を失う前で止まっているのだ。もう、何年間もずっと。

そして、杏里がこちらにいることにも、気付いていない……。

「トリップして、私はまず、ヴァルデー王国近くの土地の領主になったんです。当時のヴァルデー王国は、もっとずっと小さかったですけど。」

私、ゲームをやってなくて、最初は、この世界のこと、わけがわかりませんでした。レベルだとか領主だとか建築物だとか……もうさっぱりで」

「ですよー……！」

私はしみじみと頷く。

隆人みたいな知り合いがいなければ、私だって全くわけがわからなかったと思う。説明を聞いてもわからないことだらけで、散々苦労したくらいだ。

それでも私は、かなりラッキーな方だったんだ。

「だから毎日領民全員が食べていくのがやっとで、しばらくすると屋敷にあった食料もほとんど底をついて、もう駄目だと思いました。」

その時ちょうど、ヴァルデー王国から使者が来たんです。自分たちの王国に入らないかって。領地のことを全て引きつけるって。だから喜んでヴァルデー王国に入りました」

「じゃあ、杏里さんは、ヴァルデー王国の領主……!?」

「元、ですけどね。私がヴァルデー王国にいたのは、結局1年間だけでしたから。その頃は、獣人差別もありませんでした。……ちよっとお互い険悪なくらいで」

芯が教えてくれた話では、差別がひどくなり出したのは5年前。ちよつと、杏里が国を離れたころだろう。

そして、江田がこの世界に来たのも5年前。

「ってことは、杏里さんは江田さんとちよつとすれ違いになった……?」

「……みたいです」

「そんな！　なんで、そんなタイミングで……」

陳腐な言葉だけど、江田は　運が、悪すぎる。この言葉がこれほど似合う人を、他に知らない。

そう思ったけれど、杏里は俯いた。

「偶然、じゃないんです、きっと。5年前、ヴァルデー王国の最初の王様が亡くなったんです」

「えっ……最初って、じゃあ、今の人は、2代目?」

「そうです。最初の王様の息子なんですけど……次の王様は、まだ3歳になる前の子供だったんです。奨なら……そのチャンスを狙ったのかもしれない」

王はお飾りで、江田が実権を握っている、と何度も聞いた覚えがある。

好戦的である上に　ちよつど代替わりでしかも次王が子供で、実権が握りやすいときだったから、江田はヴァルデー王国についた……？

確かに……いかにも、江田っばいやり方のような。

「でも私は、最初の王様が亡くなる時に、事情があつて、国を逃げ出して　山脈を越えて、別大陸まで逃げました。違う大陸の噂はなかなか聞えて来ない上に、最初のころは奨も大人しかつたんでしよう。ようやく、噂に名前が挙がるようになったのはここ数年で……。」

本当に、私の家族だった人のことなのか、ずっと確かめたかったです。けど、私も逃げ出てきた身ですし、レイも幼い獣人で、とてもヴァルデー王国に近付くわけにはいきませんでした」

ようやく、と杏里は疲れたように溜息をこぼした。

「ミヤイ領の話を噂で聞いて、ようやく、安全に手掛かりが掴めると思つて来ました。本当に、あの人なんですな……。」

「スーツが似合つて、賢こそうだし笑顔は愛想良いけど、あんまり印象に残らないタイプで、ちよつと厭味っばい江田奨つて人なら、合つてると思います」

浮かんだ印象を指を折りながら数え上げる。杏里も同じように片手を出して、指を折り始めた。

「それと……、こつと決めたら頑固で……家族想い」

「一致、しています」

「なら……あの人、元の世界で、死んじゃったんですね……」

こちらにいと分ったということは、元の世界で死んだと確定したことです。

杏里の肩が震えたのを見て、レイの代わりに、私は遠慮しながらも手を置いた。けれど、杏里の震えは少しずつ大きくなっていく。

「私のせいです、全部。……逃げなきゃよかった！ 元の世界でも王国からでも。どこかで逃げなきゃ、奨が苦しむことなんてなかったのに！」

「あ、杏里さん、落ち着いて。それに、江田さんが思い出せなかったのも原因」

「それも、私のせいです！ ……思い出したいわけ、ないんです。奨だって辛いのに、私一人勝手に苦しんで、奨を残して死んで。子供にも妻にも置いていかれて、辛くて、奨は死んだんですから！」

それは、杏里の想像だ。江田より先に死んだ杏里が、奨の死んだ時を知っているわけじゃない。そうとは、限らない。本当に、残念で悔しいけど、些細なことで、亡くなってしまう時もある。

「それは江田さんに、聞いてみなきゃわからないですよ」

「でも、私が死んでからたった1年後に、自殺してるんですよ！？」
「だから、そうと決まったわけじゃ」

「決まっていますよ、領主はみんな、そのはずでしょう！？」

領主は、みんな。

お互い、しばらくの間無言で見つめ合う。

杏里の叫びの意味が頭に入るまで、数秒かった。

そんな私の様子を見て、さつと杏里の顔に焦りの色が浮かんだ。そして何を言おうか口をぱくぱくとさせて困っている。先に、声が出せたのは、私だった。

「そんなはず……ないです。だって、私は交通事故で……」

ようやく言えた反論も、尻すぼみになって止まってしまっ

本当に？

『女帝』と呼ばれる少女の声が、耳元でささやかれたように蘇った。

あまりにもお寂しくて、自ら、アズサ領にいらっした、と

一時的に死ぬ前のがあやふやになるのは、どうも、私だけじゃなくて

今まで、自分の死について考えると、いつも心に、静かに空虚さが湧いていた。

死んだことを受け入れられてないのかも、と思っていたけれど。

「わたし、は……」

「か、カノさん？」

ぐらり、と重力に体が引っ張られた。引っ張られるままに、椅子から体が落ちるのを止められない。

「わ……たし、……車のま、えに、飛び出したのは……私……？」

「カノさん、カノさん！ レイツ……レイ、人を呼んで カノさ

ん！」

なんだか、すごく頭が重くて、眠い。

その誘惑につられて瞼を降ろすと、……すぐに深い夢の中に入りこんでしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5324s/>

移住世界のエンプレス

2011年12月20日01時47分発行